

# 北陸新幹線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書 8

—中野市内その2—

つき おか い せき  
月 岡 遺 跡

2010. 3

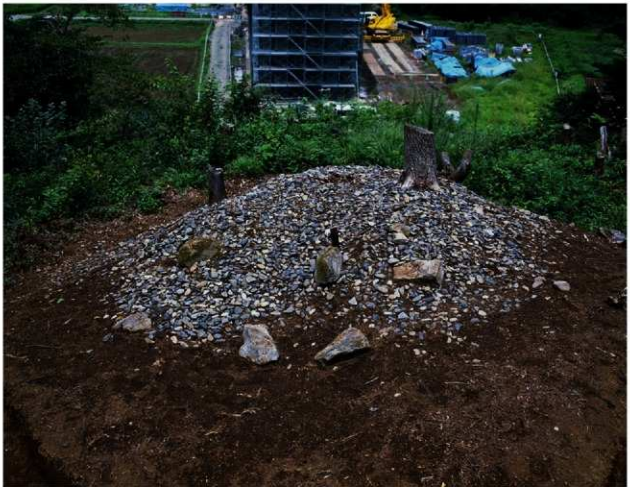
独立行政法人 鉄道建設・運輸施設整備支援機構  
鉄道建設本部 北陸新幹線建設局  
長野県埋蔵文化財センター



①・③区平坦地の中世遺構全景（南より 奥は②区平坦地）



月岡遺跡出土の中世遺物（奥：青磁碗と青銅製香炉、手前：鉄鏃と刀装具）



経塚全景（南より）



経塚出土の一字一石

## はじめに

古来、日本海は大陸へ、あるいは列島の北と南をつなぐ幹線として重要な位置をしめてきておりますが、月岡遺跡のある中野市や飯山市を中心とする北信濃は、こうした日本海からの物流や情報が内陸にある長野県へ入る玄関口として位置づいてきました。このような歴史的な背景を担ってきた地域で、新しい地域交流の一つともいえる北陸新幹線の建設にともなう平成15年度に中野市月岡遺跡の発掘調査を実施しました。その後、整理作業を断続的に継続してまいりましたが、この度、月岡遺跡の発掘調査成果を報告書として刊行する運びとなりました。

月岡遺跡は発掘歴がなく、遺跡のようすがあまりわかっておりませんでした。「月岡」(つきおか)の名は、かつて「築岡」ではなかったかともいわれ、古い歴史を秘めているように感じられます。この月岡の地には、称念寺や岩井氏の館、あるいは岩井の集落がかつてあったとも言い伝えられており、地域の歴史を紐解く時に重要な場所であると思われます。

発掘調査の結果、月岡遺跡は弥生時代と室町時代を中心とする遺跡であることが確認され、特に室町時代ではいくつもの屋敷地が集まって、そのなかで建物跡を何度も建て替えながら、多くの人々が暮らしていたことが知られました。このような屋敷地が1か所に集まった遺跡は室町時代から戦国時代にかけて多くみられ、戦乱の激化や寒冷化した気候のなかでの不安定な農業生産などの時代背景があったと思われます。また、その結束には伝承にあるような武士や寺の関わりがあった可能性も考えられます。称念寺や岩井氏にしろ、この地域では古文書の記録があまり残されておらず、こうした古文書記録が欠落した部分を埋める資料として、本遺跡の発掘成果が地域の歴史の開明の一助になることを期待いたします。

最後になりましたが、発掘調査から整理作業、本報告書の刊行に至るまで深いご理解とご協力をいただいた独立行政法人 鉄道建設・運輸施設整備支援機構の北陸新幹線建設局の方々、長野県教育委員会文化財・生涯学習課や中野市教育委員会の方々、地元地権者や区長の方々、発掘・整理作業に従事協力いただいたの方々に対して心から敬意と感謝を表す次第であります。

## 例 言

1. 本書は北陸新幹線建設に関わる長野県中野市月岡遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は日本鉄道建設公団（平成16年より）（独）鉄道建設・運輸施設整備支援機構）の委託を受けた（財）長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センターが実施した。
3. これまで発掘・整理作業の概要は「長野県埋蔵文化財センター年報」19（2002）、20（2003）、21（2004）、現地説明会・速報展資料等で紹介してきたが、本書をもって最終報告書とする。内容に相違がある場合は本書をもって訂正する。
4. 本書で使用した地図は国土交通省国土地理院発行の1：50,000「中野」「飯山」、日本鉄道建設公団北陸新幹線局作製の北陸新幹線土木工事のための埋蔵文化財発掘の通知（月岡遺跡）平面図（1：500）である。
5. 発掘、整理作業において以下の機関に業務委託した。  
月岡遺跡測量業務および空中写真撮影：（株）協同測量社  
経石の実測及び写真撮影：（有）アルケーリサーチ  
遺物の写真撮影：（株）長野フジカラー  
金属製品のX線撮影および保存処理：長野県立歴史館  
報告書印刷・製本：三和印刷（株）
6. 調査資料及び遺物は長野県立歴史館へ移管予定である。
7. 発掘、整理作業において以下の方々にご指導、ご教示いただいた。記して感謝の意を表します。  
中村山克、中島庄一、望月静男、野尻湖ナウマンゾウ博物館、中野市教育委員会、飯山市教育委員会
8. 発掘調査・整理作業の担当は以下の通りである。  
平成14年度（2002）確認調査 市川隆之・黒岩 隆  
平成15年度（2003）面的調査 市川隆之・中野亮一  
平成16・17年度（2004）整理作業 市川隆之  
平成21年度（2009）印刷業務 市川隆之
9. 本報告書の執筆・編集は市川隆之が行い、石器は鶴田昭典、縄文土器は綿田弘実・貫田 明、経石の文字判読は入沢昌基に助言を得た。また、調査部長 平林 彰、調査第1課長 上田典男の校閲を受けた。

## 凡 例

1. 遺跡名は中野市教育委員会作製の遺跡分布図に掲載されている「月岡（つきおか）遺跡」である。
2. 遺跡名を表す遺跡記号として飯山・中野市域を表す「A」と、月岡（TUKIOKA）の「T」・「O」を組み合わせた「ATO」を用いた。遺物の注記および記録類にこの遺跡記号の表記を用いている。
3. 遺構記号はSX（削平地・堅穴建物跡）、ST（掘立柱建物跡）、SK（土坑・柱穴跡）、SD（溝跡）、SF（焼土跡）、SH（石垣・集石）、SM（経塚）を用い、混乱を避けるため本報告書でも調査時の番号のまま用いた。掘立柱建物柱穴跡はST番号（SKは省略）番号）で表記し、切り合いでBがAを切る場合はA→Bと表記している。

4. 遺構番号は検出順に付し、掘立柱建物跡のみ①区北から南、②区北から南の順で付した。
5. 遺跡・遺構の位置は旧国家座標を基準とした。
6. 基本土層・埋土の色調の記録は「新版 標準土色帖」により、本報告では色調名のみを表記した。
7. 遺構の規模の計測は以下の方法によっている。

掘立柱建物跡：梁・桁行長・柱間寸法は柱穴跡最深部となる中央付近で計測し、棟方向は梁行中央を結ぶライン、もしくは一部のみの残存では桁行で計測した。

土坑：規模は土坑中央を通る直交方向で計測し、長軸方位はその長軸で計測した。

8. 本報告書掲載図の縮尺は以下の通りである。

全体図（1：1000）、遺構全体図（1：250）、溝跡・土坑分布図（1：200、1：400）、削平地（1：100）、掘立柱建物跡（1：80）、竪穴建物跡・土坑・溝跡断面・焼土跡（1：40）

土器・陶磁器（1：4）、石製品（1：3）、石器・銭貨（1：2、1：1）、金属製品・経石（1：2）

上記以外の縮尺も用いているが、それぞれ図中に記載している。

9. 遺物写真はおおむね実測図と同じ大きさであるが、俯瞰写真のみは約1：3とした。
10. 本書付録CDに、本文、PDFを収録した。
11. 本報告書で用いたスクリーントーンは以下を示す。

#### 凡 例

遺構		焼土		炭		石						
遺物		土器		陶器		磁器		鉄軸		赤彩		煤

# 目 次

巻頭カラー

はじめに

例言・凡例

目次

第1章 調査の経過と方法	1
第1節 調査・整理の経過と調査体制	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 確認調査の概要と体制	1
3. 面的調査の概要と体制	2
4. 整理作業の概要と体制	4
第2節 発掘作業と整理作業の方法	5
1. 発掘作業の方法	5
2. 整理作業の方法	7
第2章 遺跡の環境と概要	8
第1節 遺跡の概要	8
第2節 遺跡の地形環境	8
第3節 歴史的環境	9
1. 周辺遺跡	9
2. 文献史料等からみた月岡周辺の歴史	14
第4節 遺跡の基本土層	17
第3章 遺 構	23
第1節 中世の遺構	23
1. 中世遺構の概観	23
(1) 遺跡の構成	23
①. 検出された遺構	23
②. 中世遺構が検出された平坦地	23
③. 各平坦地の概要	24
(2) ①・③区と②区平坦地の遺構	26
①. 各平坦地の区画と区画方法	26
②. 各区画で検出された遺構	27
③. 区画間の関係	29
2. 掘立柱建物跡の認定	29
(1) 建物跡の認定方法	29
(2) 建物跡の特徴	31
3. 12トレンチ平坦地の遺構	33
4. ①・③区平坦地の遺構	33

(1) 北部区画の遺構	33
①. 溝跡	33
②. 削平地	36
③. 掘立柱建物跡	36
④. 土坑	41
⑤. 焼土跡	43
(2) 中央区画の遺構	43
①. 溝跡	44
②. 削平地	46
③. 掘立柱建物跡	48
④. 土坑	73
⑤. 焼土跡	87
⑥. 石垣・集石遺構	88
(3) 南部区画の遺構	90
①. 溝跡	91
②. 削平地	92
③. 竪穴建物跡	93
④. 掘立柱建物跡	95
⑤. 土坑	107
⑥. 焼土跡	112
5. ②区平坦地の遺構	113
(1) 北部区画の遺構	113
①. 溝跡	114
②. 削平地	117
③. 掘立柱建物跡	118
④. 土坑	126
(2) 南部区画の遺構	130
①. 溝跡	131
②. 掘立柱建物跡	132
③. 土坑	136
6. 経塚	137
第2節 中世以前の遺構と包含層	142
第4章 遺物	148
第1節 焼物	148
1. 中近世の焼物	148
2. 古墳～古代の土器	149
3. 弥生土器	149
4. 縄文土器	156
第2節 石器・石製品	159
1. 中世の石製品	159



2. 中世以前の石製品・石器	160
第3節 金属製品	162
1. 鉄製品	162
2. 銅製品	164
3. 銭貨	164
第4節 経石	165
第5章 まとめ	206
第1節 中世の遺構	206
第2節 経塚について	216
第3節 弥生土器について	217
第6章 結語	218

写真図版  
報告書抄録  
奥付

## 挿図目次

第1図 月岡遺跡の位置	1	第23図 掘立柱建物跡ST20～22	59
第2図 調査地点とグリッド設定	3	第24図 掘立柱建物跡ST23～25	62
第3図 調査グリッド模式図	6	第25図 掘立柱建物跡ST26・27	64
第4図 遺跡周辺の地形	8	第26図 掘立柱建物跡ST28～30	65
第5図 周辺遺跡分布	10	第27図 掘立柱建物跡ST31～34	67
第6図 土層の分布状況	18	第28図 掘立柱建物跡ST35～40	70
第7図 基本土層柱状図	19	第29図 掘立柱建物跡ST41～43	72
第8図 ①・③区平坦地トレンチ土層図	20	第30図①区 土坑1	74
第9図 遺構全体図	21・22	第31図①区 土坑2	76
第10図 中世遺構検出平坦地分布	23	第32図①区 土坑3	78
第11図 溝跡分布と区画の想定模式図	25	第33図①区 土坑4	80
第12図 土坑・竪穴建物址分布	28	第34図①区 土坑5	82
第13図 掘立柱建物跡模式図	30	第35図①区 土坑6	84
第14図 掘立柱建物跡分布	32	第36図①区 土坑7	86
第15図 ①・③区溝跡	35	第37図 焼土跡SF01～09	87
第16図 削平地SX01・03・04・06	37	第38図 石垣・集石遺構SH01・02	89
第17図 削平地断面	38	第39図 竪穴建物跡SX05	94
第18図 掘立柱建物跡ST01～03	40	第40図 掘立柱建物跡ST44～48	96
第19図 掘立柱建物跡ST04～06	49	第41図 掘立柱建物跡ST49～54	98
第20図 掘立柱建物跡ST07～10	51	第42図 掘立柱建物跡ST49～54 エレベーション	99
第21図 掘立柱建物跡ST11～14	53	第43図 掘立柱建物跡ST55～57	102
第22図 掘立柱建物跡ST15～19	56		

第44図	掘立柱建物跡ST58～65	105	第73図	経石 5	170
第45図	②区溝跡	115	第74図	経石 6	171
第46図	削平地SX02	117	第75図	経石 7	172
第47図	掘立柱建物跡ST66～70	119	第76図	経石 8	173
第48図	掘立柱建物跡ST71～76	122	第77図	経石 9	174
第49図	掘立柱建物跡ST77・78	125	第78図	経石10	175
第50図	②区土坑 1	127	第79図	経石11	176
第51図	②区土坑 2	129	第80図	経石12	177
第52図	掘立柱建物跡ST79	133	第81図	経石13	178
第53図	掘立柱建物跡ST80～84	134	第82図	経石14	179
第54図	経塚SM01平面	138	第83図	経石15	180
第55図	経塚SM01断面	139	第84図	経石16	181
第56図	経塚SM01経石出土状況	140	第85図	経石17	182
第57図	経塚SM01下部	141	第86図	経石18	183
第58図	④区SD17	142	第87図	経石19	184
第59図	グリッド別弥生土器出土重量分布 グラフ	143	第88図	経石20	185
第60図	グリッド別弥生土器出土重量分布	144	第89図	経石21	186
第61図	中近世の焼物 1	150	第90図	経石22	187
第62図	中近世の焼物 2	151	第91図	経石23	188
第63図	弥生土器 1	153	第92図	経石24	189
第64図	弥生土器 2	154	第93図	経石25	190
第65図	弥生土器 3・縄文土器	155	第94図	経石26	191
第66図	石製品	160	第95図	経石27	192
第67図	石器	161	第96図	経石28	193
第68図	金属製品	163	第97図	経石29	194
第69図	経石 1	166	第98図	経石30	195
第70図	経石 2	167	第99図	経石31	196
第71図	経石 3	168	第100図	①～③区中世遺構全体図	207
第72図	経石 4	169	第101図	①・③区平坦地の主な遺構変遷	210
			第102図	②区平坦地の主な遺構変遷	212

## 挿表目次

第 1 表	周辺遺跡一覧表	11・12	第 7 表	焼物観察表	157～159
第 2 表	調査した平坦地の規模と検出遺構	24	第 8 表	石製品・石器観察表	162
第 3 表	各区画の規模と検出遺構	27	第 9 表	金属製品観察表	164
第 4 表	各区画の中世土坑	27	第10表	経石観察表	197～205
第 5 表	掘立柱建物跡一覧表	145	第11表	各平坦地の変遷の対比	214
第 6 表	土坑一覧表	146			

## 写真目次

巻頭カラー 1	PL18	経石 2
①・③区平坦地の中世遺構全景	PL19	経石 3
月岡遺跡出土の中世遺物	PL20	経石 4
巻頭カラー 2	PL21	経石 5
経塚全景	PL22	経石 6
経塚出土の一字一石経	PL23	経石 7
PL 1 調査地遠景	PL24	経石 8
PL 2 ④区、12トレンチ、①・②・③区中世遺構 全景	PL25	経石 9
PL 3 ①・②区調査前風景、確認調査 3・4トレン チ	PL26	経石10
PL 4 ①区中世遺構 1	PL27	経石11
PL 5 ①区中世遺構 2	PL28	経石12
PL 6 ①区中世遺構 3	PL29	経石13
PL 7 ①区中世遺構 4	PL30	経石14
PL 8 ①区中世遺構 5、②区中世遺構 1	PL31	経石15
PL 9 ②区中世遺構 2	PL32	経石16
PL10 ①・②区斜面の石垣・集石遺構、経塚 1	PL33	経石17
PL11 経塚 2	PL34	経石18
PL12 ①区中世以前の土器包含層	PL35	経石19
PL13 中近世焼物 1	PL36	経石20
PL14 中近世焼物 2、石製品、金属製品	PL37	経石21
PL15 弥生土器 1	PL38	経石22
PL16 弥生土器 2、縄文土器、石器	PL39	経石23
PL17 経石 1	PL40	経石24
	PL41	経石25

## 添付CD収録データ

1. 月岡遺跡発掘調査報告書. pdf

# 第1章 調査の経過と方法

## 第1節 調査・整理の経過と調査体制

### 1. 調査に至る経緯

月岡遺跡は長野県の北部、中野市岩井地区にあり(第1図)、弥生・平安時代の遺跡とされるが発掘調査歴はない。この月岡遺跡の一部に北陸新幹線が計画されたことから、平成14年4月11日に長野県教育委員会文化財・生涯学習課において日本鉄道建設公団、長野県高速道・北陸新幹線局、文化財・生涯学習課、長野県埋蔵文化財センターによる月岡遺跡の保護協議が行われた。調査対象地は月岡遺跡北西部斜面にかかるトンネル坑口周囲と付け替え道路部分で、本線トンネル坑口は地表面の深度が浅いために一旦掘り割ってトンネルを構築して埋めもどす工法とされた。そのため遺跡が破壊される恐れが生じた。しかし、月岡遺跡は調査歴がなく本発掘調査の必要性も不明だったことから、現地確認の上で今後の方針を協議することとなり、同年4月26日に現地で再協議が行われた。遺跡では比高の大きな平坦地が複数連続する様相が確認され、遺跡背後にある山城(岩井城)に関連する可能性も想定された。しかし、対象地が付け替え道路を含む約9,800㎡と広大なため、遺構を確認する調査を実施することになり、長野県埋蔵文化財センターが担当した。

### 2. 確認調査の概要と体制

先の保護協議を受けて平成14年11月25日～12月6日にかけて長野県埋蔵文化財センターでは確認調査を実施した。対象地内の平坦地各所にトレンチ1～10までの10本のトレンチを人力・重機を併用しながら掘削し、土層の堆積状況と遺構・遺物の有無を調べた(第2図)。掘削面積は約150㎡である。確認調査の結果、本線部分の平坦地に入れた1～5トレンチでは青銅製香炉や略定形の青磁碗などの中世陶磁器、弥生



第1図 月岡遺跡の位置 (1:50000)

土器が出土し、柱穴跡や土坑や経塚も検出された。また、南に離れた丘陵縁部にかかる場所の8トレンチでは遺構が未確認ながら縄文時代や中世の遺物が採取された。これらの結果から、対象地内は中世と弥生時代を中心とした遺跡で、特に本線にかかる谷地形内の平坦地は面的調査が必要と捉えられた。その一方で、トンネル坑口の丘陵北側の斜面にある帯状平坦地に入れた10トレンチでは、造成土の下から経塚の河川礫が出土し、造成が中世以後であること、さらに8トレンチ西側の一段下がった平坦地に入れた7トレンチでは中世遺物を包含する土層が存在せず、現耕土直下がローム層となって、かなり削平されていると捉えられたことから調査の必要はないと判断した。また、付け替え道路用地の丘陵西側緩斜面部や本線の上端の平坦地は、山林や対象地周囲を民地に囲まれて重機による掘削が実施できないことから、後日、面的調査時に確認することとした。確認調査の体制は以下の通りである。

所長 深瀬弘夫

副所長兼管理部長 原 聖 管理部長補佐 田中照幸

調査部長 小林秀夫 調査課長 土屋 積 調査研究員 市川隆之、黒岩 隆

### 3. 面的調査の概要と体制

確認調査結果を受けて、平成15年4月1日付で日本鉄道建設公団北陸新幹線建設局と(財)長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター間で調査の受委託契約が結ばれた。調査対象地は丘陵上の面的調査と確認調査が実施できなかった付け替え道路部分を含んで面積9,800㎡とし、5月15日～10月11日に実施した。調査対象地は複数の階段状の平坦地に分かれ、しかも本線と付け替え道路に分割されることから、面的調査を実施する箇所を①～④区と呼称した(第2図)。このなかで、最も遺構が密集すると予想された①・②区は、同時に広範囲を調査するほうが全体記録の作成や精査が進めやすいと考え、排土は④区とその隣接する新幹線用地外(借地)に仮置きすることとした。

5月15日に重機を搬入し、排土置場とその搬出道となる④区、③区から調査を着手して、6月4日までに②区、①区の順で中世遺構検出面までの表土を除去した。5月19日より調査補助員が加わって遺構精査を開始した。

この遺構精査と並行して、前年度から持ち越した付け替え道路にかかる丘陵西・南斜面の確認調査を実施した。立木の伐採が終わった後の5月20日に、用地内の斜面の一部を崩して道をつくりながら重機でトレンチ(11トレンチ)を掘ったが、遺構・遺物は確認できず、記録を作成して直ちに埋め戻した。また、南側斜面の山林伐採を行ったところでは急斜面で、平坦地等は確認できなかったことや、上方の④区で中世遺構が検出されていないことから面的調査の必要はないと判断した。

③・④区の面的調査は5月23日に終了し、①・②区の排土を③区を経由して④区へ搬出しはじめた。そして、重機による表土掘削が進んでいた②区から遺構精査に着手し、順次①区へ展開した。中世遺構が集中する①・②区を中心に7月19日に現地説明会を実施し、7月30日に中世遺構全体の空中写真撮影を行った。その後、前年度確認調査が行えていなかった①区東方上段の平坦地に8月7日からトレンチ(12トレンチ)を人力で掘削した。また、8月19日からは中世遺構下層の①区弥生土器包含層の調査と、②区の経塚調査に着手した。弥生土器包含層の調査は、2×2m四方の調査小グリッド毎に土器を取り上げながら包含層を掘り下げ、9月12日まで継続した。経塚調査は9月18日まで実施し、あわせて経塚の礫をすべて洗浄して墨書の有無を確認する作業を行った。最後に①・②区間の石垣SH 01の断面調査を実施して9月19日に遺構精査を終了した。機材の片付け、プレハブの撤去を行い、調査区の埋め戻しは10月11日に終了した。

その後、11月12日に切りまわし道路の設計変更に伴って①区南側の墓地移転後の立会調査、平成16年4



第2図 調査地点とグリッド設定

月8日に②区北東部の遺跡内に残されていた墓地移転に係る立会調査を実施した。前者は急傾斜の尾根状地形部分を墓地造成で削平しており、中世遺物の散布や遺構も認められなかった。後者では墓地移転後に周辺を含めて調査したが遺構・遺物は確認できず調査を終了した。調査体制は以下のとおりである。

所長 深瀬弘夫

副所長兼管理部長 原 聖 管理部長補佐 上原 貞

調査部長 市澤英利 調査課長 廣瀬昭弘 調査研究員 市川隆之、中野亮一

#### 調査日誌抄録

平成14年度	7月19日	現地説明会開催。
4月11日	7月30日	空中写真撮影を実施。
	7月31日	①区斜面下の②区山際再検出。Pit 検出。
	8月1日	②区単点測量。①区清掃後、全景写真撮影。
4月26日	8月6日	中野市田川氏、牟礼村教育委員会小山氏見学。
11月25日～12月6日	8月7日	12トレンチ掘削。柱穴跡検出され、最上段の平垣地も中世の所産と捉えられる。
平成15年度	8月12日	12トレンチ測量。
4月1日	8月19日	経塚清掃。①区弥生包含層トレンチ掘削。
	8月21日	経塚写真撮影。
5月15日	8月22日	経塚碑取り外し着手。経石出土はじめる。
5月19日	9月2日	経塚の碑取り外しと①区弥生包含層調査継続。
5月20日	9月5日	経塚の断面図作成。これまでに経石は約250点確認される。
5月22日	9月10日	①区弥生包含層セクション図作成。
5月23日	9月16日	経塚完掘。12トレンチ埋め戻し。
5月27日	9月18日	経塚にタメ押しのトレンチを入れる。下部遺構は確認できず②区調査終了。
5月28日	9月19日	石垣トレンチ調査終了し、①区調査終了。器材撤収。埋め戻し開始。
5月29日	10月11日	埋め戻し完了。引き渡しの確認をして調査を終了する。
6月3日	11月12日	墓地移転地等の立会調査。
6月10日	平成16年度	
6月11日	4月8日	②区内の墓地移転立会調査。
6月18日		
7月3日		
7月9日		
7月15日		

#### 4. 整理作業の概要と体制

整理作業は調査年の平成15年度冬期に基礎整理、平成16・17・21年度に本格整理を断続的に行った。本格整理の体制は以下のとおりである。

所長 小沢将夫（平成16年度）・仁科松男（平成17・21年度）

副所長兼管理部長 藤岡俊文（平成16年度）・根岸誠司（平成17年度）・阿部精一（平成21年度）

管理係長 山崎勇次（平成16・17年度）・窪田秀樹（平成21年度）

調査部長 市澤英利（平成16・17年度）・平林 彰（平成21年度）  
 調査課長 廣瀬昭弘（平成16年度）・平林 彰（平成17年度）・上田典男（平成21年度）  
 調査研究員 市川隆之（平成16・17・21年度）

### 整理日誌抄録

平成15年度	原稿執筆。
(平成16年) 1～3月 写真整理・遺構図チェック・遺物洗淨・注記。経石の実測・写真撮影の委託。	平成21年度
平成16年度	4～5月 掘立柱建物跡検討・STエレベーション起こし。原稿執筆。
4～6月 遺構図整理・遺物の材質別の分類。	6～9月 原稿執筆・STエレベーション起こし。トレース・製版。
7～8月 遺物計測・接合・実測遺物の選択。	10月 経石図製版・写真図版作製。経石観察表作製・原稿執筆。
8～12月 遺物原稿執筆・遺物実測・遺構写真焼き付け。金属製品の保存処理。	11～（平成22年）2月 編集。校正・印刷。収納作業。
(平成17年) 1～3月 遺構・遺物実測図トレース・製版。遺物写真撮影・観察表の作製。	3月24日 発行
平成17年度	
(平成18年) 1～3月 遺構図トレース・経石トレース・	

## 第2節 発掘作業と整理作業の方法

### 1. 発掘作業の方法

#### 遺跡名と遺跡記号

遺跡名は中野市教育委員会の遺跡分布図に登録されている「月岡（つきおか）」遺跡である。長野県埋蔵文化財センターでは遺跡名をアルファベット3文字の組み合わせで示す遺跡記号を用いており、本遺跡は長野県内の地区割で中野・飯山地域を表す「A」を冠し、遺跡名の「TUKIOKA」の「T」・「O」をとって「ATO」とした。各種記録、遺物の注記はこの遺跡記号を用いている。

#### 遺構名

遺構は形状別にアルファベット2文字の組み合わせで表現する遺構記号にアラビア数字を付して個別遺構を指し示している（例 SK 01）。調査では以下の遺構記号を用いた。

ST 柱穴跡と思われる小規模な穴跡が方形に配列する掘立柱建物跡。

SK 円形・楕円形・方形の小規模な穴跡。土坑、柱穴跡。

SD 細長い落ち込みと認められる溝跡。

SH 集石や石垣など石の集中、あるいは石を組み合わせた遺構。

SF 被熱で赤化した範囲と認められた焼土跡。

SM 経塚。

SX 緩斜面に設けられた建物跡1棟前後に伴う小規模な平坦地を造成した削平地。

上記の遺構記号は検出時に付したため実際の遺構の性格とは一致しない場合もあるが、遺物や記録類の混乱を避けるために本報告では調査時の記号のまま用いた。例えば、SX 05は堅穴建物跡だが、検出時には削平地と認識したためにSXを用いた。また、SKは土坑を表すが、調査では掘立柱建物跡の検討が充



分行えなかったために柱穴跡もすべてSKで扱った。さらに、建物跡に伴う削平地や溝跡、内部施設の焼土跡や土坑と捉えられる遺構があるが、帰属関係の把握ができなかったため、個別に番号を与えている。

#### 調査地区と調査グリッド配置

面的調査対象地は斜面にある複数平坦地にかかり、同じ平坦地内でも本線と付け替え道路部に調査対象地が分かれるため、それぞれの調査対象地に地区名を付した。本線上段の広い平坦地を①区、本線下段平坦地を②区、本線から離れた付け替え道路部分の①区平坦地の続きを③区、付け替え道路の南に離れた地点を④区と呼称した(第2図)。これ以外に①区上方の平坦地や③区下の緩斜面の調査はトレンチ調査しか実施しておらず、トレンチ番号で呼称した。

調査地区名とは別に遺構の位置を示し、測量基準線となる調査グリッドを長野県埋蔵文化財センターで実施している方法に従って遺跡周辺を通る旧国家座標のX=91,800、Y=-11,400を基準として200m四方の大大地区を設定した(第2図)。今回の調査範囲は1つの大大地区内に収まり、大大地区の呼称名は与えていない。大大地区内はさらに40m四方の大大地区25個に区切り、大大地区はアルファベットで呼称し、その中は8m四方の中地区と2m四方の小地区を設定した。中地区は大大地区アルファベットに北西からアラビア数字1・2…とつけ、A1のように呼称した。これと重なるように大大地区内を2m間隔に東西方向にA~T、南北方向に01~20として組み合わせて2m四方の小地区を呼称した(第3図)。

#### 基本土層の把握と記録

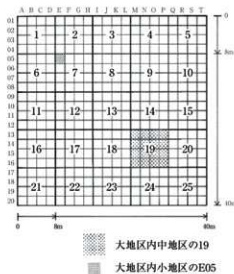
基本土層は確認調査で把握したものを標準とし、土層記録もトレンチ壁で作成した。トレンチは狭い平坦地に分かれる遺跡地形にあわせて等高線方向に設定したものが多いが、①区4トレンチのみは平坦地の造成状況を把握するために、傾斜方向に設定し、確認調査時に掘削できなかった3トレンチとの中間域や弥生土器包含層以下の土層記録は別に記録して整理作業で統合・調整した。また、面的調査では新たに③区北壁、④区北壁、11・12トレンチの土層図を追加記録した。

#### 面的調査範囲と遺構面

確認調査から、①~④区を面的調査対象とし、その調査面積は約3,000㎡である。遺構面は、①区で弥生包含層が厚く比較的良好に遺存することから、中世遺構検出面のⅡ層下面、弥生土器包含層のⅢ層の2面調査としたが、他地区は中世遺構検出面のみの1面調査である。また、①区では確認調査時にⅠ層下面でも落ち込みが散在的に捉えられていたが、数も少なく埋土の特徴から中世遺構と識別が可能と考えて中世遺構と同面で調査した。なお、野尻湖ナウマンゾウ博物館の学芸員中村由克氏から、Ⅳ層ローム層は信濃町ローム層に対比されるとの指導を受け、これまで信濃町ローム層での遺物出土が認められていないことから調査は実施しなかった。

#### 調査の手順

・中世遺構 重機でⅡ層までの土を除去し、その後、ジョレン等で遺構を探す(検出)作業を行った。検出された中世遺構で、SKは一方、SXは十字、SDは横断方向で土層断面記録を作成して掘り下げた。出土遺物は破片が多いことから一括で取り上げ、施設の一部と思われる礫は平面記録を作成した。掘りあがった状態で個々の遺構の平面図を作成し、中世面で調査区全体の空中写真撮影と地形測量を行った。



第3図 調査グリッド模式図

経塚・石垣についてはそれぞれの項で記述する。なお、掘立柱建物跡の柱穴跡は非常に密集して検出されたために、調査時には建物跡の認定が行えず、具体的な建物跡の認定は整理作業段階にもちこした。

・弥生包含層 弥生時代の包含層は3・4トレンチ位置に細いサブトレンチを入れて土層を観察し、出土遺物は2m四方の小地区ごとに一括で取り上げた。さらに、傾斜方向での土層と遺物の関係を記録するため、3・4トレンチ脇に幅50cmほどのベルトを残し、そのベルト内のみは土層断面図に遺物の出土分布をドットで記録した。弥生土器包含層掘削後にIV層上面の地形測量を行って調査を終了した。

#### 記録の方法

遺跡全体や遺構は図化記録と写真記録を中心に記録した。図化記録は平面図と断面図の記録があるが、平面図は調査グリッド中地区にあたる位置に測量杭を設置し、これを基準に手取りで作成したものと、業者に委託した単点測量がある。経塚は表土除去後に空中写真測量を実施した。遺構断面記録は調査区内に設置した標高杭を元に、高さを計測しながら手取りで作図した。写真は35mmモノクロ・スライド、6×7モノクロ・スライドを用いて撮影し、遺跡全体は業者に委託して空中写真撮影を行った。

## 2. 整理作業の方法

### 整理の手順

調査年次の冬期に記録類の整備・点検などの基礎整理を行い、翌年から報告書作成へむけた本格整理を実施した。

#### 基礎整理

調査で作成した各種記録類の整備・点検を中心に実施した。まず、図面記録類に番号を付して台帳を作成すると共に記録漏れを補う作業を行った。また、写真はアルバムに収納して撮影内容や撮影日、撮影方向を転記した。これらの作業後、個別遺構ごとに平面図と断面図の矛盾を調整した2次原因を作成し、これらを用いて全体図を作成した。

#### 本格整理

図面類は基礎整理によって作成された2次原因を用いてトレース作業、製版作業を行った。遺構写真は報告書に掲載するものを選択して焼き付け、図版を作成して報告書作成にそなえた。遺物は洗浄後、遺跡名・遺構（グリッド）名・出土層位などを遺物に記入する注記作業を行い、材質別に分類した。土器は接合作業を行いながら、遺構別・グリッド別に出土した焼物種・器種別の破片数・重量の計測を行い、図で掲載するものを選択した。金属製品はレントゲン写真を撮影した後に錆を落とし、石製品ともに報告書に掲載するものを選択した。これらの遺物は実測図を作製し、トレース、写真撮影を行い、製版作業を行った。なお、経石は量が多いこともあり、実測・写真撮影は業者に委託した。これらの作業と並行して遺跡の位置やグリッド配置の図などを新たに作成し、これらもトレースと製版作業を行うと共に、原稿の執筆を行った。最後に編集を行って報告書の印刷を行った。

#### 収納

調査資料は長野県立歴史館へ移管することとし、移管へむけて遺物は報告書の掲載番号を付し、図面や写真と共に台帳を作成した。

## 第2章 遺跡の環境と概要

### 第1節 遺跡の概要

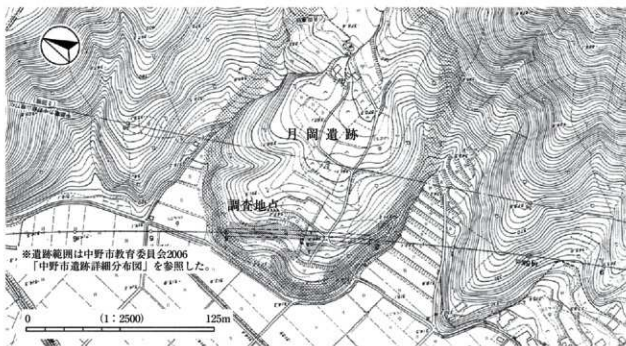
月岡遺跡の所在する中野市や飯山市周辺は、新潟県と接した千曲川下流域にあたり、盆地の標高は低く、冬季の積雪が多いところである。遺跡所在地は古代の高井郡に含まれ、高井郡は古代や中世には畿内や信濃国府からみて信濃北端にあることから、奥郡と呼ばれた地域に含まれる。しかし、中世には物資流通の幹線である日本海に近く、内陸信濃への玄関口であった。

遺跡は中野市の岩井地区に所在する。岩井地区は西に千曲川とその自然堤防・後背低地が広がり、高社山から延びた尾根が東から取り巻いて湾状地形となっている。月岡遺跡は沖積地を取り巻く尾根から派生した丘陵上にあつて、沖積地から比高20～30mの急斜面で隔てられている(第4図)。

現在、丘陵上は耕作地に利用され、山手にある湧水から引水した水田もつくられているが、かつて岩井集落や称念寺があつたと言い伝えられている。遺跡の発掘調査歴はなく、表面採集によって遺跡は丘陵上の緩斜面を中心に広がる弥生・平安時代の遺跡と捉えられていた。しかし、今回の発掘調査で月岡遺跡は中世、弥生時代を中心とする遺跡で、中世遺構は丘陵上の谷地形内に分布する階段状平坦地に広がっていると確認された。先の伝承との関連が目されることである。

### 第2節 遺跡の地形環境

月岡遺跡の立地する丘陵は、北信濃のランドマーク、高社山から北方向に延びた虚空蔵山西麓から分岐した枝尾根にあたる。高社火山山地に含まれ、基盤は輝石安山岩溶岩で、表層に信濃町ローム層が載る



第4図 遺跡周辺の地形(1:2500)

(註1)。丘陵上は比較的傾斜が緩やかで、北・南側は沢に画されて台地状となっている(第4図)。丘陵上面は標高の高い東山際が最も平坦で、西側へむかって緩やかに傾斜し、その縁部は急傾斜となって沖積地へ落ち込む。発掘地点はこの丘陵西縁の傾斜変換点付近で、その中央には西へ向かって落ち込む浅い谷地形が入っている。この谷地形内は西側へ徐々に傾斜角度を増して調査②区の西端付近から急速に落ち込んでいくが、発掘により中世に遡ると捉えられた平坦地はこの谷地形内の上部を中心に分布する。各平坦地は3~4mほどの比高をもって丘陵上部まで連続している。

人為的に造成された平坦地は丘陵全体に認められるが、今回の発掘で中世に造成された平坦地と近世以後から現代に造成された平坦地が捉えられた。中世に造成された平坦地は、中世遺物を包含する土層が平坦地背後の斜面側に厚く堆積し、中世遺構がその斜面際まで分布する特徴がある。今回調査した①・②区を含む丘陵西端から丘陵上中央を縦断する浅い谷地形内に連なる三日月形の平坦地の多くが該当すると思われる。一方、近世以後から現代に造成された平坦地では、平坦地背後の斜面際にある中世遺物を含む土層は削られて残存せず、削平された山側は表土直下にローム層が露呈する。この近世以後に造成された平坦地は④区やその下段、さらにトンネル北坑口にあたる北面斜面など丘陵の南・北側斜面やその縁に多く分布する。また、中世に造成された平坦地でも近世以後に改変が加えられたところもある。

なお、野尻湖ナウマンゾウ博物館学芸員の中村由克氏から、平坦地の比高に比べて調査区内のIV層ローム層の層厚に大差ないことから、地すべり等による緩やかな段状地形を利用して中世に平坦地を造成した可能性が指摘された。

註1：赤羽貞幸・加藤碩一・富樫茂子・金原啓司1992『地域地質研究報告 中野地域の地質』地質調査所

## 第3節 歴史的環境

### 1. 周辺遺跡

月岡遺跡の所在する中野市岩井地区は、千曲川対岸は飯山市、東方の尾根反対側は飯山市や木島平村と接する。そこで、周辺の市町村域も含んで周辺の遺跡を概観しておく(註1)。

**旧石器時代** 飯山市北部の長峰丘陵や千曲川右岸の山麓沿い、あるいは中野市高丘・長丘丘陵など千曲川沿いの河岸段丘や山麓、あるいは丘陵に遺跡が知られている。周辺では遺跡背後の尾根先端にある飯山市安田神社境内遺跡で細石刃核、尾根裏手の山麓にある山岸遺跡で尖頭器・搔器、南に隣接した中野市田上の飯綱前地籍で尖頭器(スクレイパー?)、宮の前地籍で尖頭器、日向地籍で局部磨製石斧が採取されている。遺跡は少なく不明な点も多いが、今後遺跡がみつかる可能性が指摘されている(註2)。

**縄文時代** 草創期・早期の遺跡は千曲川から離れた丘陵部などに点在し、前期の遺跡は千曲川沿い沖積地に分布する。月岡遺跡に近い田上遺跡では早期~前期土器が採集され、本遺跡から北西3kmほどの千曲川対岸に前期土器の標式遺跡である有尾遺跡がある。中期は千曲川沿いの中野市宮反遺跡、千田遺跡、飯山市深沢遺跡などが知られている。後期は遺跡北東8kmほどのところに多数の石棺墓がみつかった飯山市宮中遺跡があり、千曲川対岸にある飯山市田草川尻遺跡や隣接地の田上寺前遺跡、日向遺跡も後期の遺跡とされる。晩期では魚の線刻土器が採集された飯山市山の神遺跡が千曲川対岸にある。当地域の遺跡動向は長野県下と同様で、前期から中期に遺跡数が増加し、後期から晩期にかけて減少する。また、この地域の特徴として北陸との関係は注目される。なお、千曲川下流域では遡上するサケ・マスとの関係が注目されており、最近その確証が得られてきている(註3)。

**弥生時代** 中期前半までの遺跡は不明だが、中期後半の粟林式期では飯山市の広井川に面した長峰丘陵に



第5図 周辺遺跡分布

第1-1表 周辺遺跡一覧表 (●印は発掘歴あり)

番号	遺跡名	古河村番号	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	備考
1	月面遺跡	中野189								本報告
2	大塚	奥山82	○	○				○		S57・58発掘。塚あり
3	大塚古墳群	奥山168～181				○				
4	水沢	奥山83			○					
5	下木沢	奥山84						○		
6	小塚	奥山85		●	●					S43, 日2・3発掘
7	長峰遺跡群	奥山86～92	○	○	●					S25・26・30・33発掘
8	針道遺	奥山893		●	●			○		日10発掘
9	中水城	奥山284								
10	中水館跡	奥山285						○		
11	馬の塚城	奥山286						○		
12	布施田神社	奥山100						○		
13	島	奥山101						○		
14	藤川	奥山102		○						
15	別府塚	奥山103		●		○				S43発掘
16	正行寺北(仮称)	奥山104		○				○		
17	北塚	奥山105			●			○		S53・56・58・59発掘
18	巖谷川	奥山106		○	●			●		S54発掘
19	上新田	奥山320			○					
20	四ヶ所小城	奥山321						○		
21	山口城	奥山287						○		
22	山口御厨儀	奥山322						○		
23	南峰	奥山323						○		
24	東原寺	奥山107	○?							● 日11発掘
25	鬼ヶ峰・小長原・小長原城	奥山108・109・288			●			●		S44, 日2発掘平安木箱墓
26	長峰	奥山110	○							
27	須多ヶ峰	奥山111		●	●	●				S40・41・45・62発掘
28	お茶屋・大池1号・2号墳	奥山112・191・192						○		
29	長者塚・林子塚・黄金石上	奥山113～115						○		黄金石上S38発掘
30	有馬1～3号墳	奥山186～195				○				1号前方方墳
31	有馬	奥山116				○		○		● S24・27・30・62発掘
32	ザニ沼上	奥山117			○					
33	大聖寺遺	奥山118								
34	神明町1～4号墳・天池跡塚	奥山196～200							●	跡塚から銅板録出土S25発掘
35	北飯山	奥山120		○						
36	北町	奥山119			●	●		●		S58, 日13発掘
37	飯山城・城山	奥山121・288	○	○	○			○		日13・16発掘
38	藤崎老	奥山122			○					
39	飯山シヤンアエド	奥山123								
40	直飯	奥山124								
41	十三ヶ丘	奥山125			○			○		
42	とんぼ城	奥山300								
43	北塚北	奥山130			○					
44	法云寺1～3号墳	奥山201～203								日9一部発掘。2号前方方墳
45	法云寺	奥山128						○		
46	小塚城	奥山152						●		S57発掘
47	南川尻	奥山153								
48	中町郷谷	奥山133				○		○		
49	北塚	奥山131			○			○		
50	北塚館	奥山302						○		
51	京ノ町	奥山134								
52	藤堀館	奥山303						○		
53	藤崎神社南	奥山132						○		
54	平山	奥山151			○					
55	法花寺古墳群	奥山205～210				○				
56	小田原城	奥山305								
57	山ノ神	奥山136・137		●						S47発掘調査
58	奇山古墳	奥山211								
59	五笠野	奥山139			○					
60	田草川尻	奥山135		○	○	○		●		S47・52・57・60, 日2・3発掘
61	寛館	奥山140								
62	駒ヶ山古墳	奥山204				○				日5調査。前方方墳
63	道楽沢	奥山141								
64	五里久保古墳群	奥山212～219				○				
65	五里久保	奥山142								
66	山根	奥山143								
67	藤立	奥山144						○		
68	藤立館	奥山307						○		
69	上根	奥山146			○					
70	藤城	奥山306						○		
71	茂石工門新田	奥山145		○						
72	澤沢	奥山147		●						S38・40, 日5発掘
73	田草寺中	奥山138						○		
74	田草城	奥山308								
75	大台崎Ⅱ	奥山137						○		望月氏敷示
76	大台崎Ⅰ	奥山76						○		
77	大台崎	奥山75		○	○			●		S45・48発掘
78	藤野	奥山74		○	○					S24発掘
79	太子林	奥山61		●						S55, 日10発掘
80	小倉神社里宮・南電池・小倉藤跡	奥山62・63・319							●	日14・16発掘
81	関沢館	奥山317						○		
82	関沢	奥山65								
83	宮中	奥山66		●						S55, 日5発掘
84	千鳥	奥山67		●				●		S53・54発掘
										日1, 日14発掘

## 第2章 遺跡の環境と概要

第1-2表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	市町村番号	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	備考
85	大瀬館	奥山274							○	
86	城の南	奥山268	○							
87	廣瀬堂(孤塚)古墳	奥山188				○				石室遺址
88	猿飼田	奥山169						○		
89	神戸1・2号墳	奥山189・190				○				横穴式石室遺址
90	神戸城	奥山309						○		
91	木原	奥山170	○	○						
92	尾崎	奥山173			○			○		
93	鬼押堂	奥山324						○		
94	山原	奥山126	○	○						
95	其他古墳群	奥山220~249				○				塚の可能性あり
96	吉	奥山127		○	○					
97	岩井城	奥山306, 中野193						○		
98	安神社	奥山128	○							
99	廣瀬山古墳群	奥山250~273				○				塚の可能性あり
100	北畑	本島平1		○						
101	相楽古墳	本島平2				○				
102	野野	本島平3		○	○			○		
103	橋巻塚	本島平5		●				●	●	S53・56・62, 日1~4発掘
104	風輪	本島平25		○						
105	廣沢	本島平24		○				●	○	日5発掘
106	三枝塚	本島平4		●	○			○	○	S51発掘
107	平塚	本島平6			●			○	○	日8発掘
108	朝日3口今塚	本島平7				○				
109	大塚	本島平8		○						日8発掘
110	根塚	本島平9			●			●	●	日8~12発掘
111	北郷	本島平10		○						
112	小原	本島平26		○						
113	鬼の妻古墳	本島平11				○				
114	塚ノ木	本島平13								
115	計見小路	本島平14			○					
116	カマハ	本島平15						○		
117	西町	本島平16		●						日4発掘
118	中町	本島平17								
119	立町	本島平19		○						
120	西町小路	本島平20						○		
121	高山	本島平18		●						日4発掘
122	中小塚小丸山古								○	
123	与助沢	本島平21							○	
124	中小塚	中野192							○	
125	本島氏山城	中野191							○	
126	下山	中野190							○	中世築塚
127	岩井1・2号墳	中野187・188				○				
128	日向1~3号墳・日向塚	中野183~186				○		○	○	日向塚は中世塚
129	川上遺跡群	中野181		○	●		○		○	S57・58・60発掘
130	大塚	中野182						○		
131	小丸山古墳	中野179				○				
132	柳沢・八幡塚古墳・塚穴古墳	中野176~178		●	●			●	●	日18~20発掘。銅戈・銅鐔出土
133	藤平築塚	中野180							○	
134	古牧	中野166		○						
135	深沢城跡	中野242							○	
136	前の城の築跡	中野257							○	
137	塚田城跡	中野161							○	
138	施入塚	中野211								
139	大日影	中野212		○						
140	塚田	中野163~165		○	○		○	○	○	S46発掘
141	ねごや	中野162							○	
142	笠原	中野82			○				○	石室遺跡あり
143	じり跡	中野174								
144	杉跡	中野173		○						
145	神宮寺	中野172						○		
146	神宮寺下	中野171			○	●				S33・46発掘
147	梵天	中野170		○	○					
148	きつね塚	中野169							○	塚状遺跡
149	尾敷道	中野168		○						
150	岡上	中野167		○						
151	福沢	中野215		○						

●=発掘あり。

小泉遺跡群や上野遺跡、柳町遺跡、中野市では千曲川沿いに銅戈・銅鐸を出土した柳沢遺跡、田豊田村の川久保遺跡、南大原遺跡、中期後半の土器標式遺跡である栗林遺跡があり、中野市街地周辺の扇状地には西条・岩船遺跡群、長丘丘陵東麓には七瀬遺跡がある。月岡遺跡に近いところでは田上寺の前遺跡で栗林式土器が採取され、礫床木棺墓に類する遺構が見つまっている。

後期は千曲川沿いに加えて山麓沿いなどに小規模な遺跡が分布し、近隣では田上寺の前遺跡、柳沢遺跡、千曲川対岸の田草川尻遺跡、遺跡背後の尾根反対側の古遺跡などがある。後期末頃の遺跡には南にやや離れたが中野市安源寺遺跡や七瀬遺跡、高地性集落とも指摘されるがまん瀬遺跡がある。それ以外に方形周溝墓から鉄剣が出土した飯山市須多ヶ峯遺跡、朝鮮半島からもたらされたともされる鉄剣が出土した墳丘墓の木島平村根塚遺跡があり、根塚の発見から千曲川東岸に未発見の弥生後期集落遺跡が存在する可能性が指摘されている(註4)。

当地域の弥生時代は、東海系の条痕文系土器の遺跡が不明瞭ながら、栗林式土器の中期後半以後に遺跡数が増加する。この栗林式土器の成立には北陸の影響が指摘され(註5)、北陸に近い当地域は成立にかかわる重要な位置を担ったと思われる。しかし、飯山市・中野市地域にやや遅れて善光寺平や佐久平に規模の大きな集落遺跡が出現し、太型蛤刃石斧や玉類の製作分業や流通の発達に伴って中野市以南に遺跡数や遺跡規模の増大化傾向が認められるように思われる。そして、後期初頭では遺跡数が減少するが、後期には千曲川水系を中心に長野県北部に分布する箱清水式土器分布圏に包括されながら、飯山型(註6)とよばれる地域的な形態の亜種が分布する小地域ができたと思定されている。その小地域的なまとまりのなかに根塚のような墳丘墓が位置づくと思われる。

**古墳時代** 当地域の古墳では、前方後方墳が飯山市勘介山古墳、同有尾1号墳、同法伝寺2号墳、南に中野市蟹沢古墳、前方後円墳は中野市の長丘丘陵に七瀬双子、同市新野に高遠山古墳がある。円墳を中心とする古墳群は中野市東部山地に南から桜沢、金鐘山の新町、高遠山、姥懐山、栗和田、高丘・長丘丘陵に立ヶ花・安源寺、七瀬・田麦・厚貝古墳群、月岡遺跡を含む中野市北部周辺に田上・岩井古墳群、千曲川対岸の飯山市に勘介山、法伝寺・法花寺・五里久保古墳群、神明町古墳群、木島平村に合掌形石室をもつ和栗古墳がある。発掘された古墳では、合掌形石室をもつ中野市金鐘山古墳が5世紀末、同姥懐山古墳が4世紀末～5世紀中頃、同七瀬古墳群2～6号墳、林畔1・2号墳は削形木棺直葬の5世紀前半の所産、高遠山古墳が粘土郭・木炭郭の主体部2基検出された4世紀の所産とされる。なお、古墳とされるなかには田麦中畝3～5号墳や月岡近くの飯綱山古墳群、やや離れた其綿古墳群など中世塚の可能性が指摘されるものがある。

集落遺跡は弥生時代末～古墳前期では飯山市柳町・上野・須多ヶ峯遺跡、中野市安源寺遺跡があり、古墳中期では千曲川対岸の田草川尻遺跡、円形周溝墓が検出された飯山市照里、有尾遺跡などがある。古墳後期では羽口を出土した飯山市田草川尻遺跡、高社山山麓の中野市神宮寺下、赤岩、千曲川沿いの千田・宮沖・川久保遺跡などが知られるが、総じて発見例は少ない。なお、祭祀遺跡として中野市新井大ロフ遺跡があり、類似した祭祀遺構が中野市立ヶ花城山遺跡、飯山市田草川尻遺跡で見つまっている。

当地域の古墳時代のはじまりの様子は不明瞭だが、高地性集落とされる越市の浦山遺跡・新井市斐田遺跡(註7)、あるいは中野市がまん瀬遺跡などの存在から、弥生後期に大きな緊張を伴う画期が存在した可能性がある。その後、古墳時代前期では北陸の影響を受けた土器や搬入品が増加(註8)し、そのなかで前方後方墳が飯山市、中野市内各所に出現したようだ。そして、前方後方墳に続くと思われる前方後円墳がより狭い範囲に分布して数も限られる点から、次第に地域をまとめる首長が成長してきたと思定できようか。古墳後期には善光寺平南部と同様に突出した規模の古墳はみられなくなる。

**古代** 奈良時代の遺跡は、高丘丘陵で須恵器窯や工房跡、宮沖・川久保遺跡で集落跡が確認されている



が、善光寺平のような規模の大きな集落跡も、条里遺構が想定される地点もなく、古墳時代から古代への展開の仕方や奈良時代のようなすば不明瞭な点が多い。一方、平安時代の遺跡は、小型住居跡数軒からなる小遺跡ながら、千曲川沿いの中野市柳沢遺跡、宮沖・川久保、牛出遺跡、飯山市北原遺跡、木島平村蟹沢遺跡などが知られている。平安時代の良好な木棺墓がみつかった飯山市小佐原遺跡など一部に注目される遺跡はあるが、小規模な遺跡が多いことが当地域の特徴かもしれない。

中世 城館跡以外の集落跡は断片的な発見にとどまり詳細な様相はわからない。月岡遺跡周辺での発掘例はないが、遺跡内北東部の小高い場所に五輪塔が散乱し、遺跡北西尾根上に塚の可能性も指摘される飯綱山古墳群、東尾根上に岩井城跡、南東方向にやや離れた田上から木島平村への峠道脇に木島氏山城（牧ノ入城）、峠から下った尾根上に中小屋小丸山砦がある。岩井城跡は主郭周辺に横溝と垂下する縦堀をもつ大きな山城で、武田氏の改修が指摘されている（註9）。他の2城は規模が小さい。岩井氏の館跡は月岡、あるいは千曲川沿いの微高地となる現在の岩井集落内の神社地に比定されているが、遺構は不明で断定には至っていない（註10）。なお、遺跡背後の尾根から続く南東方向にそびえる高社山は山岳信仰の山で、南西山麓の赤岩には高社神社神宮寺、岩井地区の南にある田上には高社山大平等寺がある。いずれも真言宗で創建は平安時代とされる。その高社山から北西方向へ延びる尾根上には北から其綿古墳群、飯綱山古墳群、日向塚、棚平旗塚、狐塚などの塚が点在し、高社山南東山麓の山ノ内町夜間瀬では昭和49年に発掘された火葬骨を伴う礫石経塚の千手寺経塚（註11）、東山麓には山ノ内町夜間瀬苗間に苗間経塚、南方の柳沢に八幡塚経塚（註12）がある。また、飯山市小菅神社を始め、山岳信仰に係る神社や寺院も多い。

上記のように当地域は全時代を通して善光寺平の文化圏内に位置し、南側の善光寺平ほどではないが千曲川沿いの発達した沖積地の地形環境や千曲川の資源を利用した活動が賑々と認められる。そうしたなかで、東海から稲作が波及する弥生中期前半以前や、陸路によって畿内との関係ができる古墳後期～古代の遺跡が少なく感じられ、それ以外の北陸との関係が強まる時期に遺跡数が増加するように見受けられる。また、独特な形状と存在感から当地域のランドマークとして親しまれる高社山は、古代以後に信仰の山としての位置を占めており、その高社山北西に延びる尾根に接した本遺跡も関連があるとも思われる。

## 2. 文献史料等からみた月岡周辺の歴史

ここでは中野市誌や飯山市誌（註13）を参考に古代から中世の様相をみておく。

平安時代初期には遺跡の所在する高井郡には5郷あったことが知られ、遺跡周辺では高社山の北側周辺に神戸郷、南側の中野市周辺に日野郷があったと推定されている。月岡遺跡周辺はどの郷に含まれるかは明らかにされていない。平安時代中頃には、平将門の乱平定の勲功で藤原秀郷に与えられた功田として日野郷内の中野御牧、それとは別に高社山山麓付近に比定されている笠原御牧（後に南北に分かれる）、夜間瀬周辺に比定される金倉井御牧が成立したとされる。このなかで金倉井御牧は短期で廃絶したが、平安時代末期ころには、中野御牧に藤原助広、笠原御牧には笠原頼直などの武士がいたことが知られ、中野御牧の藤原氏は地域に根付いて中野氏を名乗るようになるとされる。これらの牧内の開発や、古代以来の郷内からの発展、あるいは郷内未開地の新開発によってさまざまな郷村が生まれたと推測されており、月岡遺跡のある岩井地区南隣の田上は文永八年（1271）に「南笠原内田上」と見え、月岡遺跡周辺も笠原南牧に含まれていた可能性がある。

ところで、中野氏は鎌倉時代に一族の尾藤・佐藤氏との所領争いに加え、惣領家に男子がおらず所領を相続した女子が市河氏の後妻に入って、所領の一部を市河氏に取られて零細化していく。一方、市河氏は飯山市南部へ所領を拡大し、高梨氏も中野市南部から北部へ所領を拡大して室町時代には市河・高梨氏が

対立する。高梨氏が優位になって帰結して飯山市南東部までを掌握した。月岡遺跡周辺は高梨氏の勢力拡大のなかでの北部境界に近い場所であったとみられる。

やがて、武田氏が侵攻してくるが、中野市域ではその前後に天文十九年（1550）中野市内の真宗寺院の笠原本誓寺の僧である超賢が加賀小山御坊へ転出し、翌天文二十二年（1553）に高梨氏と岩井氏が摂津本願寺を訪れている（註13）。湯本軍一氏は、超賢の転出は武田氏侵攻から逃れる退去、高梨・岩井氏の本願寺訪問を門徒との関係や武田氏侵攻に対する政治的な配慮が秘められていたと想定している（註13）。なお、月岡遺跡の所在地名を名乗る「岩井」氏が文献にみえるのは、この天文二十二年の記事が初出で、高梨氏と行動を共にしていることから高梨氏の一族と考えられている（註13）。月岡遺跡の中心的な年代は、高梨氏・岩井氏の支配時期に重なり、中野市誌ではその岩井氏の居館跡を月岡の地に推測している。

その後、高梨氏は武田氏侵攻により上杉氏を頼って越後に転出を余儀なくされ、かわりに市河（川）氏が領域を広げる。しかし、武田氏滅亡と共に上杉氏の支配するところとなり、岩井氏は飯山城代として信濃にもどり、やがては上杉氏の移封に従って転出している。

道 月岡遺跡の所在する北信濃は北陸との関係が強いことから、北陸と当地域を繋ぐ道は地域の歴史的背景を考える上で重要な要素と考えられる。そこで、道について飯山市誌を参考に触れておく。

飯山市誌（註14）によると、信濃北部と越後境の関田山脈を越える峠として、深坂、野々海、須川、伏野、ひるこ、大明神、小沢、平丸、富倉などがあり、他に斑尾山麓から信濃町を通過する道などがあった。峠を越えた道は飯山市や栄村に入って千曲川の東と西岸沿いの道に接続していたと推測されている。本遺跡のある千曲川東岸の道は、現在、千曲川に沿って遺跡北西にある飯山市綱切橋脇を通過して野沢温泉や木島平村へつながる道があるが、ここは尾根が千曲川淵までせり出しており、中世では洪水の影響がない遺跡背後の尾根続きを越える木島平村塔の原や中小屋を通過する道が利用されたと推測されている。また、これとは別に地元の方々の話では遺跡北脇を通過して背後の尾根鞍部へ続く道がかつてあったという。この尾根越えの道脇に岩井城が位置し、この峠をこえると飯山市木島に入る。

千曲川の渡しは、遺跡北西方向にある飯山市安田（現綱切橋周辺）にあったとされる。戦国時代の古文書に「綱取」「縄取」とみえ、縄綱渡に由来する名前と考えられている。現在の「綱切」の名称は江戸時代初期の慶長年間の古文書にみえるのが初出という。また、戦国時代、武田氏は上杉方の守備する千曲川西岸の飯山城を避けて千曲川東岸沿いに北上し、東岸にある飯山市小菅神社は永禄年間（永禄四年（1564））に武田氏によって焼却されたとも伝える（註15）。武田氏の動向にみえるような千曲川東側を通る幹線道が遺跡周辺を通過し、さらに飯山方面への千曲川渡しも近いなど交通の要所に月岡遺跡があったといえよう。

称念寺 寺伝ではもともと下高井郡倭村岩井月岡にあって天台宗であったが、建保元年（1213）開基安諦（あんたい）が親賢戸隠参籠の折りに弟子となり、真宗に改めたと伝える。そして天文年間に千曲川西側の飯山市の奈良沢の西南に移り、元和六年（1620）飯山城下町の現在地に移転したという（註16）。ちなみに、中野市誌では中野市域に多くの真宗寺院があるが、寺伝の多くが高梨氏支配時代の創建年代を伝えていることに注目し、真宗寺院の成立に高梨氏が関連していた可能性を指摘している。

岩井氏 岩井氏は遺跡所在地の字名を冠する武士で、その居館跡は月岡が岩井集落のある千曲川沿いの自然堤防上に推測されている。岩井氏は戦国時代からその名がみえ、その出自は飯山市を本拠とする泉氏の一族ともされるが、高梨氏の一族とする説が有力である。天文二十一年（1552）高梨政頼は上京にあたって岩井などに夫役負担を徴し、翌年岩井民部大輔と共に本願寺へ挨拶に向かっているが、伝承にある称念寺移転時期と前後する時期に重なる。その後、高梨氏は飯山上杉氏に応援を請うていることから弘治年間には岩井氏も飯山へ退き、弘治二年（1556）に信玄は旧高梨氏領の岩井北隣の安田の地を市河（川）氏

## 第2章 遺跡の環境と概要

に宛がっている。また、永禄五年前後(1562)と推測される上杉氏の文書に岩井氏が越後から飯山口の守備に赴いていることが窺え、少なくとも永禄年間には上杉氏をたよって越後に転出したとされる。その後、岩井氏は所領が越後に給されたこともあって越後に留まり、上杉景勝時代に飯山城代として信濃に一旦戻ったが、やがて上杉氏の移封に従って転出している。

- 註1 周辺遺跡分布図は以下の文献を参考とし、飯山市の遺跡の一部は飯山市教育委員会の望月静雄氏にご教示いただいた。また、木島平村の遺跡分布は長野県教育委員会の遺跡分布マイラーを参照した。
- 中野市教育委員会2006『長野県中野市遺跡詳細分布図』、同2001『中野市の文化財』、飯山市教育委員会1986『飯山の遺跡』、同2003『飯山市遺跡分布図』、宮坂武男2002『図解 山城探訪第十二集 高井資料編』・2004『図解 山城探訪第十四集 補遺資料編 東北信版』、長野県教育委員会1983『長野県の中世城館跡分布調査報告書』
- 岡孝一・田川幸生1981『第1編 原始の中野』『中野市誌 歴史編(前編)』中野市誌編纂委員会
- 田川幸生・金井深次・金井善久一朗『第2編 古代の中野』1981『中野市誌 歴史編(前編)』同上
- 壇原長則1987『中野平の古墳概観』『高井』第79号
- 中島庄一1993『第一編第一章第一節飯山のあけぼの』『飯山市誌 歴史編上』同上
- 金井正三1993『第一編第一章第二節土器を使いはじめた人びと』『飯山市誌 歴史編上』同上
- 太田文雄1993『第一編第一章第三節稲作のはじまり』『飯山市誌 歴史編上』同上
- 望月静雄1993『第一編第一章第四節古墳造りと村』『飯山市誌 歴史編上』同上
- 註2 中野市教育委員会1986『出土』
- 註3 これまで一部の遺跡でサケ・マスのはねかみ出土していたが、サケ・マスを本格的に捕った確証は得られていなかった(榎原 健1981『縄文時代における千曲川漁労について』『高井』第54号)。しかし、最近千曲川沿いの縄文遺跡群でサケ・マスのはねが多く確認された(水沢敦子2009『内陸部における縄文と環境—縄文遺跡群の調査研究から』『遺跡と環境』博古研究会2009年研究発表会 資料)
- 註4 木島平村教育委員会2002『根塚遺跡』
- 註5 笹沢 浩1996『弥生時代中部高地 栗林式土器』『日本土器事典』藤山園、石川日出志2002『栗林式土器の形成過程』『長野県考古学会誌』99・100 長野県考古学会
- 註6 笹沢 浩1986『箱清水式土器の文化圏と小地域』『歴史手帖』14-1 名著出版
- 註7 新潟県教育委員会(財)新潟県縄文文化財調査事業団2000『浦山遺跡』、笹沢 浩2004『第二部第三章第三節 倭国大乱と高地性集落』『上越市誌 通史編1』上越市誌編さん委員会
- 註8 坂井秀弥 シンポジウム中の発言 1985『古墳出現期の地域性』千曲川古代文化研究所・北武蔵古代文化研究会・群馬県考古学談話会、前島 卓1993『北陸系土器の動向』『長野県考古学会誌』69・70 長野県考古学会
- 註9 宮坂武男2004『図解 山城探訪第十四集 補遺資料編 東北信版』、2002『図解 山城探訪第十二集 高井資料編』
- 註10 長野県教育委員会1983『長野県の中世城館跡 分布調査報告書』
- 註11 山ノ内町夜間瀬横倉千手寺経塚緊急発掘調査団1975『千手寺経塚』『高井』第三十一号 高井地方史研究会
- 註12 壇原長則1986『古墳に築造された経塚二例』『高井』第七十四号 高井地方史研究会
- 註13 湯元軍一1981『第3編 中世の中野』『中野市誌 歴史編(前編)』中野市誌編纂委員会
- 松澤芳宏『第二編第二章第二節大塔台戦とその後、第三章上杉氏と飯山』1993『飯山市誌 歴史編上』飯山市誌編纂専門委員会
- 郷道哲章1993『第二章第一節内乱の時代と飯山地方の土豪』『飯山市誌 歴史編上』飯山市誌編纂専門委員会
- 註14 松澤芳宏1993『第四章第一節人びとのからし』『飯山市誌 歴史編上』飯山市誌編纂専門委員会
- 註15 笹本正治2005『信仰の変化とまつり』『長野県飯山市小菅総合調査報告書』飯山市教育委員会
- 註16 称念寺の寺伝は称念寺発行の『案内』による

## 参考文献

- 飯山市 飯山市教育委員会1984『田草川尻遺跡Ⅲ 付清川尻(小原解)遺跡』
- 飯山市教育委員会1978『田草川尻遺跡Ⅱ』
- 飯山市教育委員会1984『北町遺跡』
- 飯山市教育委員会1985『北原遺跡Ⅳ』

- 飯山市教育委員会1986「田草川尻遺跡Ⅳ」  
 飯山市教育委員会1990「千苜遺跡の研究」  
 飯山市教育委員会1991「田草川尻遺跡Ⅴ」  
 飯山市教育委員会1991「小佐原・間沢遺跡」  
 飯山市教育委員会1991「田草川尻遺跡Ⅵ」  
 飯山市教育委員会1992「有尾遺跡」  
 飯山市教育委員会1992「田草川尻遺跡Ⅶ」  
 飯山市教育委員会1994「南原・深沢遺跡」  
 飯山市教育委員会1994「勘介山古墳測量調査報告書」  
 飯山市教育委員会1995「須多ヶ峯遺跡」  
 飯山市教育委員会1997「法伝寺2号古墳」  
 飯山市教育委員会1999「太子林遺跡Ⅱ地点」
- 木島平村  
 木島平村教育委員会1977「三枚原遺跡」  
 木島平村教育委員会1982「稲荷境遺跡」  
 木島平村教育委員会1990「稲荷境Ⅳ」  
 木島平村教育委員会1991「稲荷境Ⅴ」  
 木島平村教育委員会1993「西町遺跡・高山遺跡」
- 中野市  
 中野市教育委員会1986「田上」  
 中野市教育委員会1989「七瀬古墳 田麦中畝古墳群」  
 金井及次・桐原 健1958「長野県中野市赤岩神宮寺下遺跡  
 調査概報」『信濃』Ⅲ10-8
- 飯山市教育委員会1999「針湖池遺跡」  
 飯山市教育委員会2000「南條遺跡」  
 飯山市教育委員会2001「北町遺跡Ⅱ」  
 飯山市教育委員会2002「飯山城下情報センター敷地内遺跡」  
 飯山市教育委員会2003「千苜遺跡・小菅大聖院跡・大菅遺跡」  
 飯山市教育委員会2003「小菅修験遺跡2002」  
 飯山市教育委員会2004「飯山城跡」  
 飯山市教育委員会2004「飯山城跡 遺構確認調査報告」  
 飯山市教育委員会2005「長野県飯山市小菅総合調査報告書」
- 木島平村教育委員会1994「蟹沢遺跡」  
 木島平村教育委員会1997「根塚遺跡・大塚遺跡・平塚遺跡」  
 木島平村教育委員会2002「根塚遺跡」
- 中野市教育委員会1996「西条・岩船遺跡群発掘調査概報」  
 豊田村教育委員会1980「南大原遺跡」  
 豊田村教育委員会1994「飯綱平遺跡」  
 豊田村教育委員会2005「飯綱平遺跡Ⅱ」

## 第4節 遺跡の基本土層（第6～8図）

遺跡の基本土層は平成14年に実施した確認調査で地表面からⅠ～Ⅳ層に把握され、翌年の面的調査でも大きな変更がなかったためそのまま用いた。平坦地をつくる盛土層は中世と近世以後のものがあるが、基本土層の番号は振っていない。基本土層は以下の通りである。

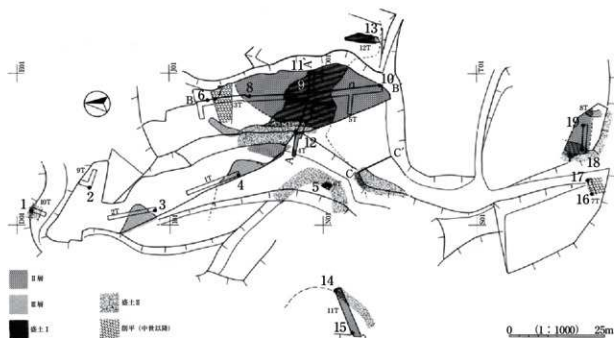
- Ⅰ層：灰褐色～灰黄褐色を呈する粘質土層。しまりなく灰色味の強い現耕作土Ⅰa層と黄色味が強くしまるⅠb層に分けられる。遺跡全体に分布する。Ⅰa層が現耕作土、Ⅰb層が中世以後の崩落土で、現耕作土の母材層とみられる。
- Ⅱ層：灰色味の強い褐灰色粘質土層。炭化物や中世遺物を包含し、中世遺構面を覆っている。①区では山手側で厚く堆積する傾向があるが、②区や④区では山手側を中心に分布しながらも、分布範囲は狭い。①区内ではローム粒の含み方や色調の違いから細分したが、山手側斜面直下ほど厚く堆積して分層できる傾向があり、中世以後の崩落土や雨水等によって運搬された東方から流入した土と思われる。中世遺構の上面を覆って中世の遺物を含むことから中世遺物包含層と捉えた。
- Ⅲ層：黒～黒褐色を呈する植物腐植土層で縄文～古代の土器を含む。①区の谷地形内には厚く堆積してローム粒の含み方や色調の差から分層され、そのなかで上部の黒味の強い土層に弥生土器が多く含まれる。①区ではアルファベット小文字を付して分層し、弥生土器包含層と捉えた。このほかにロームブロックを多く含む傾斜地の崩落土と思われる土層も含まれる。

Ⅳ層：遺構調査の最終面としたローム層で粗いスコリアを含む。非常に堅く締まっており、2次堆積ロームが入る①区谷地形内以外で露呈する。信濃町ロームに対比しうる（註1）。

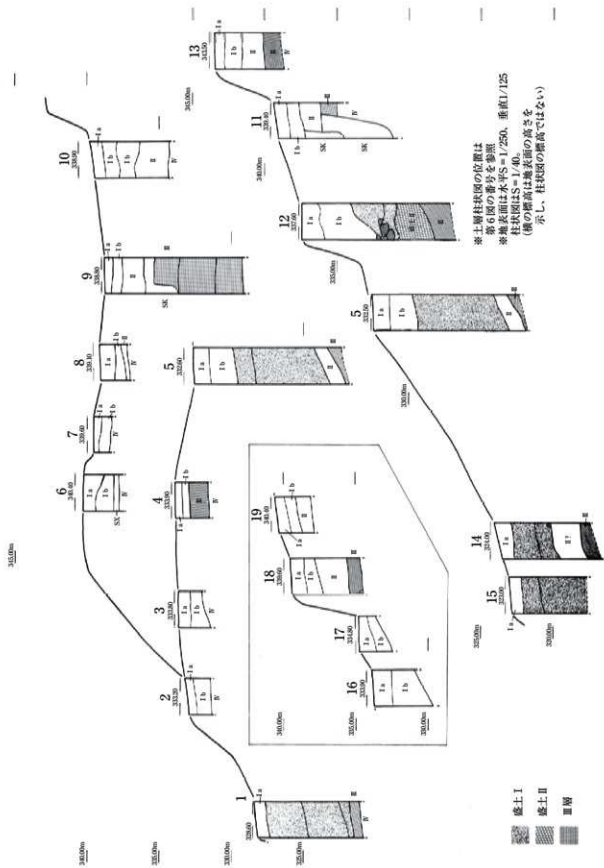
盛土層：Ⅳ層ロームブロックやⅢ層黒色土ブロックを多く含む特徴から、人為的な造成土と捉えられる土層で、平坦地の造成に関わって調査地内に部分的に認められる。さまざまな時期の所産があり、中世では平坦地を造成する盛土や、SX 01・03や04を埋める小規模な盛土があり、近世以後では中世平坦地の改変や拡張に伴う盛土、あるいは新たに平坦地を造成した盛土がある。このように盛土には多様な時期のものがあって基本土層としての番号は付していないが、平坦地造成に関わるⅡ層下の中世盛土層は盛土Ⅱ、Ⅱ層上面の近世以後と思われる盛土層は盛土Ⅰとした。

上記の基本土層は場所によって細分されたところもあるが、概ね調査区に共通して認められる。遺構検出面は近世以後と推測される小土坑若干がⅡ層上面、中世遺構はⅡ層下面の盛土層、Ⅲ、Ⅳ層上面で検出され、弥生～古代の土器はⅢ層上部の黒味の強いⅢb層に多く含まれる。また、SH 01は盛土Ⅰに伴う。しかし、Ⅰb・Ⅱ層が薄くなる平坦地先端付近では、盛土層とⅠb・Ⅱ層との関係が把握できなかったところがある。

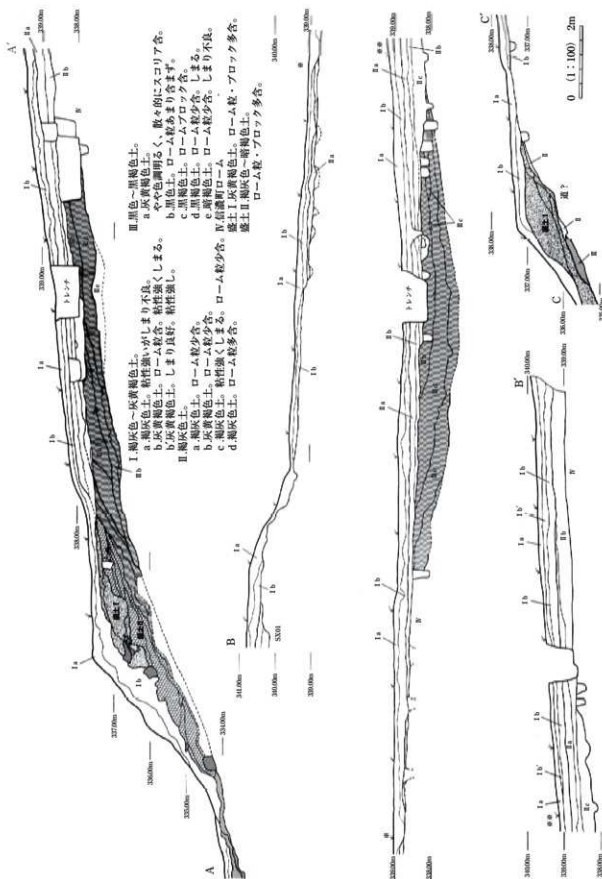
註1 信濃町野尻湖ナウマンゾウ博物館芸員 中村由克氏の現地指導による。



第6図 土層の分布状況



第7図 基本土層柱状図



第8図 ①・③区平田地トレンチ土層図





# 第3章 遺 構

## 第1節 中世の遺構

### 1. 中世遺構の概観

#### (1) 遺跡の構成

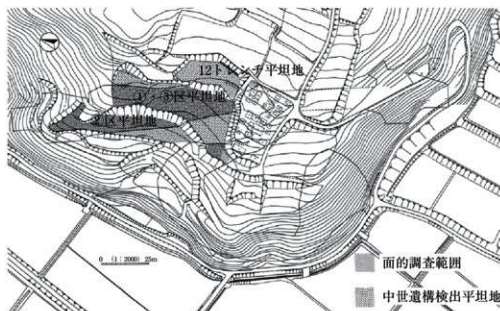
##### ①. 検出された遺構

今回の調査で検出された遺構は溝跡50条、削平地5か所、竪穴建物跡1軒、掘立柱建物跡84棟、土坑78基、焼土跡12か所、石垣・集石遺構2基、経塚1基がある。このなかで溝跡2条と土坑4基、石垣・集石遺構2基は近世に造られた可能性があり、他に地滑り等に伴うと思われる溝状の亀裂痕が7条ある。また、経塚は中世末～近世の所産と思われるが、年代は確定できなかった。それ以外の遺構は15～16世紀である。出土遺物には13世紀の焼物もあるが、鎌倉時代13世紀代と特定できた遺構はない。

##### ②. 中世遺構が検出された平坦地

中世の遺構は月岡の丘陵中央を西へ垂下する浅い谷地形内に連続する階段状平坦地で検出された。この平坦地は丘陵西側の斜面が低地に向かって急傾斜となる変換点付近から丘陵上方まで連続し、平坦地群全体がひとつの中世居住遺跡と捉えられる。各平坦地は比高3～5mの段差で隔てられ、丘陵上方ほど平坦地は広く段差も小さい。上方に遺跡の中心的な遺構が存在する可能性がある。調査した平坦地は、この平坦地群の下から2段目(②区)、3段目(①・③区)、4段目(12トレンチ)である。以下、②区平坦地、①・③区平坦地、12トレンチ平坦地と呼称する(第10図)。

各平坦地は、平坦地間の段差斜面際まで中世遺構が分布し、15～16世紀の遺物を包含するⅡ層がその上面を覆うことから、中世に造成されたと捉えられる。造成方法は傾斜上方を削り、削った土を下方に盛っ



第10図 中世遺構検出平坦地分布

で平坦な空間を作り出したものだが、平坦地間の比高3～5mながら、①区の東側（山側）ではローム層の削平が70cm程度しか認められず、西側（谷側）で捉えられた盛土範囲も狭い。従って、平坦地は大規模に造成したものではなく、地すべり等による階段状地形に若干手を加えて利用していると推測される（註1）。

この地すべり等に関わる可能性がある亀裂痕が①区南部の谷地形南縁周辺で検出された。調査当初は溝状の落ち込みとしてSD18～22、24・25としたが、断面形がV字状で地形傾斜方向に走り、U・J字状に屈曲、あるいは部分的に重複しながら連続する様子から、地滑りに伴う地割れあるいは亀裂痕と推測した（第11図）。埋土は弥生土器を含むⅢ層を基調とし、Ⅳ層ロームブロックを多く含む土層である。いずれも中世遺構に切られることから弥生時代～中世の間に生じたと推測される。

なお、経塚は②区の北西隅に位置する。ここは東側の①・③区平坦地と比高5mほどの斜面で隔てられ、南から延びる平坦地が①・③区平坦地の北端を取り巻いて東側へ鋭角に折れた箇所にあたる。①・③区平坦地との間にある5mほどの段差は地すべり等で階段状に分断された地形とみられ、経塚周囲に中世遺構がほとんど分布しないことから、平坦地が造成と関連するとは考えられない。そのため、経塚は平坦地一区画とは別個に扱うこととした。

以上のように月岡遺跡では丘陵中央を西に垂下する浅い谷地形内に連続する平坦地で中世遺構が検出され、各平坦地は後述するように溝跡によっていくつかの区画に分割されており、区画からなる平坦地が集合して、平坦地群全体で一つの居住遺構を構成すると捉えられる。

### ③. 各平坦地の概要

今回調査した3段の平坦地の規模・形状と検出遺構は以下の第2表の通りである。なお、①・③区と②区平坦地間の斜面で検出された石垣・集石遺構は便宜的に①・③区の遺構に含めた。

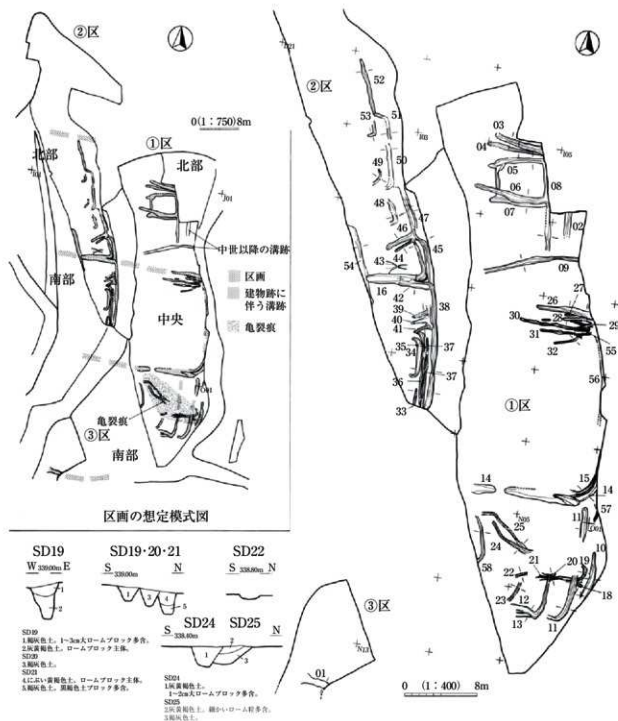
第2表 調査した平坦地の規模と検出遺構

平坦地名	規模（南北×東西長m）	区画	遺構（近世の可能性のあるものも含む）							
			溝跡	削平地	堅穴建物跡	掘立柱建物跡	土坑	焼土跡	石垣・集石	その他
12トレンチ	33×12	なし	0	0	0	0（柱穴跡あり）	0	0	0	
①・③区	60×20	3区画	27	4	1	65	65	12	2	
②区	60×12	2区画	23	1	0	19	13	0	0	経塚1

平坦地は丘陵西側斜面に上段から12トレンチ平坦地、①・③区平坦地、②区平坦地と連続し、それぞれ4m前後、3～5m前後の急斜面に隔てられている。規模は未調査域を含めた現地表面で推測される大きさで、①・③区平坦地が最も大きく、12トレンチ平坦地が最も狭い。なお、②区平坦地は現地表面で南北長約78mを測るが、南端に入れた確認調査6トレンチで地表面下1.3mのⅡ層上部に厚い盛り土層が確認され、近世以後に平坦地が拡張されたと捉えられた（第7図）。ただ、北部では遺構が検出されず、②区平坦地すべてに手を加えて利用されていたかは不明である。

各平坦地は、自然地形を利用したために平面形などの規則性は捉えにくく、①・③区平坦地は3区画、②区平坦地は2区画が認められるように、それぞれの平坦地規模に応じて小区画に分割して利用していたとみられ、12トレンチの平坦地のみは平坦地一つが1つの区画に相当する。

各平坦地で検出された遺構は、調査面積が異なるため単純に比較できないが、①・③区平坦地と②区平坦地では検出された遺構の様相が異なる。平坦地の利用時期では、①・③区平坦地で13世紀からの遺物が



第11図 溝跡分布と区画の想定模式図

採取されたのに対して、②区平坦地では15世紀からで、前者のほうが利用開始は早い可能性がある。また、①・③区平坦地の遺構密度は高く、各区画内での建物跡の建て替え回数も多いため、②区平坦地より長く利用されていた可能性がある。

次に、遺構の種類を比較すると、①・③区では掘立柱建物跡に加えて、土坑の数も多く、②区平坦地には少ない大型土坑や堅穴建物が検出されている。そして、これらの遺構は方位にあわせて構築されており、掘立柱建物跡では棟方位が南北方向から東西方向へ変化している。これに対して、②区平坦地では掘

立柱建物跡や土坑の数が少ない。この掘立柱建物跡は地形にあわせた棟方向と南北方向の二者があり、①・③区平坦地の掘立柱建物跡に比べて桁柱間数が少ない傾向がある。二つの平坦地間で遺構の様相が異なることは、居住階層差や利用状況、利用期間の違いを表していると思われる。

一方、各平坦地間に共通する様相も認められる。①・③区平坦地中央区画北辺を区画するSD26の西延長先に②区の区画溝跡SD16が位置し、平坦地を越えて両者が同じ規格ラインにある。また、SD16脇に石組を伴う大型土坑SK167・1145が位置するが、同様に①・③区平坦地中央区画北辺のSD26脇や、南辺のSD14・15脇や重複する場所に石組をもつ可能性がある大型土坑が認められる。このように平坦地相互に共通する様相が認められることから、同じ計画性によって編成された可能性が窺える。また、雨水浸入防止用の溝跡を伴う建物跡は①・③区平坦地、②区平坦地に分布し、広域に同様に認められることは同じ契機で出現した可能性がある。

これらの平坦地間の差異や共通する様相は第5章で述べるように、当初からのものではなく、遺跡存続時期内のある段階で現れていると捉えられる。

なお、平坦地間の連絡や、生活用水を運ぶために道があったと考えられるが、今回の調査では具体的に把握できなかった。唯一、③区西斜面でトレンチにかかって狭い道跡状の段差が検出された(第8図)。②区と③区を繋ぐ小道と思われるものの、調査区域で見つかったため全容は不明である。また、月岡遺跡の丘陵への通路は、現在は南側斜面につづれ折りの狭い農道があるが、かつては丘陵裾を南から西へ取り巻くように入って11トレンチ地点の緩斜面に入る道があったといわれ、その痕跡が平場として残っていた。ただし、11トレンチの調査では痕跡が判然とせず、中世に遡る道跡の存在は確認できなかった。

## (2) ①・③区と②区平坦地の遺構

### ①. 各平坦地の区画と区画方法

調査で検出された溝跡には、山側斜面に沿って10m前後延びて両端が谷側へ直角に折れる建物跡に伴う雨水浸入防止用溝跡と捉えられるものと、等高線と直交方向に比較的長く延びる空間の区画に伴うとみられる溝跡がある。比較的広く調査し得た①・③区平坦地と②区平坦地では、この区画溝跡あるいは土坑の配置からいくつかの区画に分割されていた様相が窺えた。

①・③区平坦地では、中央にSD26～32・55を北辺、SD56・57を東辺、SD14・15を南辺とする溝跡に取り巻かれた方形の区画があり、その区画北側と南側にもそれぞれ遺構が分布する空間があって、大きく3つの区画に分割されていた可能性が捉えられる。以下、北部、中央、南部区画と呼称する。中央区画の規模は南北長約20m、その北辺からSD03までの北部区画が南北長約18m、南辺SD14・15から①・③区南部区画南際SD01までの南北長が約22mとほぼ等間隔である。ただし、平坦地が三日月形なので東西長は13～23mと幅がある。

②区平坦地では、区画に関わる溝跡SD16により、南北にそれぞれ長さ約24mと13m以上の二つの区画が捉えられる。しかし、SD16と重複する位置にSD39～40を南辺、SD(44・)45を東辺、SD44・46を北辺とした「コ」字状の溝跡があり、その南側に類似した溝配置となるSD33～37が並ぶ。これらは南北長約8～10mの規模で、ほぼ建物跡1棟前後の大きさに当たることから、②区では建物跡が並列し、区画がない時期があったと推測される。整理ではSD39～41・44～46の区画に伴うとみられるST79を認定したが、その柱穴跡がSD16の脇にある区画関連の遺構と思われるSK167に切られているため、南北二つの区画が生まれたのは後出する可能性がある。一方、①・③区平坦地では②区平坦地のような区画範囲とずれた遺構配置は認められず、一貫して類似場所に区画が維持されていたとみられる。

①・③区平坦地と②区平坦地に認められる区画は、①区SD26の西延長先にSD16が位置し、同じ基準規

格で設定されたと見受けられる。また、①区中央区画北辺のSD26や南辺SD14、②区SD16に一部切られながらも隣接して石組をもつ大型土坑が分布している。これらは区画施設の一部か、区画境界に設定された施設と推測され、上述した溝跡による区画以前に、若干区画境界位置がずれながらも別の区画施設が存在していた可能性が窺える。

## ②. 各区画で検出された遺構

各区画の規模と検出された遺構を区画毎にまとめると第3表のようになる。なお、この表で②区平坦地の溝跡や掘立柱建物跡は区画以前と以後に厳密に区別できないため、便宜的に区画溝跡SD16を境とした南北いずれかの区画に含めて掲載している。

第3表 各区画の規模と検出遺構

	区画規模 南北長×東西長	遺構（近世の可能性のあるもの含む）						
		溝跡	削平地	竪穴建物跡	掘立柱建物跡	土坑	焼土跡	石垣・集石
①・③区北部	18×13～18m	8	1	0	3	9	4	0
①・③区中央	20×16m	12	2	0	40	35	7	2
①・③区南部	22×21～23m	7	1	1	22	21	1	0
②区北部	25×12m	13	1	0	13	9	0	0
②区南部	13以上×12m	10	0	0	6	4	0	0

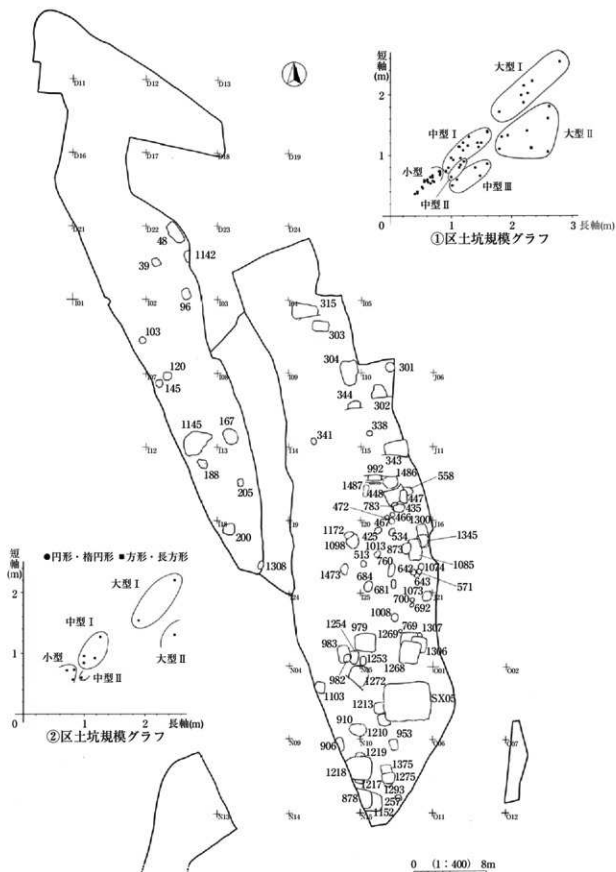
この表から、各区画の遺構種類や数、そのあり方には異なる様子が認められるが、一方で共通する様子も認められる。まず、共通する様子は、いずれの区画も掘立柱建物跡が存在し、各区画が掘立柱建物跡を中心に設定されたとみられる点である。

次に差異だが、上述したように①・③区では古い段階から区画が存在したが、②区の区画は後追いで設定された可能性がある。遺構種類では、竪穴建物跡が①区南部区画のみにあり、①区中央区画では圧倒的に掘立柱建物跡数が多い。土坑も区画毎に形状が異なる。土坑は①・③区平坦地の3区画に多く、②区平坦地では少ない傾向があるが、土坑の形態を長軸1.0m未満（小型）、1.0m前後～1.9m前後（中型）、2.0m以上（大型）、長軸と短軸比から1：1、3：2、2：1前後の平面形（それぞれⅠ・Ⅱ・Ⅲ類）に分類すると（第12図）、各区画では第4表のように分布する。

この表から、小型土坑は①区中央区画に多く、大型土坑は南部区画に多い傾向も窺え、中型土坑は①・③区平坦地に多く、中型Ⅲ類はほぼ中央区画にしかない。各土坑の性格は明らかにしえないが、形態差は機能差を表している可能性がある。大型Ⅰ・Ⅱ類は区画境界周辺に位置することから、境界に設置される施設・あるいは境界施設と思われ、大型Ⅱ～中型Ⅲ類は建物跡内に位置して内部施設と思われる。小型土坑で焼土を含む例は火所に関わる施設と思われる。類似した機能で若干異なる形態の土坑が含まれ、上記分類も厳密な機能差を捉えられているわけではないが、土坑の形態別分布状況の差は、各区画の建物跡内

第4表 各区画の中世土坑（近世の可能性のあるものを除く）

	大型Ⅰ類	大型Ⅱ類	中型Ⅰ類	中型Ⅱ類	中型Ⅲ類	小型	合計
①・③区北部	0	5	1	0	0	0	6
①・③区中央	1	2	8	2	5	15	33
①・③区南部	6	5	7	3	0	1	22
②区北部	2	1	4	0	0	2	9
②区南部	0	0	1	1	0	2	4



第12図 土坑・竪穴建物址分布

部構造や利用状況の違いに起因する可能性がある。

### ③. 区画間の関係

平坦地内の区画は上述したように、成立時期が異なる可能性がある。詳細は第5章で述べるが、最も古いと考えられる区画は①区中央区画で、遺構密度も高く、区画全体を当初から溝跡で囲んで継続的に掘立柱建物跡が建てられたと看取される。この中央区画と併存する南部区画も古くからあったと思われるが、唯一の竪穴建物跡が検出されたように利用状況が異なる空間であったともみられる。

①区南部区画はその後、雨水浸入防止用溝跡を伴う建物跡が建てられているが、同様に雨水浸入防止用溝跡を伴う建物跡が①区北部、②区にも認められる。このことから、ある時期から①・③区平坦地の北部区画・南部区画、②区平坦地は居住場所に利用されるようになり、②区では4棟前後の建物跡が並列する場所から南北二つの区画に分割されたと推測される。②区平坦地の4棟前後並列する段階では屋敷地のような明確な空間占有意識があったとは言い切れないように思われる。

## 2. 掘立柱建物跡の認定

調査時では建物跡の把握が十分行えず、認定は整理作業段階で行った。ここでは整理作業段階での検討方法に触れておく。なお、認定した掘立柱建物跡は遺構記号STを冠し、番号は①区北部から②区南部の順に付した。調査時に個別柱穴跡へSK番号を付したが、建物跡認定に曖昧さが残るため本報告の記述でもSK●、もしくは掘立柱ST一(●)と( )内にSK番号を略してそのまま記述した。

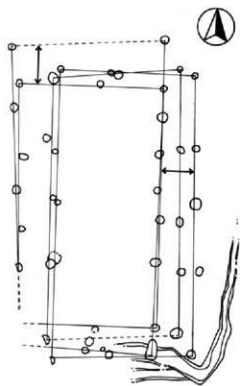
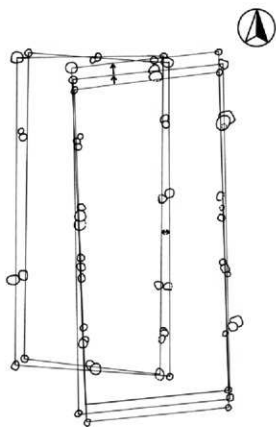
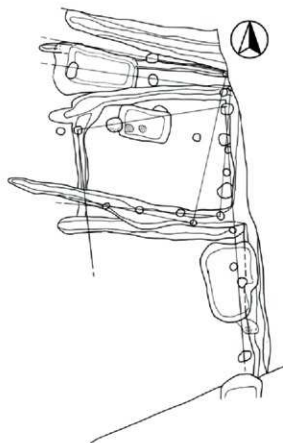
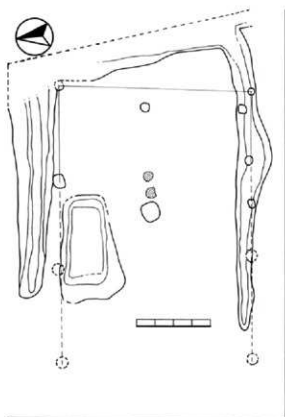
### (1) 建物跡の認定方法

整理作業では、建物跡の基準長として柱間1間の長さを探ることからはじめた。そこで注目したのが①区北部区画の削平地SX01である(第13図)。SX01内のSD03-06、SD04-07、コの字状SD05の各溝跡は東西方向に棟を持つ建物跡の軒下にある。その間隔が5m前後なので、梁行2間前後として、1間=2.5m前後という目安を得た。当時、厳密な物差を用いた確証がないため若干幅をもって捉えている。桁行については各平坦地の区画ごとに傾向を探った。

①・③区平坦地の北部区画の削平地SX01周辺では、建物跡に伴うSD03-06、SD04-07の延長上の平坦地西縁までが8~9mなので桁行3~4間前後となる。中央区画では削平地SX03・04東側でも中央付近は柱穴跡が特に密集するが、これは中央区画北辺に寄せた建物跡と、南辺に寄せた建物跡を建て替えたために、その中央付近で両者の建物柱穴跡が重なって残されたからと考えた。そこで、南辺と北辺から柱穴跡が密集する範囲までの距離12~14mが桁行の最大規模と考えて桁行4~5間前後と推定した。南部区画は建物跡に伴う雨水浸入防止用溝跡と捉えたSD10-13・23の長さ12m前後から、桁行4~5間前後と予想した。②区平坦地では建物跡に伴う雨水浸入溝跡SD39~41とSD45・46の長さ8m前後の3~4間と予想した。

上記の建物跡規模を参考に、建物跡は区画の形状に規定されて配置されるか、建物跡に伴う雨水浸入防止用溝跡に沿って存在すると予想して柱穴跡の配置を検討した。柱穴跡はほぼ長方形の辺上に並ぶが、梁行で対応した位置になく、ずれている場合がある。これは柱上に桁材を先に載せ、梁材を桁材の上に設置する構造に由来すると考えた。そこで、多少棟持柱穴跡の位置がずれても両端四隅の柱穴跡がそろい、その両端中間に柱穴跡が認められる柱穴跡配置を一つの建物跡と認定することとした。(ただし、すべての条件を満たさずとも可能性がある場合は建物跡と認定したものがある。)

次に、柱穴跡平面配置から認定した建物跡毎に柱穴跡エレベーション図を作成してみると、柱穴跡の底



第13图 掘立柱建物跡模式図



面標高がほぼ一致する例がいくつか認められた。これは同じ長さで伐採した柱材を用いて屋根を水平に据えたためと考えた。そこで、柱穴跡底面標高も同一建物跡柱穴跡の補助要件としたが、厳密な条件とは言い切れない。

以上のような認定基準によったため、桁行中間の柱穴跡の柱間寸法は1.6m～3.0m強まで幅がある。さらに、個々の建物跡の柱穴跡が重複しないよう調整しながら、建物跡の認定に努めたが、隣接する柱穴跡に代えても認定しうる場合もあって、曖昧さを残した。その反対に同一柱穴跡を複数の建物跡の柱穴跡に充てたものや、柱穴跡の帰属建物跡を断定できなかったもの、不明とした柱穴跡、桁行や梁行列からずれた位置の柱穴跡を充てざるを得なかった場合もある。

## (2) 建物跡の特徴

認定した建物跡は84棟(第14図)である。組めなかった柱穴跡があるので、遺跡に存在した掘立柱建物跡数は上記より多いとみられる。構造は、一部に総柱建物跡や内部に部分的な柱穴跡を捉えたものもあるが、基本的には長方形の掘立柱建物跡が主体である。規模は梁行2間×桁行3・4・5間の大・中型(母屋)と、梁行1間×桁行2間前後の小型建物跡の二者を認定し得た。後者は数も少なく分布も限られる。各区画別に建物跡規模を比較すると、②区より①区、①・③区平坦地の北部・南部区画よりも中央区画が大きい傾向がある。

なお、参考に掘立柱建物跡のモデルとしてST01を示した(第13図)。ST01内には内部施設と考えられる棟方向に長軸をとる長方形土坑が桁行際にあり、土間中央部に焼土跡がある。そして、建物跡の山側の桁・梁行外側を溝で囲む。ただし、内部施設と考えられる長方形土坑は普遍的な施設とは言えない。

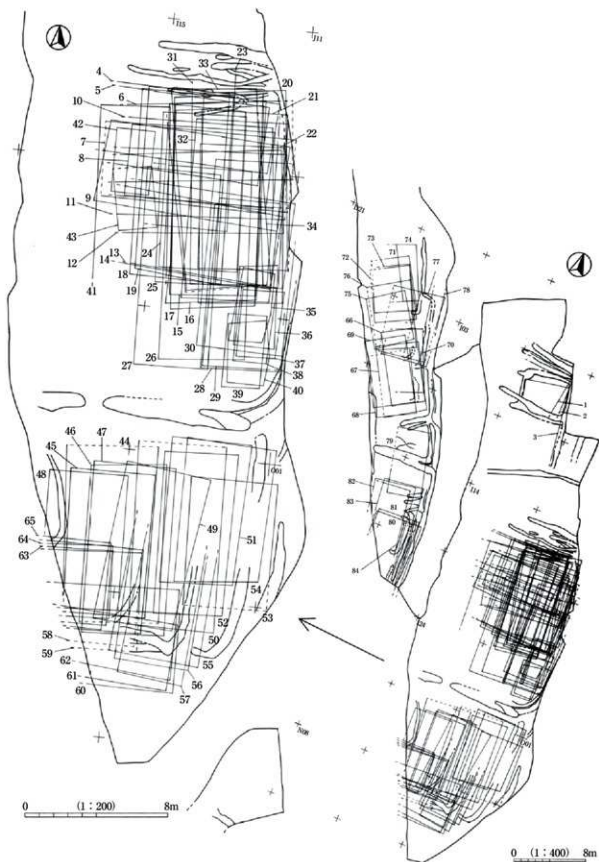
### ア. 建物跡の建て替え(第13図)

建物跡の検討のなかで、梁・桁行を少し平行移動させた位置に別建物跡が重なる例があり、本報告ではそれらを建て替えの関係と捉えてまとめて記述した。

建て替えと捉えた例は、①桁・梁行が60～1m前後平行移動して重なる位置にあるものが多いが(第13図B・C)、②柱穴跡が隣接するもの(第13図B)、あるいは③類似場所で棟方向を90°反転させたもの(第13図A)もある。①のような梁・桁行を僅かに平行移動した位置にある例は、建て替え前の柱の位置を知っていたからと思われ、両者は時間差がなく建て替えられたのではないかと考えた。建て替えと捉えた建物跡では②のように平行四辺形の平面形がそのまま平行移動した例(第13図B)もあり、柱以外の桁・梁・屋根材を再利用したか、柱を入れ替えたとも見受けられる。ただし、建て替えの関係と捉えた例には、柱間数や寸法の違いがあるものもあって認定に不安が残る。また、一つの建物跡を認定すると、次はその建物跡を参考に建物跡を認定していったため、類似した建物跡のみを認定している可能性がある。

ところで、①・③区平坦地の中央区画では類似場所に重なる建物跡を30棟以上認定した。この中央区画に限らず、遺跡全体で柱穴跡密度が高い理由は、基本土層Ⅱ層が中世遺構面を被覆したことによって、旧地表面かそれに近い面が残存し、通常の遺跡でみつかるとは異なる柱穴跡が検出できたためと考えられる。出土遺物から建物跡の建て替えられた最大時期幅を15～16世紀の200年間とすると、1回の建物跡の利用期間が十年以下となって短すぎるようにも感じられるが、豪雪地帯に立地することから、冬期の雪の加重に耐えられるように頻りに柱の建て替えを行った地域的な特性が背景にあるかもしれない。

なお、遺跡に隣接する飯山市では雪の加重に耐える建築構造として、小屋組と軸組を貫く柱で棟を支える「タテノボセ構造」が知られているが、本遺跡では棟を支えるとみられる梁中間の柱穴跡も特別大きく強固とは認められず、雪の耐加重のための構造については明らかにできなかった。



第14図 掘立柱建物跡分布

### 3. 12トレンチ平坦地の遺構 (第9図 PL2)

①区東方上段に位置する小規模な平坦地で、調査対象地のなかで最高所にあたる。この平坦地は①・③区平坦地から比高差約4m前後の急斜面で隔てられ、長さ約33m、幅12m前後の不整形の平面形である。調査対象地が狭く、しかも周囲を畑地・墓地に囲まれて重機による掘削も困難と思われたことから、人力によるトレンチ調査のみ実施した。トレンチの位置が平坦地西縁近くにあたるため、遺構密度は低く、柱穴跡が7基しか捉えられず、掘立柱建物跡の認定はできなかった。いずれの柱穴跡もトレンチの東・南端に位置してⅢ層上面で検出され、上面はⅡ層に覆われていた。

### 4. ①・③区平坦地の遺構

#### (1) 北部区画の遺構

北部区画は中央区画北辺SD26より北側の空間で、南辺以外の区画溝跡は捉えられていない。北部区画南側のSD09からSD26の間は近世以後に削平されたと捉えられ、遺構の遺存状態が悪い。そのため中世遺構の多くは北部区画の北側SX01周辺で検出されたが、遺構密度は低い。

検出遺構には、削平地SX01の1基、掘立柱建物跡ST01～03の3棟、土坑は大型SK303・304・315・343・344、中型SK301の合計6基、焼土跡はSF07・10～12の4基がある。溝跡はSD02～09の8条あるが、SD02・09は近世以後の可能性がある。これ以外に近世以後の土坑SK341・338の2基、溝跡の浸食部分を埋めたとと思われる落ち込みSK302が1基検出された。

SX01は検出時に一つの遺構と捉えたが、調査の結果では掘立柱建物跡ST01～03の建て替えと共に順次北へ拡張されたと捉えられた。各掘立柱建物跡はSX01東壁際にあるSD08を共有しながら、それと直交方向の溝跡を北側へ造り替えており、各建物跡と溝跡の組み合わせはST01がSD03と06、ST02がSD04と07、ST03がSD05である。また、ST01～03には長方形土坑や焼土跡を伴う可能性が捉えられた。長方形土坑SK303がST02、SK315がST01、SK304か344がST03に伴うとみられる。いずれも建物跡の桁行脇の、端から2目前後に位置する。焼土跡SF11・12はSK303埋土上面で検出され、SF10がST01(1292)に切られることから、SF11・12がST01、SF10がST02施設と考えられる。

これ以外の土坑SK301・343は単独の遺構と捉えられ、SF07は建物跡との関係が十分把握できなかった。SK343は中央区画北辺のSD26脇にある石組を伴った土坑と捉えられ、②区のSD16脇に位置するSK167・1145と同様に区画境界脇に位置する施設と思われる。

#### ①. 溝跡

SD02 (第15図) I05・10

位置：①区北部区画の東端にある。重複：なし。構造：幅約0.7mでN1°E方向に直線的に伸び、北端は調査区外へ、南端はSD09に接続する。調査区内で約4.0mの長さを測る。底面は雨水の浸食で凹凸が著しい。埋土：黒褐色土を基調として粗いスコリアを含む。出土遺物：図示していないが弥生土器1片5g出土した。所見：本址の南端がSD09と接続しており、SK302は本址の一部の疑いがある。SD09は近世以後の削平に伴う可能性があり、それに接続する本址も関連する溝跡と思われる。

SD03～08 (第15図) D24・I04

位置：①区北部区画のSX01内にあり、SX01東側にSD08があり、そこに接続するようにSD03～07が分岐する。SD03・06がST01、SD04・07がST02、SD05がST03を囲むように位置する。

重複：SD07→SD06、SD08→SD09。SD03～05重複関係は見逃したが、調査区東壁の土層観察からSX01はSD03個から埋められたと捉えSD05→04→03とした。なお、調査時にSD04→SK315と捉えたが、SK315はST01内施設で、そのST01より古いST02に付属するSD04が切るのは矛盾すると考えた。SD04北岸とSK315の平面形が重なるので、調査時の所見は見誤りの可能性がある。また、調査時に土層観察用ベルトにかかって柱穴跡SK311がSD06を切ると観察された。SD06はST01に伴うと捉えたが、この所見からST01に後出する建物跡の可能性が捉えられるが、具体的な建物跡は認定しえなかった。これ以外のSD05とSK315・316・317・324、SD06とSK312・313・314・321・322、SD07とSK334の新旧関係は何れも各溝跡底面上で検出したもので、溝跡が切るか、見逃しか直接関係は捉えられていない。また、SD08と土坑SK304、柱穴跡SK308、SF07は重複して新旧関係があるようにみえるが、SD03～07が掘り直されている状況から、SD08も掘り直されて調査時の形態はその最終形態と考えられる。そのため、掘り直し以前の古いSD08とは併存する可能性があると思われる。

構造：SD08はSX01東壁直下をN7°W方向に走り、SD09に切られる南端まで約10.2mの長さを測る。断面形は傾斜上方にあたる東側が急傾斜、西側が緩やかに立ち上がるU字状で、SX01底面からの深さは約20cmを測る。

SD03はSD08北端付近から西へ折れてN79°W方向に延びる溝跡である。西端は浅く途切れ、東端は調査区外へ延びて調査区内では約5.8mの長さを確認した。幅は東部で0.8mを測る。断面形は南壁が緩やかに立ち上がるU字状でSX01底面からの深さは12cmほどを測る。

SD04はSD08北部から西へN83°W方向に延びる。西端は浅く途切れ、東端はSD08に接続すると思われる。確認範囲で長さ約6.5m、幅0.3～0.4mを測る。断面形はU字状で深さ10cmと浅い。

SD05はSD08北端からN78°E方向に約6.3m延び、その西端は南へ折れて2.5mほど続いて南端はSD06付近で浅く途切れる。幅は北辺0.5m、西辺0.3mを測り、北辺西端は雨水で浸食されたためか、やや突出して浅く途切れる。断面形はU字状で、SX01底面からの深さは北辺東部で20cm、西辺で10cmを測る。

SD06はSD08の途中からN82°W方向に西へ延びて、西端は浅く途切れる。確認範囲で長さ約7.7mを測る。幅は最大で約0.9m、断面形はU字状を呈してSX01底面からの深さ20cmほどである。

SD07はSD08の途中、SD06が分岐する付近から西へN83°E方向に延びて、西端は浅く途切れる。確認範囲で長さ約6.4mを測る。幅は約0.5mで、断面形はU字状でSX01底面から深さ12cmを測る。

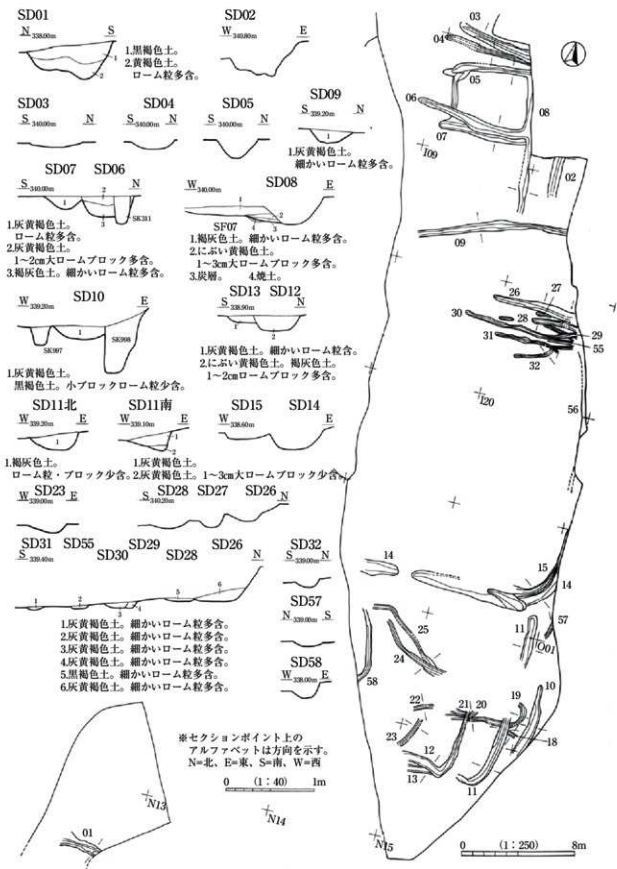
埋土：SD03・08はロームブロックを含む埋め戻し土、SD04・05・07が灰黄褐色土を基調としてローム粒等を含む。SD06は底面上に灰黄色褐色土、その上にロームブロックを多く含む土層がのる。

出土遺物：図示していないがSD03埋土からカワラケ小片2点4g、弥生土器1片2gが出土した。SD08・04・06・07はなし。

所見：SD08を共有しながら、ST01に伴うSD03とSD06、ST02に伴うSD04とSD07、ST03に伴うSD05が構築されたと思われる。

#### SD09 (第15区) I09・I10

位置：①区北部区画の南よりに位置する。調査前に本址周辺は土地境の段差が認められていた。重複：SK344を切り、SD02 (SK302) が接続する。構造：東端は調査区外へ延び、N76°E方向に若干「く」字状に折れながら①区を横断して西端は浅く途切れる。確認範囲で長さ10.7mを測る。幅は東側約0.6m前後である。埋土：細かいローム粒を含む灰黄褐色土の単層である。出土遺物：なし。所見：本址以南から中央区画北辺の区画溝SD26の間は中世遺構が希薄なので、近世以後の削平に伴う溝跡とみられる。



第15図 ①・③区溝跡

## ②. 削平地

SX01 (第16・17図、PL5) D24、I04

遺構の認定：Ⅳ層ローム層上面でロームブロックを多く含む土層の落ち込みが捉えられ、トレンチを入れたところⅣ層ローム層を底面とする平坦面と溝跡が確認され削平地と判断した。調査では埋土上面で重複遺構の有無を確認して掘り下げた後、底面上面で遺構を検出し、削平地全体をSX01、内部で検出された土坑や溝跡等は個別に遺構番号を付して精査した。

位置：①区北部区画北端の小尾根状の高まり南側の緩斜面に立地する。

構造：斜面上方の北・東辺側を削り込んで平坦地を造成した遺構で、削った土を傾斜下方に盛土していたとみられるが、調査では盛土が検出できず流失した可能性が考えられた。また、南部のSD09以南は近世以後に削平され、北東部は調査区外へ延びる。確認範囲の規模は南北約13m、東西約8.7mで、東壁の方位はN8°Wである。底面は比較的堅く平坦で標高339.8m前後で、東壁と底面の比高は50～60cmほどである。この東壁直下に溝跡SD08、その北端から直交方向にSD03～05、中央付近から西直交方向に溝跡SD06・07、底面上で長方形土坑SK303・304・315・344、焼土跡SF07・10～12、掘立柱建物跡ST01～03が検出された。各建物跡の桁行脇に平行する溝跡が位置し、SD03とSD06がST01、SD04とSD07がST02、L字状のSD05がST03に付属すると捉えられる。また、建物跡の桁行脇に長方形の大型の土坑が位置しており、内部施設の可能性が捉えられた。土坑SK315はST01、土坑SK303がST02、土坑SK304かSK344がST03に伴う可能性がある。焼土跡SF10～12は建物跡ST01・02中央東よりに位置し、建物跡内施設の可能性はある。SF07はST03との関係がつかめなかった。

出土遺物：珠洲寛破片1片214g(第61図15)と古代以前の不明土器小片2片7gが埋土から出土した。

重複関係：本址はロームブロックを含む土で埋め戻されており、その上面で本址を切る遺構は検出されていない。また、埋め戻されているため底面検出遺構は本址に伴うとみられる。調査区東壁の土層観察からSD03側から埋め戻されており、北端SD03とそれに関連するST01が新しく、建て替えの建物跡がずれながら位置することから南からST03→ST02→ST01へ変遷して、北側へ拡張した可能性が推測される。

所見：本址は①・③区平坦地の北部区画の建物跡に伴って造成された遺構で、②区や①区南部にある建物跡に伴う溝跡と同じ性格ながら、立地場所が緩斜面であったために削平を伴ったと思われる。

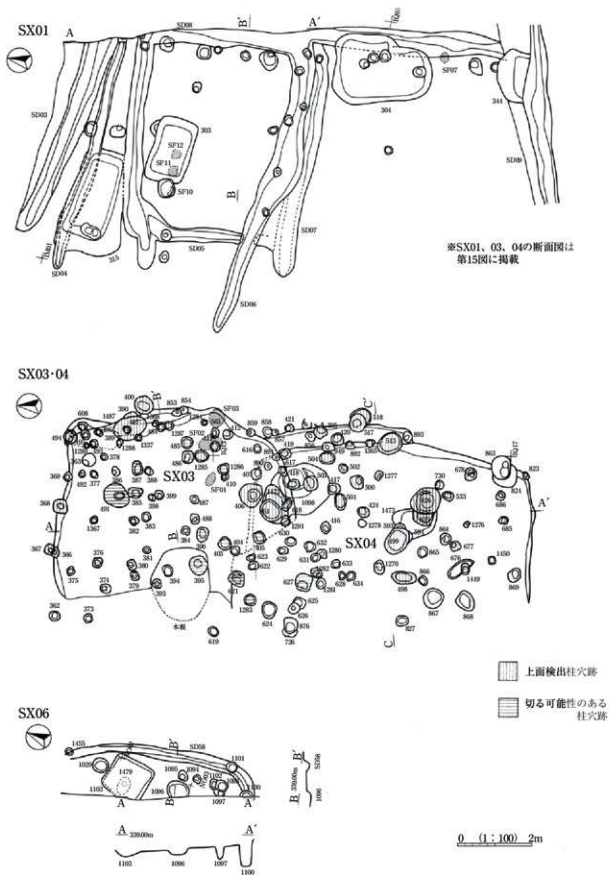
## ③. 掘立柱建物跡

ST01・02 (第18図) I04

建物跡の認定：三方(北・東・南)を溝跡で囲まれ、内部に大型土坑を伴う建物跡と認定した。調査時から溝跡に囲まれた建物跡が想定されていたが、柱穴跡は特定できず、整理作業で検討してSD03・04・06・07が長く延びる東西方向を棟方向とするST01・02を認定した。

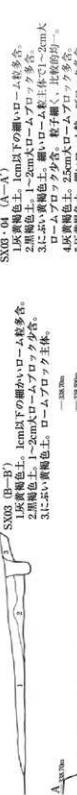
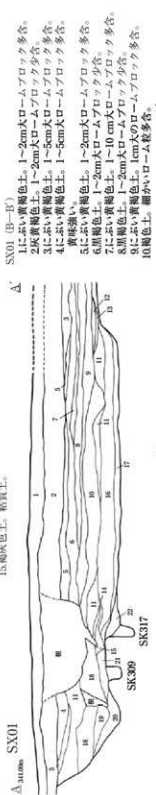
ST01は北辺を区画するSD03脇に並ぶSK323・309を北桁行、SK309から南直交方向でSD08脇に並ぶSK309・307・312を東梁行、南辺を画するSD06内のSK312・322を南桁行と捉えた。本址内部に位置するSK315、SF11・12は内部施設の可能性はある。なお、北桁行SK323と南桁行SK322は棟方向に相対する(直交する)位置になく、南桁行SK312・322はSD06内に入ってしまうなど南桁行柱穴跡の認定に不安がある。東梁行をSK309・306・311として南桁行はSK311・322と捉えられる可能性もある。このなかで、SK322は本址の北桁行からSK1292を通して南へ直交するライン上にあり、SK1292がST02(303)を切る関係からも、SK1292はST01の柱穴跡の可能性は高い。

ST02は北辺をSD04、東辺をSD08、南辺をSD07に取り巻かれ、整理時にSD04脇にあるSK326(327)・310・317(316)を北桁行、SK317(316)から南へ直交する方向にあるSK318・313を東梁行、SK313から



第16図 削平地SX01・03・04・06

- SX01 (A-A')  
 1. 灰黄褐色粘質土、壤土。(現耕作土)  
 2. 黄褐色土。ロームプロック多量。  
 3. 細灰色粘質土プロックに1-5cm大ロームプロック多量。  
 4. 緑色土。粗いスコリア粒、ロームプロック多量。  
 5. 細灰色粘質土プロック主体で1-2cm大ロームプロック主体。  
 6. 緑色土。1-2cm大ロームプロック多量。  
 7. 細灰色プロックと1-5cm大ロームプロックより成る。
8. 明黄褐色土。1-2cm大の細かいロームプロック主体。  
 9. 粗スコリア多量。  
 10. 粗灰色。細かいローム主体。粗スコリア多量。  
 11. 粗いスコリア粒多量。  
 12. 粗灰色土粘質土粘質土プロック含。1. 粗灰色土粘質土粘質土プロック多量。  
 13. 緑色土。粗いローム粒プロック主体で粗スコリア粒多量。  
 14. 緑色土。粗いローム粒プロック主体で粗スコリア粒多量。  
 15. 粗灰色土。粘質土。
16. 粗い黄褐色土。1-2cm大ロームプロック主体。  
 17. 緑色土。粗いローム粒主体で1-2cm大粗灰色プロック少含。  
 18. 粗い黄褐色土。  
 19. 粗い黄褐色土。1-2cm大ロームプロック多量。  
 20. 緑色土。粗いローム粒主体。  
 21. 粗灰色土。粗いスコリア粒多量。  
 22. 粗い黄褐色土。1-3cm大ロームプロック多量。  
 粗スコリア粒多量。



第17図 湖平地断面



西へ直交方向のSK313・321を南桁行と捉えた。ST01・02の西側は傾斜してSX01底面より低くなって柱穴跡は検出されなかった。

位置：①区北部区画の削平地SX01内に位置し、ST01・02が重なって位置する。

構造：ST01は確認範囲で梁行2間約5.2m、桁行は1間以上約3.8m以上の規模で、棟方向はN85°Wである。桁行規模は不明ながら、①区平坦地西縁まで8～9mあるので、最大3～4間前後と推定される。中央にあるSK1292は内部柱穴跡の可能性があり、部分的な内部柱をもつ建物構造とみられる。柱間寸法は東梁行で北から2.2、3.0m、北桁行で2.6m、南桁行で3.0mである。柱穴跡は直径20～40cmの円形、隅丸方形で検出面から底面までの深さは20～80cmである。柱穴跡の底面標高は北桁行柱穴跡が深く339.0m前後、南桁行柱穴跡で339.4～339.5mを測る。

ST02は確認範囲で梁行2間約4.4m、桁行2間以上(約5.5m以上)の側柱建物跡で、棟方向はN84°Wである。西側柱穴跡が検出されておらず桁行規模は不明だが、ST01同様に①区平坦地縁まで最大3～4間前後と推定される。柱間寸法は東梁行で北から2.1、2.3m、北桁行で東から2.6、2.9mである。柱穴跡は直径20～40cmの円形・隅丸方形を呈し、検出面から底面までの深さは約20～80cmを測る。本址もST01同様に北桁行柱穴跡が深く、柱穴跡底面標高は北桁行で339.0m前後、南桁行で339.4m前後である。また、棟方向と同じ長軸方位の土坑SK303や、ST01(1292)に切られるSF10は内部施設の可能性があり、本址とST01でも同様の施設と思われる土坑SK303、SK315の位置が異なり、焼土跡SF10がSK303脇に位置するのはやや認定に無理があるかもしれない。また、北桁行柱穴跡は2基ずつ重複するものがあり、ST02自体が建て替えや改修された可能性がある。

出土遺物：ST01なし。図示していないが、ST02のSK303から弥生土器片が出土している。

重複関係：ST02(SD07)→ST01(SD06)、SF10→ST01(1292)、ST02(SK303)→ST01(1292・SF11・12)。これ以外のST02(326・327)とST01(SK315)、SD06とST02(313・321)、SD05とST02(316・317)との関係は不明で、ST03(409)とST02(SK303)との関係も不明ながら、ST03(409)が切られる可能性がある。なお、調査所見ではST01内施設と捉えたSK315をST02に伴うSD04が切る所見だが、SK315北辺がSD04の北岸ラインと一致するので調査時の見誤りの疑いがある。

所見：SX01は東側壁土層の観察からSD03個から埋め戻されており、ST01はSX01内の最終建物跡で、溝跡の重複状況からST02の建て替えと考えられる。ただし、ST0・02では内部施設と思われる長方形土坑の位置が異なり、ST02内にはST01のSK1292のような内部柱穴跡は検出されていない。

### ST03 (第18図) I04・09

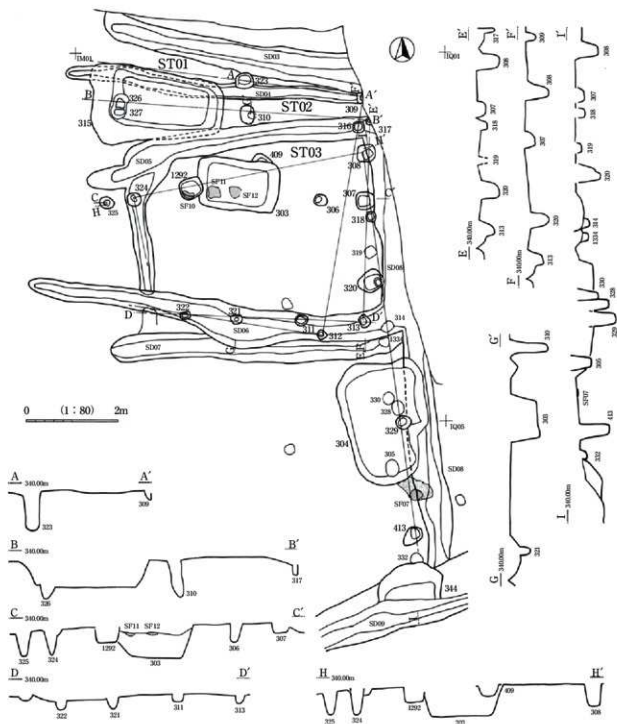
建物跡の認定：整理時の検討でSD05・08に東・北・西側を取り巻かれた建物跡と認定した。北辺を区画するSD05脇のSK324・409・308を北梁行、SK308から南、直交方向でSD08脇にあるSK308・320・329・413を東桁行柱穴跡と捉えた。南側のSD09以南は中世以後に削平されて不明で、西側は表土流失によるため柱穴跡は検出されていない。東桁行ライン上にはSK319・314・1334・330・328・305・332があるが、東桁行北端SK308から2.5～3.0m間隔で並ぶ比較的深い類似底面標高の柱穴跡を本址の所産とした。平面形はやや菱形に近い長方形で、他に内部柱穴跡と断定できたものはないが、東桁行際に棟方向と同じ長軸方向のSK304が344は内部施設の可能性があり、本址柱穴跡(329)がSK304を切るため、SK344のほうが妥当かもしれない。SF07が本址に伴うかは不明である。

位置：①区北部SX01南側に位置する。

構造：本址は確認範囲で梁行2間約5.2m、桁行3間以上8.3m以上の側柱建物跡で、棟方向はN7°Wである。柱間寸法は北梁行東から2.4、2.8m、東桁行北から2.9、2.9、2.5mである。ただし、東桁行の柱穴

跡認定に不安があり、SK308・319・1334・328・332の4間ならば柱間寸法は2.0～2.5m前後となる。柱穴跡は直径20～30cmほどの円形、隅丸方形の平面形で検出面から底面までの深さは約30～80cmである。柱穴跡底面標高は北梁行で339.2～339.6m、東桁行上のSK309からSK332までの14基は底面標高339.0～339.6mで、北東隅SK308底面標高と類似した339.0～339.3mの柱穴跡を本址の柱穴跡とした。

重複関係：SK324はSD05底、SK409はSK303調査後に検出したが、前後関係は確認していない。SK409はST02内の土坑SK303検出時に南半分が検出されなかったことからすれば、切られる可能性がある。SK304



第18図 掘立柱建物跡ST01～03

→ST03 (329)。

出土遺物：なし。

所見：本址はSX01内の東西棟方向のST01・02に先行する南北棟方向の建物跡である。認定できなかったが、東桁行ラインに重なる柱穴跡から建て替えの建物跡が他にもあるとみられる。

#### ④. 土坑

SK303 (第31図 PL.6) I04

位置：①区北部区画SX01内にある。重複：西壁上部をST01 (1292)に切られ、埋土上部の窪地内でSF11・12を検出した。ST03 (409)は本址の壁で検出して前後関係を見逃したが、本址はST02の内部施設で、ST02がST03に後出することから本址が切る可能性がある。構造：平面形は長軸約1.8m、短軸約1.1mの長方形で、長軸方位はN83°Wである。短辺側の壁は若干斜めだが、長辺側は垂直で、底面はほぼ平坦ながら若干東壁際が低い。検出面からの深さ約70cmを測る。埋土：下層に埋め戻しと捉えられるロームブロックを多く含む土層があり、埋土上部にSF11・12と炭化物・灰層が位置する。出土遺物：図示していないが、弥生土器片2片3gある。所見：SK304・315と同様の建物跡内施設と思われ、本址はST02内部施設の可能性がある。

SK304 (第31図 PL.6) I04・09

位置：①区北部区画のSX01のST03東桁行と重なって位置する。平成14年度確認調査トレンチに一部かかった。重複：東端をSD08、上面をST03 (329)、SK328・330に切られる。SK328・329は確認調査トレンチ断面で本址を切ることを確認した。構造：平面形は長軸約2.7m、短軸約1.9mの北東部が若干突出した長楕円形で、南部で幅約1.5mを測る。この飛び出た部分が土坑の重複によるかは明らかにしなかった。長軸方位はN10°Wである。壁は若干斜めで、底面は平坦で検出面からの深さ約38cmを測る。埋土：底面上に褐灰色土、その上部にロームブロックを多く含む締まった土層がある。出土遺物：なし。所見：類似形状のSK303・315と同様の建物跡内施設と思われ、本址はST03に伴う可能性がある。

SK315 (第31図) I04

位置：①区北部区画SX01のST01範囲内にある。重複：底面で柱穴跡SK326・327を検出したが、前後関係は直接確認できていない。また、調査時にSD04に切られると捉えたが、本址がST01内施設とみられ、ST01より古いST02に伴う溝跡SD04を切っていた可能性がある。北辺がSD04と重なるので調査では新旧関係を見誤った可能性がある。また、南端が僅かに重複するSD05との新旧関係は把握できなかったが、建物跡の重複関係からST03に伴うSD05を本址が切るとされる。構造：検出面での平面形は長軸約2.8m、短軸約1.8mの長方形で、長軸方位はN83°W方向である。上部は漏斗状に開き、下部は壁が垂直で平面形は長軸約2.1m、短軸約1.1mの長方形である。上部は崩れによるもので、下部は本来の形状と思われる。底面は平坦ながら、若干南壁際が低く、検出面からの深さ約60cmを測る。埋土：底面上と埋土中にロームブロックが僅かな黒褐色土や褐灰色土が認められたが、大部分はロームブロックを含む埋め戻し土である。出土遺物：なし。所見：ST01内施設と思われるが、具体的な機能はわからなかった。

SK343 (第31図 PL.6) I10・15

位置：①区北部区画に位置する。重複：SD26、柱穴跡SK342に切られる。構造：平面形は長軸約2.6m、短軸約1.8mの長方形で、長軸方位はN77°Eである。壁は垂直で、底面は平坦となり、検出面からの深さ

は42cmを測る。SD26に切られる場所以外の底面上の3隅で20cm前後の礫1～4点出土した。本来は4隅に礫が存在した可能性がある。礫は壁施設に関連する施設の一部と思われる。埋土：底面上に自然堆積の褐灰色粘質土、上部に岩片・スコリア粒を多く含む埋め土と思われる土層が入る。出土遺物：なし。所見：本址は①区北部区画の南辺に位置する。底面上で礫が検出された土坑は、大型SK1268やSK979など区画境界付近にあるものが多く、本址も同様の場所にある施設と思われる。

## SK344 (第32図) I09

位置：①区北部区画SX01南側に位置する。重複：南側はSD09に伴う近世以後の削平で壊され、東側にSD08が僅かに重複する。調査では新旧関係は把握できなかったが、本址はSX01内の建物跡に伴う施設の可能性がある、SX01内の建物跡はSD08を共有しているので、SD08とは同時存在していたが、掘り直しによって重複するようになったと思われる。構造：遺存部で東西長約1.4m、南北長は0.8m以上の規模で、平面形は長方形と推測される。長軸方位は残存部からN2°W前後と推測される。壁は若干斜めで、底面は平坦、検出面から底面までの深さは約42cmを測る。埋土：ロームブロックを多く含み、埋め戻しされている。出土遺物：なし。所見：ST03か同位置に建て替えられた南北棟建物跡に伴う内部施設の可能性がある。北に位置するSK304と同じ性格の土坑と思われる。

## SK301 (第33図 PL6) I10

位置：①区北部区画のSX01東側に単独で位置する。重複：なし。構造：平面形は直径1.0～0.9mほどの円形で、壁はほぼ垂直で底面が平坦な桶状の形状である。検出面から底面までの深さは22cmを測る。中央と南よりに2個の頭大礫が検出された。埋土：スコリア粒を多く含む土である。出土遺物：なし。所見：形状は近世の土坑に近いが、埋土から中世と考えた。

## SK302 (第36図) I10

位置：①区北部区画のSX01東側にある。重複：SD02先端付近で楕円形状の落ち込みとして検出されたが、調査の結果、SD02の一部の可能性が考えられた。構造：平面形は北側が楕円形で、南側はSD09と接続する部分で直線的に途切れる。確認範囲で長軸約1.4m以上、短軸約1.6mを測る。長軸方位はSD02と一致する。底面は東側がやや深い。埋土：底面上に黒褐色土、上面にローム粒を含む褐灰色土がある。出土遺物：なし。所見：SD02上部の窪みや雨水浸食部分が埋まった痕跡の可能性はある。

## SK341 (第36図) I09

位置：①区北部区画の西側に単独で位置する。重複：なし。構造：平面形は直径約0.6mの円形で、壁はほぼ垂直で底面は平坦である。検出面から底面までの深さは20cmを測る。埋土：灰色味の強い粘質土である。出土遺物：図示していないが弥生土器12片29gある。所見：埋土からⅡ層上面から掘り込まれたと考えられ、近世以後の所産とみられる。

## SK338 (第36図) I10

位置：①区北部区画のSD09とSD26中間に位置する。重複：掘り下げ後に柱穴跡SK337を検出したが、本址は埋土の特徴からⅡ層上面から掘り込まれた遺構とみられ、SK337を切ると思われる。構造：平面形は直径0.6mの円形で、壁は垂直で底面も平坦である。検出面から底面までの深さは24cmを測る。埋土：粘性の強い褐灰色土である。出土遺物：なし。所見：埋土や形状から近世以後の遺構とみられる。

## ⑤. 焼土跡

## SF07 (第37図) I09

位置：①区北部区画のSX01内SD08脇に位置する。重複：東側はSD08に切られるが、SD08はSX01内のST01～03で共有して維持されており、SD08の掘り直しによって一部掘り壊された可能性がある。構造：やや窪んだ場所に長軸30cm、短軸24cmの円形に被熱で赤化した範囲が認められ、周囲に炭化物が分布するように検出された。焼土面の上面はロームブロックを含む土層で、埋められた可能性がある。出土遺物：なし。所見：SX01内のSF10～12はST01中央に位置することから、SD08側に寄っている本址は建物跡内の施設とは言い切れない。

## SF10～12 (第31図 PL.6) I04

位置：①区北部区画のSK303埋土上部の窪み内にSF11・12、西側のST01(1292)に切られて部分的にSF10がある。SF10～12はN90°E方向に並ぶ。重複：SK303→SF11・12、SF10→ST01(1292)。構造：SF10は直径30cmほどの焼土跡とみられるが、ST01(1292)に切られて被熱で赤化した範囲がSK1292壁に断片的にしか残存しない。SF11の被熱で赤化した範囲の平面形は直径23cmの不整形、SF12は直径30cmほどの不整形円形である。SF11・12周囲には薄く炭化物が幅40cm、長さ90cmほどの範囲に広がっていた。焼土跡の周囲が若干窪み、被熱で赤化した土層の厚さは6cm前後である。出土遺物：なし。所見：ST02に伴うと思われるSK303埋土上部で検出され、重複関係からST01に伴う可能性が高い。一方でST01柱穴跡の可能性のあるSK1292に切られ、ST01内で造り替えられた可能性がある。

## (2) 中央区画の遺構

中央区画は、①・③区平坦地の中央南よりにある谷地形の北岸付近の比較的平坦な場所にあり、区画全体が溝跡で囲まれ、区画内では個別に雨水浸入防止用溝跡を伴う削平地・建物跡はない。また、遺構密度は調査区内でもっとも高い。遺構の長軸方位や棟方向はほぼ方位に一致する。

検出遺構には、削平地SX03・04の2基、掘立柱建物跡ST04～43の40棟、土坑は大型がSK448・1085・1300の3基、中型はSK558・684・873・992・1073・1098・1345・1486・435・1473・447・681・760・1172・1487の15基、小型はSK425・466・467・472・534・571・642・643・692・700・769・783・1008・1013・1074の15基の合計33基あり、他に近世以後の土坑SK513がある。焼土跡はSF01～03・05・06・08・09の7基、溝跡はSD26～32、14・15、55～57の12条がある。なお、南辺付近にある大型土坑のSK1268・1269・1306、SK979は便宜的に南部区画に含めたが、中央区画の遺構であった可能性がある。

削平地SX03・04は中央区画の西側の類似場所に重複して造り替えられており、中央区画の空間が東西に分割して利用されていた可能性がある。他の削平地は建物跡に伴うと思われるが、SX03・04は規模から2×4・5間建物跡に伴うとは考えにくく、小型建物跡も認定できなかった。そのため建物に伴う削平地と断定できず性格は不明である。最終的に埋め戻されているので、中央区画に普遍的に必要な施設ではないこと、東側に掘立柱建物跡が併存した可能性からは母屋に付属した施設と考えられる。

建物跡は整理作業で認定したが、組めなかった柱穴跡もあるので捉えられた以上の数が存在すると思われる。認定した建物跡も柱穴跡の組み合わせや遺構間重複の矛盾もあって、すべて確実視できるものばかりではないが、建物跡は梁行2×桁行4・5間の南北棟建物跡21棟、東西棟建物跡11棟、梁行1×桁行2間の小型南北棟建物跡8棟を認定した。小型南北棟建物跡以外すべて梁行2間の掘立柱建物跡で、桁行4・5間桁行規模は7.5～11.2mまであり、多いのが桁行4間約9.0～10.0m前後である。1×2間建物跡では桁行4.0～4.5mである。棟方向は北から最大10°西・東に振った方位か、その直交方向で、ほぼ方位に合

わせて建てられている。ST15～17、18・19等のように、柱穴跡が団子状に数基連なって一定間隔で並ぶ例から、少しずつ平行移動させて建て替えを繰り返したと思われる。柱穴跡が隣接するあり方には南北と東西に連なるものがあり、東西、南北に平行移動して建て替えるものがあると思われる。なお、柱穴跡は中央区画中央南部の柱穴跡分布が希薄だが、これは初年度の確認調査3・4トレンチで柱穴跡を一部掘り壊した疑いがある。

土坑は中型以下が多く、建物跡分布域と重なることから建物跡内施設の可能性がある。建物跡の密集が著しく、北部区画ほどには建物跡と土坑の関係は捉えられなかったが、北部区画の長方形土坑と建物跡の関係を考え合わせ、位置から対比すると長軸方位が東西方向のSK435は東西棟のST04・05、南北方向のSK447が南北棟のST15～17・20～22、同じく大型SK1085がST20～22・28～30、SK1300がST20～22・30、SK681がST26、SK760が18・19・27の内部施設の可能性がある。ただし、後述するように重複関係の所見からは造り替えと思われるSK1085と1300と伴う建物跡の関係の認定には問題を残した。また、上記土坑と類似規模の中型SK558・992・1073・1345・1487は建物跡内施設の可能性があるが、関係する建物跡を特定できなかった。これ以外の小型土坑については他遺構との関係は不明である。なお、SK1268・1269・1306・979は石組を伴う大型土坑で、SD14・15と重複している。SX05に関連する大型土坑とも考えて便宜的に南部区画に含めたが、類似した土坑である②区SK167・1145、中央区画北辺のSK343はいずれも区画溝跡に切られながらも、区画溝跡以前の類似区画境に設置された施設の可能性があるが、SK1268・1269・1306・979も同様に中央区画に伴った施設の可能性がある。

溝跡は中央区画周囲を囲むものしかなく、南辺がSD14・15・57の3条、北辺はSD26～32・55の8条、東辺は調査区境に重なってSD56の1条である。東辺は調査区境に当たって一部しか検出できていないが、北・南辺共に溝跡の掘り直しが捉えられる。その数は北辺が多く、幅広い範囲で造り替えられている。その理由は北辺が地形傾斜上方にあたり、常時雨水に対する対応が必要だったことに加え、中央区画北部に東西棟建物跡が多い傾向から、これらの建物跡に伴う雨水浸入防止用溝跡として造られたもの含まれるかもしれない。

焼土跡は中央区画の北よりに東西方向で並ぶように検出された。建物跡内施設で、南北棟建物を東西に平行移動しての建て替えに伴って造り替えられ、東西に並ぶように遺存したのことが多いと思われる。重複関係や位置関係からSF01→03・08・09がSX03を切る南北棟建物跡ST15～19、23～25に伴い、SF05・06は東西棟建物跡ST07～12に伴う可能性がある。

#### ①. 溝跡

SD14・15・26～32・55～57 (第15図) I14・15・20・24・25

位置：①区中央区画を囲む。東辺がSD56、東辺南部から西へ屈曲する部分でSD14・15・57、北辺にSD26～32・55が位置する。①区中央区画全体を囲むため、内部にあるST04→43、SX03・04に伴う溝跡は確認されなかったが、北辺のSD27→32・55は北辺際に建てられた建物跡に付属する溝跡の可能性がある。

重複：北辺を区画するSD26～32・55はいずれも浅く重複関係が捉えきれないが、確認範囲でSD27→SD26、SD29→SD28、SD32→SD31と南から北へ造り替えられたように見受けられた。ただし、建物跡は認定しえなかったが、北端SD26と重複する柱穴跡があることからSD26が最終溝跡かは不明である。

他遺構との重複は土坑SK343→SD26、柱穴跡SK354・357・364・365・415→SD28、柱穴跡SK350→SD28、SD29→SK358、ST23(845)→SD29、柱穴跡SK350・土坑SK992・土坑SK1486→SD30・31。また、ST04(479)、ST04・18(846)、ST06?(451)、ST15(808)、ST18(476)、ST19(549・847)、ST20(482)、ST33(475)、土坑SK992・1486、SK478をSD31が切ると捉えたが、埋土が薄く断定できない。

SD26とSK345、SD28とST31 (355)、SD28とSD29、SD29とSD30・柱穴跡SK1372、SD30とSD55の關係は把握できなかった。SD32は同方位SK448と近接時期の所産と思われるが、周辺調査の終了間際に存在が判明し、周辺SKとの前後關係は把握できなかった。

中央区画東辺にあるSD56は調査区東壁とほぼ重なる位置にあり、調査当初に調査区壁際に防水用の溝を掘ったために溝跡底面にあるST04 (460)、ST04? (461)、ST06 (585)、ST08? (584)、ST09 (743)、ST11 (434)、ST13 (1019)、ST22 (742)、ST29 (874)、ST30 (721・1044)、ST30? (1349)、ST31 (428)、柱穴跡のSK561・586・587・814・843・844・991・1043・1066・1067・1348・1358・1484との前後關係は直接確認できず、北辺のSD26~32との連続部分も埋土が浅く把握できなかった。

南辺にあるSD14・15、57の重複關係は、SD15→14、土坑SK979・1306→SD14、SK981・1358→SD14、SD14・15→SK811・812・816、SK813・1307→SD15の關係が捉えられた。SD57とSK1235の重複關係は両者とも埋土が数cmしかなく確認できていない。他にSD11北延長先と思われる窪みがSD14底で検出され、SD11がSD14に接続していたとみられる。SD11と造り替えと思われるSD10、12・13、23とSD14の關係は把握できなかったが、同様に接続していた可能性はある。

構造：東辺を画するSD56は調査区東壁際に位置して西半分しか検出できず、東岸は調査区外へ延びて幅や造り替えの溝跡の有無は確認できていない。本址北部は浅いながらも落ち込みが認められ、中央南より付近から浅く途切れるようになり、その南延長先にあるSD14・15との連続關係は直接把握できなかった。北端も不明瞭だが、SD26付近からSD14・15の屈曲部までだとするとN4°W方向に約20mの規模を測る。幅は不明だが、南延長先のSD14から類推すると約0.5m前後と推測され、断面形は西側の立ち上がり緩やかなU字状で、北部では深さ6cm前後を測る。

北辺を画するSD26~32、55は重複が著しく、各溝跡の範囲も見誤った可能性があり、SD30東端がSD55、SD31東端はSD32にあたる可能性がある。SD26はN87°W方向に延びて、幅0.7m、長さ約6.4mを測る。断面形はU字状で東端の深さ約30cmを測る。SD27はSD26南脇に僅かに残存し、幅約0.3m、確認長約0.9mしかない。N89°E方向に延び、深さは10cmほどである。SD28は幅約0.4m、途中で浅く途切れるが、長さは約5.6m、緩やかなカーブを描きながらN89°W方向に延びる。SD29はN77°W方向に延びて約3.2mを確認した。幅0.3mで深さは3cmほどと浅い。SD30はN87°W方向に長さ約8.6mを確認した。幅約0.3mである。SD31は東端がSD32の一部を含む可能性があるが、直線的に続くため本址に含めた。いずれも幅約0.2mで、確認長は合計5.2mを測る。方位はN89°Eである。深さは最深部でも7cm前後しかない。SD32はSD31と一部重なり、西側はN70°E方向にずれる。SD31と重複する部分以東は確認できておらず、この部分までの確認長は約3.0m、幅は0.2mである。

東辺南部から南辺のSD14・15・57は、SD56の南延長先付近の調査区壁から緩やかにカーブして西側へ延びる。SD14・15ともに確認調査時のトレンチで上部を削平し中央部分は遺存不良だが、SD14を調査区境付近まで断続的に検出された部分をつなぐと、N87°W方向に13.2mほどの長さとなる。幅は傾斜下方ほど広く、最大幅約1.0mを測る。断面形はU字状である。SD57はSD14・15の南東側にカーブしながら約1.3mの長さを確認した。東端は調査区外へ延び、西端は浅く途切れる。断面形はU字状だが、検出面から底面までの深さは3cm前後しかなく仔細は不明である。

埋土：北辺のSD26~32・55はスコリアやローム粒を含む褐色土～黒褐色土で、大きな差異は認めにくく、調査でも重複關係が把握しにくかった。東辺のSD56の埋土は記録もれで不明で、南辺のSD14は傾斜上方では下層にロームブロックを含む褐色土層、上層に黄褐色土層があり、傾斜下方では下層が砂質で、上層は粗いスコリア粒を含む褐色土である。傾斜下方ほど粗いスコリアが目立つ。

出土遺物：図示していないがSD14から弥生土器25片184gが出土した。他はない。

所見：ここで触れた溝跡は中央区画の北・東・南辺の3方をめぐる溝跡だが、北辺のみSD26～32・55と多数の溝跡が重複する。これは傾斜上方にあたる北側からの雨水浸入防止だけでなく、中央区画北側で建て替えられた東西棟建物跡に伴う可能性がある。東・南辺もSD14・15、57と最低3回は造り替えが捉えられ、SD14が最も規模が大きく、断片的にしか検出されなかったもののSD57が最も南に位置する。先述したように石組を伴う可能性がある大型土坑はSK343やSK167・1145など各区画南辺側に位置する共通点がある。石組をもつ可能性があるSK1268・1269・1306、SK979も同様の施設として中央区画南辺に位置するとすれば、中央区画自体が南部区画側に若干広がっていた時期があり、その後、北側へ寄って大型土坑を切る位置にSD15、規模が大きなSD14が造られていることになる。この石組をもつ土坑→深い区画溝跡の関係は、SD15の西延長先溝跡が見つかっていないものの②区のSK167・1145→SD16の関係にも当てはまるようにも思われる。ただし、一方で大型土坑は南部区画のSX05をL字状に取り囲むようにもみえ、断定はできなかった。なお、①区中央区画内では掘立柱建物跡や削平地に雨水浸入防止用の溝跡が伴わないが、これは①区中央区画のみ周囲が溝跡に囲まれることによると思われる。

## ②. 削平地

SX03・04 (第16・17図 PL5) I14・19

遺構の認定：①区中央区画西側で、IV層ローム層上面でロームブロックを主体とする埋土の長方形の落ち込みが認められ、南北方向にトレンチを入れたところ、緩斜面を掘り込んで平坦な底面を造成した削平地が2基重複すると捉えられた。その東・北辺は範囲が明瞭ながら、傾斜下方の西・南辺は緩やかに傾斜面に連続して範囲が不明瞭である。調査は上面で重複遺構を精査した後、東西方向の土層観察用ベルトを設定し、切り合い関係で新しいSX03から掘り下げ、その底面で遺構を検出し、次にSX04掘り下げと底面上の遺構検出をした。SX03・04とも床面上で検出できた柱穴跡は浅いものが多く、削平地造成で削られた残骸が、埋め戻し以後の見逃した遺構かは断定できなかった。また、東壁に中段状の狭いテラスが検出され、造り替えの古い削平地の残骸とも考えられたが、東西方向の土層観察では捉えられなかった。

位置：①区中央区画の西側にSX04とSX03が南北に重なって位置する。同じ①区内では斜面下方の類似場所にもSX06が位置するが、構造がやや異なる。

構造：SX03は傾斜上方側の北・東壁が掘り込まれ、底面は平坦で傾斜下方の西・南辺は緩やかに緩斜面に続く。西・南辺は不明瞭だが、確認範囲で東西約5.2m、南北約6.6mの規模を測る。平面形は不整形で、東壁の南東部は緩やかにカーブして整った形となっていない。遺構方位は北辺でN84°W、東辺でN6°Wと一定しないが、周囲の掘立柱建物跡同様に方位に合わせて造られた遺構とみられる。東辺中央付近で中段が認められたが、造り替えが削平地の重複かは明かにしなかった。底面は貼り床されていないもの比較的平坦で堅く締まり、傾斜下方の西側は緩やかに傾斜して底面も軟弱である。北東部で検出面から底面までの深さは32cmを測り、底面標高は338.3mである。底面上では直接伴う建物跡は認定できなかったため、SX01同様の建物跡に伴うとは断定できなかった。

SX04はSX03南側に一部重なって位置し、傾斜上方の北・東辺側を掘り込んで平坦な底面を造りだし、南辺に僅かな壁があるようにもみえたが、ほぼ傾斜下方の西・南側は緩斜面に続く。確認範囲で南北約7.6m、東西約4.6mの規模で、やや丸みのある長方形の平面形を呈する。東壁北側に幅60cmほどの中段が検出されたが、本址が切る削平地の重複かは断定できなかった。遺構方位は東辺でほぼN5°E、北辺でN86°Wとなり、正方位の遺構とみられる。壁はほぼ垂直に近く、SX03底面との比高は20cm、北東部のもっとも高い検出面から底面までの深さは約40cmを測る。底面の標高は338.0m前後である。SX03同様に貼り床ではないが、比較的堅く締まる。この底面上では柱穴跡がいくつか検出されたが、直接本址に伴う



建物跡は捉えられていない。SX03・04はいずれもロームブロックを含む土で埋め戻されていた。

**出土遺物：**SX03底面上で青銅製の刀装具（第68図11）、SX04からカワラケ1片8g（第60図18）、弥生土器2片36g、研磨痕のある石1点（第65図16）が出土した。

**重複関係：**SX03の堅い底面がSX04上面に載っていることからSX03がSX04を切るかと捉えられた。SX03埋土上面で検出したSX03を切る遺構はSF01～03、ST04（367・1285）、ST05（366）、ST06（376）、ST11（486）、ST13（406）、ST15（494・1368）、ST16（484）、ST17（496・1287）、ST18（368）、ST27？（410）、ST41（412）、SK389・411がある。底面上で検出したが、SX03埋め戻し以後と捉えられる東西棟の建物柱穴跡や、上面で見逃したものの同じ建物跡の他柱穴跡がSX03を切ることから同様にSX03を切る可能性があるのがST04（395）、ST05（403・1286）、ST06（616）、ST07（379・385）、ST08（382・488・497）、ST09（387・380・621）、ST10（491）、ST11（384）、ST12（396・485）、ST16（495）、ST18（399）、ST19（398）、ST41（374・393・493・1337・1367）がある。SX03が切る遺構は土坑SK1487がある。これ以外のST23（377）、ST24（1289）、ST25（378）、ST26（563）、ST33（390）、ST34（1284・1288）、ST43（404）、SK363・369・375・381・383・386・388・389・394・487・492・853・854は底面上で検出したものだが、上面の見逃しの可能性も否定できない。このなかで底面から柱穴跡底面までの深さが10cm前後のST23（377）、ST24（1289）、ST25（378）、ST34（1288）、SK381は前後関係が不明ながら、浅すぎるのでSX03に伴う可能性は低い。

SX04埋土上面で検出されたSX04を切る柱穴跡はST07（418）、ST08（421）、ST09（503）、ST11（416・504）、ST12（424・517）、ST13（826）、ST14（825）、ST18（501・533）、ST19（417）、ST23（502）、ST24（420）、ST27（678）、ST41（505）、SK498～500・513・593・594・608・677・685・686・1172で、SX04との関係は直接確認できていないが、SK1172を切ることが確認できたST08（1291）、ST10（618）、SK861もSX04を切る。また、同じ掘立柱建物跡の他柱穴跡がSX04を切ることから、同様にSX04を切ると考えられるのがST06（405）、ST09（621・627）、ST13（406）、ST19（730）、ST23（407）、ST27（1277）、ST41（1270・1282・1449）である。他にSX04を切る建物跡の建て替えの関係となる建物跡や、建物跡間の重複関係からSX04を切ると推測されるのがST25（419・1365）である。ST23（502）はSX04を切っているが、SX03との関係は不明である。これ以外のST26（856）、ST42（617）、ST43（890・891・892・1278）、土坑1098・1473、SK622～626・628・629・631・632・633・634・676・749・823・824・827・863～869・876・949・1276・1278・1280・1281・1283・1450・1473は底面上で検出したものの、SX04が切るか埋土上面の柱穴跡を見逃したものかはわからなかった。このなかでST27（1277）がSX04を切ることから、建て替えの関係と思われるST26も切る可能性がある。なお、SX03の底面はSX04検出面と同じ標高なので、SX04上面検出でSX03を切りながらSX03底面上柱穴跡と同時存在した柱穴跡が含まれる可能性は残る。

**所見：**SX03・04ともに斜面地形に平坦地造成を目的とした削平地と捉えられる。類似した他の削平地と異なって溝跡を伴わないが、それは①区中央の区画全体が溝で囲われているためと考えられる。また、他削平地では掘立柱建物跡が伴う可能性が捉えられたが、SX03・04に直接伴う建物跡は特定できておらず削平地の造成目的はわからなかった。その規模から梁行2間×桁行4間以上の建物跡は想定し難く、SX03・04範囲内で認定したST42・43のような小型建物跡が考えられる。しかし、ST42・43は重複位置からSX04に伴わず、SX03・04をSX01同様の性格とは言いにくい。なお、重複状況から東西棟方向のST04～14、南北棟方向ST15～19・23～27はSX03・04が埋め戻された以後の所産で、ST20～22・31・32・（33・34）は併存する可能性がある。

## ③. 掘立柱建物跡

ST04・05・06 (第19図) I14・15・19・20

建物跡の認定：整理時に①区中央北辺の溝跡群SD26～32・55に平行して直線的に並ぶ柱穴跡列から桁行を東西方向とするST04～06の3棟を認定した。

ST04はSD31と重なりながら同方向で等間隔に並ぶSK367・552・479・846・460(461)を北桁行、SK460(461)から南へ直交するSK460(461)・542・660を東梁行、SK660から西へ直交するSK660・437・605・1285・395を南桁行と捉えた。北桁行のSK552は浅く、桁行ラインから若干ずれているが、近接するSK475はST33柱穴跡と捉えざるを得ない関係からSK552を当てた。東梁行のSK542はST15～17柱穴跡の可能性もあるが、本址梁行中間に位置することから本址の柱穴跡とした。西梁行中間の柱穴跡が特定できず西梁行は確定できなかったが、北桁行西延長先にあるSK362まで最大延長する可能性がある。また、本址柱穴跡SK461・395は平面規模が大きいわりに浅く柱穴跡との認定に不安を残す。内部柱穴跡は特定できなかったが、棟方向と一致する長軸方向の土坑SK435は内部施設の可能性がある。

ST05は直線的な配置のSK366・369・371・990・841を北桁行、SK841・574・598を東梁行、SK598・442・470・1286・403を南桁行と捉えた。西梁行は確定できていないが、SK366とSK403までを本址の範囲と捉えた。北桁行の東端から2番目柱穴跡はSK450も考えたが、他柱穴跡と底面標高が近いSK990とした。また、南東隅SK598は浅いながら、隣接するSK438をST06柱穴跡と考えたため、本址の柱穴跡とした。SK574も浅く、ST15～17の東桁行柱穴跡の可能性もあるが、梁行中間に位置して本址の柱穴跡とした。このようにST05はST04より柱穴跡底面標高がまちまちで帰属柱穴跡認定に不安を残すが、ここでは柱穴跡の平面的な配置を優先して認定した。

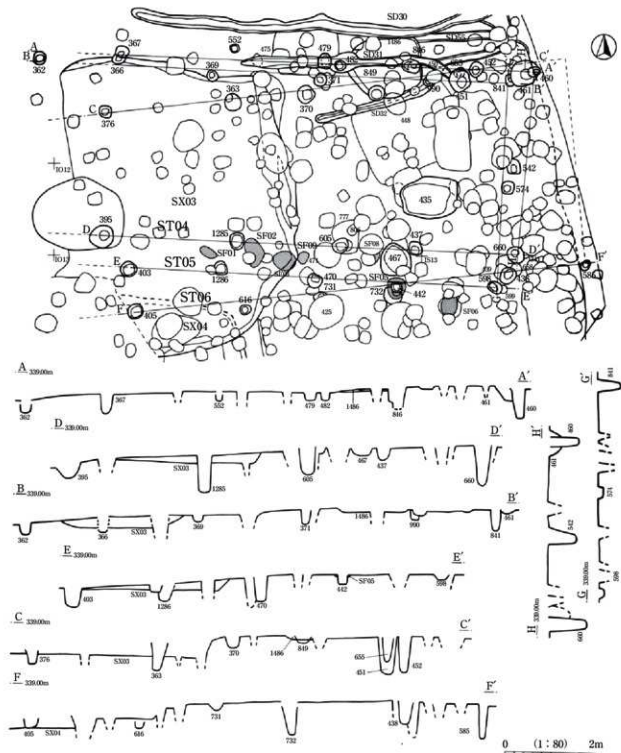
ST06はST04・05桁行南側に直線的に並ぶ直径40cm前後の柱穴跡SK376・363・370・849・452(451)・(調査区外)を北桁行、それと平行するSK405・616・731・732・438・585を南桁行と捉えた。北桁行中央のSK370・849と南桁行のSK731はやや浅く、それぞれ両側の柱間寸法が狭いなど認定に不安が残る。東梁行は調査区外へ延び、西梁行は中間の柱穴跡が不明で建物跡規模は特定できなかった。

位置：①区中央区画の北よりにST04・05が重なり、その南に若干ずれてST06が位置する。

構造：ST04は確認範囲で梁行2間約4.0m、桁行4間約9.1mの規模の掘立柱建物跡で、棟方向はN88°Wである。柱間寸法は北桁行で西から2.9、1.7、1.9、2.7mと両端が長く、東梁行は北から2.0、2.0mである。個々の柱穴跡は直径30cmほどの円形・楕円の平面形で、検出面から底面までの深さは約30～70cmで、底面標高はSK479が338.5mと高く、SK1285が337.7と低いが、他は338.0～338.20mである。

ST05は西端が確定できていないが、確認範囲で東梁行2間約4.2m、桁行は4間北桁行で約8.7m、南桁行は短く8.1mを測り、平面形は若干平行四辺形の掘立柱建物跡である。棟方向はN87°Wである。柱間寸法は北桁行西側から2.2、2.4、2.3、1.8m、東梁行で北から2.0、2.2mで、南桁行東端は1.8mと短いながらもほぼ類似する。柱穴跡は直径20～30cmほどの円形、隅丸方形の平面形で、検出面から底面までの深さ約30cm前後だが、傾斜下方の西側ほど低く北桁行で底面標高338.1～338.6mまで幅がある。南桁行は東側SK442・598が338.6mと高く、中央で338.0m前後である。

ST06は、確認範囲で梁行推定2間約4.4m、桁行5間約9.9mの規模で、棟方向はN84°Eの掘立柱建物跡である。柱間寸法は南桁行西から2.4、1.8、1.6、2.3、1.9mと中央柱間寸法が狭いが、北桁行中央のSK370、南桁行中央のSK731を含まない4間では桁行の西から2番目柱間寸法が約3.4mと長すぎて4間とは断定できないと思われる。柱穴跡は直径40cmほどの円形・隅丸方形を呈し、検出面から底面までの深さは20～70cmまで幅があるが、底面標高は338.0～338.3m前後が多い。そのなかで桁行中間のSK370・849・731が338.5m前後と高く柱穴跡認定に不安を残す。



第19図 掘立柱建物跡ST04～06

出土遺物：ST04 (605) から青磁碗片 (第61図6) が出土している。

重複関係：ST05 (366)→ST04 (367), ST07 (1341)→ST04 (660), ST32 (860)→ST04 (605), SK777→ST04 (605), ST16 (599)→ST05 (598), SF05・ST06 (732)→ST05 (442), ST27 (471)→ST05 (470), 削平地SX03・04→ST04・05・06, SD32と土坑SK448→ST05, ST15 (439)・ST34 (658)→ST06 (438)。ST04 (479・846)・ST06 (451)とSD31の関係, ST04 (542)とST08 (463)の関係, ST06 (731)とSK425の関係, ST06 (849)と土坑SK1486の関係, ST04 (479)と土坑SK992の関係, ST04

(460・461)・ST06(585)とSD56の関係は重複部分がかで捉えられなかった。また、長軸方位が類似するSK435は関連施設で、北桁行に隣接するSD30がST04・05と関連する可能性がある。

所見：ST04～06はSX03・04を切る東西棟方向のST07～14と関連した建物跡群に含まれ、中央区画の北寄りに重なって位置するグループである。重複関係からST06→05→04と捉えられたが、ST06の棟方向はST04・05とは若干ずれ、重複関係でもST06(732)を切るSF05をST05(442)が切る関係から、ST05とST06の間は若干時間差が想定できる。

#### ST07～10 (第20図) I14・15・19・20

**建物跡の認定**：整理時に削平地SX03上面検出柱穴跡の配列を検討し、建て替えの関係とみられる東西棟方向のST07～10を認定した。いずれも西梁行が特定できず規模は不明である。

ST07は東西方向に直線的に並ぶSK379・385・392・(不明)・786を北桁行、それと並行するSK(不明)・418・512・547・1150を南桁行と捉えた。北桁行西から4番目柱穴跡はSK781の可能性も考えたが、柱間寸法が狭すぎてST19柱穴跡と判断して本址柱穴跡は不明とした。また、東梁行はSK786・1341・1150と想定したが、中間のSK1341は浅く認定に不安が残る。西梁行は不明である。

ST08はST07の東側に少しずれて重なる。北桁行は西からSK382・497・852・463(調査区外)、南桁行はSK1291・421・577・531・589、西梁行をSK382・488・1291と捉えた。南桁行東端柱穴跡のSK589はST14柱穴跡としても位置が妥当で帰属関係に迷ったが、本址の柱穴跡と認定し、(調査区外)・584・589を東梁行と捉えた。また、北東部SK463はST15～17柱穴跡の可能性はあるが、周囲にある柱穴跡のなかで底面標高が近い本址柱穴跡とした。一方、SK852は浅く、隣接するSK782が充てられる可能性もあるが、西側SK497との間隔が広すぎるのでSK852を本址柱穴跡とした。

ST09はSX03・04上面検出のSK503とSK387がST07・08と同じ梁方向に位置すると認められ、そこから柱穴跡の配置を検討して認定した。SK380・387・465・433・743を北桁行、SK743から南へ直交するSK743・538・800を東梁行、SK800から西へ直交方向に並ぶSK800・1060・582・503・627を南桁行、SK627・621・380を西梁行と捉えた。西梁行中央のSK621は南へ寄りすぎて認定に不安がある。

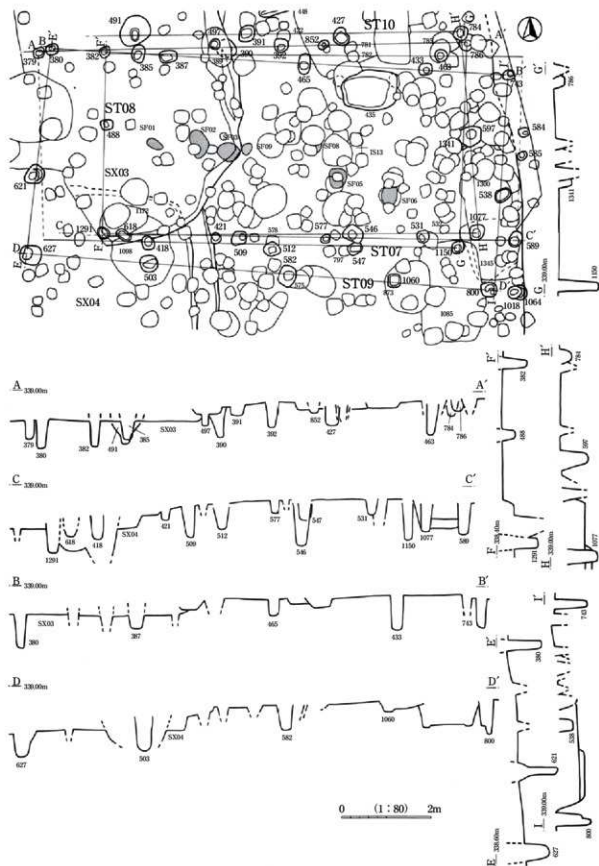
ST10はST08柱穴跡東側に隣接して並ぶ柱穴跡列から認定した。SK491・391・427・784を北桁行、SK784・597・1077を東梁行、SK1077・546・509・618を南桁行と捉えた。建て替えとみられるST08が桁行4間なので本址も西側にもう1間延びる可能性があるが、柱穴跡は特定できなかった。

位置：①区中央区画の北より、ST04～06からやや南に平行移動した位置にあり、ST07・08・10が類似位置に重複し、ST09がやや南東に少しずれて位置する。

構造：ST07は確認範囲で推定梁行2間約4.5m、桁行4間約9.6mの規模の側柱建物跡で、棟方向はN89°Wである。柱間寸法は南桁行西から2.2、3.2、推定2.1・2.1mで、2間目が幅広い。北桁行3番目柱穴跡を隣接するSK390とすると、2.0、2.8mとなり間隔は狭いが南桁行柱穴跡と位置が対応しない。個々の柱穴跡は直径30～40cmの円形・隅丸方形の平面形で、検出面から底面までの深さは30～70cm、底面標高は337.8～338.4mと幅はあるが、SK786のみ338.4mで、他は337.8～338.2m前後が多い。

ST08は確認範囲で梁行2間約4.2m、桁行4間約9.3mの規模の側柱建物跡で、棟方向はN87°Wである。柱間寸法は南桁行で西から2.5、2.5、2.1、2.1m、西梁行で北から1.8、2.4mである。柱穴跡は直径20～30cmの円形や隅丸方形の平面形で、検出面から底面までの深さは30～60cm、底面標高は北桁行で338.2～338.5m前後を測るが、南桁行SK382・589・1291は337.5～338.0m前後と低い。

ST09は梁行2間約4.8m、桁行4間約10.3mの規模の側柱建物跡で、棟方向はN86°Wである。柱間寸法は南桁行で西から2.6、3.2、2.3、2.3mと比較的長い。東梁行は北から2.7、2.1mである。柱穴跡は直径



第20図 掘立柱建物跡ST07~10

40cmの円形・隅丸方形の平面形で、検出面から底面までの深さは40～80cmである。底面標高はSK1060が338.5mと高く、SX03・04と重複するSK380・503・621・627は337.3～337.6mと低いが、他は338.0m前後である。

ST10は確認範囲で梁行2間約4.5m、桁行3間以上約8.0m以上の規模を測る欄柱建物跡で、棟方向はN87°Wである。柱間寸法は南桁行で西から2.7、2.5、2.8mと比較的長い。東梁行は北から2.3、2.2mである。個々の柱穴跡は長軸30cm前後の隅丸方形・楕円形の平面形で、一部に直径50cmほどのものもある。検出面から底面までの深さは30～110cmと幅広いが、北桁行東側SK391・427・784で底面標高は338.5m前後だが、他は337.8～338.0m前後が多い。北東部が浅く、南西部が深い傾向である。

上記のST07～10の範囲内に位置するSK435はST04・05のみならず、本址の内部施設でもある可能性があり、焼土跡SF01～03・05・06・08・09もST07～10内中央に位置し、関連する可能性はある。

出土遺物：なし。

重複関係：ST07(786, 1341)→ST10(784, 597)、ST07(1341)→ST04(660)、ST20(422)→ST07(392)、ST32(578)→ST07(512)、ST27(797)→ST07(547)、ST33(390)→ST08(497)、ST14(532)→ST08(531)、ST16・17? (785・654)→ST08(463)、ST11(575)→ST09(582)、土坑SK1172→ST10。土坑SK448→ST10、SK1085→ST07～09、SK1098→ST07～10、土坑SK1300・1345→ST08・10、SK1300→ST09、削平地SX03・04→ST07・08・09・10。SK1172とST08(1291)、SK448とST08(852)、ST09と土坑SK873、ST08・09とSD56の関係は見逃して不明である。

所見：ST07～10は、ST04～06やST11～14と同じ①区中央区画の東西棟建物跡で、桁行が重なることから連続した建て替えの関係とみられる。重複関係からST07→ST04・10、ST11→ST09、ST14→ST08の順で、東西棟建物跡内では北側の建物跡が後出する傾向が窺える。

#### ST11・12 (第21図) I14・15・19・20

建物跡の認定：整理作業での建物跡認定作業中にST04～10南側にその桁行と同方向に並ぶ柱穴跡列を認め、それを桁行柱穴跡と捉えて建て替えの関係とみられるST11・12を認定した。

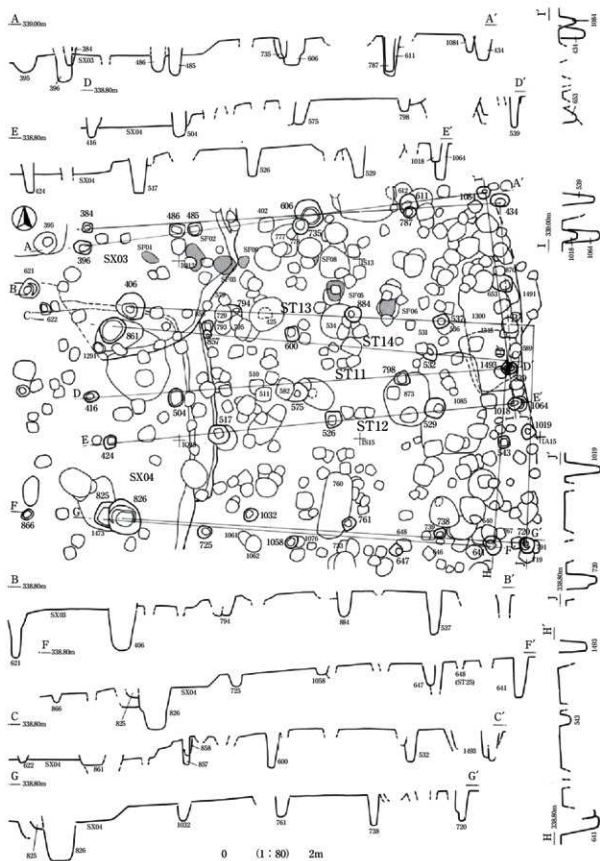
ST11はSK384・486・735・787・434を北桁行、SK416・504・575・798・539を南桁行と捉えた。西梁行中間の柱穴跡は不明で、東梁行中間柱穴跡はSK870付近と想定されたが、SK870はST22柱穴跡と捉えて本址柱穴跡は不明とした。ただし、SK539は平坦地東際に位置し、SK539・434ラインより東へは延びないと思われる。また、南北桁行中央の柱穴跡間隔が広いが、南桁行SK510か511、北桁行SK402を充てると逆に東側が広く、均等な間隔となる上記を柱穴跡と認定した。

ST12はST11北桁行と重なるラインのSK396・485・606・611・1084を北桁行、それと平行するSK424・517・526・529・1018(1064)を南桁行と捉えた。東梁行中間柱穴跡はSK653か1491周辺にあたるが、いずれも浅すぎて認定できず、西梁行中間柱穴跡はSK1291周辺にあたるが、ST08の柱穴跡と認定して本址柱穴跡は不明とした。

位置：①区中央区画北寄りのST07～10南に一部重複しながら位置する。

構造：ST11は梁行推定2間約3.8m、桁行4間約9.2mの欄柱建物跡で、棟方向はN86°Eである。柱間寸法は、北桁行西から2.0、2.7、2.5、2.0mと中央が広い。柱穴跡は直径30～40cmほどの円形、隅丸方形の平面形で、検出面から底面までの深さは約60～110cm、底面標高は西側が低い傾向ながら、SK798のみ338.4mと高いが、他は337.7～338.2m前後に集中する。

ST12は梁行推定2間約4.7m、桁行4間約9.0mの規模の欄柱建物跡で、棟方向はN86°Eである。柱間寸法は北桁行で西から2.5、2.6、2.2、1.8mを測る。柱穴跡は直径30～50cmの円形か方形ぎみの円形で検



第21図 掘立柱建物跡ST11~14

出面から底面までの深さは60～80cmで、底面標高は337.6～338.2m前後である。

出土遺物：なし。

重複関係：ST12 (606・611)→ST11 (735・787)、ST21 (778)→SK777→ST11 (735)、SX03・04→ST11・12、土坑SK1300・1345→ST11、ST11 (575)→ST09 (582)、ST14 (1493)→ST11 (539)、ST20 (736)・22 (576)→ST11 (575)。ST22 (612)→ST12 (611)、土坑SK1085→ST11 (529)、土坑SK1300・1345→ST11 (539)。ST12と土坑SK435・873の関係、ST11 (434)とSD56の関係は不明である。

所見：①区中央区画内に重複した位置にあるST04→10、13・14と同じ東西棟方向の建物跡である。重複状況からST12→ST11→ST09の前後関係となり、北側へ建て替えられた可能性が推測される。

#### ST13・14 (第21図) I14・15・19・20

建物跡の認定：SX04に重複して、大き目の柱穴跡SK825・861が約4mの間隔で、ST04→12の東西棟方向と直交方向に並ぶことから、この2基が梁行で並列する柱穴跡として建物跡ST14を認定した。また、SK825・861と重複するSK826・406からも同様の建物跡ST13を認定した。

ST13は大き目の柱穴跡SK406から東へ直線的に並ぶSK406・794・884・537(調査区外)を北桁行とした。西延長先にあるSK1283は直接関係すると断定できない。北桁行西から2番目柱穴跡にSK425かSK795が該当する可能性もあるが、各桁行ライン上に位置することから前者はST31柱穴跡、後者はST34柱穴跡、SK794をST13柱穴跡とした。ただし、重複が僅かで前後関係は断定できないが、調査所見はSK794→795でST13と34の柱穴跡帰属関係は逆かもしれない。南桁行はSK826から東に直線的に並ぶSK826・1032・761・738・720(719)とした。南にずれて直線的に並ぶSK826・1061・733・646・719のラインの可能性も考えたが、SK1061がSK1062と重なることから、2基隣接するST18・19柱穴跡の可能性が高いとして上記の南桁行と結論した。南桁行西延長先にあるSK827は間隔が広く関連なしと判断した。東梁行はSK720(719)・1019で、北東隅が調査区外に延びると捉えた。

ST14は北桁行をSK861・857・600・532・1493、SK1493から南へ直交するSK1493・543・641を東梁行、SK641から西へ直交する方向に並ぶSK641・647・1058・725・825を南桁行と捉えた。北桁行東端にSK589を充てることも考えたが、SK589をST08柱穴跡と認定した関係からSK1493をST14柱穴跡とした。南桁行の西延長先にSK622・866があるが、その関係は不明である。

位置：①区中央区画にST13・14南桁行が重複し、北桁行は若干離れて平行するように重なる。

構造：ST13は梁行2間約4.7m、桁行4間約9.0mの側柱建物跡で、棟方向はN85°Wである。柱間寸法は南桁行で西から2.7、2.2、2.0、2.1mと西端の間隔が広く、東梁行で北から2.2、2.5mを測る。柱穴跡はSK406と826の平面形は直径60、80cmの不整形円形だが、他は直径30cm前後の円形や隅丸方形の平面形である。検出面から底面までの深さは60～100cmで、底面標高はSK406・826が337.1、337.4mと低いが、それ以外は337.8～338.0m前後と高い。

ST14は梁行2間4.4m、桁行4間約9.0mの規模で、棟方向N86°Wの側柱建物跡である。柱間寸法は北桁行で西から約2.1、1.9、2.8、2.2mで、梁行は2.1、2.3mである。柱穴跡は西端のSK861・825が直径50cm前後、他は直径30cmの円形や隅丸方形の平面形である。検出面から底面までの深さは約30～90cmで、底面標高はSK1058が338.3mと高いが、他は337.8～338.0m前後で近似する。桁行西端のSK861・825の平面規模は大きい、底面標高は他の柱穴跡と差はない。

出土遺物：ない。

重複関係：ST14 (825・641)→ST13 (826・640)、ST21 (767)・ST37 (791)→ST13 (720)、ST33 (536)→ST13 (537)、SX03・04→ST13、SX04→ST14、土坑SK1300・1345→ST14、ST14 (532)→ST08



(531)、ST14 (1493)→ST11 (539)、ST25 (648)→ST14 (647)、ST31 (1076)→ST14 (1058)、土坑SK1172→ST14。ST13・14がSK1473を切る可能性がある。調査では土坑SK760がST13 (761)を切るとされたが、SK760は長軸が南北方向で、南北棟建物跡に関連する可能性があり、東西棟方向の建物跡は相対的に南北棟方向建物跡を切るものが多いことから、前後関係を見誤った可能性がある。また、ST14南東隅のSK641は南桁行ラインに近いのでST14柱穴跡としたが、調査時の所見はST31 (640)がST14 (641)を切ると捉えられている。これもST31が南北棟建物跡なので重複関係の所見か、柱穴跡認定が誤っている可能性がある。なお、ST13 (794)とST15～17 (579・792・793)、ST13と土坑SK534・SD56との関係は不明である。

所見：ST13・14は西側に大きめの柱穴跡を配し、ST14→ST13へ建て替えられたとみられる。東西棟方向の建物跡内ではST08・11より古いと捉えられる。

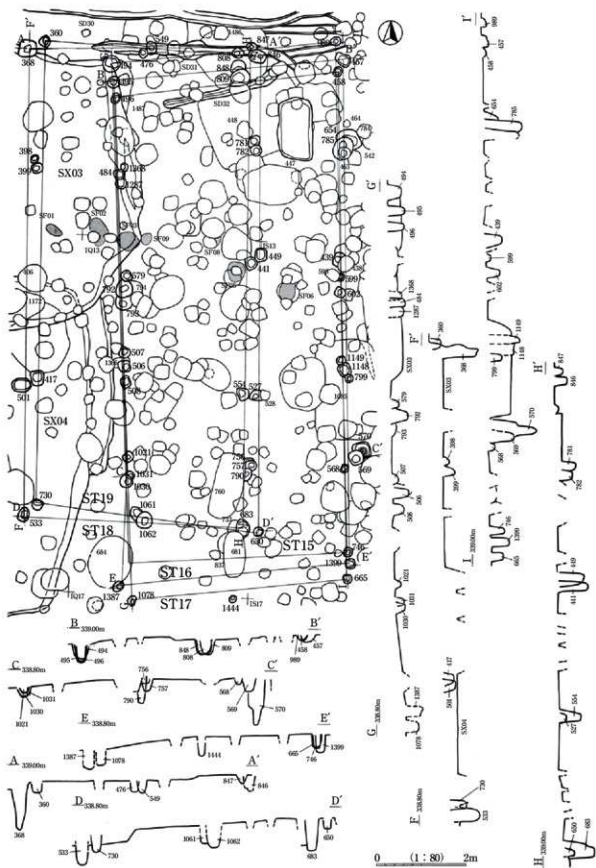
#### ST15～17 (第22図) I15・20

**建物跡の認定：**整理作業の建物跡検討で、SX03・04東縁付近に3基ずつ連なるように連続した柱穴跡が、南北方向に並び、東側にも対応する柱穴跡が認められたことから建て替えの関係のST15・16・17を認定した。3基の柱穴跡が連なって隣接するが、北端をST15、中央をST16、南端をST17とし、SK579・792・793の重複関係からST17→16→15の順と捉えた。東桁行の南端に3基連なるSK746・1399・665を南限と捉えたが、西桁行南端と南梁行中央の柱穴跡は検出されていない。見逃した可能性もあるが、桁行南端が1間短いSK1021・1031・1030-756・757・790-570・569・568を南梁行とする可能性もある。また、東桁行の北部の脇にあるSK447はST15～17の内部施設の可能性がある。

ST15は3基連続する柱穴跡列北端の柱穴跡からなる。西桁行は北からSK494・1368・579・507・1021・(不明)である。北梁行はSK494・808・989、東桁行はSK989・(不明)・439・1149・569・746と捉えた。東桁行北から2番目柱穴跡の想定位置にはSK463・654・785の3基あり、その北側にSK464がある。SK463は重複関係からST07柱穴跡と認定し、残るSK464・654・785がST15～17の柱穴跡と考えられるが、一番北側のSK464は位置的には本址柱穴跡で妥当だが、浅すぎて認定できない。また、SK654がSK785に切られる所見からすると、SK785が本址柱穴跡に該当することになるが、並列する柱穴跡の一番南に位置するため認定しえず、不明とせざるをえなかった。南梁行はSK746から西、直交方向と思われるが、1間北側のSK1021・756・570のラインの可能性も残る。なお、南東端SK746の西、直交方向のSK837はST29柱穴跡と捉えた。

ST16は北からSK495・484・792・506・1030・1387を西桁行、SK495・848・457を北梁行、SK457・(654か785)・599・1148・570・1399を東桁行、SK1399・(不明)・1387を南梁行と捉えた。南梁行中間の柱穴跡は不明で、北側に1間短いSK1030・757・569の可能性もある。西桁行SK506は浅すぎて重複するSK1366のほうが妥当かもしれない。また、SK1030と1031は重複関係からそれぞれST16、ST17とした。東桁行SK599は浅く、南隣するSK602がST16柱穴跡、その南SK603がST17柱穴跡となる可能性がある。東桁行北から2番目柱穴跡はST15で述べたように認定できなかったが、位置と重複関係からはSK785の可能性もある。

ST17は西桁行がSK496・1287・793・508・1031・1078、東桁行はSK458・(654か)・602・799・568・665と捉えた。東桁行2番目柱穴跡は上述したように不明ながら、重複関係からはSK654が該当する可能性がある。ただし、南隣のSK785をST16柱穴跡とすると他のST15～17の柱穴跡の位置関係とは逆になるため、明確に捉えられなかった。隣接するST04 (542)、ST08 (463)に掘り壊されたか、建物跡毎の柱穴跡認定が誤っている可能性もある。北梁行はSK496・809・458、南梁行はSK1078・1444・665と捉えた



第22図 掘立柱建物跡ST15～19

が、南梁行は柱穴跡の通りも悪く、桁行1間北側に短いSK1031・790・568の可能性もある。また、東桁行のSK458・568は浅く、柱穴跡の認定に不安がある。

位置：①区中央区画のSX03・04東脇にST15～17は南北方向に僅かにずれながら重なる。

構造：ST15は梁行2間約5.0m、東桁行は南端SK746までで桁行5間約11.4m、1間短いSK569までだと桁行4間約9.3mとなる側柱建物跡で、棟方向はN3°Wである。柱間寸法は東桁行で北から(2.2)、(2.7)、2.1、2.3、2.1mで、北梁行は西から2.7、2.3mである。柱穴跡は直径20～30cmほどの円形・隅丸方形の平面形で、検出面から底面までの深さは約20～60cmを測る。底面標高は北東端SK989が338.8mと高いが、東桁柱穴跡で338.2m前後、西桁柱穴跡で338.0～338.4m前後である。

ST16は梁行2間約5.1m、桁行は最大で5間11.3mの側柱建物跡で、桁行4間だと約8.8mの規模となる。棟方向はN3°Wである。柱間寸法は西桁行で北から1.8、3.1、2.1、1.8、2.5mで、北梁行は西から2.8、2.3mである。柱穴跡は直径20～30cmの円形・隅丸方形の平面形で、検出面から底面までの深さは約40～100cm前後だが、100cmを測るのはSK570のみである。底面標高は北東部SK457・599が高く338.7m前後、SK1387が337.8m、SK570が337.6mと低い、他は338.0～338.2m前後が多い。

ST17は梁行2間約4.9m、桁行5間約11.3m、桁行4間だと約8.6mの側柱建物跡である。棟方向はN5°Wで、平面形は若干平行四辺形に近い。柱間寸法は西桁行で北から2.0、1.7、1.7、2.2、2.7m、北梁行で西から2.7、2.2mとなる。柱穴跡は直径20～30cmの円形・隅丸方形の平面形で検出面から底面までの深さは10～60cmである。底面標高はSK458・568が338.5、338.8mと高く、南西隅SK1078が337.8mと低い、他は338.2～338.4m前後が多い。

出土遺物：ST16(457)から珠玉壺小片(第61図5)、ST15(439)から鉄鏃(第68図7)、ST15～17の内部施設の可能性があるSK447から内耳銅片が出土した。

重複関係：ST17(793)→ST16(792)、ST16(792)→ST15(579)、ST15(439)→ST06(438)、ST16・17?(654・785)→ST08(463)、ST16(599)→ST05(598)、土坑SK1085→ST17、土坑SK1487→ST15～17、削平地SX03→ST15～17。ST15?(756)・ST16?(757)・ST17?(790)とSK760は重複部が僅かであり、土坑SK1486とST15～17の関係、SD31・32とST15の関係、ST13(794)とST15～17(579・792・793)の関係、ST15(1149)・ST16(1148)とSK1085の関係は不明である。なお、ST16にSK1387を含むと土坑SK684を切り、SK463をST08柱穴跡とすればST08に切られる。

所見：東西棟方向の建物址に切れ、他の南北棟方向の建物址との関係が直接窺える重複関係はない。本址は柱穴跡が3基連続するように位置しており、ほぼ連続した建て替えとみられる。柱穴跡の重複の仕方からは柱を入れ替えるように建て替えた可能性も考えられる。

#### ST18・19 (第22図) I14・15・19・20

建物跡の認定：整理段階の検討でST15～17の西約2m平行移動した位置に柱穴跡が2基ずつ隣接して南北方向に一定間隔で並ぶ柱穴跡からST18・19を認定した。ST18・19は東西に平行移動した位置関係と捉え、2基隣接する柱穴跡の西側をST18、東側をST19と捉え、その桁行両端を結ぶラインをそれぞれ梁行と捉えたが、ST18北西隅から直交するラインはST19東桁行としたSK846に接続するようにもみえ、梁行と桁行柱穴跡の組み合わせに不安がある。

ST18はSK368・398(不明)・501・533を西桁行、SK847・781・441・554・683を東桁行、SK368・549・847を北梁行、SK533・1061・683を南梁行と捉えた。SK1061は1062に切れ、ST18(441)→ST19(449)の重複関係から、切られるSK1061を本址の柱穴跡と認定した。西桁行北から3番目柱穴跡の位置にはST13(406)、土坑SK1172があり、本址柱穴跡が掘り壊された可能性がある。南梁行東端は当初SK

683に隣接するSK733とも考えたが、桁行上に位置するSK733はST27柱穴跡とした。

ST19はSK360・399・(不明)・417・730を西桁行、SK(846)・782・449・527・650を東桁行、SK360・476・(846)を北梁行、SK730・1062・650を南梁行と捉えた。北東隅のSK846はST04柱穴跡の想定位置にもあたり、底面が2段状で2基重複していた可能性があることから、ST04と本址柱穴跡として重複して充てた。南東隅のSK650周辺はST27の柱穴跡も想定され、その桁行ライン上に位置するSK733をST27桁行柱穴跡と捉え、東西に並ぶ位置関係から西側SK683をST18、東側SK650をST19柱穴跡としたが、SK650は底面標高がやや高く認定に不安がある。

位置：①区中央区西の西寄りに位置し、重複する削平地SX03・04埋め立て後の所産である。

構造：ST18は梁行2間約4.9m、桁行4間約10.8mの規模の側柱建物跡で、棟方向はN2°Wである。柱間寸法は東桁行で北から(2.1)、2.6、2.9、3.0m、南梁行は西から2.7、2.2mと間隔が広い。柱穴跡は直径30～40cmの円形・隅丸方形の平面形で、検出面から底面までの深さは約20～100cmと差がある。底面標高は西桁北端SK368と南端SK533が337.6m前後と低く、SK847が338.6mと高いが、他は338.0～338.4m前後を測る。東桁行柱穴跡底面標高が相対的に高い。

ST19は梁行2間約5.0m、桁行4間約11.0mの規模の側柱建物跡で、棟方向はN1°Wである。柱間寸法は東桁行で北から2.2、2.6、3.2、3.0m、南梁行で西から2.5、2.5mと間隔が広い。柱穴跡は直径20～40cmの円形・隅丸方形の平面形で、検出面からの深さは20～60cmと幅がある。底面標高は西桁行SK360が338.4mと高く、SK730が337.8mと低いが、他は338.0mである。東桁行柱穴跡ではSK846が338.6mとやや高く、SK730が337.8mと低いが、他は338.0～338.4mである。西桁行北部や、東桁行南部の柱穴跡の深さが異なるが、他はST18と柱間寸法と柱穴跡の深さは類似する。

出土遺物：なし。

重複関係：ST27(733)→ST18(683)、SX03・04→ST18、SX04→ST19、土坑SK448→ST18・19、ST18(441)→ST19(449)、土坑SK1098→ST19。ST18(781)とST19(782)やST18(476)とST19(549)、西桁行北から3番目柱穴跡とST13(406)との関係は直接把握できないが、他柱穴跡からST19が切ると推測される。土坑SK992とST18・19、ST18と土坑SK681や土坑SK447、ST18・19とSD31の関係は不明である。また、ST23(528)がST19(527)を切る可能性があるが、重複が僅かで把握できていない。

所見：ST18・19はST15～17と同様にSX03・04埋め立て後に建てられた南北棟方向の建物跡で、ほぼ重なった類似場所に建て替えられたと捉えられる。同じ南北棟建物跡ST27より新しい。

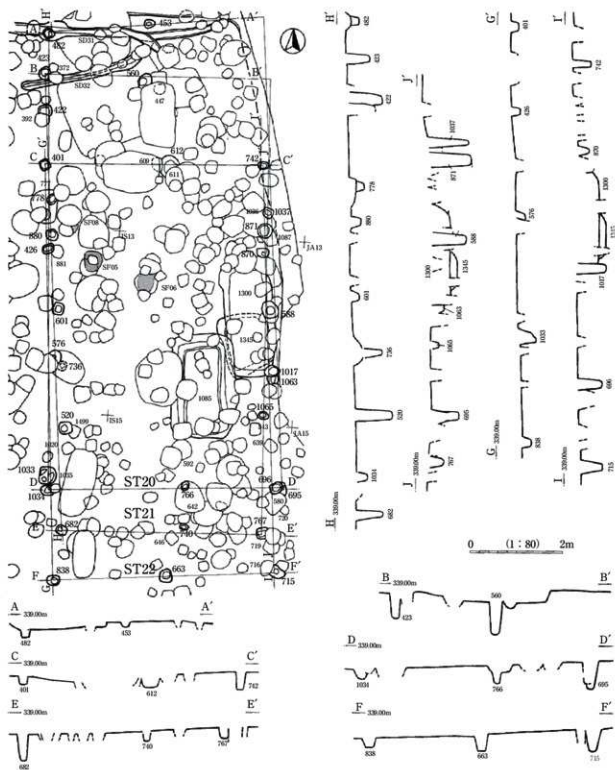
#### ST20～22 (第23図)

I15・20

建物跡の認定：整理時にSX03・04東側で、南北方向に直線的に並ぶ柱穴跡列が認められ、2m前後間隔で配列する柱穴跡を西桁行とし、底面標高を勘案しながら東側桁行柱穴跡列の組み合わせからST20～22の3棟を認定した。桁行が重なりながら南北にずれた位置関係で建て替えの関係と思われる。また、棟方向と一致する長軸の長方形土坑SK447・1085・1300は建物跡範囲内にあり、関連する可能性はある。

ST20は西桁行がSK482・422・880・736(576)・1034(1035)、南西端SK1034から東、直交方向のSK766・695(696)を南梁行、SK695(696)から北へ伸びるSK1063(1017)・871(1087)・(調査区外)を東桁行と捉えた。西桁行北端のSK482から東、直交方向のSK453・(調査区外)を北梁行と捉えた。ST20のSK1063・695・736・1034と、ST22のSK1017・696・576・1033は重複もしくは隣接し、ST20と22の柱穴跡を入れ替えて捉えられる可能性も残る。南梁行はやや北寄りのSK1020・592・639とも考えたが、他柱穴跡より底面標高が低く、西桁行南端をSK1020とするとSK736間が短すぎるので上記のように捉えた。

なお、南西隅SK1034と重複するST24(1035)、東桁行南から3番目SK871と重複するST31(1087)はそ



第23図 掘立柱建物跡ST20～22

それぞれ帰属する建物跡は断定しきれなかった。また、西桁行SK736は桁行ラインからやや内側にあり、南梁行中央のSK766も東に寄っており認定に不安を残す。

ST21はSK423・778・601・520・682を西桁行、約4.6m離れて平行する柱穴跡列SK（北端不明—調査区外）・1037・588・1065・767を東桁行と捉えた。北東部は調査区外へ延びる。東桁行SK1065は浅く認定に不安があるが、近接するSK543はST14柱穴跡と捉えた関係からSK1065とした。南梁行はSK682・740・

767、北梁行はSK423・560（不明一調査区外）である。南梁行中間柱穴跡は隣接するSK646をST37柱穴跡と捉えた関係からSK740としたが、浅く小型の形状で認定に不安があって南梁行自体が南に延びる可能性が残る。また、東桁行南端柱穴跡はSK767ではなくSK719の可能性もある。本址は柱穴跡底面標高が一定せず、帰属柱穴跡比定に問題を残すが、平面の柱穴跡分布から認定した。

ST22はSK401・426・576（736）・1033（1034）・838を西桁行、SK838から東、直交方向に並ぶSK838・663・715を南梁行、SK715から北へ並ぶSK715・696（695）・1017（1063）・870・742を東桁行、北西隅SK401から東へ並ぶSK612・742を北梁行と捉えた。このなかで本址柱穴跡としたSK1017・696・576・1033とST20のSK1063・695・736・1034は相互に帰属する建物跡の認定に不安がある。また、西桁行南端SK838はST30の柱穴跡でも妥当な位置で、いずれの柱穴跡とも断定できなかった。

位置：①区中央区西東より位置し、ほぼ桁行ラインが一致しながらST20～22が南北にずれて重なる。

構造：ST20北東部は調査区外へ延び、確認範囲で梁行2間約5.0m、桁行4間約9.8mの規模の欄柱建物跡である。棟方向はN<sup>5</sup>°Wである。柱間寸法は西桁行で北から1.7、2.8、2.6、2.7m、南梁行で西から2.9、2.1mである。柱穴跡は、直径30cmのSK871以外は直径20cm前後の円形・隅丸方形の平面形で、検出面から底面までの深さは20～70cmを測り、底面標高は337.8～338.5mである。西桁行SK1034・880・482や東桁行SK1063が338.3～338.5mと高いが、他は337.8～338.0mである。底面標高338.4m前後と底面標高338.0m前後の二者が混在する。

ST21は南梁行の認定に不安を残すが、確認範囲で梁行2間約4.6m、桁行4間9.8mの規模で、棟方向はN<sup>7</sup>°Wの欄柱建物跡である。柱間寸法は西桁行で北から2.8、2.2、2.6、2.2m、南梁行で2.4、2.2mを測る。柱穴跡は直径30cmほどの円形・隅丸方形の平面形で、検出面から底面までの深さは西桁行中央のSK601・778、東桁行のSK1065・767が20cm前後で、底面標高338.5m前後だが、他は50～70cmで底面標高は337.8～338.2m前後である。

ST22は梁行2間約4.8m、桁行4間約9.0mの欄柱建物跡で、棟方向はN<sup>4</sup>°Wである。柱間寸法は西桁行で北から1.9、2.3、2.6、2.2mを測る。南梁行は西から2.4、2.4mである。柱穴跡は直径30cm前後の円形か隅丸方形の平面形で、西桁行柱穴跡は検出面から底面まで30cmを測る。底面標高は338.4m前後が中心ながら、東桁行柱穴跡は検出面から底面まで約60cm前後で、底面標高338.1～338.5mを測るが、西桁行北側SK576・426・401以外は338.2m前後である。

出土遺物：ない。

重複関係：ST20（422）→ST07（392）、ST20（736）・ST22（576）→ST11（575）、ST20（1034）→ST24（1035）、ST32（1087）→ST20（871）、ST20（766）→土坑SK642。ST21（423）→ST25（372）、ST21（778）→SK777→ST11（735）、土坑SK1300・1345→ST22（1107）。ST21（767）→ST13（720）、S T22（612）→ST12（611）、柱穴跡SK580・881→ST22。上述したようにST20（695、1063）とST22（696、1017）はそれぞれ帰属する建物跡の認定に不安があって前後関係は断定できないが、SK695→696、SK1063→1017の関係である。これ以外のST20とSK1036やSD31の関係、ST21（423）とST24（620）、ST21（520）とST29（1499）、ST21とSK447・448・558、ST22（612）とST24（609）、ST22（715）とST36（716）の関係は直接把握できなかった。なお、土坑SK1300・1085はST20・21・22と重複するが、重複部が僅かで桁行ライン際に位置することから関連する可能性はある。

所見：ST20～22は桁行が重なることから建て替えの関係で、ST20と22を構成する柱穴跡が上記の通りならばST20→ST22となる。また、ST20～22は連続したひとつの建物跡グループとすれば、東西棟方向のST07・10～13や南北棟方向のST24・25より古く、ST31より新しい時期の建物跡と考えられる。ST20～22は位置やSX03を切るST25に切られることから、SX03・04と併存する可能性がある。

## ST23～25 (第24図) I14・15・19・20

**建物跡の認定**：整理作業の建物跡検討で、南北長軸の土坑SK760、681脇に直線的に並ぶ柱穴跡列が認められ、そのライン上の2m前後間隔にある柱穴跡を東桁行としてST23～25を認定した。

ST23はSK845・754・459・545・528を東桁行、平行して直線的に並ぶSK551・377・(不明)・407(890)・502を西桁行、SK502・1012・528を南梁行、北梁行はSK551・351・845を結ぶラインと捉えた。しかし、柱穴跡の底面標高に大きな差があって、同じ建物柱穴跡と認定しえるか不安を残す。西桁行の中央部のSX03重複部分では柱穴跡が見つかっておらず、見逃した可能性がある。

ST24は、西桁行が北からSK1289・(不明)・859・420(892)・(不明)、東桁行はSK559・609・444・872・762、北梁行はSK1289・620・559、南梁行はSK(不明)、1035・762と捉えた。西桁行北端SK1289に近接するST41(493)や西桁行SK420に近接するST43(892)は帰属関係の認定に不安がある。西桁行北から2番目のSX03重複部分の柱穴跡は不明だが、他柱穴跡の底面標高からSX03床面上まで達していないと推測され、見逃した可能性がある。西桁行南端の柱穴跡はST13(725)の位置周辺にあたるが、該当柱穴跡は不明である。南梁行SK1035が浅いことから、南梁行の位置認定に不安がある。

ST25は西桁行をSK378・(不明)・419・1365・679、東桁行をSK1490・610・573・565・648、北梁行をSK378・372・1490、南梁行をSK679・1059・648と捉えた。西桁行北から2番目柱穴跡の想定位置にあるSK486は、ST11柱穴跡と認定したため本址柱穴跡は不明となった。本址の柱穴跡は平面分布から確定したが、柱穴跡底面標高差は最大で80cmもあり、建物跡認定には不安を残す。

**位置**：①区中央区画の東寄りに位置し、ST24はST25とはほぼ重なり、ST23が北に寄って位置する。

**構造**：ST23は梁行2間約4.6m、桁行4間約9.0mの欄柱建物跡で、棟方向はN3°Wである。柱間寸法は東桁行で北から1.9、3.2、2.0、1.9m、南梁行で西から2.2、2.4mを測る。桁行中央の間隔が広い。柱穴跡は直径20cm前後の円形、隅丸方形の平面形で、検出面から底面までの深さは20～80cmとかなり幅がある。底面標高は西・東桁行南側柱穴跡で338.3m以下が多く、SK407のみ337.5mと突出して低い。一方、北側SK551は338.5m、SK845は338.8mと高く、全体的に柱穴跡底面標高は南・西側が338.0m前後、北・東側は338.5m前後で、最大差は80cmもあって柱穴跡の認定に不安を残す。

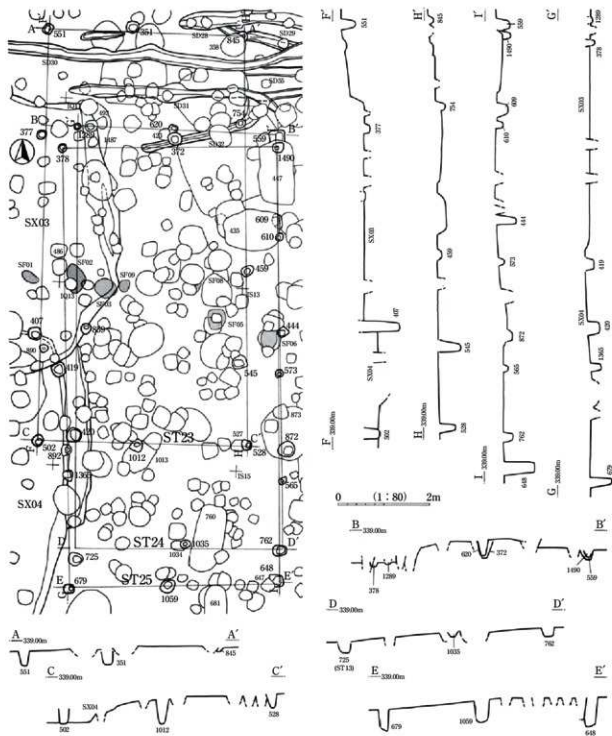
ST24は、梁行2間約4.4m、桁行4間約9.1mの欄柱建物跡で、棟方向はN3°Wである。柱間寸法は東桁行で北から1.9、2.4、2.6、2.2m、北梁行で西から2.1、2.3mを測る。柱穴跡は直径20cmほどの円形、隅丸方形の平面形で、検出面から底面までの深さは約20～50cm、底面標高は西桁行柱穴跡で338.1～338.3m前後、東桁行で338.3～338.5m前後と桁行内では近似した数値である。

ST25は梁行2間約4.6m、桁行4間約9.5mの欄柱建物跡で、棟方向はN3°Wである。柱間寸法は東桁行北から2.0、3.0、2.3、2.2m、北梁行西から2.4、2.2mである。柱穴跡は直径20～30cmの円形、隅丸方形を呈し、検出面から底面までの深さは約20～60cmを測る。底面標高は南・西側が低く、南梁行SK679・648で337.8m、西桁行北部で338.3m、東桁行北部と北梁行東部で338.5m前後である。

**出土遺物**：ST24(609)からカワラケ1点が出土している(第61図7)。

**重複関係**：ST20(1034)→ST24(1035)、ST21(423)→ST25(372)、ST25(648)→ST14(647)、土坑SK1013→ST23(1012)、ST24→土坑SK435、削平地SX04→ST23・24、ST23→SD29。これ以外にST23(528)とST19(527)、ST25(372)とST24(620)、ST25とSF06、SK435との重複は僅かで前後関係は断定できなかった。また、ST21(423)とST24(620)、ST22(612)とST24(609)、土坑SK873・1487とST24、土坑SK447とST24・25、土坑448・558とST24、SX04とST25の関係は不明である。

**所見**：ST25が東西棟方向のST14に切られ、SX03を切ることから、東西棟方向の建物跡群に先立つ南北棟方向の建物跡で、SX03・04埋め立て以後の所産とみられる。



第24図 掘立柱建物跡ST23～25

ST26・27 (第25図) 115・19・20・25

建物跡の認定：ST26・27は中央区画の南辺SD14脇に並ぶ柱穴跡を南梁行と捉えて認定した。2棟の梁行位置がほぼ同じでST27を東に約1.6m平行移動した位置にST26がある。

ST26は整理時に①区中央区画の南辺SD14に平行するSK1436・1433・1015を南梁行と捉え、そのSK1436から北へ直線的にSK1436・690(1434)・893・856・563を西桁行、SK1015から北へ直線的に並ぶSK1015・664・592・(不明)・455を東桁行、SK563・879・455を北梁行と捉えた。西桁行北端SK563脇のSK



412は、ST41が本址の柱穴跡か迷ったが、北梁行が直交する位置のSK563を本址柱穴跡とした。また、南東隅の柱穴跡SK1015はST37(1426)を切る調査所見で、後述するようにこの所見から類推される建物跡間の関係が矛盾するとも思われ、柱穴跡の認定に不安がある。東桁行の北から2番目柱穴跡はSK531・532・530周辺と想定されるが、SK531はST08、SK532はST14柱穴跡と捉え、SK530は小型で浅く柱穴跡とも断定できなかったため該当柱穴跡が不明となった。近接する土坑SK1085と重複位置に当たり、見逃した可能性がある。また、東桁行SK664に隣接するSK1048、SK592に近接するSK591は本址の柱穴跡の可能性もある。

ST27は整理時の検討で、①区中央区画の南辺SD14脇に並ぶSK1298・1080・1009(1448)を南梁行と捉え、南東隅SK1009から北へ並ぶSK829・733・524・797・1496を東桁行、南西隅SK1298から直線的に北側に並ぶSK691・678・1277・(不明)・(410)を西桁行と捉えた。北梁行はSK(410)・471・1496と捉えたが、SK410はSX03上面検出で浅く認定に不安はある。西桁行北から2番目柱穴跡はST43のSK617とも考えたが、梁行方向の東桁行SK797の位置と対比すれば、やや南の土坑SK1098と重複する付近に推測され、土坑SK1098に掘り壊された可能性もあって本址柱穴跡は不明とした。また、南梁行東端柱穴跡は東桁行・南梁行交点のSK1009を当てたが、やや外に位置するSK1448のほうが底面標高は本址の柱穴跡に近く、こちらのほうが妥当かもしれない。また、南・東桁行柱穴跡には隣接して柱穴跡があり、建て替え2棟分を1棟に捉えている可能性がある。

位置：①区中央区画の南辺に沿って位置し、ST26・27は東西に平行移動した関係にある。また、ST26・27はST30を西に平行移動した位置関係で、ST27東桁行はST28～30西桁行と重なる。

構造：ST26は梁行2間約4.8m、桁行4間約11.2mの個柱建物跡で、棟方向はN3°Wである。柱間寸法は西桁行で北から2.7、2.6、3.1、2.8mと柱間寸法が長く柱間数に比して規模は大きい。梁行は南梁行で西から2.7、2.1m、北梁行では2.3、2.5mを測る。柱穴跡は西桁行で直径約30cmの円形の平面形、東桁行で直径40cmの円形か隅丸方形の平面形である。検出面から底面までの深さは約30～70cmを測り、底面標高はSK856・455が338.2と338.3mと高く、南西隅のSK1436が337.5mと低いが、他は337.8～338.0m前後である。桁行柱穴跡は交互に深浅が繰り返されている。

ST27は北・南梁行と東桁行の柱穴跡認定に問題を残すが、上記柱穴跡から梁行2間約4.2m、桁行5間約11.0mの規模の個柱建物跡となる。棟方向はN2°Wである。柱間寸法は東桁行で北から2.1、2.2、1.8、3.0、2.0m、南梁行で西から2.1、2.1mとなる。柱穴跡は直径30cmの円形もしくは隅丸方形の平面形で、検出面から底面までの深さは50cm前後である。底面標高は337.5～338.4mの差があるが、東桁行北部SK797・1496が338.4mと高く、西桁行SK1298・691・678が337.5～337.8mと低い。東桁行南部SK1009・829・733も338.0m前後で、南・西側ほど低い傾向がある。

出土遺物：図示していないが、ST27(1080)から弥生土器片が僅かに出土している。ST26はなし。

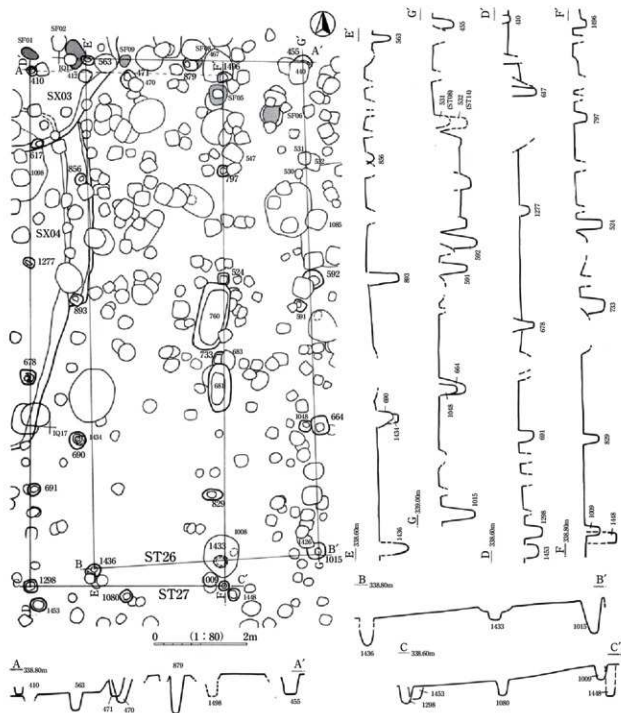
重複関係：ST26→柱穴跡SK440、SF08→ST26(879)、ST37(1426)→ST26(1015)。ST27(733)→ST18(683)、ST27(797)→ST07(547)、ST27(471)→ST05(470)、削平地SX04→ST27、土坑SK467→ST27(1496)。ST26(1433)は弥生包含層調査中に再検出し、土坑SK1008との重複関係は直接確認できていない。また、SX03を切るSF02がST26(563)を切る調査所見だが、重複部分が僅かで断定できない。ST27柱穴跡の可能性のあるSK410はSX03を切る。建て替えの関係のST26もSX04を切る可能性があるST26と土坑SK472、ST26内に位置するSK760やST27(733)とSK681の関係、ST27とSK1098の関係は不明である。

所見：①区南辺に合わせて建てられた南北棟方向の建物跡で、ST26と27は建て替えの関係で、SX03との前後関係は明確にしえなかったが、ST27がSX04を切ることでST26もSX04埋め立て以後と思われる。

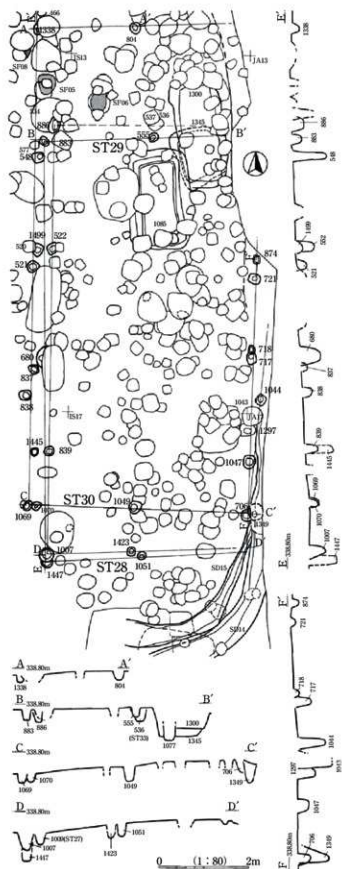
ST28・29・30 (第26図) I15・20・25

建物跡の認定：整理時に①区中央区画の東南部に2基ずつ隣接した柱穴跡が南北に並ぶことが認められ、これを西桁行とするST28・29と、やや北にずれて重複するST30を認定した。ST28は北・南梁行が特定できず、東桁行は調査区外へ伸びている可能性がある。

ST28はST29柱穴跡の東側に隣接する柱穴跡からなる。SK886・522・680・839・1007 (1447) を西桁行と捉えたが、東桁行柱穴跡は判然とせずSK718か、SK1297もしくは1043か、調査区外に伸びる可能性がある。南梁行は2基並ぶラインのSK1007 (1447)・1423・(不明) と捉えたが、東桁行が調査区外に伸び



第25図 掘立柱建物跡ST26・27



第26図 掘立柱建物跡ST28～30

れば、SK1423は西に寄りすぎていて認定に不安がある。また、西桁行南端のSK1007・1447は、西桁行北隣の柱穴跡ST29 (1445)とST28 (839)の底面標高比較から、近似数値のSK1007を本址柱穴跡と捉えた。西桁行北端の柱穴跡はSK577をST08柱穴跡と認定したことから、東に隣接するSK883をST29柱穴跡、北東隣のSK886を本址の柱穴跡とした。西桁行はSK886より北延長先には関連しそうな柱穴跡がなく、SK886を北西隣の柱穴跡と考えたが、そこから東、直交方向にある北梁行中間の柱穴跡はST13 (537)、ST33 (536)周辺にあたるものの、該当する柱穴跡がなく不明となった。

ST29はST28柱穴跡の西に隣接する柱穴跡から捉えた。SK883・1499・837・1445・1447 (1007)を西桁行、SK1447 (1007)・1051・(不明)を南梁行、SK (不明)・(1047か1297)・717・874・(調査区外)を東桁行、SK883・555・(調査区外)を北梁行と捉えた。北東部は調査区外へ延びる。

ST30はST28・29西桁行と重なる柱穴跡列SK1338・548・521・(838)・1069 (1070)を西桁行、南端SK1069から東へ直交するSK1069 (1070)・1049・706 (1349)を南梁行、SK706 (1349)から北に直線的に並ぶSK706 (1349)・1044・721・(調査区外)を東桁行、SK1338・804・(調査区外)から調査区外へ延びるラインを北梁行と捉えた。北東部が調査区外へ延びる。西桁行南端のSK1069と1070は重複していずれが本址柱穴跡とは断定できなかった。その南から2番目にあるSK838はST22柱穴跡位置にもあたり、周囲に充てられる柱穴跡もなく帰属関係を断定できなかった。また、南梁行柱穴跡は後述するST37との重複関係から認定に問題を残す。

位置：①区中央区画東側にST28・29が重複し、ST30は桁行が重なりながら北約2.5mずれて位置する。ST26・27はST30を西に平行移動した位置となり、ST28～30西桁行とST

27東桁行が重なる。

**構造：**ST28の規模は詳細不明だが、確認範囲で西桁行4間約9.6m、梁行は東桁行が調査区外ならば4.8m以上と推測される。側柱建物跡で西桁行の方位はN1°Wである。底面標高は西桁行北端のSK886が338.4mと高いが、他は338.0m前後である。

ST29は梁行2間約4.8m、桁行4間約9.3mの規模で、棟方向はN3°Wの側柱建物跡である。柱間寸法は西桁行北から2.3、2.5、1.9、2.5mを測る。南梁行は西から2.2、2.5mで、中間柱穴跡SK1051がやや西に寄っている。柱穴跡は直径20～30cmの円形か隅丸方形の平面形で検出面から底面までの深さは約20～60cmで、西桁行南部が60cm前後と深い、他は30cm前後である。底面標高はSK1447・1445が337.8mと低く、他は338.2～338.5mである。傾斜上方の東・北側の柱穴跡は底面標高も高い。

ST30は梁行2間約4.9m、桁行4間約10.6mの側柱建物跡で、棟方向はN1°Eである。柱間寸法は西桁行北より2.8、2.4、2.9、2.5m、南梁行で西より2.4、2.5mである。柱穴跡は直径30cm前後の円形か隅丸方形の平面形で、検出面から底面までの深さは約20～60cmを測る。底面標高はSK548・1044が337.9m前後だが、他は338.1～338.3mである。

**出土遺物：**図示していないが、ST30(1069)から弥生土器片が僅かに出土している。他はなし。

**重複関係：**ST28・29の関係は重複部が僅かながらST29(717)→ST28(718)で、南西隅SK1447と1007の帰属する建物跡の認定は断定しきれないが、SK1447→1007。他遺構との関係は、ST28(680)→土坑SK681、ST30(1338)→土坑SK466。ST28(886)と土坑SK534、ST29(1499)とST21(520)、ST29・30とSD56との関係は不明である。調査ではST37(1426)→ST30(1049)と捉えられたが、ST37は南北棟方向の建物跡と重複位置にある小型建物跡で、併存する可能性がある建物跡との関係で重複関係の認定や柱穴跡比定に問題を残す。なお、ST28～30の範囲内に長方形土坑SK1085・1300が位置するがST28～30との関係は不明である。

**所見：**①区中央区画内の南辺に合わせて建てられており、同様のST26・27と関連すると思われる。

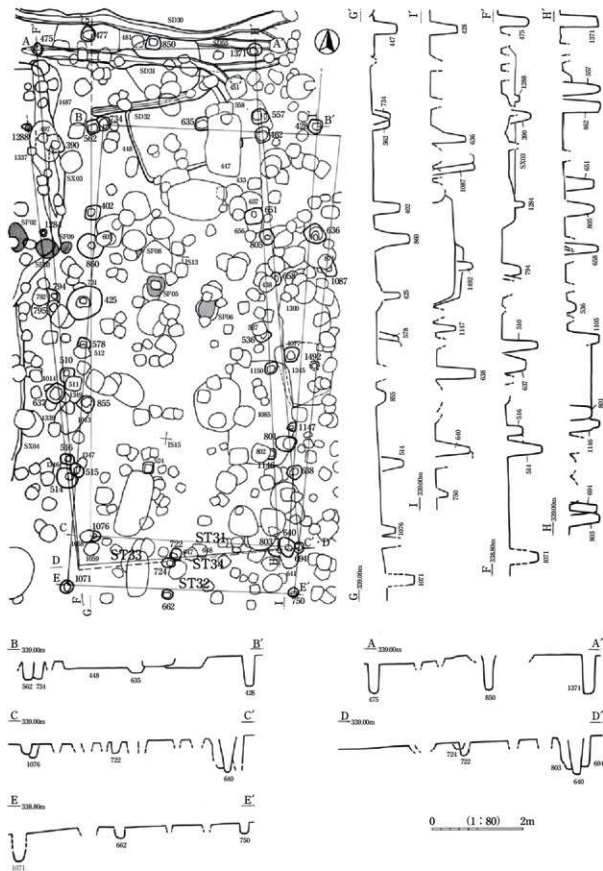
### ST31・32 (第27図) I15・20

**建物跡の認定：**整理時に比較的大きめで深い柱穴跡が南北方向に並ぶと認められST31・32を認定した。

ST31はSK562・402・425・855・1076を西桁行、SK428・636・(不明)・1147・640を東桁行と捉えた。北梁行は不明で、西桁行の北延長先のSK477まで延長される可能性もあるが、建て替えの関係とみられるST32より規模が大きくなるため本址柱穴跡に含めなかった。東桁行の北から3番目柱穴跡はST10(1077)付近にあたるが、該当する柱穴跡が特定できず、重複するSK1300に壊された可能性もある。東梁行南端柱穴跡SK640は東西棟建物跡ST14(641)を切る調査所見だが、南北棟より東西棟建物跡が後出する傾向からは重複関係が逆に思われるが、桁行ラインに載るSK641をST14柱穴跡、SK640を本址の柱穴跡と認定した。南梁行はSK1076・722・640と捉えた。SK722はやや西によるが、近接するSK647をST14、SK648をST25と捉えた関係からSK722を充てた。

ST32はST31とはほぼ桁行が一致しながら若干棟方向がずれ、西桁行はSK734・860・578・515・1071、東桁行はSK(調査区外?)・1087・1492・638・750と捉え、SK734・635(調査区外?)を北梁行、SK1071・662・750を南梁行とした。北梁行の東端柱穴跡は調査区外へ延びて不明で、北梁行中央のSK635や南梁行柱穴跡SK662・750が浅く認定に躊躇される。東桁行北から2番目柱穴跡の位置にあるSK1087と重複するSK871は、ST20と本址の柱穴跡認定に不安がある。

**位置：**①区中央区画の東側にほぼ重複して位置する。ST31と32は桁行が重なり、近接時期の建て替えとみられる。重複関係からはST32→ST31へ変遷したとみられる。



第27図 掘立柱建物跡ST31～34

**構造**：ST31は梁行2間4.3m、桁行4間9.3m、SK477を含むと桁行5間約11.3mの規模で、棟方向はN5°Wの側柱建物跡である。柱間寸法は西桁行で北から1.9、2.0、2.2、3.2mで、SK477と562間で2.0mを測る。南梁行は西から2.3、2.0mである。柱穴跡は直径30～40cmの円形か隅丸方形の平面形で、検出面から底面までの深さは30～80cmと幅がある。SK855・1076・722は底面標高が338.3～338.4mと高く、他は337.9～338.1m前後と低い。

ST32は梁行2間約5.0m、桁行4間10.2mの側柱建物跡である。棟方向はN1°Wである。柱間寸法は西桁行で北から2.7、2.1、2.8、2.6mで、南梁行で西から2.2、2.8mとなる。柱穴跡は南梁行で直径20cm強と小さいが、他は直径30cm前後の円形か隅丸方形の平面形である。検出面から底面までの深さは30～100cmと幅がある。底面標高は南梁行のSK662・750と北梁行SK635が338.4～338.5m、西桁行北端のSK734で338.3mと高いが、それ以外は337.8～338.1m前後と低い。

**出土遺物**：なし。

**重複関係**：ST31 (1076)→ST14 (1058)、ST33 (803)・ST34 (694)→ST31 (640)、ST32 (734)→ST31 (562)、土坑SK1013→ST31 (855)。ST32 (860)→ST04 (605)、ST32 (578)→ST07 (512)、ST32 (1087)→ST20 (871)、ST32→SK1300、ST34 (514)→ST32 (515)、土坑SK1345→ST32。SK1085調査後の壁で検出したST31 (1147)、土坑448底で検出したST32 (635)、ST31とSD28・56、ST32とSK447の前後関係は不明である。ST31 (725) 上部の小型土坑が柱穴跡を切る。なお、調査所見ではST14 (641)→ST31 (640) だが、ST14を含む東西棟建物跡は本址のような南北棟建物跡に後出する傾向が捉えられる。柱穴跡の重複所見が誤っているか、柱穴跡の認定に問題がある可能性は残る。

**所見**：東西棟方向のST04・07・14や南北棟方向のST20に切られる関係から、ST31・32はSX03と併存するか、それ以前の所産で、ST33・34に後続する可能性が考えられる。

### ST33・34 (第27図) I15・20

**建物跡の認定**：整理時にST31・32に近接する深い柱穴跡の配列からST33・34の2棟を認定した。

ST33はSK475・850・1371を北梁行、SK1371・462・805・536・1146・803を東桁行、SK803・724・(不明)を南梁行、SK475・390・(不明)・510・516・(不明)を西桁行と捉えた。東桁行北から4番目柱穴跡のSK536は浅く認定に不安がある。西桁行南端柱穴跡はSK1071付近にあたるが、SK1071はST32の柱穴跡と捉えて本址の柱穴跡は不明となった。西桁行の北から3番目柱穴跡はSX03東壁と重なる位置にあって見逃した可能性があり、6番目柱穴跡は前年度確認調査トレンチで掘り壊した可能性がある。また、南梁行中間柱穴跡はSK648・647が妥当な位置だが、それぞれST25、ST14柱穴跡とした関係で西に寄ったSK724を充てた。

ST34はST33柱穴跡に近接する深い柱穴跡から認定したが、欠落する柱穴跡が多く、柱間寸法が一定しないなど認定に不安がある。西桁行は北からSK1288・1284・795・637・514・(不明)、東桁行はSK557・(651)・658・(不明)・801・694と捉えた。東桁行北から2番目柱穴跡は、想定位置周囲のSK433をST09、SK574をST05柱穴跡と捉えた関係からSK651と考えたが、やや桁行ラインから西に寄る。同じく4番目柱穴跡はSK1150か1077付近にあたるが、それぞれST07とST10柱穴跡と捉えたため不明となった。該当柱穴跡がSK1300に壊された疑いもある。また、西桁行北から3番目SK795はST13 (794) と帰属する建物跡が逆かもしれない。北梁行は桁行北端のSK1288・557まで捉えられ、その北延長先に該当する柱穴跡が認められない。SK1288・557を北梁行とも考えたが、本址は桁行5間ながら、建て替えの関係とみられるST33の規模より1間分短く、北に延長する可能性がある。なお、西桁行のSK1288のかわりにSK1337、SK794は桁行上に位置してST13柱穴跡としたが、本址 (795) と代えられる可能性がある。南梁行は中間

柱穴跡や西端柱穴跡が想定位置周辺で検出されておらず、不明となった。

位置：①区中央区画北部にあり、ST33・34は桁行が重なって位置し、建て替えの関係とみられる。

構造：ST33は梁行2間約4.8m、桁行5間約11.2mの規模で、桁行はN10°Wの側柱建物跡である。柱間寸法は西桁行で北から2.1、2.1、3.0、1.9、2.4mで中央の間隔が長い。北梁行は2.5、2.3mである。柱穴跡は直径20～40cmの円形、隅丸方形の平面形で、検出面から底面までの深さは約70～80cmと深いものが多く、底面標高はSK536が338.5mと高いが、他は337.8～338.1m前後である。

ST34は確認範囲で梁行推定2間約4.9m、桁行推定5間の側柱建物跡で、東桁行の規模は約9.8mで北端SK451とすると10.4mを測る。ST33の建て替えと捉えたが、桁行はやや短い。棟方向はN13°Wである。柱間寸法は比較的等間隔の西桁行で北から1.8、1.7、1.8、1.9、(推定2.0m?)と狭いながら一定し、東桁行は北から2.1、1.5、(推定1.9)、(推定1.9)、2.2mと幅がある。柱穴跡は直径20～40cmの円形、隅丸方形の平面形で、検出面から底面までの深さは60～80cmである。底面標高は337.7～338.2mで、338.0m前後が多い。

出土遺物：なし。

重複関係：ST33(390)→ST08(497)、ST33(536)→ST13(537)、ST33(803)・ST34(694)→ST31(640)、ST33→柱穴跡SK802・511、土坑SK558→ST33(462)・ST34(557)。土坑SK1085とST33、SK1487とST34の関係は見逃した。ST34(658)→ST06(438)、ST34(514)→ST32(515)。SX03との関係は直接確認できていないが、ST33・34→ST31・32→ST20の関係とST20がSX03・04と併存した可能性からSX03以前の可能性がある。

調査時に土坑SK1085→ST34(801)の所見が得られているが、掘立柱建物跡の関係ST34→31・32→20→22→24・25と、SK1085と類似形態で隣接するSK1300がST32→SK1300となる関係、さらに土坑1085→土坑SK1300の前後関係を考慮するとSK1085→ST34→ST31・32→SK1300・ST20の順と推測される。この想定では類似形態で近接するSK1085とSK1300は前後した造り替えではなく、SK1085がST20→22、28～30に伴う可能性はないこと、さらにSK1085に伴う建物跡は不明となる。SK801の重複関係が逆ならば、ST33は最も古い所産でSK1085がST20→22、28～30に伴う可能性がある。

所見：建物跡の重複関係からは、ST33・34が東西棟方向のST06・08・13、さらに南北棟方向のST31・32に切れ、SX03と類似時期かそれ以前の南北棟方向ST20以前と捉えられ、①区中央区画でも古い建物跡の可能性がある。しかし、ST33の柱穴跡SK801とSK1085との前後関係は逆に柱穴跡の重複所見か、建物柱穴跡認定に問題が残る。

#### ST35～40 (第28図) I20・25

建物跡の認定：①区中央区画南東部の狭い範囲に柱穴跡が密集することから、小型建物跡が繰り返し建て替えられたと推測し、梁行1間×桁行2間前後の建物跡6棟を捉えた。ほぼ同棟方向で重複することから、建て替えの関係の建物群と捉えてまとめて記述する。

ST35はSK591・672・699(1440)を西桁行、SK1398・666・703を東桁行と捉えた。弥生包含層調査中に南西隅SK699と重なる位置に検出されたSK1440は同一柱穴跡の可能性が高い。また、東桁行中央のSK666は隣接するST39のSK751と入れ替えられる可能性がある。柱穴跡の平面分布から認定したが、柱穴跡底面標高に幅があって建物跡の認定に不安がある。

ST36はSK590・744・1430を西桁行、SK1395・716・705を東桁行と捉えた。

ST37は長方形に並ぶSK646・673・1426を西桁行、SK791・1355・707を東桁行と捉えたが、柱穴跡底面標高に幅があって建物跡の認定に不安がある。

ST38は長方形に配置するSK737・671・1428を西桁行、SK不明・667・710を東桁行と捉えた。東桁行北端柱穴跡はST21（767）付近にあたるが、他ST柱穴跡と認定したため該当柱穴跡は不明となった。

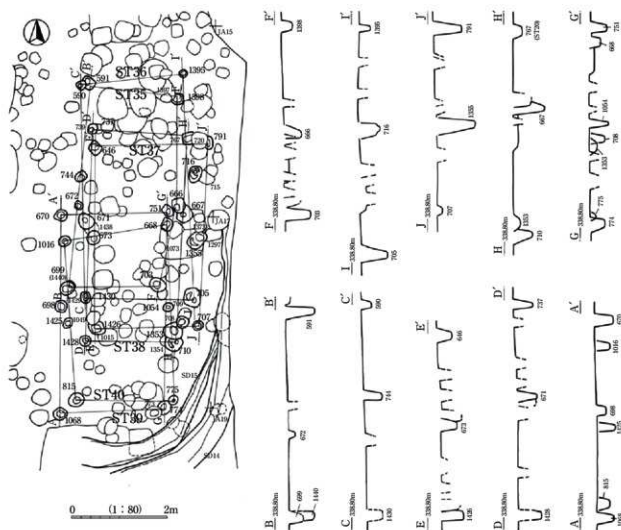
ST39は長方形に配列するSK670・698・1068を西桁行、SK751・1054・774を東桁行と捉えた。南東隅SK774は隣接するSK773の可能性がある。

ST40はSK1016・1425・815を西桁行柱穴跡、SK668・1353（708）・775を東桁行と捉えた。西桁行柱穴跡は比較的直線的に並ぶが、東桁行は若干ずれて浅い柱穴跡が多い。特にSK1353は浅いので、桁行ラインより張り出すが、隣接したSK708の可能性がある。

位置：ST35・36がほぼ重なり、ST35・36の南約1m南にST37・38が重なって位置し、その南へ平行移動した場所にST39・40が重なって位置する。

構造：ST35は梁行1間約2.0m、桁行2間約4.4mで、棟方向はN5°Eである。平面形は東桁行が南にずれる平行四辺形である。柱間寸法は西桁行で北から2.5、1.9mを測る。柱穴跡は直径30cmほどの円形・隅丸方形を呈し、検出面から底面までの深さは約20～60cmと幅があり、底面標高はSK672・1398が338.4m、SK666が338.2m、他は338.0m前後である。

ST36は南梁行1間約2.3m、桁行2間約4.5mの規模で、北梁行が2.1mとやや短い台形に近い平面形である。棟方向はN1°Eである。柱間寸法は西桁行北から2.0、2.5mを測る。柱穴跡は直径20～30cmの円



第28図 掘立柱建物跡ST35～40



形・隅丸方形を呈し、検出面から底面までの深さは20～50cmである。北・西側の柱穴跡が比較的浅く、底面標高は北部のSK590・1395で338.4m、南東部のSK705で338.0m、他は338.2m前後である。

ST37は梁行1間で北梁行は約2.4m、南梁行2.2mで、桁行2間約4.0mの規模である。棟方向はN1°Wである。柱間寸法は東桁行北から2.1、1.9mを測る。柱穴跡は直径20～30cmの円形・隅丸方形の平面形で、検出面から底面までの深さは約10～80cmで、底面標高は浅いSK707で338.5m、深いSK1355で337.8mと70cmの差がある。他は338.0～338.3m前後である。

ST38は梁行1間約2.0m、桁行2間約4.4mの規模で、棟方向はN1°Wである。柱間寸法は西桁行北から1.9、2.5mである。柱穴跡は直径20～40cmの円形・隅丸方形の平面形で、検出面から底面までの深さは約20～70cmを測り、底面標高はSK667で338.0m、他は338.2m前後である。

ST39は梁行1間約2.2m、桁行2間約4.2mで、棟方向はN0°Wである。柱間寸法は西桁行で北から1.9、2.3mで、柱穴跡は直径20～30cmの円形の平面形で、検出面から底面までの深さは20～40cmと浅く、底面標高は338.1～338.3m前後となる。

ST40は梁行1間約2.0m、桁行2間約3.9mの規模で、東桁行が長い平行四辺形の平面形を呈し、棟方向はN4°W前後である。柱間寸法は東桁行北から2.2、1.7mで、柱穴跡は直径20cm前後の円形の平面形で検出面から底面までの深さは約20～40cmと浅い。底面標高は338.1～338.4mである。

出土遺物：なし。

重複関係：ST35～40の関係は、ST35(591)→ST36(590)、ST38(667)→ST35(666)、ST39(774)→ST40(775)、ST38(710)→ST40(1353→708)で、まとめるとST39・38→40→35→36とみられる。重複する建物跡を近似時期の前後した建て替えとすると、重なって位置するST39と40は近い関係とみられるが、重複関係では一旦北朝ST38へ移り、次に南ST40へもどる関係ながら、全体としては南から北へ建て替えられた可能性が推測される。なお、ST39南東隅柱穴跡がSK773とするとST40とは切り合わない。他遺構との重複ではST37(791)→ST13(720)、ST38・40→土坑SK1073である。SK1397とST35、ST22(715)とST36(716)、ST37と土坑SK1073との関係は不明である。調査ではST37(1426)→ST26(1015)・ST30(1049)とされたが、所見で述べるように重複関係に問題がある。

所見：ST35～40は2×4・5間建物跡の分布から外れた南東部に密集する柱穴跡から認定したが、類似した小型建物跡は①区中央区画内のST42・43以外にはなく、ごく限られた存在である。ST35～40は規模から2×4・5間の南北棟建物跡の付属屋と考えられ、場所が重複しないで併存する可能性がある南北棟建物跡はST22・31～34がST39・40、ST20がST37～40、南北棟のST15～19・23～25・27・41と、東西棟建物跡のST04～14とST35～40が併存可能である。しかし、重複関係ではST37→ST26・30、ST37→ST13なので、ST13より後出する東西棟ST04～10、ST26の建て替えと思われるST27、ST27を切るST18・19もその可能性は低いように思われ、併存する可能性が高いのは東西棟ST11・12・14か南北棟ST15～17(・18・19)・23～25・41とST35～40、あるいはST20～22・31～34とST35～40の一部と考えられる。この重複関係はST37(1426)・ST26(1015)・ST30(1049)のみなので、柱穴跡の認定と重複関係の所見に見誤りがないとは言いきれず、上記の推測にも不安がある。

ST41 (第29図) I14・15・19・20

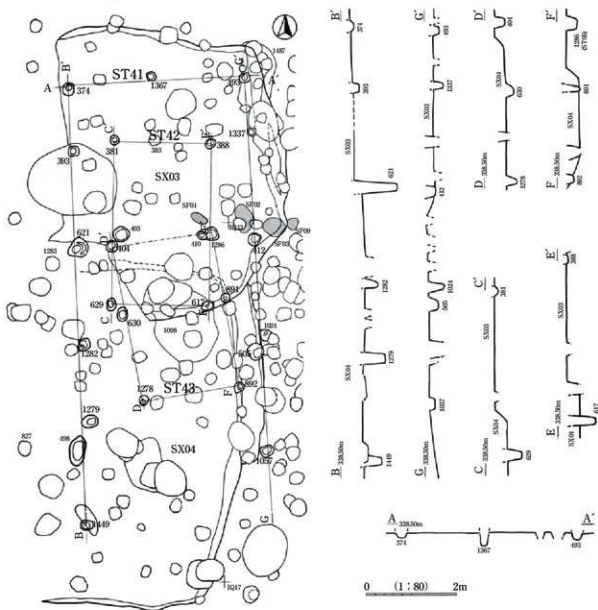
建物跡の認定：整理で柱穴跡の平面分布から認定した。SX04と重複する本址南西部の柱穴跡検出面標高は東北部柱穴跡の底面標高に近く、同一建物跡での柱穴跡底面標高が類似する傾向からは認定に問題がある。また、本址のSX03と重複する北部の桁行柱穴跡は、直交した梁行方向でも一致した位置にあるが、南部は桁行直交方向に柱穴跡が位置していない。さらに、本址は①区中央区画の西端に位置して東側に広

い空地を生じるが、他に同様の位置にある建物跡が認定できていないなどの問題がある。ここでは平面柱穴跡分布から長方形に配置する柱穴跡から建物跡の可能性のある遺構として掲載しておく。

本址はSX03・04西縁を直線的に通るSK374・393・(621)・1282・1279(498)を西桁行、平行するSK493・1337・412・505・1057を東桁行と捉えた。東桁行北から4番目柱穴跡にSK505のかわりに隣接するSK1024が充てられる可能性もある。西桁行北から3番目柱穴跡に該当するSK621はST09柱穴跡と捉えたが、底面に段差があって2基重複した可能性があって本址の柱穴跡でも充てた。西桁行南端はSK1449まで延びる可能性があるが、それに対応する東桁行の柱穴跡は不明で、南梁行の位置は特定できなかった。北梁行はSK374・1367・493と捉えたが、桁行北端の柱間寸法が短く、桁行が1間短いSK393・383・1337のラインの可能性も残る。

位置：①区中央区画西端の削平地SX03・04に重なって位置する。

構造：本址は梁行2間約3.9mで、西桁行はSK1449までだと桁行5間約9.8m、SK1279までだと4間約7.5



第29図 掘立柱建物跡ST41～43

mの規模を測る。棟方向はN5°Wの側柱建物跡である。柱間寸法は西桁行北からSK1449まで1.5、2.1、2.3、1.6、2.3m、北梁行は西から1.9、2.0mである。柱穴跡は直径30cmほどの円形・隅丸方形の平面形で、底面標高は西桁行のSK621のみ337.2m、SX04重複部分にある南西部SK1282・1279・1449の底面標高は337.6m、北梁行や東桁行柱穴跡で338.0～338.3m前後である。

出土遺物：なし。

重複関係：土坑SK1487→ST41、SX03・04→ST41（412・505）。他柱穴跡との関係は不明である。

所見：本址は南北棟方向の建物跡だが、①区中央区画の西端に寄りすぎて東側が空閑地となる。このような配置となる建物跡は他にはなく、本址の認定に不安を残す。

#### ST42・43（第29回） I14・19

建物跡の認定：整理時にSX03・04に伴う建物跡の可能性を検討するなかで、柱穴跡が長方形に並ぶST42・43の2棟を認定した。1×2間の小型建物跡だが、ST35～40のような3回以上の建て替えは想定しにくく、柱穴跡底面標高も幅があって建物跡認定に不安がある。ここでは可能性のある遺構として報告する。

ST42はSX03南部に位置し、SK381・629・388・617の4基の柱穴跡が長方形に配置するように認められ本址を認定した。ST42西桁行中間のSK403と東桁行中間のSK1286はST05柱穴跡、東桁行中間のSK410はST27柱穴跡と捉えられ、本址の想定される柱穴跡は不明となった。柱穴跡が浅いことからSX03床面までに柱穴跡底面が残存しなかったか、SX03調査中に見逃した可能性がある。

ST43はSX03・04の重複する付近に位置し、長方形に配置する柱穴跡のSK404・630・1278を西桁行、SK（不明）・891・892を東桁行と捉えた。東桁行北端にSK410とSK1286が位置するが、それぞれST27とST05柱穴跡と捉え、本址の柱穴跡は不明となった。

位置：①区中央区画の西端にあり、SX03と04の重複する境界部分付近に2棟が重なって位置する。

構造：ST42は梁行1間約2.1m、桁行は推定2間で約3.6mを測る。棟方向はN0°Wである。柱穴跡は直径20cmの円形の平面形を呈し、北梁行SK388・381は床面から底面までの深さ約10cmで底面標高338.2m前後、南梁行SK617・629で深さ約40～60cmを測り、底面標高337.7mと低い。

ST43は梁行1間約2.2m、桁行2間約3.5mで、棟方向N12°Wである。柱穴跡は直径20cmの円形・不整円形の平面形で、検出面から底面までの深さは40cm前後、底面標高は337.8～338.2m前後である。

出土遺物：なし。

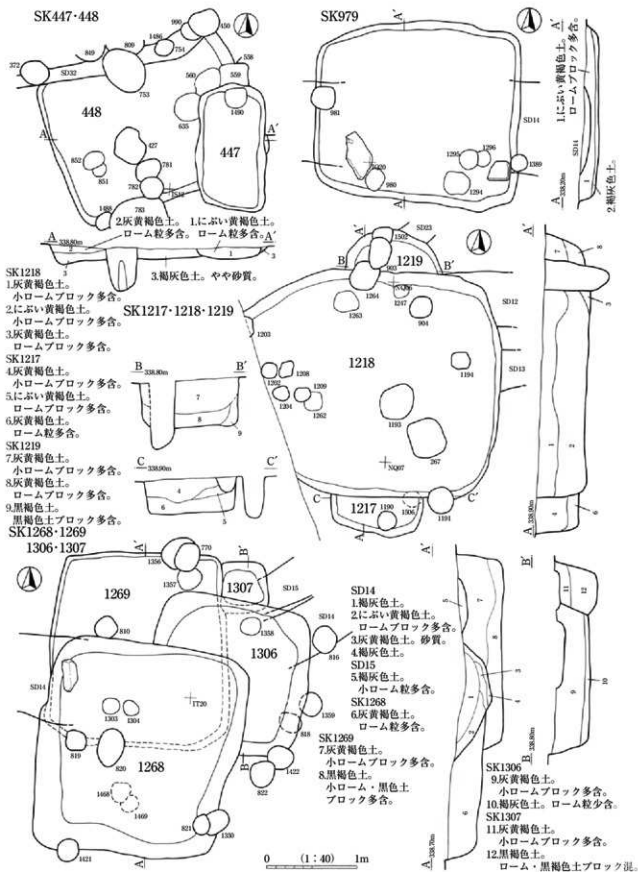
重複関係：SX04→土坑SK1098→ST42（617）。他柱穴跡はSX03やSX04床面上で検出したが、直接前後関係は把握できず、ST42とST43、ST43とSX04の関係は不明である。ST42のSK388・381は浅いので、SX03とは前後関係不明ながら同時存在ではないと思われる。

所見：SX03・04とは直接関連しないが、南北棟方向の建物跡と関連する可能性がある。

#### ④. 土坑

##### SK448（第30回） I15

位置：①区中央区画北部に位置する。重複：ST10（427）、ST18（782）、ST19（781）、土坑SK783・447、SD32に切られ、ST08（852）、ST21（560）、ST24（559）、ST32（635）、土坑SK558、柱穴跡SK851・753・1488との前後関係は見逃して不明である。また、SD32に切られることから、SD32を切るST05（990）より古いと捉えられる。構造：長軸約2.2m、短軸約1.6mの長方形の平面形で、長軸方位はN60°Eである。壁は若干斜めで、底面は平坦ながら西壁際がやや低く、検出面から底面までの深さ約22cmを測る。埋土：埋土は上部に埋め土と捉えられるスコリア粒を多く含む灰黄褐色土、下部にスコリア粒を含ま



第30図 ①区土坑1

ないⅡ層に類似する砂質の褐色土層に大別された。下層は廃絶直後の流入土の可能性がある。出土遺物：なし。所見：周囲の土坑と長軸方位が異なるが、隣接するSD32とは同方位で類似時期の遺構と思われる。

## SK1085 (第32図 PL.7) I20

位置：①区中央区画東よりにある。重複：ST07 (1150)、ST08 (532)、ST09 (800)、ST12 (529)、ST17 (799)、土坑873、柱穴跡SK581・802・530に切られ、土坑SK1345・1300を切る。ST15 (1149)・ST16 (1148)、ST31 (1147)、ST33 (1146)、柱穴跡SK581を本址底面で検出したが、前後関係は直接確認できていない。ST34 (801) は本址を切る調査所見だが、ST34は中央区画で捉えられた最も古い建物跡の可能性があり、その所見からは本址のほうが古くなる。一方で位置関係からはST34より後出するST20～22、28～30に伴う可能性もあってST34との重複関係の認定に不安がある。構造：平面形は長軸約2.3m、短軸約1.5mの長方形で、長軸方位はN2°Wである。壁は比較的垂直に近く、底面は平坦で壁際が低く浅い溝が巡る。検出面から底面までの深さは約52cmである。壁際の溝は壁施設の一部と思われる。埋土：ロームブロックやスコリア粒を多く含み埋め戻されている可能性がある。埋土中位には炭化材が少量混じっていた。出土遺物：砥石1点がある(第66図3)。所見：近接するSK1300は本址と造り替えの関係と捉えられる。掘立柱建物跡が密集する範囲内にあり、建物跡内施設の可能性のあるSK303・304・315と同様の規模や平面形なので、本址も建物跡内施設と思われる。位置的にはST20～22、28～30に伴う可能性があるが、ST34 (801) が本址を切り、ST34がST20に切られる所見からは、本址が最も古い土坑で伴う建物跡がないことになる。しかし、SK801をST34柱穴跡とする認定に不安があって断定できない(ST34参照)。

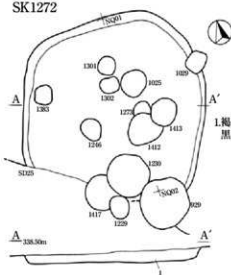
## SK1300 (第32図 PL.7) I20

位置：①区中央区画東より類似した規模の土坑SK1085と近接する。重複：ST08 (589)、ST09 (538)、ST10 (1077)、ST11 (539)、ST14 (1493)、ST22 (1017)、土坑SK1085、柱穴跡SK613・615・653・1039・1040・1494・1503・1504に切られ、ST32 (1492)、土坑SK1345を切る。SK588・1491とは前後関係を確認できなかった。南側底面で検出したSK1345はSK1300の一部と考えたが、土層観察用ベルトにかかったST32 (1492) がSK1345を切り、上部をSK1300に切られることから別遺構と結論した。構造：北辺は多くの重複柱穴跡に壊されて仔細不明だが、平面形は長軸約2.5m前後、短軸約1.2mの長方形と思われる。長軸方位はN9°Wである。壁はほぼ垂直で、底面は平坦となり、SK1085のような壁際の溝状のくぼみは認められなかった。検出面から底面までの深さは約40cmを測る。埋土：ロームブロックを含む人為的な埋め土と捉えられる。出土遺物：なし。所見：平面的な位置関係からのみいえば、SK1085とは造り替えの関係で、本址はST20～22・30の一連の建物跡の内部施設の可能性が考えられる。しかし、捉えられた建物跡間の重複関係からはSK1085→ST34→ST31・32→SK1300・ST20の順で、直接関連しないことになるが、重複関係で鍵となるSK801とSK1085の関係、SK801とST34の関係の認定に不安があって断定はできない。

## SK558 (第33図) I15

位置：①区中央区画北部に位置する。重複：土坑SK447、ST33 (462)、ST34 (557) に切られ、土坑SK448、ST24 (559)、柱穴跡SK451との関係は直接確認できていない。構造：西辺はSK447に切られ、東西長は1.0m以上、南北長は0.9m前後のやや不整形の平面形で長軸方位はおおよそN80°Eである。壁はほぼ

SK1272

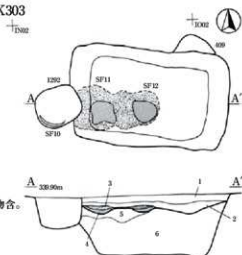


1.褐灰色土。  
黒褐色土ブロック多含。

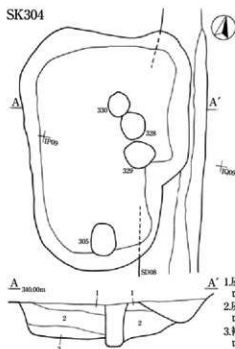
SF11・12  
1.にぶい黄褐色土。  
2.灰黄褐色土。  
3.黒褐色土。灰・炭化物含。  
4.焼土。

SK303  
5.灰黄褐色土。  
6.にぶい黄褐色土。  
ロームブロック多含。

SK303

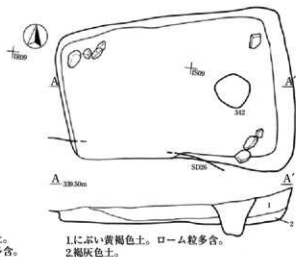


SK304



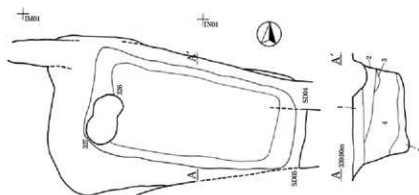
1.灰黄褐色土。  
ローム粒多含。  
2.灰黄褐色土。  
ローム粒少含。  
3.褐灰色土。  
ローム粒少含。

SK343



1.にぶい黄褐色土。ローム粒多含。  
2.褐灰色土。

SK315



1.にぶい黄褐色土。  
小ロームブロック多含。  
2.灰黄褐色土。  
小ロームブロック多含。  
3.黒色土。ローム粒少含。  
4.にぶい黄褐色土。  
小ロームブロック多含。  
5.褐灰色土。ロームブロック少含。

0 (1:40) 1m

第31図 ①区土坑2

垂直で、底面は平坦で検出面からの深さは約20cmを測る。埋土：底面上に炭化物を多く含む土層があり、上層は1cm大のロームブロックを多く含む埋め戻しと思われる土層である。出土遺物：楔状鉄製品が1点ある（第68図8）。所見：底面上に炭化物を多く含む特徴から、火処に関連する施設と思われるが、焼土が確認できておらず内部で直接火が焚かれたとは断定できない。

## SK684（第33図） I20

位置：①区中央区画南よりに位置し、前年度確認調査トレンチにかかって一部掘り壊した。重複：ST16（1387）を切る。構造：平面形は長軸約1.2m、短軸約0.9mの楕円形を呈し、壁は若干緩やかでU字形を呈す。検出面から底面までの深さは約14cmと浅い。埋土：底面上に焼土粒・炭化物を大量に含む土層があり、上層は細かいスコリア粒を多く含む埋め土の可能性がある。出土遺物：なし。所見：火処に関連した施設と思われるが、被熱面は確認できず内部で火が焚かれたとは断定できなかった。

## SK873（第32図） I20

位置：①区中央区画の東部に位置する。重複：柱穴跡SK1060、土坑SK1085を切る。埋土は僅かしか残存せず、ST12（529）、ST24（872）、柱穴跡SK798と前後関係は不明である。構造：平面形は直径1.2～1.0mを測る不整形で、検出面から底面までの深さは12cmと浅い。断面形は浅いタイ状を呈する。埋土：黒色土ブロックを含む灰黄褐色土の単層である。出土遺物：なし。所見：形状から根痕の疑いがある。

## SK992（第33図） I15

位置：①区中央区画北部にあり、周囲の柱穴跡・溝跡の調査後に検出された。重複：調査ではSD30・31、ST04（479）、ST18（476）、SK371・474・477・478・480に切られると捉えたが、重複が僅かで断定できない。また、SK550、ST19（549）との関係は不明である。構造：重複遺構が多く遺存不良だが、残存部より平面形は長軸約1.4m、短軸約1.1mの長方形と推測される。長軸方位はN88°Wで方位に合わせている。壁は若干斜めで、底面はほぼ平坦で検出面からの深さ約10cmと浅い。埋土：暗褐色土の単層である。出土遺物：なし。所見：長軸方位は異なるが、隣接するSK1486と類似する。

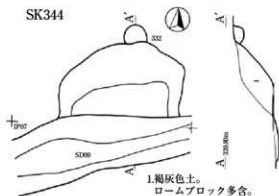
## SK1073（第33図） I15

位置：①区中央区画の南東部に位置する。重複：ST38（667）、ST40（668）、柱穴跡SK669・1042・1045に切られ、ST37（1355）、柱穴跡SK1373・1374は本社調査後に検出したものの前後関係は確認できていない。構造：平面形は南北1.0m、東西0.9mの不整形を呈し、主軸方位はN2°Eである。断面形は逆台形を呈し、検出面から底面までの深さは約12cmと浅い。埋土：ロームブロックを多く含む、埋め戻されたと思われる。出土遺物：なし。所見：柱穴跡が密集するなかに位置するが、類似遺構は周辺で認められず、建物跡に伴う遺構とはいえない。

## SK1098（第34図） I19

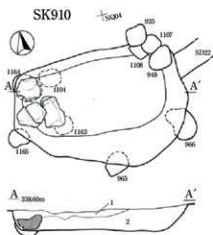
位置：①区中央区画西よりにある。重複：SX04掘り下げ後に存在が判明し、SX04と本社に隣接するSK1172との関係は明確にできなかった。SX04上面検出のST07（418）、ST09（503）、SX04床面検出のST10（618）、ST42（617）、僅かにST19（417）に切られる。構造：平面形は南北約1.6m、東西約1.4mの不整形楕円形を呈する。検出面から底面までの深さは約1m前後と深く、底面は東側に寄って位置し、直径0.4

SK344



1.褐灰色土。  
ロームブロック多含。

SK910



1.黒褐色土。  
小ロームブロック多含。  
2.灰黄褐色土。  
ローム粒少含。

SK878・1152



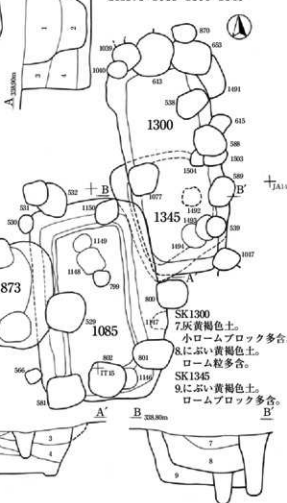
SK878

1.黒褐色土。  
小ロームブロック多含。  
2.黒褐色土。  
ロームブロック多含。

SK1152

3.灰褐色土。小ロームブロック多含。  
4.灰黄褐色土。小ロームブロック多含。  
5.灰黄褐色土。ロームブロック多含。

SK873・1085・1300・1345



SK873

1.灰黄褐色土。  
黒色土小ブロック含。

SK1085

2.にぶい黄褐色土。  
ロームブロック多含。

3.褐灰色土。  
4.黒褐色土。  
小ロームブロック。  
炭化物少含。

5.にぶい黄褐色土。  
ロームブロック多含。

6.灰黄褐色土。  
ロームブロック多含。

SK1300

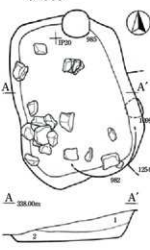
7.灰黄褐色土。  
小ロームブロック多含。

8.にぶい黄褐色土。  
ローム粒多含。

SK1345

9.にぶい黄褐色土。  
ロームブロック多含。

SK983



1.にぶい黄褐色土。  
ローム粒多含。  
2.灰黄褐色土。  
小黒褐色土ブロック少含。

0 (1:40) 1m

第32図 ①区土坑3



～0.5mの円形の平面形である。西・南壁の途中に傾斜が緩やかなテラス状の中段がある。埋土：4層に分層されたが、いずれもロームブロックを含む埋め土と捉えられる。出土遺物：なし。所見：最底部底面の形状から柱穴跡の可能性はあるが、上部が広く大きく開いた形状で柱穴跡と断定できない。井戸跡とも考えたが、調査時に湧水は認められなかった。

## SK1345 (第32図) I20

位置：①区中央区画東よりに位置する。SK1300底で検出し、当初はSK1300の一部と考えたが、土層観察用ベルトで本址を切るST32 (1492) がSK1300に切られると認められ、別土坑と認定した。重複：土坑SK1085・1300、ST08 (589)、ST10 (1077)、ST11 (539)、ST14 (1493)、ST22 (1017)、ST32 (1492)、柱穴跡SK1503・1504・1494に切れ、本址が切る遺構はない。構造：上部をSK1300に掘り壊されているが、残存部で南北約1.2m、東西約1.2mの不整形方形を呈し、検出面から底面までの深さは約52cmを測る。不整形な平面形で方位は計測しにくい、西辺でN20°Wである。埋土：ロームブロックを多く含む埋め土と捉えられる。出土遺物：なし。所見：柱穴跡分布域内にあって建物跡内施設の可能性があるが、伴う可能性がある建物跡は特定できなかった。

## SK1486 (第34図) I15

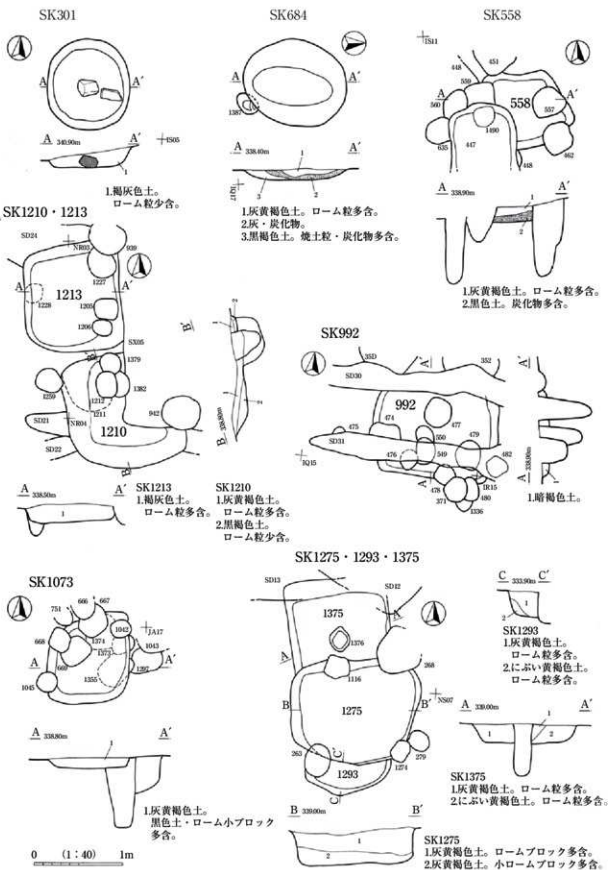
位置：①区中央区画北よりに土坑SK992と並列する。重複：周囲の柱穴跡・溝跡の調査後に本址の存在が判明し、SD30・31、柱穴跡SK481・850に本址が切られると捉えられたが重複が僅かで前後関係は断定できない。ST06 (849)、ST15 (808)、ST16 (848)、ST17 (809)、ST18 (847)、ST19 (846)、ST23 (754)、SK448・753の関係は不明である。構造：長軸方位はN52°Eで、SK448と類似する。遺構重複が著しく遺存不良で、残存部から平面形は長軸約1.6m、短軸約1.4mの隅丸不整形と推測される。壁は若干斜めで、底面はほぼ平坦で検出面からの深さ約10cmと浅い。埋土：褐灰色土の単層である。出土遺物：なし。所見：中型のSK922と隣接し、造り替えの可能性はある。

## SK435 (第34図) I15

位置：①区中央区画北よりに位置する。重複：ST24 (609)、SK783・1489を切り、ST25 (610) との関係は把握できなかった。構造：平面形は長軸約1.2m、短軸約0.9mのやや丸みのある長方形を呈し、長軸方位はN87°Wである。壁は若干斜めで底面の中央がやや窪む。検出面から底面までの深さは約14cmである。埋土：色調から2層に捉えたが、何れもローム粒を含む埋め土と思われる。出土遺物：なし。所見：本址はST04・05内に位置し、長軸方位と棟方向の類似からST04・05の内部施設の可能性がある。

## SK1473 (第34図) I19

位置：①区中央区画西よりにある。重複：中世面で見逃して弥生包含層調査時に検出したため他遺構との重複関係は直接確認できていない。埋土中の礫がない部分に重なるST14 (825)、SK593、ST14と関連するST13 (826) は本址を切る可能性がある。SK499・593・594、SX04との関係は不明である。構造：平面形は長軸1.2m、短軸0.9mの不整形長方形で、長軸はN8°W前後である。断面形は逆台形で検出面から底面までの深さは36cmを測る。埋土：黒色土ブロック等を含む埋め土と捉えられ、埋土中の一定の高さで人頭大の礫が集中的に検出された。礫の性格は不明だが、埋め戻しの途中で入れられた可能性がある。出土遺物：図示していないが、古代須恵器1片203g、弥生土器2片52gある。所見：性格は明らかにしえなかったが、本址と重複するST13 (826)・14 (825) の位置関係は、北方にあるST13 (406)・14 (861) とSK



第33図 ①区土坑4

1172の位置関係と対応し、SK1172と共に本址も掘立柱建物柱穴跡の可能性がある。

SK447 (第30図) I15

位置：①区中央区画北部に位置する。重複：土坑SK448・558を切る。ST21 (560)、ST24 (559)、ST25 (1490)、ST32 (635) との関係は把握できなかった。構造：平面形は長軸約1.4m、短軸約0.8mの長方形で、長軸方位はN2°Wである。壁はほぼ垂直で、検出面から底面までは深さ約12cmを測り、底面は平坦である。埋土：スコリア粒を全体に多く含み、人為的に埋められている可能性がある。出土遺物：図示していないが内耳鍋片2片(17g)ある。所見：位置的にはST15～17の内部施設の可能性がある。

SK681 (第35図) I20

位置：①区中央区画南東部にある。重複：ST28 (680) を切り、ST27 (733)、ST18 (683) との関係は不明である。構造：平面形は長軸約1.0m、短軸約0.5mの楕円形を呈し、長軸方位はN3°Wである。断面形はU字状を呈し、検出面から底面までの深さ約26cmほどである。埋土：ブロック土を多く含む埋め土と捉えられる。出土遺物：なし。所見：SK760の南に近接し、長軸方位から南北棟方向の建物跡の内部施設の可能性がある。本址は位置からST27内部施設の可能性がある。

SK760 (第35図) I20

位置：①区中央区画南東、SK681北側にある。重複：ST15～17の南梁行柱穴跡の可能性のあるSK756・757・790の前後関係は重複部が僅かで不明である。また、東西棟ST13 (761) を切る調査所見だが、本址は南北長軸方位なので南北棟建物跡に関係する遺構とみられ、後出する東西棟を切る所見は見誤りか、柱穴跡の比定に問題があると思われる。構造：平面形は長軸約1.5m、短軸約0.7mの楕円形を呈し、断面形はU字状で検出面から底面までの深さは約30cmである。長軸方位はN12°Eである。埋土：上層はブロックを多く含む土層で埋め戻されている。出土遺物：なし。所見：類似形状のSK681ともに南北棟建物跡の内部施設の可能性がある、本址はST18・19か27に伴う可能性がある。

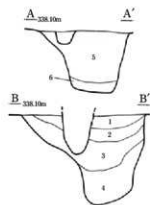
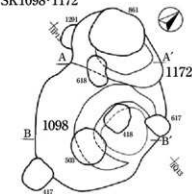
SK1172 (第34図) I19

位置：①区中央区画SX04内にSK1098と隣接して位置する。重複：SX04を切り、ST14 (861)、ST10 (618) に切られるが、本址底面検出のST08 (1291)、土坑SK1098との関係は見逃した。構造：平面形は長軸約1.4m、短軸約0.8mの楕円形を呈する。断面形は西側上部が開いた逆台形で、底面は直径0.5mほどの円形である。検出面から底面までの深さ約70cmを測る。埋土：ロームブロックを含む埋め土と捉えられる。出土遺物：なし。所見：規模から土坑としたが、南にあるSK1473とST13 (826)・14 (825) の位置関係は、本址とST13 (406)・14 (861) の位置関係と似ている。本址はSK1473と共に、掘立柱建物跡の柱穴跡の可能性ある。

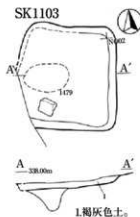
SK1487 (第35図) I15

位置：①区中央区画の北よりにある。大部分はSX03に壊され、底面と東辺のみが僅かに残存する。重複：SX03、ST15 (494)、ST16 (495)、ST17 (496)、ST41 (493)、SK389・608に切られ、ST34 (1288)、ST24 (1289) は本址と同時にSX03床面で確認したため前後関係は不明である。構造：平面形は長軸約1.4m強、短軸約0.8mの長方形と思われ、長軸方位はN7°E方向である。壁は若干斜めで、底面は平坦ながら東壁際が低く、検出面から底面までは約34cmの深さである。埋土：ロームブロックを含む灰黄褐色

SK1098・1172

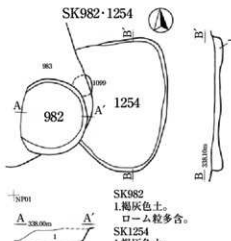


SK1103



1. 褐灰色土。

SK982・1254

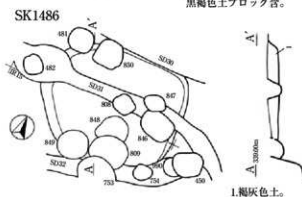


SK982  
1. 褐灰色土。  
ローム粒多含。  
SK1254  
1. 褐灰色土。  
黒褐色土ブロック含。

SK1098

1. 灰黄褐色土。  
ローム粒多含。  
2. 灰黄褐色土。  
小ロームブロック多含。  
3. 褐灰色土。  
ロームブロック含。  
4. 灰黄褐色土。  
小ロームブロック多含。  
SK1172  
5. 灰黄褐色土。  
小ロームブロック多含。  
6. 褐灰色土。  
小ロームブロック多含。

SK1486



1. 褐灰色土。

SK435・783



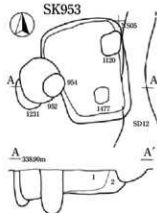
SK435

1. 灰黄褐色土。  
ローム粒多含。  
2. 褐灰色土。  
ローム粒多含。

SK783

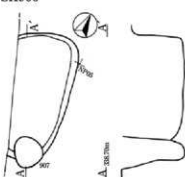
1. 灰黄褐色土。  
小ロームブロック含。

SK953

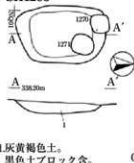


1. にぶい黄褐色土。  
ロームブロック多含。  
2. 灰黄褐色土。  
ロームブロック  
・炭化物少含。

SK906

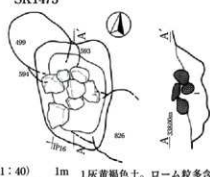


SK1253



1. 灰黄褐色土。  
黒色土ブロック含。

SK1473



1. 灰黄褐色土。ローム粒多含。

第34図 ①区土坑5

土で、埋め戻されたと思われる。出土遺物：なし。所見：形状はSK760・681に類似し、本址も建物跡内施設の可能性があるが、本址に関連しそうな建物跡は認定できなかった。

## SK425 (第35図) I20

位置：①区中央区画北よりにある。重複：柱穴跡SK490、ST31(425)を切る。ST06(731)と本址の間は重複が僅かで不明である。調査時はST31(425)柱穴跡を含めて1遺構と捉えたが、整理時に上部の炭化物を含む部分を別土坑と捉えなおした。遺構番号は変更していない。構造：平面形は東西約0.8m、南北約0.7mの円形で、壁は斜めで底面は平坦。検出面からの深さは約16cmと浅い。直接被熱で赤化した部分は認められなかった。埋土：炭化物を大量に含む。出土遺物：なし。所見：土坑内で火が焚かれたものではないが、炭化物を多く含む特徴から、火処に関連した遺構と思われる。焼土を含む小型土坑SK1013は南約3m、SK534が東に位置する。

## SK466 (第35図) I20

位置：①区中央区画北よりにある。重複：SK468、ST30(1338)を切る。構造：平面形は直径0.5mほどの円形で、断面形は逆台形を呈して検出面から底面まで約14cmと浅い。被熱痕は認められず遺構内で直接火が焚かれたものではない。埋土：焼土粒を少量含む。出土遺物：なし。所見：直接内部で火は焚かれておらず、焼土は近接したSF08から流入したものかもしれない。形状が類似する小型土坑のSK467・472が近接している。造り替えか、類似した性格の遺構と思われる。

## SK467 (第35図) I20

位置：①区中央区画北よりにある。重複：SK468を切り、ST27(1496)に切られる。構造：平面形は直径0.7mほどの不整形円形で、断面形は壁の立ち上がりが緩やかな逆台形を呈する。検出面から底面までの深さは18cmを測る。埋土：スコリア粒を全体的に多く含む。出土遺物：なし。所見：同様の小型円形土坑のSK466・472が近接し、造り替えか、類似した性格の遺構と思われる。

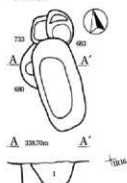
## SK472 (第35図) I20

位置：①区中央区画北よりにある。重複：SF08を切り、ST26(879)との関係は不明である。構造：直径0.5mほどの円形の平面形で、断面はU字状で検出面から底面まで16cmと浅い。埋土：全体的に地山のスコリア粒を多く含む、上層では焼土粒を含む土層が検出された。出土遺物：なし。所見：土坑内部で火が焚かれものではなく、焼土は隣接するSF08に由来すると思われる。形状・規模の類似するSK466・467が近接し、造り替えか、類似した性格の遺構と思われる。

## SK534 (第35図) I20

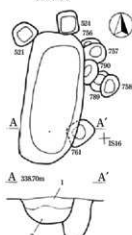
位置：①区中央区画にある。重複：東辺に重複するST13(884)、SK885、ST28(886)との前後関係は把握できなかった。構造：平面形は直径約0.6m～0.8mの円形を呈し、壁は若干斜めに掘り込まれる。底面は平坦で検出面からの深さは約16cmほどである。埋土：埋土中位に焼土層があり、その下はブロック土を含む人為的埋め土とみられる土層がある。出土遺物：なし。所見：火処に関連した施設と思われる。炭化物を多く含むSK425は西に隣接し、焼土粒を含むSK1013は南西約3mにある。掘立柱建物跡の分布範囲内にあって建物跡内の施設の可能性もある。

SK681



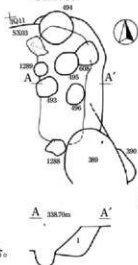
1. 灰黄褐色土。褐灰色土小ブロック多含。

SK760



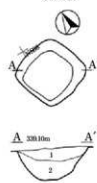
1. 褐灰色土。細かいロームブロック多含。  
2. 褐灰色土。細砂状スコリア少含。

SK1487



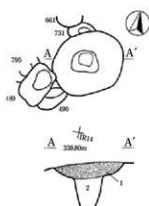
1. 灰黄褐色土。ロームブロック多含。

SK257



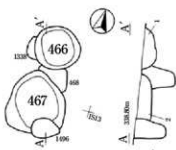
1. 暗褐色土。ローム粒少含。  
2. 灰黄褐色土。ローム粒多含。

SK425



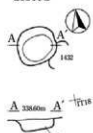
1. 灰黄褐色土。ローム粒・炭化物多含。  
2. 灰黄褐色土。しまり不良。

SK466・467



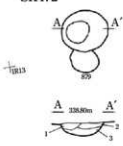
SK466 1. 灰黄褐色土。焼土粒・ローム粒多含。  
SK467 2. 灰黄褐色土。ローム粒多含。

SK692



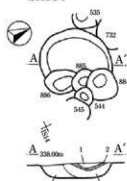
1. 褐灰色土。ローム粒多含。

SK472



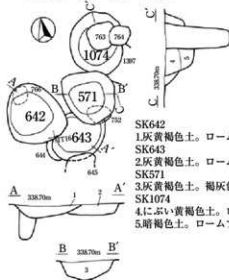
1. 灰黄褐色土。ローム粒少含。  
2. にくい黄褐色土。ローム粒多含。焼土粒多含。  
3. 黒褐色土。ローム粒多含。

SK534



1. 褐灰色土。小ローム粒少含。  
2. 焼土。  
3. 褐灰色土。小ロームブロック少含。  
4. 黒褐色土。小ローム粒少含。

SK571・642・643・1074



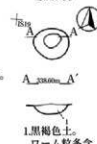
SK642 1. 灰黄褐色土。ローム小ブロック多含。  
SK643 2. 灰黄褐色土。ローム粒多含。  
SK571 3. 灰黄褐色土。褐灰色ブロック多含。  
SK1074 4. にくい黄褐色土。ロームブロック多含。  
5. 暗褐色土。ロームブロック多含。

SK700



1. 褐灰色土。ローム粒多含。

SK769



1. 黒褐色土。ローム粒多含。

0 (1:40) 1m

第35図 ①区土坑6

## SK571 (第35図) I20

位置：①区中央区画の東よりにある。重複：土坑SK643・1074、柱穴跡SK752を切り、柱穴跡SK1397とは直接前後関係は把握できなかった。構造：平面形は直径0.6mほどの不整形円形を呈し、断面形はU字状で検出面から底面までの深さは22cmである。埋土：灰黄褐色粘質土、ロームブロックを含む埋め土と捉えられる。出土遺物：なし。所見：性格不明だが、近接して類似形態のSK642・643・1074があり、ほぼ同じ時期につくられたとみられる。

## SK642 (第35図) I20

位置：①区中央区画東よりにある。重複：SK643、ST20(766)を切る。構造：平面形は直径約0.7mの不整形円形で、断面形はU字状で検出面から底面までの深さ14cmを測る。埋土：細かいロームブロックを含む埋め土である。出土遺物：なし。所見：具体的な性格は明らかにできなかったが、同様の小型円形土坑であるSK571・643・1074が近接し、類似した時期につくられたと思われる。

## SK643 (第35図) I20

位置：①区中央区画東よりにある。重複：SK644・752を切り、土坑SK642・571に切られる。SK645との関係は不明。構造：平面形は直径0.5～0.6mの不整形円形を呈し、断面形は逆台形形で検出面から底面までの深さ12cmを測る。埋土：スコリア粒を含む。出土遺物：なし。所見：性格は明らかにできなかったが、同様の小型円形土坑のSK571・642・1074が近接し、類似した時期に構築されたと思われる。

## SK692 (第35図) I25

位置：①区中央区画の東よりにある。重複：柱穴跡SK1432を切る。構造：平面形は直径約0.4mの円形で、断面形は長方形だが、検出面から底面までの深さ約12cmと浅い。埋土：粗いスコリア粒を含む褐灰色土の単層である。出土遺物：なし。所見：浅いことから土坑としたが、柱穴跡の疑いがある。

## SK700 (第35図) I25

位置：①区中央区画の南東部に単独で位置する。重複：なし。構造：平面形は長軸0.5m、短軸0.4mの楕円形を呈し、検出面から底面までは6cmと浅い。埋土：SK692と同じである。出土遺物：なし。所見：浅いことから土坑とした。性格は不明であるが、形状から柱穴跡の疑いがある。

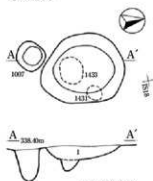
## SK769 (第35図) I25

位置：①区中央区画の南東部に単独で位置する。重複：なし。構造：平面形は長軸約0.6m、短軸約0.5mの不整形円形を呈し、断面形はU字状で検出面から底面までの深さは14cmと浅い。埋土：粗いスコリア粒を多く含む。出土遺物：なし。所見：形状から土坑としたが、柱穴跡の疑いがある。

## SK783 (第34図) I15

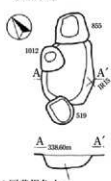
位置：①区中央区画北よりにある。重複：土坑SK448、柱穴跡SK1488・1489を切り、土坑SK435に切られる。構造：南東部をSK435に切られるが、残存部から平面形は長軸約0.8m、短軸約0.6mの楕円形の平面形と推測される。本址の長軸方位は把握しにくいだが、比較的直線的な西辺での方位はN9°Wである。壁は若干斜めで底面は若干窪み、検出面から底面までの深さは約14cmを測る。埋土：灰黄褐色土の単層である。出土遺物：永楽通宝2枚、太平通宝1枚出土した(第68図15～17)。所見：掘立柱建物跡が密集する

SK1008



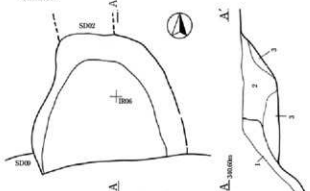
1.灰黄褐色土。  
ローム粒多含。

SK1013



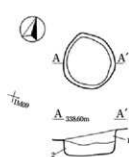
1.灰黄褐色土。  
細かいローム粒多含。  
しまりなく細かい焼土粒多含。

SK302



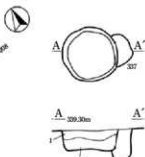
1.褐灰色土。ローム粒含。  
2.褐灰色土。ローム粒多含。  
3.黒褐色土。ローム粒少含。

SK341



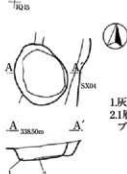
1.褐灰色土。  
2.褐灰色土。  
黒色土ブロック多含。

SK388



1.にぶい黄褐色土。  
2.にぶい黄褐色土。ローム粒含。

SK513



1.灰黄褐色土。ローム粒少含。  
2.1層に黒褐色土。  
ブロック含。

0 (1:40) 1m

第36図 ①区土坑7

範囲内にあり、建物跡に関連する可能性があるが、具体的な性格は明らかにしえなかった。

SK1008 (第36図) I25

位置：①区中央区画南よりにある。重複：ST26 (1433) と柱穴跡SK1431は弥生包含層調査で検出したもので、直接関係は確認できなかった。構造：平面形は長軸0.9m、短軸0.8mの楕円形を呈し、断面形はU字状で検出面から底面までの深さ16cmほどである。埋土：スコリア粒を多く含む。出土遺物：なし。所見：性格不明で、中世遺構とも断じ得なかった。

SK1013 (第36図) I20

位置：①区中央区画中央に位置する。重複：ST23 (1012)、ST31 (855) に切られ、柱穴跡SK519との関係は見逃した。構造：平面形は長軸約0.7m、短軸約0.6mの長楕円形で、長軸方位はN30°Eである。壁は斜めで、底面は平坦で検出面からの深さは14cmと浅い。埋土：細かいスコリア粒と焼土粒を多く含むが、直接被熱で赤化した範囲は認められなかった。出土遺物：なし。所見：焼土粒を多く含むが、直接内部で火が焚かれたと断定できなかった。

SK1074 (第35図) I20

位置：①区中央区画の東よりにある。重複：土坑SK571、柱穴跡SK763・764に切られ、柱穴跡SK1397を



切る。構造：平面形は直径0.6～0.7mの不整形円で、断面形はU字状ながら検出面から底面までの深さは32cmである。埋土：ロームブロックの含まれ方から2層に分けたが、いずれも埋め土とみられる。出土遺物：なし。所見：性格は明らかにできなかったが、同様の小型円形土坑のSK571・642・643と類似した時期に構築されたと思われる。

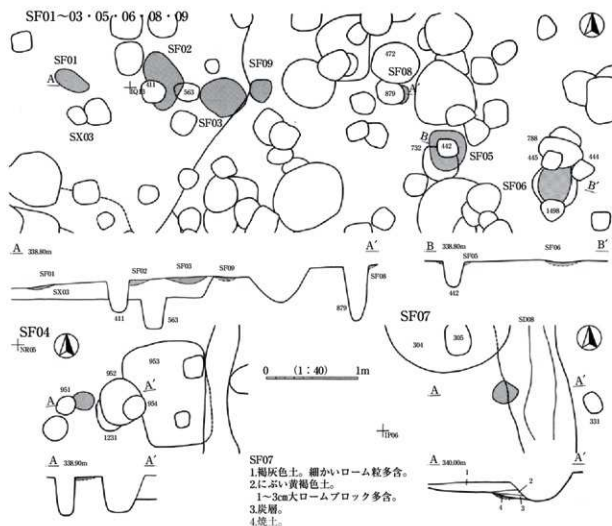
## SK513 (第36図) I20

位置：①区中央区画にある。重複：SX04を切る。構造：平面形は長軸約0.7m、短軸約0.5mの楕円形で、壁は若干斜めに掘り込まれ、底面は平坦で検出面からの深さは約14cmである。埋土：底面上に薄く黒褐色土ブロックを含むが、大部分はスコリア粒を少量含む粘質の強い土である。出土遺物：なし。所見：埋土や形状から近世以後の遺構と推測した。

## ⑤. 焼土跡

## SF01～03、05、06、08、09 (第37図) I14・15・19・20

位置：①区中央区画北寄りにある。SX03上面の東よりにSF01があり、その東約0.6mにSF02、隣接してSF03とSF09、SF09の東約1.6mにSF08、SF08の東にSF05・06が位置する。これらの焼土跡はN80°W方



第37図 焼土跡SF01～09

向に直線的に並び、なかでもSF01～03・08・09は方位に一致するN88°W方向に並ぶ。

重複：SX03→SF01・02・03、SF02→柱穴跡SK411、SF05→ST05(442)、ST06(732)→SF05、SF06→柱穴跡SK445・788、SF08→土坑SK472・ST26(879)。調査所見ではST26(563)→SF02と捉えられたが、重複部が僅かで断定できない。また、SF06と柱穴跡SK788・1498の関係は見逃して不明である。これらの焼土跡は中央区画の掘立柱建物跡の分布範囲内において建物跡内施設の可能性があるが、具体的な建物跡は特定できなかった。

構造：いずれも被熱で土が赤化した範囲と認められ、掘り込み等は伴わない。SF01は平面形が長軸40cm、短軸20cmの楕円形で被熱して赤化した層は薄い。SF02は平面形が長軸62cm、短軸40cmの楕円形である。SF03は平面形が長軸52cm、短軸42cmの楕円形で、SX03埋土上面が被熱して赤化していた。SF05は平面形が長軸を南北とする円形に近い楕円形で、長軸47cm、短軸40cmを測る。SF06は平面形が長軸を南北方向とする楕円形で、残存範囲で長軸42cm以上、短軸34cmを測る。SF08は他遺構に壊され南北22cm、東西16cmしか残存しない。被熱で赤化した層は薄く、本址の焼土粒が隣接するSK472埋土中に散見された。SF09は直径20cmほどの不整形の平面形で、被熱によって赤化した層は薄い。

出土遺物：なし。

所見：上記の焼土跡は掘立柱建物跡分布域と重なり、建物跡内施設の可能性がある。SF08が南北棟方向ST26(879)に切られ、SF05は東西棟方向ST05(442)に切られ、同じST06(732)を切る関係と捉えられた。①区中央区画内では南北棟方向より東西棟方向建物跡が後出する傾向を考え合わせると、南北棟建物跡に伴う焼土跡と東西棟建物跡に伴う焼土跡があり、それぞれ建物跡1棟に伴うと思われる。そのなかで、ほぼ東西方向に焼土跡が並びSF01～03・08・09は南北棟方向の建物跡内に位置し、SF01～03がSX03を切る関係からSX03を切るST15～19、23～25、28?～30?の施設の可能性がある、やや位置がずれるSF05、06は位置的に東西棟建物跡ST07～12内施設の可能性がある。

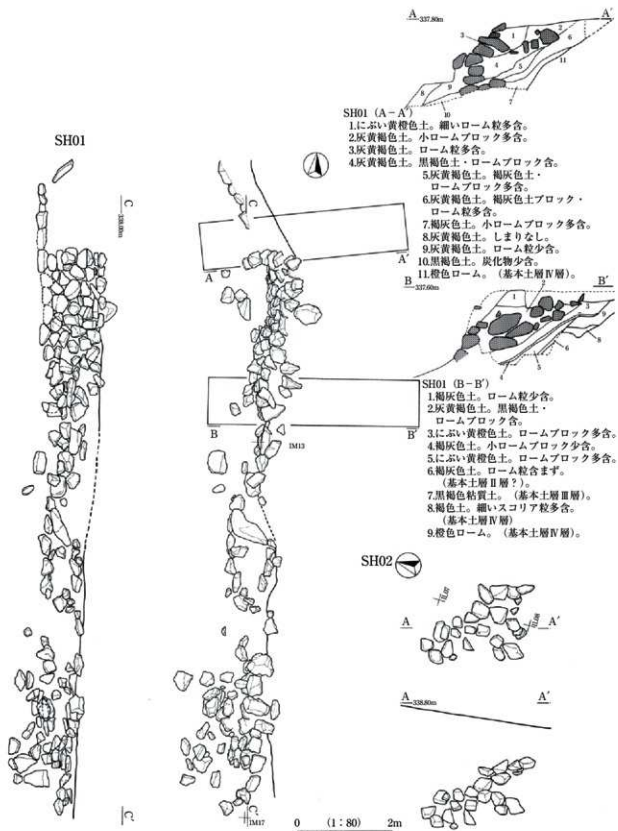
#### ⑥. 石垣・集石遺構

SH01 (第38図 PL10) I13・14・18・19

位置：①区中央の西側平坦地縁から斜面上部にかけて位置する。北端は①区内の谷地形の窪み北岸でⅣ層が露呈するところまで、南は調査区外へ続くが、南の③区では延長先が検出されず①—③区中間で収束するとみられる。重複：なし。構造：確認調査時に4トレンチ内の平坦地縁周辺に石組遺構があると認められていたので、面的調査では重機で斜面の表土を除去し人力で礫を掘りだした。その結果、大部分は崩落しているが、北側に良好な石積が認められたことから石垣と捉えた。確認長は調査区内で長さ約14mである。石垣は北部ほど石積が良好に残存し、南部ほど礫の崩落が著しい。遺存状態の良好な北部で約1.4mの高さに石を5・6段積んでいることが確認できた。その積み方は基礎となる最下段の石を横に並べて設置し、その上に向かって右側から左側へ順に人頭大の石を積み上げている。石垣裏は一抱えもあるような礫を含む礫混じり土で埋めている。出土遺物：検出時に中世陶磁器(第61図24・25、27・28)と近世の伊万里(第61図23)、銅銭(第68図22)が出土し、石垣背後の裏込め土層に入れたトレンチでは珠洲甕の破片が少量出土した(第61図26)。所見：表面ながら近世の陶磁器が採取され、中世の盛土Ⅱの上に位置することから近世以後のものとして捉えられる。

SH02 (第38図 PL10) I08

位置：①区と②区の平坦地中間の斜面北側上部で検出した。SH01北側の斜面上部表土を重機で掘削中に礫が集中して検出され、集石遺構SH02とした。重複：なし。構造：SH01のように石垣状に石を積み上げ



第38図 石垣・集石遺構SH01・02

ておらず、①区平坦地縁から若干下がった斜面に長さ約2.4m、高さ約1.6mの範囲で石が斜面に貼りついたように検出された。出土遺物：隙間から珠洲瓦破片が出土した（第61図30）。所見：集石の上端は斜めに揃えられており、①区と②区をつなぐ斜面の小道の縁に沿って設けられたと考えた。時期は不明だが、位置的に近いSH01と類似時期の所産と思われる。

### （3）南部区画の遺構

南部区画は①・③区平坦地の南部の浅い谷地形南岸付近の緩斜面に立地し、①区と③区に分割調査した。中央区画南辺のSD14・15より南側の空間で、南側にSD01のみあるが、中央区画のような区画全体を囲む溝跡はない。検出された遺構は、削平地がSX06の1基、竪穴建物跡はSX05の1基、掘立柱建物跡はST44～65の22棟、土坑は大型SK979・1218・1268・1269・1272・1306・878・910・983・1152・1217・1219の11基、中型はSK1103・1210・1213・1254・1275・1293・1375・906・953・1253の10基、小型土坑はSK257の1基である。他に近世以後の土坑SK982が1基ある。溝跡はSD01・10～13・23・58の7条である。中央区画と異なって区画全体が溝で囲まれておらず、個別建物跡や削平地に溝跡が伴い、竪穴建物跡と掘立柱建物跡が重複するなど利用状況が変化している。

削平地SX06は建物跡に伴うもので、削平を伴わないがSD10～13・23と同様の建物跡に伴う施設と思われる。竪穴建物跡SX05は南部区画のみで検出され、この区画が他と異なる利用状況があったことを窺わせる。周囲を取り巻くように大型土坑が分布するが、関係の詳細は明らかにしえなかった。また、竪穴建物跡は多くの掘立柱建物跡に切られ、SX05が切る建物跡がないことから、南部区画でも古い遺構と思われる。

掘立柱建物跡は22棟認定した。ST60・61・62は認定に不安を残し、ST55～65は全容が不明であるが、他は梁行2間×桁行4（5）間の側柱建物跡で、ST50のみ桁行5間約10.6mの規模で、他は桁行4間で規模は7.3～9.7mの幅があり、そのなかで8.8～9.2mが主体となる。棟方向は概ね北から5°前後東西に振れた方位か、直交方向で、基本的に方位に合わせて建てられている。ST49がN11°E方向だが、SD12に接して構築されたため基本的には正方位の建物跡とみて良いと思われる。また、建物跡の棟方向はST44～57が南北棟方向、ST58～65が東西棟方向で、北部・中央区画同様の南北、東西棟方向の建物跡の建て替えが捉えられた。南北棟建物跡ST44～54は傾斜上方の東桁行脇に溝跡SD10～13、23を伴っており、東西方向に平行移動するように建て替えられた可能性がある。

土坑は大型と中型が中心で、小型土坑は僅かである。大型土坑の多さは南部区画の特徴で、ほぼSX05を取り巻くように分布するようにもみえる。また、大型土坑は掘立柱建物跡に切られるものが多く、掘立柱建物跡が建てられるようになる以前のものが多と思われる。それ以外に、建物跡の内部施設の可能性のある土坑は、SK910がST58・59、SK1275・1375・1293がST60・61と関連する可能性がある。ただし、ST60・61は南北棟建物跡に後出する東西棟建物跡と捉えたが、SK1275・1375を南北棟建物跡のST55・57が切る関係で、建物跡間の前後関係が矛盾するようと思われる。一方、SK1275・1293・1375と類似した形状のSK1210・1213やSK953がほぼ南北方向に並ぶともみえ、これらと近接時期が同じ規格でつくられた土坑の一つかもしれない。

溝跡は、いずれも個別建物跡に伴う雨水浸入防止用溝跡と捉えられるもので、SD10～13・23がほぼ2.5m前後の間隔で東西に平行して並ぶ。SD11と12・13は南端が西へ折れるL字状で、SD23も明瞭な折れはないが湾曲する場所がほぼSD11～13と一致し、それぞれ建物跡同様に東西に平行移動した造り替えの関係とみられる。このなかでSD11北端はSD14に接続し、接続部分のSD14底が流水で抉れているのでSD11がSD14に接続していたとみられる。また、このSD10～13・23にそれぞれ伴う建物跡としてSD10はST

53・54、SD11はST50～52、SD12・13はST44～47・49、SD23がST48に該当すると捉えた。焼土跡は1基のみあるが、建物跡内施設の可能性があるものの帰属する建物跡は特定できなかった。

#### ①. 溝跡

##### SD01 (第15図) N12

位置：③区の南斜面直下に位置する。重複：なし。構造：東延長先は①区では検出されず、西端は浅くなって平坦地縁で途切れる。N87°W方向に直線的に伸びて確認範囲で長さ約3.2mを測る。断面形は逆台形で東端では深さ30cmを測るが、底面は流水による浸食で凹凸が著しく西端ほど浅く広がる。埋土：上層に黒褐色土、雨水の淘汰作用によるスコリア粒が下層に多く認められる。出土遺物：なし。所見：中世遺構分布域の南限にあたり、南部区画の南限を画する溝跡と思われる。

##### SD10 (第15図) O01

位置：①区南部区画、東側斜面直下の緩斜面に位置する。ST53・54に伴う溝跡と捉えた。重複：SK998を切る。構造：溝跡の南北両端は浅く途切れ、緩やかなカーブを描いてN8°E方向に伸び、確認範囲で長さ約5.4mを測る。幅約0.7mで断面形はU字状で、検出面から底面までの深さは20cmを測る。埋土：灰黄褐色土の単層である。南端の底面に落ち込みが認められたが、トレンチを入れたところ上層にローム層、下層に黒褐色土が入る深い溝状の落ち込みで、範囲が溝跡とずれることから地すべりに伴う亀裂痕と捉えた。出土遺物：なし。所見：ST53・54に伴う雨水浸入防止用の溝跡とみられる。

##### SD11 (第15図) I25、N05・10

位置：①区南部区画にあり、SX05を挟んで南北で検出されたが、位置や走行方向の一致から同一溝跡と捉えた。本址はST50～52に伴う可能性がある。重複：調査ではSX05と重複する部分は検出されていないが、本址に伴うと捉えたST50～52がSX05を切ることから、本址もSX05を切っていた可能性がある。柱穴跡SK1257・1232・1170は底面で検出したため前後関係は直接確認できていない。構造：本址は南北方向の溝跡で南端が短く西へ折れる。南北方向の部分はN9°E方向に12.6mの長さを測り、北端は浅く途切れる。その北延長先のSD14底には本址から流れた雨水で浸食されたと思われる窪みがあり、北端も短く折れてSD14に接続していたと思われる。南端は西へ屈曲して1.5mほどで浅く途切れる。SD14接続部まで含めると全長約13.0mを測る。幅は遺存良好なところで約0.6m、断面形は東側傾斜上方の東岸が急傾斜で西側は緩やかなU字状を呈し、検出面から底面までの深さは20cmを測る。埋土：褐灰色土層を基調とし、南側は若干黄色が強い。出土遺物：図示していないが黒曜石片1点、須恵器1片181g、弥生土器1片3gがある。所見：建物跡ST50～52に伴う雨水浸入防止用の溝跡とみられ、西側に並行するSD12・13、23とは南端の折れる位置が一致し、本址と造り替えの関係と思われる。

##### SD12・13 (第15図) N05・10

位置：①区南部区画に位置し、SD11西側に平行するL字状溝跡をSD12、屈曲部分付近に重複する溝跡をSD13とした。ST44～47、49に伴うと捉えた。重複：SD13→12、土坑SK953→SD12、SD12→柱穴跡SK270。また、調査時にSD12がSX05に切られると捉えたが、整理時の検討でSD12がST44～47、49に伴う可能性が想定され、これらの建物柱穴跡がSX05を切ることから、本址もSX05を切っていたと思われる。また、調査時にSD12・13をSK1218が切ると捉えたが、整理時の検討でSD12・13に伴うと思われる建物跡ST47(904)がSK1218を切ると捉えたことから、SK1218をSD12・13が切っており、調査時の所見が誤っ

ていた可能性がある。底面上で検出したSK1153・1159、ST50 (1476)、ST49 (1201)、ST45 (1154)との前後関係は把握できず、調査時には土坑SK1375をSD12が切ると捉えたが、重複が僅かで断定できない。構造：SD12は北端のSX05重複部からN9°E方向に約5.2m続き、南端から西へ折れてSK1218重複部分まで3.2mを測る。断面形は逆台形で、幅は南辺で約0.6m、検出面から底面までの深さは最大17cmを測る。SD13はSD12屈曲部から1.8m、幅は約0.4mを測る。断面形は逆台形で、検出面から底面までの深さは約6cmほどである。埋土：何れも細かいローム粒、ブロックを含む。SD12にはぶい黄褐色土、SD13は灰黄褐色土層の単層である。出土遺物：なし。所見：SD12の南北部分を共有しながら南端部分をSD13→SD12へ造り替えられた可能性がある。ST44～47、49に伴う雨水浸入防止用の溝跡で、屈曲部の場所が一致するSD11、23は造り替えの関係とみられる。

## SD23 (第15図) N10

位置：①区南部区画のSD12西端付近にあり、ST48が伴う。重複：ST62 (1002)・ST61 (1162)・ST57 (272)、土坑SK1219と重複するが、埋土が僅かにしか残存せず、前後関係は不明である。構造：北端は浅く消え、南端はSK1219に切られるまで約2.2mを検出した。浅く僅かな痕跡しか残存していなかったが、緩やかにカーブする。断面形はU字状を呈し、検出面から底面までの深さは10cmに満たない。埋土：記録もれだが、褐灰色土とみられる。出土遺物：なし。所見：本址が緩やかにカーブする位置がSD12・13屈曲部とはほぼ同じなので、ST48等の建物跡に伴う雨水浸入防止用溝跡と捉えた。

## SD58 (第15・16図) N04

位置：①区南部区画の削平地SX06に伴う。重複：SK1100はST58柱穴跡の可能性があり、調査所見では本址を切る。柱穴跡SK1455は弥生包含層調査中に調査されたもので前後関係は直接確認できていない。ST44 (1101)との関係は不明である。構造：北端は浅く消え、南端は屈曲して調査区西外へ延びる。形状はL字状で、幅約30cm、調査区内で長さ約5.4mを確認した。断面U字状を呈する。埋土：記録もれで仔細不明である。出土遺物：なし。所見：SX06に伴う雨水浸入防止用の溝跡とみられる。

## ②. 削平地

## SX06 (第16図 PL5) N04

遺構の認定：①区南部区画の調査区西壁際にやや不整形な落ち込みが認められ、壁際にトレンチを入れたところ削平地と判明した。大部分は調査区外へ延びて全容は不明である。

位置：①区南部区画の西壁際に位置する。

構造：北西へ傾斜する地形に立地して傾斜上方の東・南辺が深く掘り込まれ、西辺は調査区外へ延び、北辺は傾斜下方にあって浅く緩斜面に続く。調査区内では南北約5.3m、東西は調査区内で1.5mの規模を測る。平面形は長方形を呈すると思われるが、やや南東隅が丸い。長軸方位は東辺でN17°Wである。斜面上方は10cm前後は垂直に削平し、その際に溝跡SD58を配する。底面は平坦だが、あまり堅くはない。埋土は他削平地同様にロームブロック土で埋め戻されていた。

出土遺物：砥石1点(第66図5)がある。

重複関係：SX06→SK1100。ST44 (1101)、ST48 (1029)、土坑SK1097・1103、柱穴跡SK1093～1097・1102・1455・1479との前後関係は直接確認できず不明である。SK1094は底面までの深さ約8cm前後だが、他は底面から柱穴跡底面までの深さ20～30cm前後を測り、本址に伴う可能性がある。

所見：形状からSX01同様の建物跡に伴う削平地と捉えられるが、伴う建物跡の規模や棟方向は明らかに

しえなかった。隣接した中央部の区画西側の傾斜下方にあたる類似場所に削平地SX03・04があるが、SX03・04では確実に伴う建物跡が把握できず同じ性格と言いつれない。

### ③. 竪穴建物跡

SX05 (第39図 PL5) N05

遺構の認定：Ⅳ層ルーム上で方形の落ち込みと認められ、削平地と想定してSX05としたが、トレンチを入れたところ傾斜下方にも立ち上がりが確認され竪穴建物跡と判明した。遺構記号はSXのまま使用した。

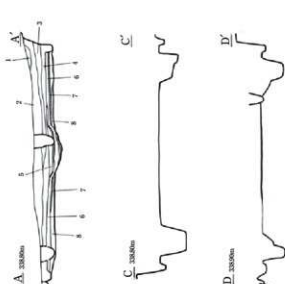
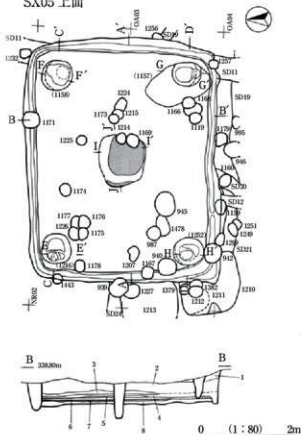
位置：①区南部区画の東よりに位置する。

構造：平面形は東西約5.2m、南北約4.2mの長方形を呈し、長軸方位はN86°Eである。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、東壁は深さ約50cmを測るが、西側は14cmほどしかない。埋土はルームブロックの含まれ方から分層したが、何れもルームブロックを含む埋め土である。床面は平坦でかなり堅く、壁際に壁溝、4隅に柱穴跡、中央に炉跡が検出された。床面は2枚あり、下部床面は直接被熱を受けて赤化した部分が認められ、その上にルームブロック主体の土で埋めて床面としている。東・南壁の一部も赤化しており、火災後に床を貼り直し、炉や柱穴跡も造り替えられた可能性がある。上面床面で重複する柱穴跡が多数検出され床面上で検出された柱穴跡に個別SK番号を付したが、後に四隅にあるSK1157・1158・1216・1252が本址柱穴跡であると判断した。柱穴跡の平面形は直径60cm前後の円形を呈し、底面には段差が認められたことから、建て替えに伴って新田2基の柱穴跡が同じ場所に重複していた可能性がある。柱穴跡内から銅銭が出土したものの、調査では見逃して一緒に掘り下げたため帰属が新田何れなのか不明となった。柱穴跡は床面からの深さは約60cm前後である。炉は中央に位置する浅く窪んだ地床炉で、火床面は2枚あって、床の貼り直しに伴って造り替えられたと思われる。平面形は1辺1m前後の不整形を呈し、中央から南東部が顕著に焼けていた。また、新炉の上面には盛り上がるように灰層が検出された。壁溝は幅約20cm前後で、断面形は長方形を呈して深さ約14cm前後を測る。内部は被熱で赤化しておらず、使用時に開口してなかったか、建て替えに際して掘り直された可能性がある。

出土遺物：大部分の出土土器は本址が掘り込む基本土層Ⅲ層中の弥生土器片で、中世遺物は少ない。近世遺物も出土したが、見逃した木根痕等の混入の疑いがある。中世焼物(第61図19~22)は珠洲壺2片99g、瓦質内耳鍋1片61g、内耳鍋8片61g、近世焼物は伊万里碗1片9g(第61図20)、弥生土器は249片1937g、土製円盤1点8g・土器片紡錘車1点4g(第65図220・221)がある。他に砥石1点(第66図4)、石鉢片1点(第66図8)、打製石斧1点(第67図21)、キセル1点(第68図13)、鉄釘1点(第68図4)、北西隅柱穴跡SK1216から銅銭1点(第68図18)が出土した。調査ミスで出土SK不明となった銅銭2点(第68図20・21)は本址柱穴跡SK1157出土の可能性がある。

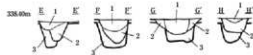
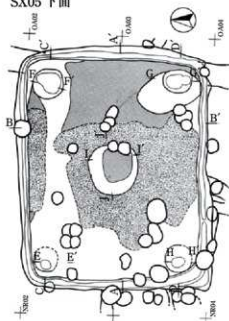
重複関係：SX05→ST47(SK940・1175)、SX05→ST49(945・1174)、SX05→ST50(1169・1214)、SX05→ST52(1215)、SX05→ST53(987・1478)、SX05→ST54(1207)、SX05→柱穴跡SK939・942・1119・1171・1166~1168・1173・1176~1178・1224~1226。SD19→21→SX05、SD24・25→SX05。重複する柱穴跡は埋土中から床面上で検出し、床面下で検出された柱穴跡はない。重複関係を見逃したSK1179はST50柱穴跡の可能性があり、本址を切ると思われる。ST55~57との関係は不明である。壁際で検出したSK1159・1256・1257・1443・1299、土坑SK1210・1213との前後関係は確認できなかった。また、調査時にSD11・12との重複を見逃したが、SX05東西断面にSD11延長先と思われる落ち込みが記録されており(埋土1層)、SD11に伴うと思われるST50・52、SD12に伴うと思われるST47・49柱穴跡が本跡を切ることも、SD11・12が本址を切る可能性が高い。

SX05 上面

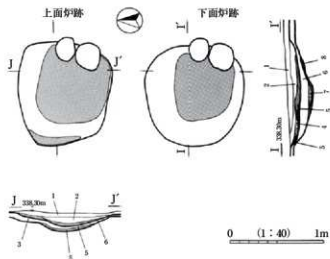


1. 褐灰色土。小ロームブロック多含。
2. 黒褐色土。黒色土ブロック多含。
3. 灰黄褐色土。小ロームブロック多含。
4. 灰黄褐色土。小ロームブロック少含。
5. 灰層。
6. にぶい黄褐色土。ロームブロック多含。
7. 焼土ブロック多含。
8. 褐灰色土。小ローム較多含。

SX05 下面



- 柱穴跡 1. 黒褐色土。ロームブロック多含。  
2. 灰黄褐色土。小ロームブロック少含。  
3. 褐灰色土。ロームブロック多含。



- 柱跡
1. にぶい赤褐色灰層。
  2. 褐灰色灰層。炭化物少含。
  3. 灰主体。焼土小ブロック多含。
  4. 灰褐色土。炭化物多含。
  5. 焼土。
  6. 灰層。
  7. 炭層。
  8. 灰含焼土。

第39図 竪穴建物跡SX05



所見：調査区内で検出された唯一の堅穴建物跡である。すべての掘立柱建物跡に切られ、南部区画で掘立柱建物跡が建て替えられるようになる以前に、他区画と異なる空間利用、あるいは居住者が居たことを窺わせる。また、本址西側に大型土坑が並んでおり、関連する施設と思われる。

#### ④. 掘立柱建物跡

ST44・45 (第40図) I24・25, N04・05

建物跡の認定：整理作業でSD12の西2mに平行して南北方向に直線的に並ぶ柱穴跡が認められ、2m強の間隔の柱穴跡を組み合わせるとST44・45を認定した。

ST44はSK975・967・1228・289・273を東桁行、約5.2m離れて平行するSK1088・1182・1101・909・(調査区外)を西桁行と捉えた。南北梁行の中間柱穴跡は不明で、梁行は特定できなかった。また、本址の中央の棟方向にSK928・1163が位置するが、内部柱穴跡と断定できず側柱建物跡と捉えた。

ST45はSK1392・1391・1259・(不明)・1154を東桁行、東桁行の西約4.9m離れて平行するSK1090・922・299・(調査区外)を西桁行、SK1090・1246・1392を北梁行、南梁行はSK1154・1247・(調査区外)と捉えた。南西部は調査区外へ延びる。東桁行北から4番目の柱穴跡想定位置には柱穴跡が検出されず不明となった。

位置：①区南部区画の西側にあり、東桁行が重なりながらST44・45は南北にずれて重なる。

構造：ST44は確認範囲で梁行推定2間約5.2m、桁行4間約9.7mの規模で、棟方向はN2°Wである。柱間寸法は東桁行北から2.6、2.5、2.4、2.2mである。柱穴跡は直径40cmの円形の平面形で、検出面から底面までの深さ約20～40cmだが、底面標高は南側で338.7～338.6mで、東桁行南側SK273・289は338.5、338.6mと高いが、他は337.5～338.1mを測り、北側ほど低い傾向がある。

ST45は梁行2間約4.9m、桁行4間約9.1mの規模で、棟方向はN1°Wである。柱間寸法は東桁行で北から2.3、2.2m、南側は中間柱穴跡を仮定して2.3～2.4m前後と推測される。北梁行は西から2.7、2.2mである。柱穴跡は直径約30cm前後の不整形を呈し、検出面から底面の深さは南東端SK1154が約80cmと深い、他は約40cm前後である。底面標高は高いSK1259で338.2m、低いSK1090で337.4mと80cmの幅がある。ただし、337.8～338.2m前後が多い。

出土遺物：図示していないが、ST45(1392)から混入と思われる弥生土器片が出土した。ST44なし。

重複関係：ST44(273)→柱穴跡SK274、土坑SK1218→ST45(1247)。SX06とST44(1101)、ST44(1228)と土坑SK1213、ST45(1246)と土坑SK1272、ST45とSD12の関係は見逃した。

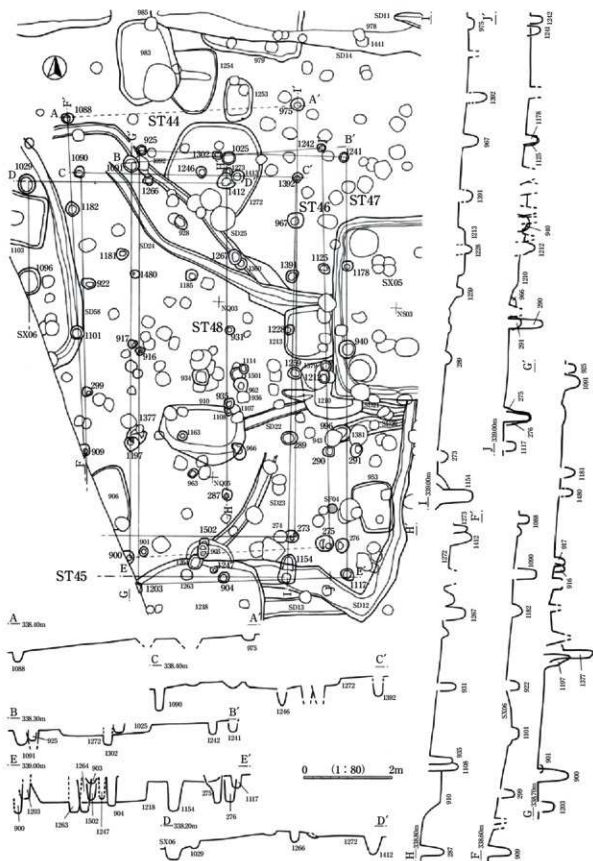
所見：ST44・45は位置的にSD12に伴う建て替えの建物跡とみられる。直接重複していないが、梁行の位置が類似するST45と46・47は近接時期の建て替えの可能性がある。

ST46・47 (第40図) I24・25, N04・05

建物跡の認定：整理作業でST45の東約1mに平行する直線的な柱穴跡列からST46・47を認定した。

ST46はSK1242・1125・1212・290・275を東桁行、平行するSK1091・1181・917・1197・900を西桁行、SK1091・1302・1242を北梁行と捉えた。南梁行はSD12・13屈曲部脇にあるSK275から西、直交方向のSK900を結ぶラインと想定した。南梁行中間の柱穴跡は、その想定位置周辺にあるSK1502はST63、SK1264はST65柱穴跡と捉え、SK903は浅すぎて柱穴跡と断定できず不明となった。また、桁行柱穴跡と直交方向の建物内にあるSK1501・1360は内部柱穴跡と認定しなかった。

ST47はSK1241・1178・940・291(か996)・1117を東桁行、平行するSK925・1480・916・1377・1203を西桁行、桁行北端のSK925・1025・1241を北梁行、SK1117・904・1203を南梁行と捉えた。南西隅のSK



第40図 掘立柱建物跡ST44～48

1203は南に寄りすぎ、調査区外に該当柱穴跡があるかもしれない。また、南梁行は少し東にずれたSK901・276を結ぶラインの可能性もある。なお、桁行北延長先にはSK978・1441、985があるが、離れ過ぎて位置もずれて関連しないと捉えた。また、本址中央にあるSK1114は他に対応柱穴跡がなく、内部柱穴跡と認定しなかった。

位置：①区南部区画の西よりにST45の東に少しずれた場所にST46・47がほぼ重なって位置する。

構造：ST46は確認範囲で梁行2間約4.4m、桁行4間約9.0mで、棟方向はN2°Wの側柱建物跡である。柱間寸法は東桁行の北から約2.7、2.5、1.7、2.2mで、北端の柱間寸法が長く、南から2番目が短い。梁行は北梁行西から約2.0、2.4mを測る。柱穴跡は直径約30cm前後の円形の平面形で、検出面から底面までの深さは南部で約80cm、北部で約30cm前後を測る。底面標高は337.8～338.2mである。

ST47は梁行2間約4.6m、桁行4間約8.9mで、棟方向はN2°Wの側柱建物跡である。柱間寸法は東桁行で北から2.5、1.9、2.3、2.2m、梁行で約2.0・2.6mを測る。柱穴跡は直径20～30cmの円形の平面形で、検出面から底面までの深さは約20～100cmを測る。底面標高はSK1377のみ337.4mと低く、南東隅のSK1117・291が338.5mで高いが、他は337.8～338.2mである。

出土遺物：ST46(917)からカワラケ1片22g(第61図10)、ST47(1241)から図示していないが弥生土器片3片34gが出土した。

重複関係：SX05→ST47(940・1178)、土坑1210→ST46(1212)、土坑SK1218→ST47(904・1203)、土坑SK1272→ST47(1025)、SD25→ST46。ST54(1381)とST47(291)は検出が前後し、ST47(1377)も弥生包含層調査中に検出したためST46(1197)との前後関係は直接確認できなかった。土坑SK1272とST46(1302)の関係は見逃した。

所見：ST46・47は位置関係からSD12に伴うと思われる、梁行の位置が類似するST45と46・47は近接時期の可能性がある。

#### ST48 (第40図) N04・05

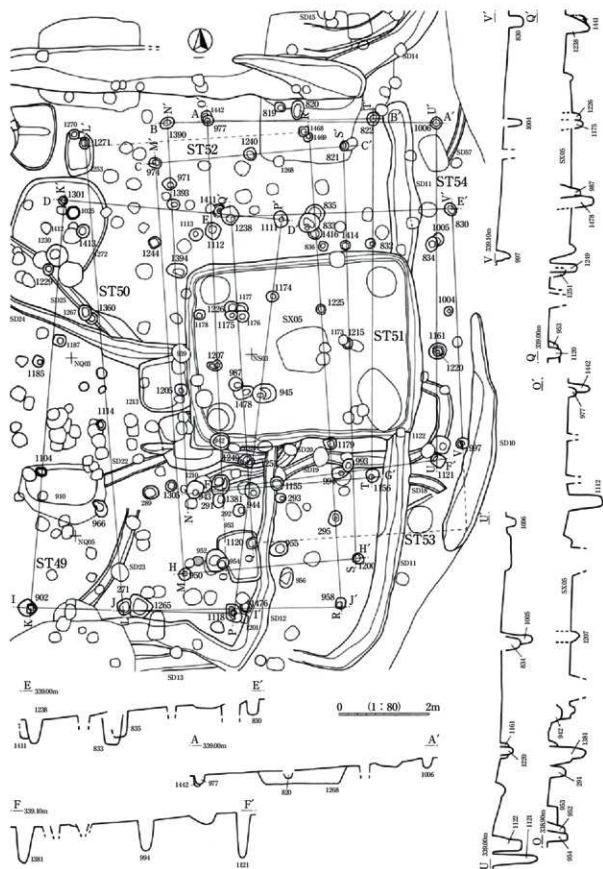
建物跡の認定：整理時にSD23湾曲付近から北に直線的に並ぶSK1412・1267・931・935・287を東桁行、その北端SK1412から西へ直交方向に並ぶSK1266・1029を北梁行と捉えた。西桁行はSK1029からSK1096へ続くラインと思われるが、大部分は調査区外へ延びる。東桁行柱穴跡の一部はST50の西桁行と重なり、本址(287)はST55柱穴跡の可能性も残る。また、本址は規模も柱間寸法も狭く、東桁行は南延長先のSK904まで延びるとも考えたが、本址はSD23に伴う可能性があり、SD23より南にあるSK904はST47柱穴跡と認定した。

位置：①区南部区画の西よりに位置する。

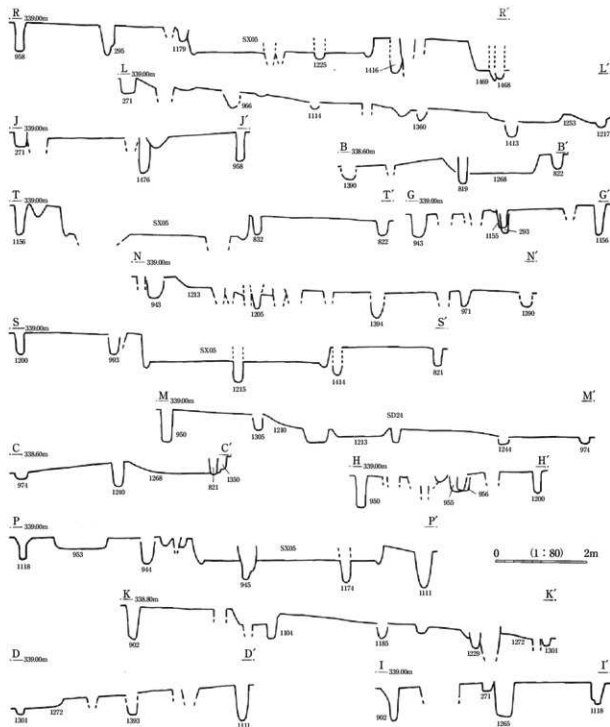
構造：ST48は確認範囲で梁行推定2間約4.2m、桁行4間約7.1mの規模で、棟方向はN2°Wの側柱建物跡である。柱間寸法は東桁行北から約1.7、1.7、1.7、2.1mで、①区南部区画の類似規模の建物跡としては小さい。柱穴跡は直径20cmほどの円形・不整隅丸方形の平面形で、検出面から底面までの深さは傾斜上方の南側で約70cm、北側で40cmで、底面標高は337.4～338.2mで、南側は338.2m前後、北側で337.6m前後と地形傾斜同様に北側ほど低い。

出土遺物：なし。

重複関係：ST50と本址の関係では、ST48(1267)がST50(1360)を切り、ST50(1413)がST48(1412)を切る矛盾した調査所見だったが、何れも重複部分が僅かで新旧関係は断定できない。また、土坑SK910→ST48(935)との調査所見だが、重複が僅かで断定できない。ST48と土坑SK1272・SX06との関係は直接確認できず不明である。位置的にSD23は本址に伴う可能性がある。



第41圖 掘立柱建物跡ST49～54



第42図 掘立柱建物跡ST49～54 エレベーション

所見：①区南部区画のSD23に伴う建物跡とみられるが、他に同様の建物跡は認定できなかった。

ST49 (第41・42図)

N04・05

建物跡の認定：整理時にSD12東脇に直線的に並ぶSK1111・1174・945・944・1118を東桁行、その北端SK1111から西へ直交方向のSK1111・1393・1301を北梁行、東桁行柱穴跡と平行して直線的に並ぶSK1301・1229・1185・1104・902を西桁行、桁行南端のSK1118・1265・902を南梁行と捉えた。このなかでSK1174はSX05床面上、SK1301・1393は弥生包含層調査中で検出した。西桁行北端から2番目はSK1230、3番目

にSK1187が該当する可能性もあるが、桁行北から1・2間目が短く、3番目が長すぎるためSK1229と1185を充てた。また、SK289は南梁行から北側1間目の中央に位置しており、内部柱穴跡とも思われたが、他に関連する柱穴跡もなく、本址に関連するものとは認定しなかった。

位置：①区南部区画のST44～47東側に一部重複しながら位置する。

構造：本址は梁行2間4.8m、桁行4間約8.8mの規模で、棟方向はN8°Eの側柱建物跡である。柱間寸法は東桁行で北から1.7、2.2、2.2、1.7m、北梁行で西から2.4、2.4mを測り、比較的等間隔である。柱穴跡は円形・不整隅丸方形の平面形で、傾斜上方の東・南側は直径40～50cmで、深さは70cm前後、西・北部は直径20cm前後で、深さ40cm前後である。相対的に傾斜上方の東・南が大きく深く、柱穴跡の底面標高は西桁行と東桁行北側で337.7～337.0m、東桁行南部SK1118・944で338.2、338.3mを測る。

出土遺物：なし。

重複関係：SX05→ST49 (945・1174)、SD24・SK1272→ST49 (1229)。ST49 (1265)とST50 (271)、ST49 (1104)と土坑SK910、ST49 (1301)とSK1272、ST49 (1201)とSD12の関係は直接把握できなかった。

所見：本址はSD12に伴う可能性がある。同様にSD12に伴うST44～47とは棟方向が若干異なるが、本址との前後関係は直接把握できなかった。

#### ST50・51・52 (第41・42図) I25、N05・10

建物跡の認定：整理時にSD11脇に直線的で等間隔に並ぶ柱穴跡の配列から建物跡3棟を認定した。

ST50はSD11脇に並ぶSK (1468か1469)・1416・1225・1179・295・958を東桁行、それと約5m西に平行するSK1271・1413・1360・1114・966・271を西桁行、その両端を結んだSK958・1476・271を南梁行、SK (1468か1469)と1271を結ぶラインを北梁行と捉えた。北梁行中間柱穴跡は不明で、東桁行の北から4番目の柱穴跡はSK1179ではなく、SX05埋土中にあった柱穴跡を見逃した可能性がある。西桁行SK966は底面に段差があり、ST56の柱穴跡と2基重複した可能性がある。また、本址内の中央棟方向にSK1113・1178・942が直線的に並び、本址の内部柱穴跡の可能性はあるが、建て替えの関係と捉えたST51・52には内部柱穴跡が認められず、内部柱穴跡と認定しなかった。なお、ST51・52は桁行4間なので、本址が桁行5間となることは不安がある。

ST51はSD11脇に直線的に並ぶ柱穴跡のSK822・(不明)・832・(不明)・1156を東桁行、その北端SK822から西へ直交方向で約4.6m離れて平行するSK1390・971・1394・1205・943を西桁行、桁行北端を結ぶSK1390・819・822を北梁行と捉えた。東の桁行北から2番目の柱穴跡や、SX05と東桁行重複部分の柱穴跡は見逃した可能性がある。南梁行はSK943・293か1155・1156を結ぶラインと考えたが、南梁行がSD11の区画範囲より短く、もう1間南へ延びる可能性が残るが、該当する柱穴跡はない。本址の平面形は不整形方形で認定に不安がある。

ST52はST51から西側60cmに直線的に並ぶ柱穴跡SK821・1414・1215・993・1200を東桁行、それと並行するSK974・1244・(不明)・1305・950を西桁行と捉えた。西桁行の北から3番目の柱穴跡が不明だが、やや東に位置するSK939か、検出できなかった可能性がある。南梁行はSK950・955・1200、北梁行はSK974・1240・821と捉えた。南梁行のSK955はかなり梁行ラインから内側に入るが、隣接するSK956をST57柱穴跡と捉えた関係からSK955とした。

位置：①区南部区画の東側、SD11脇にST50・51・52が少しずつ西にずれながら重なって位置する。

構造：ST50は梁行2間約4.9～5.2m、桁行5間約10.6mの規模で、棟方向はN4°Wの側柱建物跡である。柱間寸法は西桁行北から2.0、2.0、2.4、1.8、2.2mで、南梁行は西から2.7、2.2mである。柱穴跡は直径30cm前後の円形の平面形で、検出面から底面までの深さは東側で70cm前後、西側では30～40cm

ほどである。底面標高は傾斜上方にある西桁行南端SK271が最も高く338.6m、傾斜下方の西桁行北部で337.6mと1m近い差があるが、332.8～338.2m前後が多い。

ST51は南梁行の位置の認定に不安があるが、上記の柱穴跡から梁行2間で南梁行約4.0m、北梁行約4.6m、桁行は4間で東桁行約7.9m、西桁行8.2mの側柱建物跡である。平面形は不整形長方形で、西桁行でN2°W方向である。柱間寸法は西桁行で北から1.4、1.9、2.7、2.3mと最大1.3mの差がある。柱穴跡の平面形は直径30～40cmの円形・隅丸方形で検出面から底面までの深さは傾斜上方の東・南側で50～70cmを測り、低い西・北側で30～40cmで、底面標高は西桁行のSK1394が337.8mと低いが、他は338.0～338.2m前後である。

ST52は梁行2間約4.2m、桁行4間約9.2mの規模で、棟方向はN2°Wの側柱建物跡である。柱間寸法は東桁行北から2.2、2.2、2.7、2.1m、北梁行で西から2.1、2.1mである。桁行中央の柱間寸法が長い、他はほぼ近似する。柱穴跡の平面形は直径20～30cmの円形で、検出面から底面までの深さは傾斜上方の東・南側で約50～60cm、低い北・西側で約20cm前後である。底面標高は東桁行SK1215・1414がそれぞれ337.8m、338.0mと低いが、他の柱穴跡は338.2～338.4m前後を測る。

出土遺物：図示していないがST52（1240）から弥生土器片23片205g、ST51（1394）から銭貨（第68図19）が出土した。

重複関係：SX05→ST50・52、土坑SK1268→ST51（819）、土坑SK1213→ST51（1205）。土坑SK1268→ST52（821）、SD19→ST52。柱穴跡の認定に不安を残すが、ST54?（994）→ST52（993）。ST49（1265）とST50（271）は重複が僅かで前後関係は把握できず、ST50（1271）と土坑SK1253、ST50（1413）と土坑SK1272、ST50（966）と土坑SK910、ST50（1476）とSD12との前後関係は見逃した。また、ST48（1267）がST50（1360）を切り、ST50（1413）がST48（1412）を切る調査所見であったが、重複部分が僅かで新旧関係は断定できない。

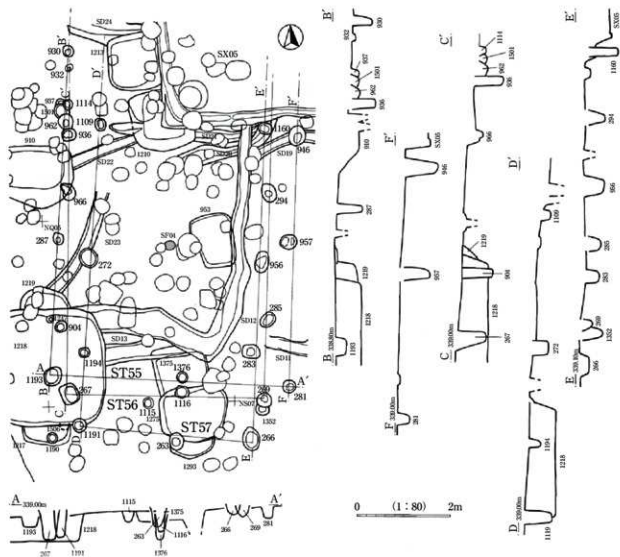
所見：いずれも建物跡認定に不安はあるが、SD11に伴う建物跡と捉えた。直接重複はないが、ST50・51・52の順で西側に離れ、ST51と52は桁行柱穴跡が近いことからより関連が高い建て替えと推測すると、ST51→52→50かその逆順とみられる。ただし、ST50はST51・52に比べてやや大きく桁行5間と捉えた点で建て替えと言い切れるか問題を残す。

#### ST53・54（第41・42図） I25、N05、O01

建物跡の認定：整理作業でSD10脇に散在する柱穴跡の配列から南北方向のST53・54の2棟を認定した。東側のやや傾斜する場所において、柱穴跡の欠落や通日も悪いなど認定に不安を残す。

ST53はSD10脇に並ぶSK830・1004・997を東桁行、それと約5m離れて2基ずつ柱穴跡が重なりながら直線的に並ぶSK（1238か1411）・（1226か1175）・（987か1478）・（1249か1251）・1120を西桁行、桁行北端を結ぶSK830・（833または835）・（1238か1411）を北梁行と捉えた。東桁行柱穴跡は1基ずつだが、西桁行では柱穴跡が隣接、重複するものが多く、東西桁行柱穴跡は桁行と直交方向の位置にない。遺存状態が悪い東桁行柱穴跡の認定に不安がある。北梁行ではSK833または835を中間柱穴跡と推測したが、何れも西に寄って認定に不安がある。南東部柱穴跡は調査で見逃し、南梁行は確定できていない。なお、本社の中央棟方向に並ぶ柱穴跡は内部柱穴跡ではなくST50の東桁行柱穴跡と認定した。

ST54はST53東桁行に平行するSK1006・（834か1005）・1220（1161）・（1121か1122）を東桁行、約5m西に平行するSK（977か1442）・（1112か1113）・1207・（1381か291）を西桁行、桁行北端のSK（977か1442）・820・1006を北梁行と捉えた。南梁行はSK（1381か291）・994・（1121か1122）としたが、周囲に桁行3間と認定した建物跡はなく、西桁行南延長先に位置するSK954まで延びて桁行4間の可能性が残



第43図 掘立柱建物跡ST55～57

る。

位置：①区南部区画東よりにあり、SD10西脇にST54がST53の西へ60cmほど平行移動して重なる。

構造：ST53は確認範囲で梁行2間約5.0m、桁行4間約7.3mで、棟方向はN2°Wの掘立柱建物跡である。柱間寸法は西桁行で北から2.2、1.8、1.5、1.9mと狭く、東桁行は2.2、3.0mと一定していない。柱穴跡は直径20～30cm前後の円形の平面形で、検出面から底面の深さは北辺で80cm前後ながら、他は40cm前後だが、底面標高は東桁行で338.5～338.8m、西桁行は337.8～338.5mで傾斜上方ほど高い。

ST54は確認範囲で梁行2間約5.0m、桁行はSK977～1381まで3間約8.1m、SK954までだと4間約9.8mの掘立柱建物跡である。棟方向はN1°Wである。柱間寸法は西桁行北から2.5、3.0、2.6m、SK954まで1.8m、北梁行で西から2.0、3.0mである。柱穴跡は長軸約30～40cmの円形・楕円形の平面形で、検出面から底面までの深さは南部SK1121で90cm、北梁行周辺では20cmである。底面標高はSK1121が337.6mと低く、SK1006・1220が338.6m前後と高いが、他は338.0～338.4m前後である。

出土遺物：図示していないが、ST53（1238）から弥生土器片が僅かに出土している。

重複関係：SX05→ST53・54、SD21→ST53（SK1249・1251）、土坑SK953→ST53（1120）。ST54？（994）→ST52（993）、土坑SK1268→ST54（820）。土坑953→ST53？（954）、ST54（1381）を後に検出したた



め、ST47(291)の関係は直接把握していない。

所見：建物跡の認定に不安を残すが、SD10に伴う建物跡と考えられる。ST54南梁行の位置が断定できていないが、南梁行の中間柱穴跡がSK994とするとST52を切り、SD11に伴う建物跡ST50～52より古い建物跡の可能性はある。

ST55・56・57 (第43図) N005・10

建物跡の認定：整理時にSD10～13・23の区画南側に分布する柱穴跡から、類似位置に重なるST55～57の3棟を捉えた。いずれもSX05と重複する付近以北は不明で、規模は確定できていない。

ST55はSK946・957・281を東桁行、SK281・1376・1193を南梁行、SK1193・287・936(か962)・930を西桁行と捉えた。このうち、SK287はST48柱穴跡の可能性もあり、帰属関係は断定できなかった。また、西桁行北端をSK930と捉えたが、柱間寸法が短く本址柱穴跡との認定に不安はある。

ST56はST55東桁行に平行するSK294・285・269を東桁行、SK269から西直交方向のSK(1115か1116)・267を南梁行と捉えた。西桁行はSK267から北、直交方向のSK(1114か932)を結ぶラインと想定したが、南から2番目の柱穴跡想定位置のSK904はST47柱穴跡、3番目柱穴跡想定位置のSK966はST50の柱穴跡と捉えたため、本址柱穴跡は不明となった。ただし、SK966は底面に段差があって2基重複していた可能性がある。

ST57はSK1160・956・283・266を東桁行、SK266・263・1191を南梁行、SK1191・1194・272・1109を西桁行と捉えた。北側の柱穴跡が検出されておらず、建物跡規模は不明である。梁行が短いため、SK(1190か1506)を南梁行西端としてSK(1506か1190)・(904か1247)・966・932を西桁行とする可能性も考えたが、ST56柱穴跡と重複することになることから、上記の柱穴跡の構成とした。

位置：①区南部区画のSX05の南側にあり、ST55西約60cmにST56、ST56と桁行が重なりながら梁行が80cm南へずれてST57が位置する。

構造：ST55はSK930以北の範囲が不明で、確認範囲で梁行2間約5.1m、桁行3間以上約7.0m以上の側柱建物跡である。棟方向はN4°Eである。柱間寸法は西桁行北からSK930～936で1.8(SK930～SK962で1.6)、SK936～287で2.3(SK962～287で2.5)、SK287～1193で2.9m、南梁行は西から2.8、2.3mである。柱穴跡は直径20～40cmの円形・隅丸方形の平面形で、検出面から底面までの深さはSK281とSK1193が20cm強、底面標高は338.5と338.7mと高いが、他は40～60cmで底面標高は337.9～338.2mである。

ST56はSK(1114か932)以北が不明で、確認範囲で梁行2間約4.2m、桁行は3間以上で北端がSK1114までだと約6.3m以上、SK932まで約7.0m以上の規模で、棟方向はN4°Eの側柱建物跡である。柱間寸法は東桁行で北側から2.7、1.7m、南梁行で西から2.4、1.8mである。柱穴跡はSK267が1辺約40cmの隅丸方形で、それ以外は直径30cm前後の円形・隅丸方形を呈し、検出面から底面までの深さは約40～70cmである。底面標高は南西隅のSK267が338.2mと低いが、他は338.4～338.5mである。

ST57はSK1109以北が不明で、確認範囲で梁行2間約3.9m、桁行3間以上6.6m以上の規模で、棟方向はN5°Eの側柱建物跡である。柱間寸法は南梁行で西から2.2、1.7m、西桁行で北から2.9、2.0、1.7mである。柱穴跡は直径30cm前後の円形・隅丸方形の平面形で、検出面から底面までの深さ約40～60cm、底面標高は南東隅SK266が338.8mと高く、SK1160が338.1mと深い。他は338.4～338.6m前後である。

出土遺物：なし。

重複関係：SX05とST55～57の関係は不明である。土坑SK1375→ST55(1376)、土坑SK1218→ST55(1193)・ST56(267)・ST57(1191・1194)、土坑SK1293→ST57(263)、SD20→ST55・57。SD23とST57(272)の関係は不明である。SK1116をST56柱穴跡とすると土坑SK1275→ST56(1116)。

所見：SD10～13・23は南端がL字状に類似場所で屈曲することから、関連した造り変えの遺構と考えられ、その区画から外れるST55～57は、SD10～13・23と関連すると捉えたST44～54と異なる時期の所産とみられる。遺構間の重複関係でみると、ST57が切るSK1293、ST55が切るSK1375は、東西棟建物跡ST60・61内部施設の可能性があります、この関係からST55～57は東西棟建物跡ST60・61より後出する可能性が出てくる。しかし、①区では東西棟建物跡は南北棟建物跡に後出すると考えられることからSK1375・1275・1293とST60・61は関係ない可能性もある。また、ST60・61の建物跡構造の認定に不安もあり、ST55～57はST44～54の前後に位置するとしかわからない。

## ST58・59 (第44図) N04・05・09・10

建物跡の認定：整理時にST63～65と重複する位置に、2基ずつ並ぶ柱穴跡が長方形に配置すると認められ、建て替えの関係と想定されるST58・59を認定した。何れも南東隅のSD13と重複する部分の柱穴跡が検出されず、西部は調査区外へ延びて部分的な把握に留まる。

ST58はSK(1100)・960・1110を北桁行、SK1110・288・(不明)・1208を南桁行と捉えた。南東隅の柱穴跡が想定されるSD13付近に柱穴跡が検出されていないが、北桁行のSK960・918から北桁行と直交する位置にあるSK1208・1209はST58・59の南桁行柱穴跡と捉え、南東隅柱穴跡は見逃した可能性があると捉えた。また、SK1100は北桁行の西延長上の調査区境にあり、他柱穴跡より突出して深く、調査区外に本址柱穴跡が存在する可能性も残るため、本址柱穴跡と断定できなかった。

ST59はST58の柱穴跡南隣りのSK911・918・1124を北桁行、SK1124・1001・(不明)を東梁行、SK(不明)・1209を南桁行と捉えた。本跡も南東隅柱穴跡を見逃した可能性がある。

位置：①区南部区画の西側に位置し、ST58・59が重なって位置する。

構造：ST58は南西部が調査区外へ延び、確認範囲で梁行2間推定約5.4m、桁行2間以上約5.1m以上の側柱建物跡である。建物跡の方位は北桁行でN89°Eである。柱間寸法は東梁行で2.5m、推定2.9m、北桁行は西から2.6、2.5mである。柱穴跡は直径30cm前後の円形の平面形で検出面から底面までの深さは約40～60cm、底面標高は337.8～338.2mである。ちなみにSK1100底面標高は337.4mを測る。

ST59は南西部が調査区外へ延び、確認範囲で梁行2間推定約5.4m、桁行2間以上約4.6m以上の側柱建物跡である。建物跡の方向は北桁行でN86°Eである。柱間寸法は梁行が2.6と推定2.8m、桁行は2.5、2.1mを測る。柱穴跡は直径30cm前後の円形の平面形で、検出面から底面までの深さは北桁行・東梁行の柱穴跡で約40～60cm、南桁行SK1209で約20cm、底面標高は337.8～338.2mとST58に類似する。

出土遺物：なし。

重複関係：ST59(1124)→ST58(1110)、SK1218→ST58・59。なお、SK1100はSX06を切る。

所見：ST58・59は東西棟方向の建物跡で、重複して位置することから、ST59→58に建て替えられたと思われる。また、梁行が平行移動した位置関係のST63～65とも関連する可能性がある。

## ST60・61 (第44図) N09・10

建物跡の認定：整理時にSD12・13・23の南側に2～3基ずつ隣接する柱穴跡が長方形に配置すると見受けられ建て替えの関係と推測されるST60・61を認定した。桁行柱間寸法が長く、各柱穴跡の底面標高に幅があって認定に不安はある。当初は東梁行北延長先にあるSK1299・1248、その西側SK948・1107・1108と組み合わせる南北棟方向の建物跡と考えた。また、SK1375・1275・1293は位置的にST60・61内部施設の可能性があります、これらの土坑が南北棟建物跡のST55・57に切られるが、①区では東西棟方向が南北棟方向の建物跡より後出すると考えられるのでST60・61も南北棟建物跡となるように思われた。しか



位置：①区南部区画の西寄りにST60と61は若干棟方向がずれて重なり、西側は調査区外へ延びる。

構造：ST60は確認範囲で梁行2間約4.5m、桁行2間以上約5.8m以上の規模の側柱建物跡である。棟方向はN87°Eで、柱間寸法は梁行が約2.3、2.2m、北桁行は東から3.5、2.3mとやや長い。柱穴跡は直径20～40cmの円形の平面形で、検出面から底面までの深さは約20～80cmで、底面標高もSK258が338.8mと高く、SK907が337.8m、SK1477が338.1mと低いが、338.5m前後が多い。

ST61は確認範囲で梁行2間約4.0m、桁行2間以上5.7m以上の側柱建物跡で、棟方向はN86°Wである。柱間寸法は東梁行で2.0、2.0m、北桁行で東から3.2、2.5mとやや長い。柱穴跡は直径20～40cmの円形の平面形で、検出面から底面までの深さは20～80cmで、底面標高は低いSK907で337.8m、高いSK259で338.7mを測るが、338.3～338.5m前後が多い。

出土遺物：ST60・61（907）から珠洲壺片1片59g（第61図8）、図示していないが弥生土器片3片97gが出土している。

重複関係：土坑SK906→ST60・61（907）。土坑SK953とST60（1477）、ST61（1198）とST62?（1476）、ST61とSD23との関係は見逃した。なお、土坑SK1275・1293・1375はST60・61南東隅に位置しているためST60・61の内部施設の可能性もあるが、南北棟方向のST56・57（1116・263）に切れ、①区では東西棟建物跡より南北棟建物跡が古いと考えられるので断定できない。

所見：東西棟方向の建物跡で、同棟方向で近接するST57・58、ST62～65と関連すると思われる。

#### ST62（第44図） N09・10

建物跡の認定：整理時にST60・61北に並ぶSK1196・1002・292を北桁行、SK292・1201（1476）・1274を東梁行、SK1274・260を南桁行と捉えた。東梁行中間柱穴跡は柱間寸法からSK1201と考えたが、SK1476も可能性がある。また、本址SK1274脇のSK279、SK260脇にあるSK1192はいずれも浅く、柱穴跡ではなく本址と関連はないと考えた。西側は調査区外へ延びて全体規模は不明で、北桁行西壁際のSK909は本址柱穴跡とも考えたが、桁行ラインから若干ずれてST44の柱穴跡とした。

位置：①区南部にST60・61の約1.4m北ある。

構造：確認範囲で梁行2間約5.2m、桁行2間以上約4.5m以上の規模で、棟方向はN84°Eである。柱間寸法は北桁行東側から2.5、2.0mで、梁行は中間柱穴跡をSK1201なら2.5、2.7m、SK1476とすれば2.2、3.1mである。柱穴跡は直径30cm前後の円形の平面形が多く、検出面から底面までの深さは約30～60cmを測る。底面標高はSK292・1274が338.5、338.4mだが、他は338.0～338.2m前後である。

出土遺物：なし。

重複関係：ST61（1198）とST62?（1476）、SD23や土坑SK1275との関係は把握できなかった。

所見：①区南部西寄りにある東西棟方向の建物跡の一つである。

#### ST63・64・65（第44図） N04・09

建物跡の認定：①区南部区画の西寄りに3基ずつ近接する柱穴跡がL字状に並ぶと認められ、3回建て替えられた建物跡と推測してST63～65を認定した。建て替えは北桁行柱穴跡を平行移動したものと捉え、東梁行はその北桁行北東隅柱穴跡から直交方向の柱穴跡の組み合わせで捉えた。

ST63はSK913・934を北桁行、SK934・964・1502を東梁行と捉えた。ST64はSK914・933を北桁行、SK933・965・1264を東梁行と捉えた。ST65はSK915・1105を北桁行、SK1105・963・1263を東梁行と捉えた。いずれも西側は調査区外へ延びて全体の規模は不明である。

位置：①区南部区画の西寄りに3棟がほぼ重なって位置する。

**構造**：ST63は確認範囲で梁行2間約4.2m、桁行2間以上約3.2m以上の規模で、棟方向はN86°Eの側柱建物跡である。柱間寸法は桁行で1.5m、梁行で2.1mである。柱穴跡は直径20～40cmの円形の平面形で検出面から底面までの深さは約20～50cmだが、底面標高は337.9～338.1mである。

ST64は確認範囲で梁行2間約4.6m、桁行2間以上約3.2m以上の規模で、棟方向はN89°Eの側柱建物跡である。柱間寸法は梁行2.3、2.3m、北桁行は1.6mで、柱穴跡は直径20～30cmの円形の平面形で、検出面から底面までの深さは30～80cmで傾斜上方の南側は深い。底面標高はSK965が338.4mだが、他は337.9～338.0m前後である。

ST65は確認範囲で梁行2間約5.0m、桁行2間以上約3.5m以上で、棟方向はN90°Eである。柱間寸法は梁行で2.7、2.3m、桁行は約1.7mである。柱穴跡は直径20～30cmの円形平面形で、検出面から底面までの深さは30～80cmで、底面標高はSK963のみ338.5mだが、他は338.1m前後と類似する。

**出土遺物**：なし。

**重複関係**：3棟の建物跡はST64(914, 933)→ST63(913, 934)、ST64(933)→ST65(1105)の関係からST64→63、ST64→65の順と捉えられた。土坑SK1218→ST64(1264)、SK1219→ST63(1502) ST64(1264)、土坑SK1218とST65(1263)の関係は見逃したが、建て替えの関係とみられるST64(1264)と同様にST65が切るとみられる。SK910とST65の関係は見逃した。

**所見**：東西棟方向の建物跡の一つで、近接する東西棟の建物跡とは建て替えの関係で、なかでもST63～65が比較的近接した時期の可能性はある。

## ⑤. 土坑

SK1218 (第30図 PL7) N09・10

**位置**：①区南部区画の南端に位置する。重複：ST45(1247)、ST47(904・1203)、ST55(1193)、ST56(267)、ST57(1191・1194)、ST58(1208)、ST59(1209)、ST64(1264)、SK1202～1204に切られる。本址がSK1217・1219を切る。底面検出のST65(1263)、SK1262、壁にかかるSK1506との前後関係は見落とした。ST65(1263)は、建て替えの関係のST64がSK1218を切ることから切る可能性が高い。また、調査時にSD12・13を本址が切ると捉えたが、SD12・13に伴う可能性があるST47に本址は切られるので本址が切られていた可能性がある。**構造**：平面形はやや不整形長方形で、長軸方位はN88°W、西側は調査区外へ延びて確認範囲で長軸約2.9m以上、短軸は約2.5mを測る。壁はほぼ垂直で、検出面から底面までの深さ約56cmを測る。底面は壁際が若干低いが、全体的に平坦で軟弱である。**埋土**：ローム粒やブロックを多く含む埋め戻し土と捉えられる。**出土遺物**：なし。**所見**：本址の規模から竪穴建物跡の可能性はあるが、内部施設は検出されず断定できない。①区南部区画内で掘立柱建物跡が建てられる以前の施設で、SK878・1152と共にSX05西側に並ぶことから、SX05と関連した大型土坑の一つと考えられる。

SK1152 (第32図 PL7) N09・10

**位置**：①区南部区画の南端に位置する。重複：大型土坑SK878とSK255に切られる。西半分は調査区外へ延び、西側を土坑SK878に切られて遺存状態は悪い。**構造**：調査区内の確認規模は東西約2.0m以上、南北約2.1mを測り、平面形はやや不整形長方形を呈する。北辺と南辺がずれており、北辺でN79°W、南辺でN87°Wである。壁はほぼ垂直で検出面から底面までの深さは約73cm、底面はほぼ平坦で軟弱である。**埋土**：ロームブロックの含まれ方で分層したが、すべてローム粒やブロックを含む埋め土と捉えられる。**出土遺物**：なし。**所見**：重複する類似形態のSK878は本址の造り替えとみられる。本址はSX05西側に並ぶ大型土坑の一つで、SX05と関連する施設と思われる。

## SK878 (第32図 PL.6) N09・10

位置：①区南部区画に位置する。重複：大型土坑SK1152を切り、SK254に切られる。構造：西半分は調査区外へ延び、確認できた規模は東西約2.0m以上、南北約2.0mで、推測される平面形は不整長方形である。北辺の方位はN79°W、南辺でN87°Wである。壁はほぼ垂直で検出面から底面までの深さは約70cmを測り、底面はほぼ平坦で軟弱である。埋土：2層に分層したが、いずれもロームブロックを含む黒褐色土で、埋め土と捉えられる。出土遺物：なし。所見：重複するSK1152は規模も形も似ており、本址と造り替えの関係とみられる。SX05西側に並ぶ大型土坑の一つでSX05と関連する施設と思われる。

## SK1217・1219 (第30図 PL.7) N09・10

位置：①区南部区画の南西部にある。本址はSK1218の北側をSK1219、南側をSK1217として別に調査したが、平面位置や底面の高さが一致することから同一遺構と捉えて報告する。重複：SK1219はST63(1502)、ST64(1264)、ST46柱穴跡の可能性のあるSK903、土坑1218に切られ、SD23との関係は不明である。南側のSK1217とした部分は柱穴跡SK1190・1506、土坑1218に切られる。構造：SK1217は幅約1.0m、南北規模は残存部で約0.4m、SK1219は東西約1.1m、南北規模は残存部で約0.5mを測る。同一遺構として長軸方位はN2°E、平面形は長さ3.4mの長方形となる。壁はほぼ垂直で、底面は平坦、検出面からの深さはSK1217が42cm、SK1219が38cmを測る。埋土：両者ともローム粒・ブロックを多く含む、埋め土と思われる。出土遺物：なし。所見：大型の土坑SK1218に切られ、ST44～65以前の南部区画内で古い遺構とみられる。周囲に類似した土坑もなく、性格は不明である。

## SK979 (第30図 PL.6) I24・25

位置：①区南部区画の北端にあるが、中央区画の遺構の可能性もある。重複：SD14と柱穴跡SK981が本址を切る。底面検出のSK980・1294～1296は前後関係が不明である。構造：平面形は長軸約2.3m、短軸約2.0mの長方形を呈し、長軸方位はN88°Wである。断面形は長方形で底面は平坦、検出面から底面までの深さは約18cmである。南西隅に長さ40cm、南東隅に長さ20cmの平石が検出され、本址に伴う施設の一部とみられる。埋土：底面上にロームブロックをあまり含まない2層、上部にロームブロックを多く含む1層があり、上部土層は埋め戻された可能性がある。出土遺物：図示していないが弥生土器12片50gがある。所見：本址南側に近接する類似規模のSK1272とは造り替えの関係の可能性もある。また、本址と類似規模の配石をもつ可能性がある大型土坑は、各区画境界付近に位置する傾向が認められ、本址も同様に区画境界に関わる施設とも思われる。一方でSX05を取り巻く大型土坑の一つである可能性があり、いずれとも断定はできなかった。

## SK1268 (第30図 PL.7) I25

位置：①区南部区画北端に位置する。重複：SK1306・1269を切り、SD11・14・15、ST51(819)、ST52(821)、ST54(820)に切られる。底面上で柱穴跡SK1303・1304・1421・1350・1468・1469を検出したが、前後関係は不明である。構造：平面形は南北約2.3m、東西約2.1mの規模の方形で、長軸方位N6°Eである。壁はほぼ垂直で、底面はほぼ平坦で検出面からの深さは約34cmを測る。北西壁際で壁に沿うように長さ30cmの平石の立石が検出され、北部区画SK343同様に隅もしくは壁際に石が配置されていた可能性がある。埋土：スコリア粒を多く含む淘汰の悪い土層で、埋め戻し土と考えられる。出土遺物：図示していないが混入と思われる弥生土器31片244gある。所見：重複しているSK1269やSK1306とは造り替えの関係とみられ、SK1269→1306→本址への変遷が捉えられた。SK979同様に区画境に設けられた石組をも

つ大型土坑のひとつか、SX05をL字状に取り巻く大型土坑のひとつとみられる。

#### SK1269 (第30図) I25

位置：①区南部区画北端にSK1268と重複して位置する。重複：SK770・1268・1306・1356、SD11・14・15に切られ、SK1307を切る。SK1357との関係は不明である。構造：平面形は南北約2.1m、東西約2.0mの方形を呈し、長軸方位N2°Wである。壁はほぼ垂直で、底面は平坦ながら軟弱で検出面からの深さ約57cmを測る。埋土：ブロック土の含まれ方から分層したが、いずれも埋め土と捉えられる。出土遺物：鉄鋼片と思われる鉄製品1点がある(第68図9)。所見：重複するSK1268やSK1306とは造り替えの関係で本址→SK1306→SK1268への変遷が捉えられた。区画溝跡SD14以前の区画境に設けられた施設か、SX05をL字状に取り巻く大型土坑のひとつと考えられる。

#### SK1306 (第30図 PL7) I25

位置：①区南部区画北より位置する。重複：土坑SK1269、SK1307・1358を切り、土坑SK1268、柱穴SK818、SD14・15に切られ、後に検出されたSK1359との関係は不明である。構造：平面形は東西約1.8m、南北約1.7mの方形を呈し、長軸方位N6°Eである。壁はほぼ垂直、底面は平坦で検出面から底面までの深さは約36cmほどである。埋土：底面上にⅡ層に類似する褐灰色粘質土が薄く均一にあり、その上部をロームブロックを多く含む埋め土と思われる土層が覆う。出土遺物：なし。所見：重複するSK1269→本址→SK1268へ造り替えられている。SX05を取り巻くように位置する大型土坑の一つか、中央区画境に設けられた施設と思われる。

#### SK1272 (第31図) N04・05

位置：①区南部区画北より位置する。重複：ST47(1025)、ST49(1229)、SK929・1230・1273・1383・1417に切られる。ST45(1246)、ST46(1302)、ST48(1412)、ST49(1301)、ST50(1413)、SD25との新旧関係は確認できなかった。SD25は亀裂痕で、他の中世遺構に切られることから、本址が切る可能性がある。構造：SD25との重複部分は同時に掘り下げてしまったが、残存部で南北約2.0m前後、東西約2.0mの不整形の平面形と捉えられ、長軸方位はN25°Eである。壁はほぼ垂直で、底面はほぼ平坦ながら軟弱であり、検出面から底面までの深さは約12cmと浅い。埋土：黒褐色土ブロックを含む埋め戻し土である。出土遺物：なし。所見：規模は竪穴建物跡に類するが、平面形がやや不整形で柱穴跡や炉址がなく断定できない。北側に隣接するSK979とはほぼ南北方向に並んで位置するが、長軸方位は90°異なる。SX05西側にSK1218等と並ぶことから、SX05と関連する大型土坑の一つとみられる。

#### SK910 (第32図 PL6) N04・05

位置：①区南部区画に位置する。重複：柱穴跡SK1163～1165を切り、柱穴跡SK948・1107・1108に切られる。ST49(1104)、ST50(966)、ST64(965)との関係は直接確認できていない。ST58・59は本址長軸方位と同じ棟方向なので関連する可能性もある。SD22は僅かな重複で新旧関係は不明だが、SD22は亀裂痕と思われる、他の中世遺構同様に本址が切る可能性が高い。また、調査では土坑SK910→ST48(935)だが、重複が僅かで断定できない。構造：平面形は長軸約2.0m、短軸約1.3mの規模で、検出面の平面形は南辺中央が広がる不整形丸長方形だが、底面の形状から本来は短軸約1.1mの規模で平面形は長方形とみられる。長軸方位はN89°Wである。断面形は逆台形で、検出面から底面までの深さは30cmを測る。底面は平坦である。埋土：上部にブロック土を多く混じる土層があり、埋め戻されたとみられる。西側の埋

土下部で人頭大の礫が集中的に検出された。出土遺物：珠洲すり鉢片1片(32g)ある(第61図9)。所見：形状が類似した土坑にSK983がある。本址は長軸方位が東西方向であり、東西棟建物跡内の施設の可能性がある。

## SK983 (第32図 PL.6) I24

位置：①区南部区画北西よりにある。重複：柱穴跡SK982・985、SD14に切られ、柱穴跡SK1099を切る。SK1254との関係は重複が僅かで把握できなかった。構造：平面形は長軸約1.8m、短軸約1.3mの長方形を呈し、長軸方位はN7°Wである。断面形は逆台形で検出面から底面までの深さは約30cmを測る。埋土：底面上にスコリア粒を少量含む土層があり、上層はブロック土を含む。埋土中の西南部周辺で人頭大礫が散在的に検出された。出土遺物：珠洲すり鉢片1片178g(第61図12)、図示していないが弥生土器31片226gある。所見：本址は掘立柱建物跡が密集する範囲内にあり、規模から建物跡内部施設の可能性もある。建物跡内部施設の土坑ならば、長軸方位が棟方向と一致する可能性からすれば、南北棟の建物跡に伴うと思われるが、関係する建物跡は特定できなかった。

## SK1103 (第34図 PL.6) N04・05

位置：①区南部区画の調査区西壁際、SX06と重複して位置する。重複：SK1479を切るが、SX06との前後関係は明らかにできなかった。構造：一部調査区外へ延び、確認範囲で平面形は1辺1.1m前後の方形とみられる。長軸方位はN5°Eである。残存部は僅かで検出面から底面まで約10cmと浅い。壁はほぼ垂直で底面は平坦である。底面上で長さ20cmの角礫が1点出土した。埋土：スコリア粒を少し含み、埋め土と断定できなかった。出土遺物：なし。所見：SX06内に位置するが、SX06とは方位がずれており、SX06に伴う施設ではないと思われる。周辺では類似した土坑がなく、性格は明らかにできなかった。

## SK1210 (第33図) N05

位置：①区南部区画SX05西脇に位置する。重複：SX05掘り下げ中にSX05西辺に接して位置する本址の存在が判明したが、SX05との前後関係は確認できなかった。ST46(1212)、SK1379・1382に切られ、SD21・22、SK1211を切る。構造：平面形はほぼ1辺1.2m四方の不整形方形で、西辺の方位はN8°Wである。壁は斜めで、検出面から底面までの深さは約24cmである。埋土：ロームブロックを含み埋め戻されている可能性がある。出土遺物：なし。所見：①区南部区画の中央付近に類似した中型の方形土坑SK1213・本址・953・1375・1275・(1293)がほぼ南北方向に並び、関連する可能性がある。

## SK1213 (第33図 PL.7) N05

位置：①区南部区画SX05西脇にSK1210と並んで位置する。重複：SK1210と共に検出し、SX05との前後関係は確認できなかった。ST52の柱穴跡の可能性のあるSK939、ST51(1205)、柱穴跡SK1227・1206が本址を切ることを確認できたが、底面で検出したST44(1228)は前後関係が確認できなかった。構造：平面形は長軸方位N5°Wの1辺約1.3mのやや不整形方形を呈し、検出面から底面までの深さ20cmを測る。埋土：ロームブロックを多く含み、埋め戻しと捉えられる。出土遺物：なし。所見：①区南部区画中央に南北方向で中型のSK本址・1210・953・1375・1275・(1293)がほぼ南北に並び、これらと関連する可能性がある。



## SK1254 (第34図) I24

位置：①区南部区画の西よりにある。重複：土坑SK982に切られる。土坑SK983・柱穴跡SK1099との関係は重複が僅かで断定できない。構造：平面形は長軸約1.5m、短軸1.0m以上の不整楕円形である。壁は垂直で、底面は平坦ながら若干凹凸がある。検出面から底面までの深さは約14cmと浅い。長軸方位はN2°Wである。埋土：ブロック土を含み、埋め土とみられる。出土遺物：なし。所見：不整形な平面形で底面に凹凸があるなど、根痕の疑いがある。

## SK1275 (第33図 PL7) N10

位置：①区南部区画の南端に位置する。重複：ST56の柱穴跡の可能性のあるSK1116、ST57(263)、SK1274に切られ、土坑SK1293・1375を切る。ST61(268)、ST62(1274)は重複部が僅かで前後関係は不明である。位置的にST60・61内施設の可能性も残るが、本址を切るST57(263)・ST56?(1116)は南北棟建物跡であり、①区では東西棟方向の建物跡が南北棟方向の建物跡より後出する傾向を考えると東西棟方向のST60・61に伴うとは断定できない。構造：平面形は長軸約1.5m、短軸約1.2mの不整長方形を呈する。長軸方位はN85°Eである。断面形は長方形で検出面から底面までの深さは約38cmを測る。埋土：上層は大きめのブロック、下層は細かいブロックを含む。埋め土と捉えられる。出土遺物：なし。所見：重複する類似形状のSK1293・1375とは造り替えの関係とみられ、同じ中型土坑のSK1210・1213・953・1375・本址・1293がほぼ南北に並び、関連する遺構と思われる。

## SK1293 (第33図) N10

位置：①区南部区画南端に位置する。重複：北側をSK1275、北西部をST57(263)に切られる。構造：僅かな残存で全容は不明で、確認範囲で南北0.5m以上、東西約1.0mで、壁はほぼ垂直、底面は平坦で検出面からの深さは31cmである。埋土：壁際にロームブロックを少量含む土層があり、埋土の大部分はロームブロックを多く含む土層で占められる。壁際の土層は廃絶直後の流入土で、あまり時間を置かないで埋め戻されているとみられる。出土遺物：なし。所見：重複するSK1275・1375と造り替えの関係と思われる。ST60・61の南東隅に位置することからST60・61内施設とも考えられるが、SK1275同様に断定はできない。また、中型のSK1213・1210・953・1375・1275・本址が南北方向に並ぶようにもみえ、これらと関連する遺構と思われる。

## SK1375 (第33図) N10

位置：①区南部区画南端に位置する。重複：南側をSK1275、ST55(1376)、ST56?(1116)に切られ、ST61(268)との関係は不明である。調査時にSD12・13が本址を切ると捉えたが、重複が僅かで断定できない。構造：確認範囲で平面形は南北1.0m以上、東西約1.2mの方形か長方形と思われる、残存する東辺の方位はN12°Wである。断面は逆台形で底面は平坦で、検出面からの深さは約22cmを測る。埋土：スコリア・ローム小ブロックの含まれ方で2層に分層したが、いずれも埋め土の可能性はある。出土遺物：なし。所見：重複するSK1275・1293とは近接した造り替えの関係とみられる。ST60・61の南東隅に位置し、内部施設の可能性があるが、SK1275同様に断定はできない。また、同じ中型のSK1213・1210・953・本址・1275・1293がほぼ南北に並んでいるとみえ、これらと関係する可能性がある。

## SK906 (第34図) N09

位置：①区南部区画の西よりに位置し、半分以上が調査区外へ延びる。重複：ST60・61(907)に切られ

る。構造：確認範囲で南北約1.4m、東西0.7m以上の長方形か方形の平面形と思われる。長軸方位はN18°Wである。断面形は長方形で壁はほぼ垂直で、底面は平坦で検出面から底面までの深さは66cmと深い。埋土：記録もれで不明である。出土遺物：なし。所見：全容は不明だが、中型の土坑とみられ、掘立柱建物跡の分布域内に位置して建物跡内施設の可能性はある。

## SK953 (第34図) N10

位置：①区南部区画に位置する。重複：ST54柱穴跡の可能性のあるSK954、ST53 (I120)、柱穴跡SK952、SD12に切られ、底面で検出したST60 (I477) との関係は直接確認できていない。構造：平面形は長軸約1.2m、短軸0.9mの長方形を呈し、長軸方位はN6°Wである。断面形は逆台形で、検出面から底面までの深さは26cmである。底面は平坦ながら若干北西部が高い。埋土：2層に分層されたが、何れもブロック土を含む埋め戻し土と思われる。また、下層には若干炭化物が含まれていた。出土遺物：なし。所見：類似した形状の中型土坑のSK1213・1210・本址・1375・1275・1293がほぼ南北に並び、本址のみやや長方形さみだが、これらと関連する可能性がある。

## SK1253 (第34図 PL7) I24

位置：①区南部区画の北西よりにある。重複：SK1270に切られ、ST50 (I271) との関係は不明である。構造：平面形は長軸約1.0m、短軸0.6mの若干楕円形さみの長方形で、長軸方位はN2°W方向である。壁は斜めで、底面は平坦で、検出面からの深さ約16cmと浅い。埋土：ブロック土を主体とする埋め土である。出土遺物：混入の疑いがある唐津皿1片2g (第61図13)、図示していないが弥生土器10片82g、不明鉄製品1点がある。所見：周囲に類似形状の土坑はなく、性格は不明である。

## SK257 (第35図) N10

位置：①区南部区画南端に単独で位置する。重複：なし。構造：平面形は1辺0.6～0.7mの方形を呈し、断面はU字状である。長軸方位は厳密ではないがおよそN17°W前後である。検出面から底面までの深さは36cmを測る。埋土：色調から2層に分けられ、スコリア粒や小ロームブロックを少量含む。出土遺物：なし。所見：規模がやや大きめだが、柱穴跡の可能性もある。

## SK982 (第34図) I24

位置：①区南部区画の北西よりにある。重複：土坑SK983・1254、柱穴跡SK1099を切り、西側は重機掘削時に若干掘り壊した。構造：平面形は直径0.7～0.8m前後の円形で、断面形は逆台形で検出面から底面までの深さは約20cmを測る。埋土：スコリア粒を多く含む。出土遺物：なし。所見：形状・埋土の特徴から近世以後の遺構とみられる。

## ⑥. 焼土跡

## SF04 (第37図) N10

位置：①区南部区画のSD12屈曲部付近の北西側にある。重複：南側にあるSK951と重複するが、焼土部分が薄く前後関係は明確に把握できなかった。構造：平面形は南北22cm、東西22cmの円形に直接被熱で赤化した範囲が認められた。出土遺物：なし。所見：①区南部区画で検出された唯一の焼土跡で、本址も建物跡内施設の可能性はあるが、帰属する建物跡は明確にしなかった。

## 5. ②区平坦地の遺構

### (1) 北部区画の遺構

北部区画は、②区平坦地を区画するSD16以北の空間と捉えたが、周囲を区画する溝跡は南東部以外では不明瞭で、北側は区画施設がなく掘立柱建物跡の分布範囲でしか捉えられない。南辺はSD16に区画される。東辺は溝跡の重複が著しく、東辺南部はSD44が区画すると捉えられるが、その北延長先については調査時にSD44北端がL字状に西へ折れ、北延長先にあるSD47を別溝跡と捉えて仔細不明となった。整理作業で見直すとしてSD44の西へ折れる部分は別溝跡の重複を見誤った可能性があり、本来はSD47に接続して北側まで延長されていた可能性がある。ただし、北部区画ができた以後の建物跡と捉えたのはST77・78だが、これらの建物跡は棟方向を方位に合わせており、SD44—47の方向とは合わない。また、北部区画中央に1棟で存在するST75・76が北部区画成立以後の建物跡とも考えられるが、切り合いからは区画成立以前と考えざるをえず、区画溝跡の方位と建物跡が一致しないことになるため、SD44の延長先がSD47に接続するとは断定できなかった。このように北部区画では区画溝跡と建物跡の関係に問題を残したか、少なくとも南部区画同様、北部区画も部分的にも溝跡で区画されていた可能性がある。

この区画溝跡SD16・44と重複して、建物跡に伴う雨水浸入防止用溝跡と思われるSD46・SD44の西へ折れる部分を北辺、SD45を東辺、SD39—41を南辺とする「コ」字状の溝跡の配置が認められた。この区画に伴うと捉えたST79が北部区画に伴うSK167に切られることから、北部区画は当初から存在したものではないと考えられる。従って、北部区画が成立する以前の遺構も存在すると考えられるが、記述の便宜上、区画以前の遺構を含む北部区画範囲内の遺構を扱う。なお、②区平坦地の北部から経塚までの間は遺構分布が希薄で、僅かに経塚南方に柱穴状の落ち込みと削平地状の遺構が検出されたのみである。この柱穴状の落ち込みは断面形が不整形で浅く柱穴跡とは断定できず、削平地状の遺構も現地表面で一段低い場所と認められていたもので、近世以後の耕作地への通路として造成されたものと捉えた。

北部区画の遺構は東側斜面直下に短い溝跡が重なり、その西脇に建物跡が分布する。検出遺構は削平地SX02の1基、建物跡ST66—78の13棟、土坑は大型土坑SK1145・167・48の3基、中型はSK39・96・120・1142の4基、小型はSK103・145の2基、溝跡はSD16・43—54の13条がある。

削平地SX02はSD16と重複して位置し、北部区画の設定以前の遺構の可能性がある。調査区域にかかって僅かしか調査できなかったが、SX01・06同様に建物跡に伴う削平地と思われる。

掘立柱建物跡は、調査時から直線的に並ぶ柱穴跡列から存在が想定されていたが、西側の柱穴跡が判然とせず、具体的な認定は整理作業で行った。認定にあたっては西側の柱穴跡分布が希薄ながら、ところどころ東西方向に並ぶ柱穴跡が認められたことから、これを梁行柱穴跡と想定して直交方向に並ぶ桁行柱穴跡を組み合わせて建物跡を認定した。粗めな柱穴跡もあり、認定した以上の建物跡数が存在するとみられる。認定した建物跡は梁行2間×桁行3・4間の側柱建物跡が主体である。桁行は3間が多く、ST75が約5.8mと短いが、多くは6.2—7.7mで、4間は7.7—8.4(9.8?)mである。ST66・67とST74は中央に柱穴跡列があって総柱建物跡に見えるが、いずれも側柱建物跡の建て替えられた範囲内であって、建て替えられた側柱建物跡の桁行が重複した可能性がある。棟方向はN30°WとN8°W前後の2種あり、両者は位置的に重なることから時期差があると推測される。また、建物跡の柱穴跡列が平行するものが多く、ST66・67、ST68・69の柱穴跡は1mずつ東西方向、約1m南北にずれた位置である。これらは連続した建て替えと捉えた。N30°Wの棟方向の建物跡はST66—76が該当し、北側にST71—74、南側にST66—70が並列し、中間にST75・76がある。N8°Wの棟方向の建物跡はST77・78が該当する。

溝跡は上述した区画溝跡SD16・44(・47)以外は建物跡に伴う雨水浸入防止用溝跡と思われる。その

溝跡の方位はSD45・46・47・48がN30°W方向かその直交方向、北端のSD49～53はN12°W方向で、具体的な建物跡を認定できなかったものもあるが、棟方向と類似した方位に設定されていた可能性がある。掘立柱建物跡との関係はSD46（・47）がST66・67、SD48がST69、SD49は若干方位がずれるが、ST75か76、SD52・53がST71・74に伴う可能性がある。このような雨水浸入防止用溝跡に伴う建物跡が分布するあり方は①・③区平坦地北部区画・南部区画、②区南部区画と共通する。

土坑は全体的に少ない。大型土坑はいずれも単独で存在し、石組をもつSK167・1145は区画境界に設置された施設の可能性がある。中型・小型土坑は建物内施設とも思われたが、関連する建物跡を特定できなかった。また、埋土に焼土や炭化物を多く含む土坑としてSK103がある。

#### ①. 溝跡

SD16（第45・50図 PL.9） I12・13

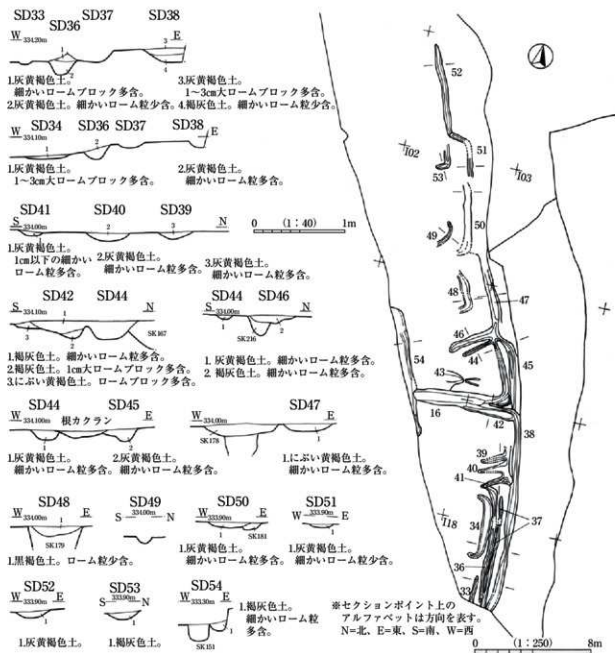
位置：②区北・南部区画中間にある。重複：土坑SK1145・167を切る。西先端が重なるSX02との重複部分を確認調査トレンチで掘り壊して前後関係を把握できなかったが、②区平坦地では溝跡の区画が後出することから、SD16よりSX02が古い可能性がある。また、SD16と重複位置には北側のSD46と東側のSD44・45、南側に位置するSD39～40が長さ10m前後の区画を形づくると思われる。SD44は本址に接続する東辺の部分と、L字状に屈曲する北辺は本来異なる溝跡であったものを連続した溝跡と誤認している可能性がある。これらの溝跡からなる区画に伴うと捉えたST79をSK167が切ることから、これらの溝跡とST79よりSD16は後出すると捉えた。構造：北部から連続するSD44、南部から連続するSD38・42が本址東部で接続する。西端は徐々に浅くなってSX02との重複部分付近まで続くが、その西延長先は確認調査トレンチで掘り壊して確認できていない。確認範囲で長さ約5.2m、溝跡の方位はN85°Eである。幅は約1.0mで断面はU字状を呈して底面は西側へ傾斜する。埋土：3層に分層され、下層ほど雨水の淘汰作用による粗いスコリア粒が多く含まれる。出土遺物：石鉢の底部破片（第66図7）があり、確認調査時に出土した青銅香炉（第68図12）は本址か、SK1145からの出土と思われる。所見：周囲の溝跡よりも大きく深く、調査区を横断することや、SD38・44と接続することから、個別建物跡に伴う雨水浸入防止用の溝跡ではなく、区画の溝跡と思われる。また、本址の位置は①区中央区画の北辺溝跡SD26～32・55の西延長先にあたり、①、②区に共通する区画に沿って構築された可能性がある。

SD43（第45図） I07

位置：②区北部区画のSD16北脇にある。SK167西辺からSK1145東辺にかけて断片的に検出された。重複：SK167・1145との関係は直接確認できていない。構造：SK167西側から延びて浅く途切れ、SK1145東側で再び深くなってSK1145と重複するところまで確認できた。確認範囲の長さは2.5mで、幅0.9m、東側で検出面から底面までの深さ6cm、西側はSK1145壁で深さ30cmを測る。東側が浅く、途中で途切れて西側のSK1145側へ低く傾斜する。埋土：記録漏れで不明である。出土遺物：なし。所見：本址はSD16に平行する同様の区画溝跡とも思われるが、本址の浅さや地形同様に西へ傾斜して深くなることから、雨水の流下によってできた浸食痕の疑いがある。

SD44～47（第45図） I07

位置：②区北部区画のSD16北側に位置する。重複：調査では溝跡間の重複関係が捉えきれず、SD44～47が交差する地点の前後関係と連続関係は把握できなかった。SD44は東辺がSD16に接続するが、北端から西へ折れる部分は別溝跡の重複を見落とした可能性がある。また、SD44東辺がSD47へ接続していた可能



第45図 ②区溝跡

性はあるが、断定はできなかった。確認できた重複関係はSD45→SD38。土坑SK167→SD44、柱穴SK242・245→SD44、SK161・216→SD46。SD46底面で検出したSK1321、SD47底面で検出したSK149、ST79(238・244)とSD44は前後関係が直接確認できていない。

構造：斜面直下にSD45とSD44が平行し、南端はSD44が西へ屈曲してSD16に接続し、SD45は直線的に延びてSD38に切られる。北端は西へ延びるSD44・46、北へ延びるSD47が交差するが、接続関係は十分捉えきれていない。SD44は東辺から北端で西へ屈曲する部分と捉えたが、直線的に延びてSD47へ接続し、SD45がSD46へ接続する可能性がある。

SD44はN24°W方向に約4.5m続き、南端はN53°E方向に折れて約2.0m続いてSD16に接続する。幅は広い南端屈曲部で約1.0m、狭い東辺で0.5m前後を測る。検出面から最深部までの深さは約20cmを測る。

南東の屈曲部分付近から中段を形成して深くなってSD16に接続するが、掘り直しか雨水の浸食によると思われる。SD44北端は調査ではN53°E方向で西へ折れ、長さ約2.4m続いて西端は浅く途切れる。幅約0.3m、断面形はU字状を呈して検出面から底面までは深いところで10cmを測る。上述したように、本址の北端から西へ折れる部分は別溝跡で、重複を見落とした可能性がある。

SD45は南端がSD38に切れ、北端はSD44・46交差付近までと捉えたが、その延長先はSD46かSD44の西へ折れた部分のいずれかに接続していた可能性がある。確認範囲でN18°W方向に長さ5.2mを測る。幅0.6mで断面形はU字に近い逆台形で、検出面から底面までの深さは10cm弱である。

SD46はSD44・45・47交差付近から西へ延びる範囲と捉えた。N62°E方向に約4.0m続いて浅く途切れる。幅は0.5m、断面形は浅いU字状で、検出面から底面までの深さは約10cmである。

SD47はSD44～46との交点からN18°W方向に延びる溝跡で、北端はSD50との接続周辺が僅かな遺存で、仔細は不明である。幅0.7mで長さ6.3mを測る。検出面から底面までの深さは10cmである。

埋土：いずれも褐灰色～灰黄褐色土の色調で細かいローム粒を含み、大きな差異はない。

出土遺物：なし。所見：調査ではSD44～47の北部交差する付近の重複関係が捉えきれず、溝跡の単位と接続関係が把握できなかった。整理で見直すとしてSD45・46とSD44北辺は、南にあるSD39～41と対応して建物跡1棟前後に伴う区画を形づくり、②区南部区画のSD16に接続するSD38・42が南部区画全体を区画することから、SD16へ接続するSD44はSD47と連続して北部区画を区画していた可能性が考えられる。しかし、本項の冒頭で上述したように建物跡と区画溝跡の関係に問題を残し、SD47を区画溝跡と断定しきれなかった。SD44北辺とSD46には南梁行が近接するST66・67に伴う可能性がある。

## SD48・49・53 (第45図) I02・I07

位置：②区北部区画のSD47西側にL字状の短い溝跡SD48、49、53が南から並ぶ。重複：柱穴跡SK176→ST66(177)→SD48、柱穴跡SK132→SD48、ST76(173)→SD48、SD49→SK119、SD49→SK114。ST68(179)→SD48。ST69(168)・柱穴跡SK182とSD48、SD49とST69(164)の関係は重複部分が僅かで把握できなかった。SD49と底面で検出したSK1130、SD53とSK64の関係も把握できなかった。なお、SD53はSD52の南延長先にあたることも考えたが、位置が若干ずれることから別溝跡とした。構造：SD48はL字状を呈し、東辺はN20°W方向に約4.8m、南端で西へ折れて0.7m続く。北・西端は浅く途切れる。断面形は浅いU字状で東岸の立ち上がり認められ、西辺は底のみの残存である。遺存状態が良好なところでも検出面から底面までの深さ10cmしかない。SD49は東辺がN26°W方向に約0.5mの長さを測り、南端から西に折れてN66°E方向に1.6mほど続いて浅く途切れる。幅0.4mほどで、検出面から底面までの深さは6cm以下である。SD53もL字状を呈し、東辺はN18°W方向に約1.6mの長さを測り、南端が西に折れてN67°E方向に1.0mほど続いて浅く途切れる。幅0.2～0.3mで、検出面から底面までの深さ約5～10cmである。埋土：SD49・53は記載もれで不明。SD48は黒褐色土を基調とする。出土遺物：なし。所見：いずれも建物跡に伴う雨水浸入防止用の溝跡と思われる。ほぼ南北にSD48・49・53が並列するが、間隔が4m前後と狭いので同時存在は考えにくい。なお、SD48にはST69、SD49にST75・76、SD53にST71・74に伴う可能性がある。

## SD50～52 (第45図) D22、I02

位置：②区北部区画の北部、SD47北側にSD50、やや離れてSD51があり、SD51の屈曲部北側にSD52が接続する。SD50と51は同一溝跡の可能性がありますが、若干位置がずれるため別遺構番号を付した。

重複：調査ではSD50がST68(185)、ST70(115)、柱穴跡SK183に切れ、ST66(162)、ST67(1127)、

SK180・181を切り、SD51はSK100に切られると捉えたが、埋土の残存が僅かで前後関係は断定できない。SD50とSK166の前後関係は把握できなかった。SD51と52は接続した1本の溝跡とも思われたが、それぞれ底面の高さが異なることから別遺構とした。SD51・52の前後関係は把握できなかった。

**構造：**SD50は斜面直下をN13°W方向に延びる。本址南端はSD47が西へ折れるように見受けられたところから確認されたが、SD47は底面が僅かしか残存せず接続関係は不明である。また、北側も底面のみしか検出できなかった。確認範囲で長さ約5.0mを測り、幅は0.4m、検出面から底面までの深さは約4cmを測る。SD51はSD50の北延長先に位置し、N18°W方向に2.5m以上続き、その北端から折れてN80°W方向に1.2m続いてSD52と重なる。幅0.3mほどで検出面から底面までの深さは約5cmほどである。SD50・51は若干位置がずれているようにみえたため別遺構番号を付けたが、連続するとすれば長さ7.8mほどの区画を構成する。SD52は南端がSD51と接続し、北端は浅く途切れる。N22°W方向に長さ6.3mを確認した。幅0.4mで、検出面から底面までの深さ4cmほどである。

**埋土：**いずれも灰黄褐色土で、SD51と52には大きな差異は見受けられなかった。

**出土遺物：**なし。

**所見：**溝跡相互の連続関係の認定に不確定なところがあるが、いずれも規模から建物跡に伴う雨水浸入防止用の溝跡と捉えられる。このなかでSD52にはST71・74が伴う可能性がある。

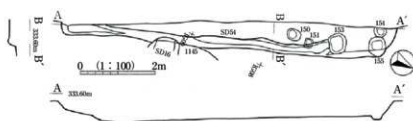
#### SD54 (第45・46図) I07

**位置：**②区中央のSX02内にある。**重複：**SK151・153に切られると捉えたが、SK153との重複部分は僅かで判然としにくい。**構造：**SX02段切り直下にN16°W方向で4.0mほど確認できたが、南端は浅く途切れて不明となった。幅0.3mほどで、SX02床面から底面までの深さは3cmほどである。**埋土：**褐灰色土である。**出土遺物：**なし。**所見：**SX02に伴う溝跡と思われる。

### ②、削平地

#### SX02 (第46図) I07・12

**位置：**②区中央の北・南区画中間の調査区西壁際に位置し、南・西辺は調査区外へ延びて規模の詳細は不明である。本址は②区が南北に大きく分かれる南・北区画や、SD44～46・39～41、SD33～37といった建物跡1棟に伴う雨水浸入防止用の溝跡が造り替えられた区画には一致していない。**重複：**本址内では北壁肩にかかってST68(155)・柱穴跡SK154、底面上でST69(153)・柱穴跡SK150・151を検出した。底面から柱穴跡底面までの深さ約50cmのSK150は本址柱穴跡の可能性があるが、他の柱穴跡と本址の関係は直接把握できなかった。また、本址東側でSK1145、SD16と重複するが、重複付近を確認調査時にトレンチで掘り壊し、加えてSD16の遺存が不良で前後関係は直接把握できなかった。**構造：**確認範囲で南北長約9m、東西幅1m以上を測る。平面形は不明だが、おそらく長方形を呈すると思われる。壁は東壁がほぼ垂直で、北壁は斜めで、南端はテラス状に一段高い平坦面がある。壁際にSD54を配し、底面の南側は若



第46図 削平地SX02

干低い、ほぼ平坦で、確認範囲ではあまり堅くない。**埋土：**調査の記録漏れで詳細は不明だが、ロームブロックを含む土で埋められていた。**出土遺物：**カワラケ1片11g(第61図17)、青花皿1片15g(第61図16)、図示していないが弥

生土器1片14g、焼粘土塊1点5g、銅銭1点(第68図23)が埋土から出土した。

所見：調査範囲が狭く、全容は捉えられていないが、SX01や06同様の1棟前後の建物跡に伴う削平地と思われる。位置的にSD16により②区内が南北区画に分割された段階の遺構ではなく、それ以前のST66～70、ST71～74、ST79、ST80・81が並列した時期の遺構である可能性が高い。

### ③. 掘立柱建物跡

ST66・67 (第47図 PL.8) I02・07・08

建物跡の認定：調査時に②区北部東寄りに1m間隔で直線的に並ぶ柱穴跡列が認められており、整理作業ではSD47・50脇に直線的に並ぶ柱穴跡から梁行が約1mずれて位置するST66・67と、ややずれて桁行が重なるST70、ST66・67東桁行の西約1mに平行して柱穴跡が位置するST68・69を認定した。すべて平行移動した位置に柱穴跡がある関係からST66～70は建て替えの関係で、なかでもST66と67が近接時期の建て替えの関係と推測した。なお、ST66・67は内部に柱穴跡列があつてST68・69にはないことから建て替えとは言い切れないところがあるが、ST66・67内部の柱穴跡列は、さらに西に平行して建て替えられた別の建物跡の東桁行を含む可能性が残る。その全容は不明で、建物跡と認定できなかったのでここで含めて触れる。

ST66は東側に直線的に並ぶSK83・104・162・126・129を東桁行、その西約4mに平行して並ぶSK93・(不明)・(1507)・148・131を西桁行と捉えた。桁行中間にはSK124・113・(1319)・132が直線的に並び、それぞれ桁行柱穴跡と直交する方向にあつて内部柱穴跡とも考えたが、建て替えの関係と思われるST68・69にはなく、別の建物桁行柱穴跡の可能性もある。この中央の柱穴跡列の南から2番目柱穴跡は、位置がずれるがSK1319の可能性もある。北梁行はSK93と83を結ぶライン、南梁行はSK131・132・129と捉えた。北梁行中央柱穴跡や西桁行北から2番目柱穴跡は確認調査トレンチで掘り壊した疑いがある。3番目の柱穴跡はSK120と重複するSK1507が充てられる可能性がある。

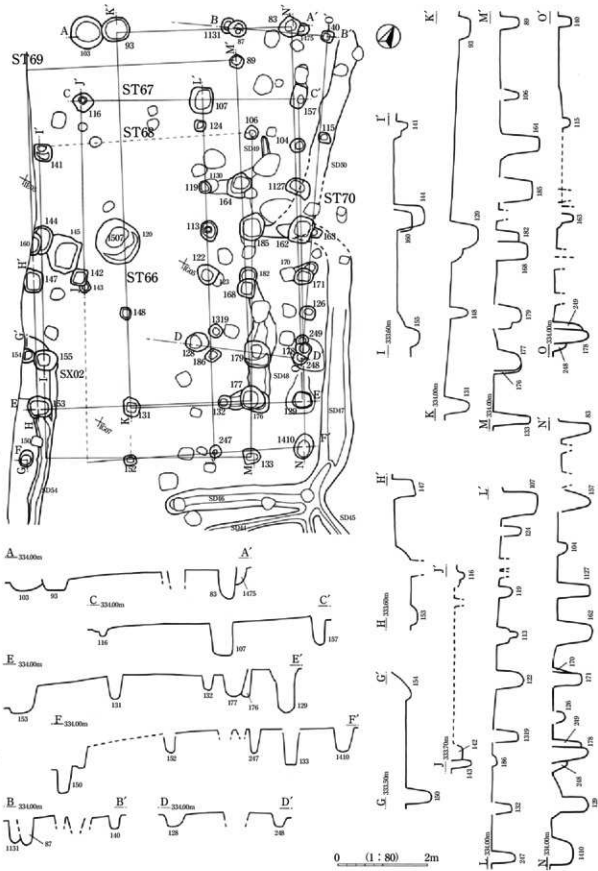
ST67はST66東桁行柱穴跡と重なるSK157・1127・171・178・1410を東桁行、北梁行は東桁行北端SK157からSK107を通して西延長上のSK116を結ぶライン、南梁行は東桁行南端のSK1410から西へ直交するSK1410・247を結んで西延長先のSK152を結ぶラインと考えた。しかし、北・南梁西端のSK116と152では大きく位置がずれ、しかも西桁行柱穴跡の想定位置が確認調査トレンチの位置にあつて西桁行柱穴跡の位置を特定できなかった。西桁行を南梁行SK152からとすると梁行規模はST66に同じだが、北側に関連する柱穴跡はない。一方、SK116・142のラインは東桁行や中央の柱穴跡列のSK107・122とも梁行で一致する位置にあるが、南側がやや広がる平面形となる。また、本址もST66同様に東・西桁行中間に東桁行柱穴跡と梁行がほぼ一致するSK107・119・122・186・247が直線的に並んでおり、内部柱穴跡列とも思われたが、建て替えの関係と捉えたST68・69にないため断定はしなかった。

位置：②区北部区画に位置し、ST68・69は桁行の位置が重なりながら梁方向で1mずれて位置する。

構造：ST66は確認範囲で梁行2間約4.0m、桁行4間約8.4mの規模で、棟方向はN29°Wである。柱穴跡の配置から総柱建物跡ともみられるが、上述したように断定できず個別建物跡の可能性もある。柱間寸法は東桁行で北から2.6、1.9、1.9、2.0mと北端が長く、南梁行は東から2.1、1.9mである。柱穴跡は直径30～50cmほどの円形や隅丸方形の平面形で、検出面から底面までの深さは40～70cmと深く、底面標高は北東部SK104が333.6mと高いが、他は333.0～333.3mが多い。

ST67は梁行2間でSK152まで約3.9m、SK116で約4.9m、桁行4間約7.7mで、棟方向はN30°Wである。柱穴跡の配置から総柱建物跡ともみられるが、上述したように個別建物跡の可能性もある。柱間寸法は東桁行で北から2.0、1.9、1.6、2.2mで、梁行は北辺で西から2.7、2.2mを測る。桁行中間の柱間寸法





第47図 掘立柱建物跡ST66~70

がやや狭い。柱穴跡は直径30～50cmの円形や隅丸方形の平面形で、検出面からの深さは40～70cmと深いものが多い。底面標高はSK107が332.9mと低いが、他は333.1～333.4m前後である。

出土遺物：ST67 (107) からカワラケ片1片12g (第61図1)、図示していないが弥生土器片1片2g、ST66 (129) から鉄鎌 (第68図5) が出土した。

重複関係：ST66 (177)→SD48、ST70 (163)→ST66 (162)、ST70 (248)→ST67 (178)、柱穴跡SK123・249・1130→ST67 (119・178・122)。ST66とSD50は重複部分が僅かで前後関係は不明である。また、SK1507をST66柱穴跡とすると土坑SK120に切られる。SD46とSD44北辺はST66・67南梁行位置と一致し、伴う可能性がある。

所見：類似位置にあって、桁・梁行柱穴跡が平行した位置関係にあるST66～70は建て替えの関係で、そのなかでも桁行が重なって梁行が平行移動した位置関係のST66・67は近接時期の建て替えとみられる。また、棟方向はN30°W前後で、同じ方位のST71～74と併存した可能性がある。また、ST66・67には東桁行、南梁行の位置的が合致するSD46・47が伴う可能性がある。

#### ST68・69 (第47図 PL8) I02・07

建物跡の認定：整理時にST66・67の西約1mに平行した位置にある柱穴跡列を東桁行とし、そのなかで南北に1mずれて位置する柱穴跡から構成される建て替えの建物跡としてST68・69を認定した。

ST68は直線的に並ぶSK106・185・179・133を東桁行、それと約5m西に離れて並行するSK141・144・155・(不明)を西桁行と捉えた。西桁行をSK150・154ラインとも考えたが、SK150の底面標高が低いためにSX02に伴う柱穴跡と認定して西桁行は上記の通りに捉えた。梁行中間の柱穴跡は不明である。

ST69はSK89・164・168・177を東桁行、それと約4.8m離れて西に並行するSK147・153を西桁行と捉えた。北西部は調査区外へ延びる。梁行中間柱穴跡は不明である。

位置：②区北部区画にあり、ST69・68は東桁行が重なりながら、梁行が1m南北にずれた位置にある。

構造：ST68は南北梁行が未確定で範囲の詳細は不明だが、確認範囲で梁行は1 (推定2) 間約4.7m、桁行は3間約7.2mの規模で、棟方向はN30°Wの欄柱建物跡である。柱間寸法は東桁行北から2.1、2.8、2.3mを測る。柱穴跡はSK144・185・179が平面形は1辺約60cmとやや大きい隅丸方形や楕円形を呈するが、他は直径30～40cmの円形や隅丸方形の平面形で、検出面から底面までの深さは約40～70cm、底面標高はSK144が332.8mだが、他は333.0～333.4m前後である。

ST69は梁行が確定できていないが、確認規模で梁行1 (推定2) 間 (約4.8m)、桁行3間 (約7.7m) の欄柱建物跡で、棟方向はN32°Wである。柱間寸法は東桁行で北から2.7、2.3、2.5mを測る。柱穴跡は直径40cmの円形が隅丸方形を呈し、検出面から底面までの深さは約40～80cmで、底面標高は東桁行のSK89・168・177が333.2～333.4mで、他は332.9m前後である。

出土遺物：ST68 (144) から中国産天目茶碗 (第61図3) が出土した。

重複関係：調査ではST68 (179)→SD48と捉えたが、SD48はST69東桁行の位置と一致しており、伴う可能性がある。ST68 (155)・ST69 (153)とSX02の関係は重複が僅かで把握できず、ST68・69の範囲内にある土坑SK120・145は内部施設が不明である。

所見：ST68・69共に②区北部に多く認められるN30°Wの棟方向の建物跡で、ST66～70は建て替えの関係で、なかでも桁行が重なって梁行を平行移動したST68・69は近接時期の建て替えと捉えた。本址北側にある同方位のST71～74と併存した可能性がある。

#### ST70 (第47図、PL8) I02・07

**建物跡の認定：**整理時にST66・67の東桁行と重なる位置に直線的にSK140・115・163・248が並ぶと認められ、これを東桁行として北端SK140から西側へ直交方向に位置するSK1131(87)を北梁行、南端SK248から西、直交方向のSK248・128を南梁行と捉えた。本址の東桁行柱穴跡の深さは、いずれも浅いことから、西側柱穴跡は遺存しなかった可能性がある。

**位置：**②区北部区画にあり、ST66・67とは東桁行の位置がほぼ重なって位置する。

**構造：**ST70は確認範囲で梁行1間以上約2.4m以上、桁行3間約7.2mの規模で、棟方向はN23°Wの側柱建物跡である。柱間寸法は東桁行北から2.2、2.2、2.8mを測る。柱穴跡はいずれも直径40cm以下の円形か隅丸方形の平面形で、検出面から底面までの深さは30cm前後である。柱穴跡底面標高は333.5～333.6m前後で、西側の検出面の標高はこれより低い。

**出土遺物：**なし。

**重複関係：**ST70(163)→ST66(162)、ST70(248)→ST67(178)。SD47・50との重複は僅かで前後関係は不明である。

**所見：**規模の類似や位置の重複からST66～69とは建て替えの関係とみられ、重複関係からST66～69以前の建物跡とみられる。

#### ST71・72・73 (第48図、PL8) D21・22、I01・02

**建物跡の認定：**調査時に建物跡が想定された②区北部のSD52西脇柱穴跡列から、東桁行が重なりながら梁行が1m南北にずれたST71・72、ST72と隣接・重複する柱穴跡からST73を整理時に認定した。

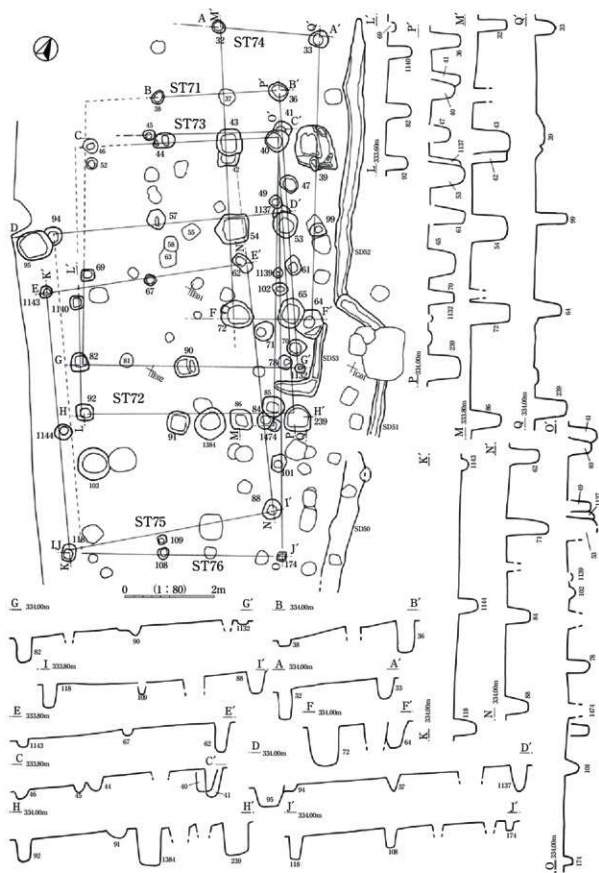
ST71はSD52と平行してSD53屈曲部まで直線的に並ぶSK36・47・61・1132を東桁行、南端のSK1132から西、直交方向に並ぶSK90・82を南梁行、SK82から北、直交方向に並ぶSK69を西桁行と捉えた。東桁行の南端柱穴跡SK1132は浅すぎるので、位置は北に若干寄るSK70が充てられるかもしれない。北端SK36から西、直交方向のSK38を結ぶラインを北梁行と捉えたが、北西部の柱穴跡が検出できずSK38も西に寄りすぎている。また、西・東桁行の方がずれて台形平面形であるなど建物跡認定に不安を残す。

ST72はST71東桁行と重なって南北にずれたSK40・53・65・239を東桁行、北端のSK40から西直交方向のSK44を通るラインを北梁行、南端のSK239の西、直交方向に位置するSK91・92を南梁行、SK92から北、直交方向に位置するSK1140を西桁行と捉えた。南梁行中間のSK91は浅く、西に寄る位置だが、隣接したSK1384のほうかST72柱穴跡とした柱穴跡の深さと近似しており、こちらが充てられる可能性もある。

ST73はST72北梁行と東桁行の柱穴跡に重複・隣接して位置するSK41・49・1139と延長上のSK1474を東桁行、北東隅SK41から西、直交方向のSK45を通るラインを北梁行と捉えた。西桁行や梁行の柱穴跡は不明で、東桁行柱穴跡が浅いことから、西桁行柱穴跡は遺存しなかった可能性がある。東桁行南端の柱穴跡はSK1474のかわりに、ST77柱穴跡としたSK85が本址柱穴跡の深さに近く、該当する可能性も残る。また、東桁行のSK1139が極端に浅く、SK1139とSK1474の間隔も空き過ぎて認定に不安が残る。しかし、ST72柱穴跡に隣接して柱穴跡が位置することや、建物規模が類似することから本址を認定した。

**位置：**②区北部にあり、ST71・72は東桁行が重なって南北約1.2mずれ、ST73はST72とほぼ重なる。

**構造：**ST71は梁行2間約4.9m、桁行3間6.3mで棟方向はN30°Wの側柱建物跡である。柱間寸法は南梁行東から2.5、2.4m、東桁行で北から2.1、1.9、2.3mを測る。柱穴跡は東桁行南端のSK1132が直径20cm、南梁行中央のSK90が直径50cmと幅があるが、直径30～40cmほどの円形・隅丸方形の平面形が多い。検出面から底面までの深さはSK69・90・1132が20cm、他は50～70cmを測る。底面標高はSK90と1132が333.4mと333.7mだが、他は332.8～333.2mである。



第48図 掘立柱建物跡ST71~76

ST72は梁行2間約4.8m、桁行3間約6.2mの規模で、棟方向はN31°Wの側柱建物跡である。規模はST71と同じである。柱間寸法は南梁行東から約2.6、2.2m、SK1384を梁行中間の柱穴跡とすると2.0、2.8mとなる。東桁行は北から1.9、2.0、2.3mでST71の柱間寸法に類似する。柱穴跡は直径40～60cmほどの円形、隅丸方形の平面形で、検出面から底面までの深さは約50～80cm、底面標高は多くが332.9～338.2mだが、SK91が底面標高333.4mと浅く、隣接するSK1384は底面標高332.9mである。

ST73は確認範囲で梁行1間以上3.0m以上、桁行3間約6.6mの規模で、棟方向はN25°Wの側柱建物跡である。東桁行柱間寸法は北から1.6、1.6、3.4mと北端が長い。柱穴跡は直径40cm以下の円形の平面形が多く、検出面から底面までの深さは東桁行で約60cm前後、北梁行SK45で20cmと浅いが、底面標高は333.1～333.2mが多い。ただし、東桁行中央SK1139のみ底面標高が333.6mと高い。

出土遺物：なし。

重複関係：ST71重複なし。ST76 (1157)→ST72 (53)・ST73 (49)、ST74 (64)→ST72 (65)、ST73 (41)→ST72 (40)。ST75 (84)とST73 (1474)の関係は不明だが、ST75の建て替えと捉えたST76のST76 (1137)がST72 (53)に切られる関係から、ST72の建て替えのST73がST75を切る可能性がある。桁行の位置が重なって建て替えと捉えられるST71とST72・73との前後関係は不明である。

所見：重複関係からST73→72で、ST71はその前後に位置する建て替えの関係とみられる。いずれも周囲のN30°W方向の建物跡群のひとつで、1m南北・東西にずれる位置関係はST66～70と類似する。このことから、ST71～73はST74と共に、南側のST66～70と併存した可能性がある。

#### ST74 (第48回 PL.8)

D21・22、I01・02

建物跡の認定：整理時の検討でSD52脇に直線的に並ぶSK33・(39)・99・64を東桁行、北端SK33から西、直交方向のSK32を北梁行、南端SK64から西、直交方向SK72のラインを南梁行と捉えた。西桁行柱穴跡は検出できず不明である。東桁行柱穴跡列の西約2m離れて平行するSK32・43・54・72の柱穴跡列は内部の柱穴跡列にみえるが、東桁行と若干方位のずれがあり、建て替えの関係とみられるST71・72・73は側柱建物跡と捉えられているので、内部柱穴跡列ではなく、建て替えの別建物跡東桁行の疑いがある。ただし、西側に対応する柱穴跡が認められておらず、中央柱穴跡列を本址に含めて述べる。なお、東桁行南延長上にあるSK239、中央桁行南延長上にあるSK86まで含む可能性も考えたが、SK239はST72柱穴跡と認定した関係から、南へ延びないと結論した。また、土坑SK39底面の窪みを本址柱穴跡の残存と捉えた。

位置：②区北北区画にあり、ST71～73の北へ約2.4m、東へ0.7m平行移動した位置にある。

構造：確認範囲で本址は、梁行1間のみで南梁行約1.8m、北梁行約2.2mで、北梁行が2間とすると、約4.4m前後と思われる。桁行は3間約6.3mで、建物址方位は東桁行でN25°W、中央の柱穴跡列でN28°Wである。柱穴跡の配置から総柱建物跡にもみえるが、中央の柱穴跡列が別建物跡の東桁行の可能性があつて断定できず、側柱建物跡の可能性がある。柱間寸法は東桁行で北から2.4、1.9、2.0mである。柱穴跡は東桁行と北梁行のもので直径40cm前後の円形や隅丸方形の平面形で、検出面から底面までの深さ60cmを測る。中央の柱穴跡列は直径70cmの円形・隅丸方形の平面形で、検出面から底面までの深さが80cmを越えるものが多い。底面標高は東桁行柱穴跡で333.1～333.3m、中央の柱穴跡列で332.8～333.0mである。

出土遺物：なし。

重複関係：ST74 (64)→ST72 (65)。土坑SK39と本址柱穴跡の関係は見逃して不明だが、SK39埋土断面記録からみると本址柱穴跡が切っていた可能性がある。SD53は本址東桁行南端付近でL字状に折れ、その北延長上にあるSD52と共に本址に伴う雨水浸入防止用溝跡の可能性もある。

所見：位置的に重なるST71～73とは建て替えの関係で、ST72より古く、ST73→72の関係を考慮すると74→(73→72)の順と推測される。また、同棟方向のST66～70と併存した可能性がある。

ST75・76 (第48図、PL8) D21・22、I01・02

建物跡の認定：整理時にST71～74の東桁行柱穴跡列と重なる位置に並ぶ柱穴跡から認定した。

ST75はST71～74東桁行柱穴跡の西脇に直線的に並ぶSK62・71・84・88を東桁行、その北端から西へ直交する方向にあるSK62・67・1143を北梁行、東桁行南端から西へ延びるSK88・109・118を南梁行、北梁行西端のSK1143から南へ直交する方向のSK1143・(不明)・1144・118を西桁行と捉えた。西桁行南端SK118はST76柱穴跡とも迷ったが、西桁行と南梁行が交差する位置にあたることから本址の柱穴跡とした。建て替えの関係と捉えたST76より規模が小さく、梁行の認定に不安はある。

ST76はST71～73東桁行に重なって直線的に並ぶSK1137・102・78・101・174を東桁行、北端のSK1137から西へ直交する方向に並ぶSK57・94を北梁行、南端のSK174から西へ直交する方向にならぶSK108を南梁行と捉えた。南西隅の柱穴跡はST75(118)の位置が妥当だが、SK118はST75西桁行と南梁行の交差付近に位置することからST75柱穴跡と認定して本址柱穴跡は不明とした。西桁行は柱穴跡が検出できず不明である。

位置：②区北部、ST66～70とST71～74が並列する中間にST75・76が重なって位置する。

構造：ST75は確認範囲で梁行2間約4.6m、桁行3間で東桁行約5.6m、西桁行約5.8mの規模の側柱建物跡で、平面形は台形に近い。棟方向はN35°Wである。柱間寸法は北梁行で2.1、2.5m、東桁行で北から1.6、2.0、2.0mである。柱穴跡はいずれも直径40cm以下の円形か隅丸方形で、検出面から底面までの深さはSK71が90cmを越えるが、他は40～50cmで、底面標高は332.8～333.2m前後である。

ST76は梁行2間約5.1m、桁行4間約7.7mの側柱建物跡で、棟方向はN28°Wである。柱間寸法は北梁行で西から2.3、2.8m、東桁行は北から1.7、1.7、2.3、2.0mである。柱穴跡は直径40cm以下の円形か隅丸方形の平面形で、底面標高は北梁行柱穴跡で333.1m前後、東桁行柱穴跡で333.2～333.6mと浅い。

出土遺物：図示しなかったが、ST75(71)から白磁碗片1片2gが出土した。ST76はなし。

重複関係：ST75(84)→ST77(85)。ST75(84)とST73(1474)の関係は直接把握できていないが、ST73と建て替えの関係とみられるST72(53)がST76(1137)を切り、本址と重複位置にあるST76が本址と前後した建て替えと推測すると、本址(84)もST73(1474)に切られる可能性がある。ST76(1137)→ST72(53)・ST73(49)。SD49はST75・76南梁行の位置にあり、伴う可能性がある。

所見：ST66～70、ST71～74の中間にST75と共に位置する。重複関係から、N30°W前後のST66～70とST71～74や、方位を合わせたST77より古い所産と思われる。ST66～70とST71～74が併存する以前に、ST75・76といった単独の建物跡が建てられていた可能性を示す。

ST77・78 (第49図) C22、I02

建物跡の認定：整理時の検討でSD51周辺の柱穴跡が方位にあわせた方向に並ぶと認められ、建て替えの関係のST77・78を認定した。当初は部分的な柱穴跡配置を捉えて小型建物跡と考えたが、小型建物跡のみで構成される区画は他になく、伴う可能性のある同方位の2×3・4間の建物跡も認められなかった。そこで、周囲の柱穴跡を再検討したところ、ST77・78の東辺南延長先にあるSK166・(163)、さらにそこから西へ直交する方向に並ぶSK166・110・1129、163・119・117を結んでST77・78が2×3・4間の建物跡になる可能性が捉えられた。欠落する柱穴跡が多く全容は不明ながら、その柱穴跡は列状に並びながらも柱間寸法が短いことから建て替えの建物跡が重複する可能性が捉えられた。しかし、柱穴跡が部分的



第49図 掘立柱建物跡ST77・78

なことから個々の建物跡は捉えきれず、ここでは桁行列が南北にずれて位置する建物跡をそれぞれST77・78に大別して記述する。

ST77は②区東側斜面直下に直線的に並ぶSK59・75・79（以南不明）を東桁行、これと約2.7m西に平行するSK1138・70・85（以南不明）を中央の柱穴跡列、その北端を結ぶSK59・1138（55）を北梁行と捉えた。北梁行の西延長上のSK55は、東隣のSK1138とは柱間寸法が長すぎ、平面形もゆがむため本址北梁行西端柱穴跡とは断定できない。中央柱穴跡列の南延長先にSK110が位置し、東桁行南延長先にあるSK166と直交する位置にあることから、SK166・110・1129が南梁行にあたる可能性があるが、中間の柱穴跡が検出されておらず関連は確定できなかった。また、中央柱穴跡列は梁行の位置が重なりながら西へ2.7m平行移動した別建物跡の桁行柱穴跡の可能性がある。なお、SK85はST73の柱穴跡の可能性があり、中央柱穴跡列の南延長上にSK89が位置するが、これはST69柱穴跡と捉えた。

ST78はST77桁行柱穴跡列と桁行が重なりながら1m南に平行移動した位置にある柱穴跡から認定した

が、検出された柱穴跡が少なく一部のみしか捉えられなかった。SK74・76が東桁行で、それと1m西にSK97・77が平行する。東桁行は南延長先にあるSK125か1505もしくはST70柱穴跡としたもののSK163か、166まで延長し、その西直交方向のSK117・119が南梁行となる可能性がある。SK74・97とSK76・77の柱間寸法が短すぎ、同じ桁行ライン上で重なりながらさらに南北に平行移動して建て替えた建物跡柱穴跡を含む疑いがある。また、中央の柱穴跡列もSK97北延長先にSK60、南延長先にはST70柱穴跡としたSK140が直線的に並ぶが、これらは梁行位置を同じくしながら東西に建て替えた建物跡柱穴跡の可能性もある。SK74・97の西延長先にあるSK64はST74柱穴跡、SK76・77の西延長先にあるSK78はST75柱穴跡と捉えたため、西桁行は不明である。ただ、SK64・78を繋ぐラインは東桁行から約2.7m、梁行1間分の距離には当たる。また、中央の南延長先のST70(140)はST78の柱穴跡の可能性もある。

位置：②区北部区画の東斜面際に位置する。ST78はST77南に1.2m平行移動した位置にある。

構造：ST77は当初捉えた範囲では梁行2間約2.8m、桁行2間約3.2mだが、上記の推測から周囲柱穴跡を含めて梁行2間約5.4m、桁行4間約7.6mの規模と推測される。棟方向はN8°Wである。柱穴跡配置から総柱建物跡にもみえるが、北辺のSK60両側の柱間寸法は短すぎ、本址も東西に平行移動して建て替えられた側柱建物跡の重複である可能性がある。柱間寸法は東桁行で北から1.7、1.6mと狭く、柱穴跡は20～40cmの円形か隅丸方形の平面形で、検出面から底面までの深さは東辺で約10～60cm、底面標高はSK59・75・79が333.7m、SK55が333.5mだが、他は333.2～333.3mが多い。

ST78は当初捉えた範囲が南北2間約(2.6m)、東西2間約(2.7m)だが、上述したように建物跡の一部のみで、それも建て替える別の建物跡を含めて捉えている可能性がある。本来は上記の規模以上と思われるが、関連する柱穴跡が少なく全体規模は不明である。柱穴跡の平面形は直径20～40cmの円形か隅丸方形を呈し、検出面から底面までの深さは30～60cmを測る。底面標高は東桁行SK76・74で333.8m、333.7m、中央のSK77・97で333.2～333.3mを測る。

出土遺物：なし。

重複関係：ST75(84)→ST77(85)。土坑SK96→ST78(97)、ST78(100)との前後関係は不明。

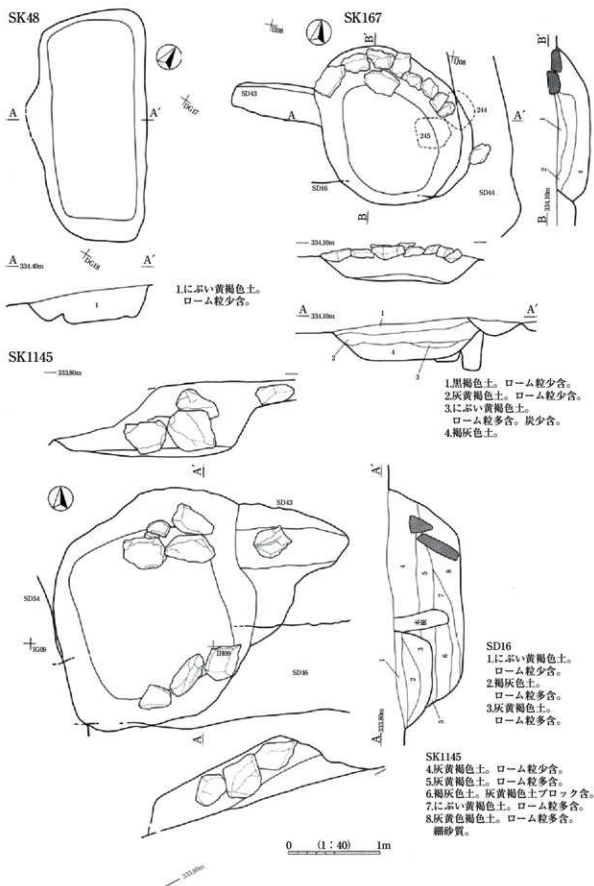
所見：全容は不明だが、②区北部の数少ない正方位の建物跡と捉えた。重複関係からST75より後出するとみられるが、ST71～74との関係は捉えられなかった。

#### ④. 土坑

SK1145 (第50図 PL9) I08

位置：②区北部区画南辺のSD16脇にSK167と並んで位置する。重複：SD16に切られ、SX02との関係は確認調査1トレンチで重複部を掘り壊したため把握できなかった。また、SK167側から本址北東部にSD43が接続するが、本址の一部とは捉えきれなかった。構造：平面形は南北約2.5m、東西約2.1mの不整形を呈し、長軸方位はN8°Wである。断面形は逆台形を呈し、検出面から底面までの深さは傾斜上方東側で約80cmを測る。底面はほぼ平坦で北壁と南壁東寄りに1辺40～50cmほどの角礫を並べている。北・南辺共に西側には礫が検出されなかった。石は一部2段に重ねられているところもあるが、大部分は1段で、裏込めの埋め土は捉えられなかった。埋土：中位に埋め土と判断されるブロック土を含む土層があり、廃絶後からSD16が構築されるまでの間に埋め戻されたものと捉えられる。出土遺物：図示していないが、中世以前と思われる時期不明土器1点30gがある。また、確認調査トレンチ内から出土した青銅製香炉(第68図12)は本址もしくはSD16からの出土と思われる。所見：類似構造のSK167が東側に位置し、この2基がSD16脇に位置する。①区でも区画溝跡の脇に石組をもつ大型土坑が分布する可能性が捉えられており、それらと同様の施設と思われる。





第50図 ②区土坑1

## SK167 (第50図 PL.9) I08

位置：②区北部区画南東部のSD44屈曲脇に位置する。重複：ST79(244)→SK167、柱穴跡SK245→SK167、SK167→SD16・44。北東部の窪みSD43は本址の一部の可能性もあるが、直接関係は把握できなかった。構造：平面形は南北約1.7m、東西約1.7mの不整形である。断面形は立ち上がりが緩やかな逆台形で、検出面から底面までは約39cmを測る。北壁際には人為的に並べられたと捉えられる石組が検出された。南側に礫は検出されなかったが、構築当初から存在しなかったかは明かにしえなかった。埋土：下層ににぶい黄褐色土、中層にⅡ層に類する灰黄褐色土、上層にスコリア粒を含む黒褐色土がある。出土遺物：図示していないが弥生土器2片4gがある。所見：①区北部区画や中央区画では、区画溝跡の脇に石組を伴う大型土坑が分布する可能性が捉えられており、本址もSK1145と共に区画境に設けられた施設の可能性がある。

## SK48 (第50図 PL.9) D22

位置：②区北部区画の東斜面直下に単独で位置する。重複：なし。構造：平面形は長軸約2.5m、短軸約1.2mの長方形で、西側中央部が若干張り出す。長軸方位はN35°Wで、ほぼ等高線に沿う。断面形は逆台形で検出面から底面までの深さ約36cmである。底面は若干凹凸があるが、全体的に平坦である。埋土：粘質土で、埋め戻し土とは断定できなかった。出土遺物：なし。所見：掘立柱建物跡の分布域から外れて位置し、性格は不明で、中世の所産とも断定できなかった。南に隣接するSK1142とは類似時期のものと思われる。

## SK39 (第51図) D22

位置：②区北部区画に位置する。重複：ST74柱穴跡との前後関係は把握できなかったが、土層断面からは本址が切られる可能性がある。構造：平面形は南北1.0m、東西0.8mの台形で、長軸方位はN31°Wである。断面形は逆台形を呈するが、底面は凹凸が著しく平坦ではない。北西部の一段低い部分は重複するST74の柱穴跡とした。検出面から底面最深部まで18cmの深さを測る。埋土：色調と地山ロームブロック等の含有物で分層したが、下層は淘汰が悪い。出土遺物：なし。所見：平面形は近接するSK96と似ており、同様の性格の土坑と思われる。また長軸方位は近接するST71～76と同じだが、建物跡内に入らないため建物内施設ではないと思われる。底面の凹凸から木根に攪乱された疑いがある。

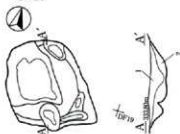
## SK96 (第51図 PL.9) D22

位置：②区北部区画に位置する。重複：ST78(97)に切れ、重複するSD51は埋土の遺存が僅かだが前後関係は把握できなかった。構造：平面形は南北約1.2m、東西約0.9mの方形で、長軸方位はN30°Wである。断面形は逆台形で、検出面から底面までの深さは30cmを測る。底面はほぼ平坦ながら、北壁際が溝状に窪む。埋土：全体にロームブロックを多く含み、埋め戻されている可能性がある。出土遺物：なし。所見：長軸方位は近接するST71～76に類似するが、建物跡内に入らないので建物跡内施設ではないと思われる。近接するSK39は平面形が類似し、同様の性格と思われる。

## SK120 (第51図) I07

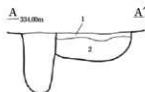
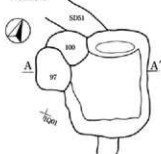
位置：②区北部区画の西よりに位置する。単一の柱穴跡として調査したが、下部の柱穴跡の柱痕跡が本址底面で途切れることから、整理作業では柱穴跡の上部に土坑が重複したと捉えなおし、下部の柱穴跡をSK1507、上部の土坑をSK120とした。重複：ST66柱穴跡の可能性あるSK1507を切る。構造：平面形は

SK39



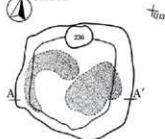
1. におい黄褐色土。  
ローム粒少含。
2. におい黄褐色土。  
ローム粒多含。

SK96



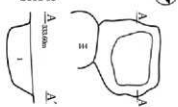
1. におい黄褐色土。  
ローム粒多含。
2. 灰黄褐色土。  
ローム粒多含。

SK200



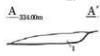
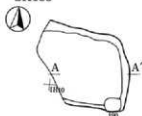
1. 黒褐色土。  
ローム粒多含。
2. 灰黄褐色土。  
ロームブロック多含。
3. 炭層。
4. 灰黄褐色土。  
細かいローム粒少含。

SK145



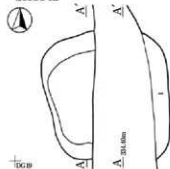
1. におい黄褐色土。  
ローム粒多含。

SK188



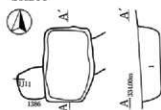
1. 灰黄褐色土。  
ローム粒含。

SK1142



1. 灰黄褐色土。  
ロームブロック多含。

SK205



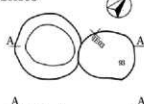
1. 灰黄褐色土。  
細かいローム粒多含。

SK1308



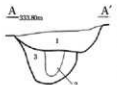
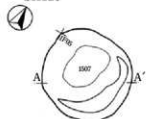
1. 灰黄褐色土。  
ロームブロック多含。

SK103



1. 炭層。
2. 灰黄褐色土。  
ローム粒多含。

SK120



1. におい黄褐色土。  
ローム粒多含。
- SK1507
2. 黒褐色土。  
ローム粒少含。
  3. 灰黄褐色土。  
ローム粒多含。

0 (1:40) 1m

第51図 ②区土坑2

直径約1.0mの円形で、断面は逆台形で、検出面から底面までの深さは約22cmを測る。埋土：スコリア粒を多く含む。出土遺物：なし。所見：浅いくぼみ状で根の攪乱の疑いもある。

## SK1142 (第51図) D22

位置：②区北部区画の東斜面直下に掘立柱建物跡とは離れて単独で位置する。重複：なし。構造：本址は②区の斜面直下の調査区東壁際で検出されたが、上部に斜面堆積土が厚く載って全体を露呈することができなかった。確認範囲から平面形は1辺約1.3m前後の方形を呈するとみられる。長軸方位は西辺からN18°W前後と推測される。断面形は逆台形で底面は平坦で、検出面から底面までの深さは24cmと浅い。埋土：ブロック土を多く含む埋め土と捉えられた。出土遺物：なし。所見：単独で存在するが、大型のSK48が近接し、類似した性格と思われる。出土遺物もなく、時期は不明である。

## SK103 (第51図) I01

位置：②区北部区画に位置する。重複：調査ではSK103→ST66(93)と捉えたが、重複部分が僅かで断定できない。構造：平面形は直径約0.7mの円形で、断面形はU字状で検出面から底面までの深さは約16cmを測る。埋土：底面上に細かいローム粒を含む土層、その上部に炭化物を多く含む土層がある。焼土は認められなかった。出土遺物：なし。所見：内部で直接火が焚かれたとは認められない。その性格は不明である。

## SK145 (第51図) I07

位置：②区北部区画に位置する。重複：SK145→ST68(144) 構造：平面形は南北約0.8m、東西約0.7mの方形を呈し、長軸方位はN16°Wである。西壁の傾斜が緩やかな逆台形の断面形を呈す。検出面から底面までの深さは約28cmを測る。埋土：細かいローム粒を多く含む。出土遺物：なし。所見：方形のSK39・96と平面形は類似するが、小型で柱穴跡の可能性も残る。

## (2) 南部区画の遺構

南部区画は②区平坦地のSD16以南の空間で、南端は調査区外へ延びて全容は不明である。南部区画は北辺がSD16・42、東辺がSD38に囲まれている。また、北部区画同様に、区画ができる以前に建物跡が並列していた空間であった可能性があり、ここで扱う遺構は厳密には南部区画に伴う遺構に限定できないが、南部区画範囲にある遺構を含めて扱う。

検出遺構は、掘立柱建物跡ST79～84の6棟、溝跡はSD33～42の10条、土坑は中型SK200・188の2基、小型土坑SK205・1308の2基がある。

掘立柱建物跡は調査区境にかかって全容不明なものもあるが、確認範囲では梁行2間×桁行3・4間の欄柱建物跡が認定しえた。ST82・83は桁行4間の可能性があり、桁行規模は約9.8～10.0m、他の桁行3間建物跡では7.4～7.7mである。いずれも棟方向は方位に一致させている。

土坑は僅かしかなく、SK1308は遺構でない疑いがある。SK200は埋土中に炭化物が検出され、建物跡ST80～84内に位置するが、建物跡との関係は断定できなかった。SK188と205はいずれも平面形が長方形で、区画溝跡SD16・38の脇に長軸方位を合わせて位置し、SD16・38の区画以後の所産と思われる。

溝跡は上述した区画溝跡SD16・42・38以外は建物跡に伴う雨水浸入防止用溝跡と捉えられる。類似場所に数度掘り直されており、その配置場所から南側のSD33～37と、北側のSD39～41の2グループに分かれる。SD39～41は南端が西へ折れて浅く途切れるが、北側はSD45(44)を東辺、SD44の西へ折れた部分

かSD46を北辺とするとみられる。SD39～41南端の位置はSD33～37北端とほぼ一致し、SD33～37とSD39～41が伴う建物跡が並列していたと捉えられる。なお、建物跡と溝跡の関係は、SD33～37がST80・81、SD39～41（SD44～46）がST79に伴うとみられ、SD16・38・42による南部区画に伴うのがST82～84とSK188・205と推測される。

#### ①. 溝跡

##### SD33～37 (第45・53図 PL.8) I13・18

位置：②区南部区画の東側斜面直下のSD38西脇に、西へ向かってSD37、36、33・34の順で並ぶ。SD33と34は途切れるが同一溝跡、SD35はSD36の造り替え部分が残存したと捉えた。このSD33～37北端はSD39～41の南端と接する付近で途切れ、SD39～41と併存したと思われる。重複：SD35→SD36、SD33・34→ST82（209）、SD36・37→SK201、SD35→SK240。SD37とST83（1311・1329）・ST81（1309・1312）・柱穴跡SK1313・1332、SD33・34とST82（214）、SD34とST82（226）・ST84（212）、SD35・36とST82（226）・ST83（227）、SD36と柱穴跡SK1330・1364は重複が僅かか、溝跡底で検出したため、重複関係は確認できていない。SD36とSD37の前後関係も把握できなかった。構造：SD37は北端が浅く途切れ、南端は調査区外へ延びる。N3°W方向に長さ約7.8mの長さを確認した。幅約0.4m、断面形は浅いU字状を呈し、検出面から底面までの深さは約5cmを測る。SD36は幅約0.3m、確認長約7.6mを測り、北端は西へ1.1mほど屈曲する。本址途中で西へL字状に折れるSD35が検出されたが、南北部分はSD36とほぼ重なって掘り壊されたとみられる。SD34はコ字状の溝跡で、幅0.6m、N4°W方向に長さ約4.4m続き、北・南端が0.7mほど西に折れる。南延長上にはSD33があり、本来連続した7.6m以上の長さの溝跡だが、埋土は深さ3～4cmと浅いために途切れるように検出されて別の溝跡と捉えてしまったと思われる。SD34の南端が屈曲するようにみえたのは溢れた雨水の浸食によると思われる。埋土：SD33・35・37は土層記録が漏れたが、SD34・36は灰黄褐色土を基調として小ロームブロックを含む。出土遺物：なし。所見：SD33～37はSD39～41同様に、建物跡1棟分に伴う長さ10m前後の雨水浸入防止用の溝跡で、ST80・81が伴う可能性がある。

##### SD38・42 (第45図 PL.8) I13・18

位置：②区南部区画の東側斜面直下に位置する。調査時にSD38とSD42の接続関係が捉えきれず、東側の斜面直下にある南北方向の溝跡をSD38、その先端から西へ折れてSD16に接続するまでをSD42としたが、掘り下げた結果2本の溝跡の底面が同じ高さで連続してSD16に繋がると判明した。SD38・42が区画するなかにはST82～84が伴うと捉えられる。重複：SD38→SK1308、SD45→SD38。ST80（1310・1316）・柱穴跡SK1318はSD38底面で検出したため、前後関係は確認できていない。また、SD16のところで述べたように建物跡に伴う雨水浸入防止用の溝跡と捉えられるSD39～41、SD44・45、SD46からなる区画に後出する可能性がある。構造：SD38は②区東側斜面直下にあり、N3°W方向に緩やかな弧を描いて南端は調査区外へ延びる。確認範囲での長さ約13.8mで、その北端から西へ屈曲するSD42は屈曲部からSD16に接続するまで約2.0mを測る。SD38は幅約0.5m、断面形はU字状を呈して検出面から底面までの深さ16cmを測る。底面は北側へ傾斜する。SD42は幅0.8mと幅広いが、底面北側の幅0.2mほどが一段深く、検出面から底面までの深さは約10cmである。埋土：SD38上層は斜面上方からの崩落土で、下層が細かいローム粒を少量含む灰黄褐色土である。SD42は下層や南岸際にロームブロックを含む土層がある。埋土の基調は灰黄褐色土である。出土遺物：なし。所見：SD38・42は②区南部区画に伴う溝跡で、その区画にST82～84が伴うと捉えた。

## SD39～41 (第45図) I13

位置：②区南部区画のSD33～37の北側にあり、SD39～41が平行して並ぶ。重複：SD36→SD41、SD40→ST82 (215)。SD39～41間の前後関係、SD39と土坑SK205、SK1386との関係は重複埋土が僅かで把握できなかった。構造：N16°W方向に延びる2.6m以上の長さの東辺の溝跡南端から、SD39～41が分岐する。SD39はN70°Eに長さ1.3mで幅0.3mを測る。SD40はN73°E方向に長さ2.3m、幅0.5mを測る。SD41はN68°E方向で長さ約1.7m、幅0.3mを測る。いずれも検出面から底面までの深さは8cm以下で西端は浅く途切れる。埋土：灰黄褐色土で大差はない。出土遺物：なし。所見：SD39～41周辺の溝跡の関係が調査では十分捉えきれておらず、特にSD44は複数の重複溝跡をまとめて捉えている疑いがある溝跡の番号と関係が混乱している。溝跡の平面分布からは、SD39～41に接続する東辺は北延長先にあるSD45へ接続していた可能性がある。SD45西脇にあるSD44もSD16に接続する溝跡と捉えられたものの、SD39～41東辺の延長先に位置して重複位置にSD39～41東辺に接続する別溝跡が存在した可能性がある。そのSD44・45北端から西側に延びるSD44とSD46があり、全体としてSD44・46を北辺、SD45 (・44)を東辺、SD39～41を南辺とする長さ10mの区画を形づくる可能性がある。この区画はST79など建物跡1棟に伴う雨水浸入防止用溝跡で、SD39～41はその部分的な造り替えの関係と思われる。また、南にある建物跡に伴う雨水浸入防止用溝跡と捉えられるSD33～37とは並列し、いずれもSD16との重複関係から、SD44の一部とSD38・42からなる区画が造られる以前の所産と思われる。

## ②. 掘立柱建物跡

## ST79 (第52図) I07・08・12・13

建物跡の認定：整理時に区画溝跡SD16周辺に散在する柱穴跡から建物跡が存在する可能性を検討し、SD45とSD38脇に直線的に並ぶSK238・244・1325・221を東桁行、SK221の西へ直交する方向3.8mにあるSK233を結ぶラインを南梁行、SK233から北へ直交する方向のSK189を結ぶラインを西桁行と捉えた。西桁行南から3番目柱穴跡は土坑SK1145と重複する位置に想定されるが、柱穴跡は検出されていない。本址中央の棟方向で南北にならぶSK138・1409・1408は東桁行柱穴跡と梁行で交差する位置になく、本址の内部柱穴跡とは認定しなかった。

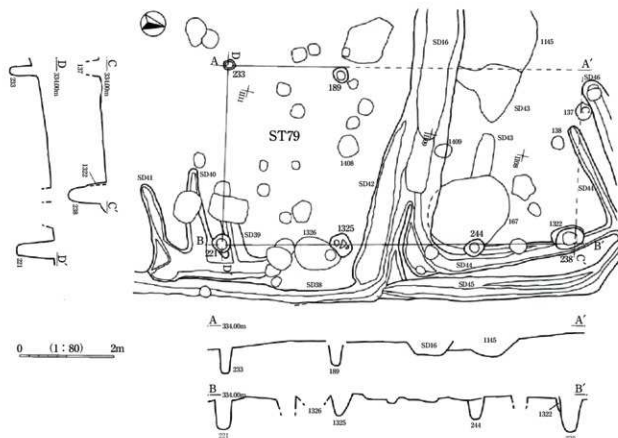
位置：②区南部区画の北寄りにSD44・46を北辺、SD39～41を南辺、SD45 (・44)を東辺とする区画内にある。

構造：確認範囲で梁行1 (2)間約3.8m、桁行3間約7.5mの規模で、梁行は中間柱穴跡が不明ながら規模から2間と推測される。棟方向はN14°Wである。柱間寸法は東桁行で北から2.1、3.0、2.4mである。柱穴跡の平面形は直径40cm前後の円形・楕円形が多く、検出面から底面までの深さは50～70cm、底面標高はSK1325・244が若干高く333.50mだが、他は333.0～333.2m前後である。北西部や梁行中間柱穴跡が見つかっておらず規模も断定はできないが、北辺SD44・46、東辺SD45、南辺SD39～41が本址に伴うと考えられているので、ほぼ建物跡の桁行規模は上記の3間とみられる。

出土遺物：なし。

重複関係：ST79 (244)→土坑SK167。他の遺構との重複関係は重複部が僅かで判然としない。直接重複していないが、SK1145やSD16との同時存在は考えにくく、石組をもつSK167とSK1145がSD16脇に並列することから、SK167に切られる本址はSD16より古いと考えられる。本址 (1325)とSK1326の関係やSD44と本址 (238・244)の関係は把握できなかった。なお、本址はSD44・46、SD45、SD39～41の溝跡に伴うと思われるが、SD39は本址内に入るのでSD40か41が伴う可能性がある。

所見：本址は認定に不安を残すが、SD44・46を北辺、SD45 (・44)を東辺、SD39～41を南辺とする溝跡



第52図 掘立柱建物跡ST79

に囲まれた建物跡で、南に隣接するSD33～37の区画に伴うST80・81と併存する可能性がある。

ST80・81 (第53図 PL.8) I 2・13・17・18

**建物跡の認定：**SD33～37を建物跡に伴う溝跡と推測し、その西側の柱穴跡からST80・81を認定した。

ST80はSD38脇に直線的に並ぶSK1316・1333・1310を東桁行、北東隅SK1316から西へ直交する方向のSK1331・223を北梁行と捉えた。東桁行の北延長先にSK1318があるが、その西へ直交した方向に柱穴跡がなく、建て替えの関係と捉えたST81も北へ延びないことから本址柱穴跡に含めなかった。

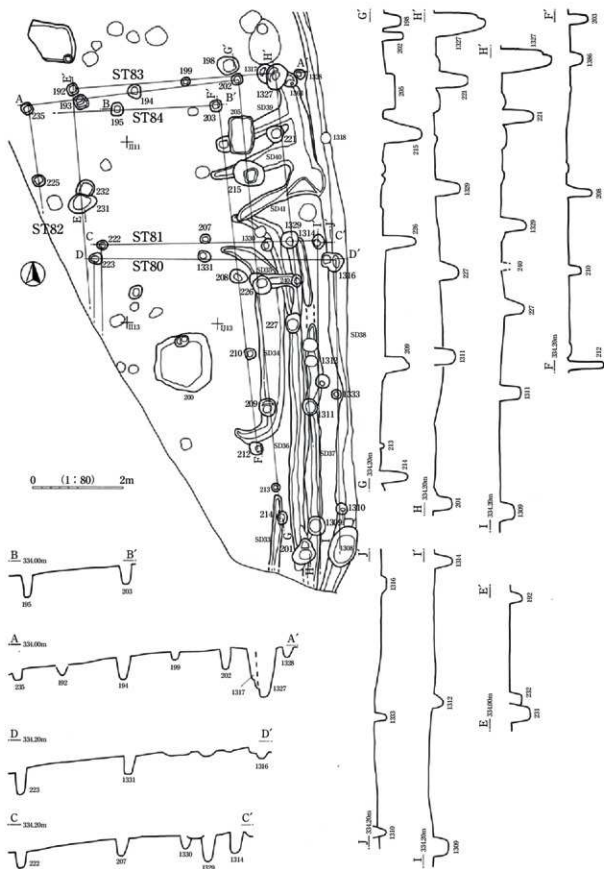
ST81はST80北梁行柱穴跡に隣接するSK1314・207・222を北梁行、SK1314・1312・1309を東桁行と捉えた。SK1309はST83東桁行柱穴跡の可能性もあり、本址の柱穴跡の認定に不安がある。

**位置：**②区南部に位置し、ST81とST80がほぼ同じ場所に重複し、建て替えの関係と捉えた。

**構造：**ST80は確認範囲で梁行2間約5.1m、桁行2間以上5.5m以上の規模の掘立建物跡で、棟方向はN3°Wである。柱間寸法は梁行で東から2.3・2.8m、桁行で北から2.3・3.0mを測り、柱穴跡は直径20cm前後の円形の平面形で、検出面から底面までの深さは約10～60cmを測る。底面標高は傾斜下方の西側のSK223で333.0m、東側桁行柱穴跡で333.8m前後と標高差があって柱穴跡の認定にやや不安は残る。

ST81は確認範囲で梁行2間約4.8m、桁行はSK1309までだと2間以上約6.3m以上の規模で、棟方向はN0°Wの掘立建物跡である。柱間寸法は梁行が東から2.3、2.5m、東桁行で北から3.1、3.2mである。柱穴跡の平面形は直径20～30cmの円形の平面形で、検出面から底面までの深さは約20～50cm、底面標高は西側ほど低く333.2m、東側のSK1309・1314で333.6m前後である。

**出土遺物：**なし。



第53図 掘立柱建物跡ST80～84



重複関係：ST81（1312・1309）とSD37の前後関係は把握できず、本址範囲内に位置するSK200は本址の内部施設と認定できなかった。隣接するSD38との関係は捉えられず、直接伴う溝跡は不明であるが、位置的にSD33～37に伴う建物跡のひとつと思われる。

所見：ST80・81に伴う雨水浸入防止用の溝跡は把握できなかったが、この建物跡に伴う溝跡と思われるSD39～41の屈曲する部分とSD33～37の区画北辺境に本址の北梁行が位置し、本址はSD33～37が伴う建物跡群の一部とみられる。

ST82・83・84（第53図 PL.8） I12・13・17・18

建物跡の認定：整理時に②区南部区画の北よりに東西方向に柱穴跡が直線的に並ぶと認められ、それを梁行と捉え、直交方向のSD38脇に並ぶ柱穴跡を東桁行として重複位置にST82～84の3棟を認定した。3棟は建て替えの関係と推測され、なかでもST82・83は北梁行の場所が一致した近接した時期の建て替えと思われた。いずれも南西部は調査区外へ延び、全容は不明である。

ST82はSD38に直交する方向で並ぶSK202・194・235を北梁行、その北梁行東端のSK202から南へ直交した方向に並ぶSK215・226・209・214を東桁行、北梁行西端のSK235から南、直交方向に並ぶSK235・225を西桁行と捉えた。西桁行、南梁行は調査区外へ延びて建物跡の全容は不明である。

ST83はST82北梁行と重なるSK1327・199・192を北梁行、その西端SK192から南へ直交する方向にあるSK232か231を西桁行、北梁行東端SK1327から南へ直交する方向に並ぶSK1329・227・1311を東桁行と捉えた。東桁行のSK1327とSK1329の間隔が長く、東桁行はSK1327・（不明）・1329・227か、SK1327・（不明）・240・1311と思われる。東桁行の南端は南へ延長した先のSK201やST81（1309）まで含む可能性があるが断定はできなかった。

ST84はST82・83北梁行と平行するSK203・195を北梁行、SK203から南へ直交方向に並ぶSK208・210・212を東桁行と捉えた。北梁行西端は調査区外へ延びて梁行規模は不明で、東桁行もSK212までは捉えられるが、それ以南は不明である。また、東桁行では北東隅のSK203と南のSK208との間隔が空きすぎており、途中に1間入る可能性がある。

位置：②区南部北よりにあり、ST82・83・84が重なって位置する。

構造：ST82は南西部が調査区外へ延びて不明だが、確認範囲で梁行2間約4.6m、桁行4間約9.8mの規模で、棟方向はN5°Wの個柱建物跡である。柱間寸法は北梁行の東から2.2、2.4m、東桁行で北から2.2、2.4、2.7、2.5mを測る。柱穴跡は直径20～40cmの円形か隅丸方形の平面形で、検出面から底面までの深さは40～60cm、底面標高は333.1～333.5mで、333.2～333.4m前後が多い。

ST83は南西部が調査区外へ延び、確認範囲で梁行2間約4.4m、桁行はSK1311までだと3（4）間約7.4m、南端をSK201までとすると4（5）間約10.7m、SK1309までで4（5）間約10.0mを測る。桁行が断定できないが、構造は棟方向がN6°Wの個柱建物跡である。東桁行の柱間寸法はSK1327・1329・227・1311とすると北から3.7、1.9、1.9m、南端のSK201を含めると3.2mである。東桁行をSK1327・（不明）・240・227とすると（2.3）、（2.3）、2.7mを測る。西桁行の柱間寸法2.3mと比較すると、北端のSK1327と1329の間の柱穴跡を見逃した可能性があり、中間に柱穴跡を想定した場合は、南端のSK201や1309を含めると5間になるが、周囲には桁行5間の建物跡がないのでSK201・1309を含まないかもしれない。柱穴跡は円形か楕円形の平面形で、東側の柱穴跡は長軸40～50cm、検出面から底面までの深さは約50cm前後と深く大きく、西側柱穴跡は直径20cmほどの円形の平面形で検出面から底面までの深さは20cm前後である。底面標高は北梁行中央のSK199や南東部柱穴跡が333.6m前後と高く、北東隅のSK1327が332.9mと低い。他は333.2～333.4m前後である。

ST84は南西部が調査区西外へ延び、確認範囲で梁行1間以上2.2m以上、桁行3間7.7mの規模の欄柱建物跡である。東桁の方位はN7°Wである。柱間寸法は東桁行北から3.9、1.7、2.1mを測り、北端が長いことから中間の柱穴跡を見逃した可能性がある。柱穴跡は直径20～30cmの円形や隅丸方形の平面形で、検出面から底面までの深さは約30～70cm、底面標高はSK195・212が333.2m、333.1mと低い、他は333.4～333.6m前後である。

出土遺物：なし。

重複関係：SD33・34→ST82(209)。ST82(214)とSD33・34、SD35とST82(226)・ST83(227)、ST83(1329・1311)とSD36・37、ST84(212)とSD34、ST83(1311)とSD37との関係は溝跡の埋土が僅かで前後関係は確定できなかった。また、ST82～84の範囲内に位置する土坑SK200は内部施設の可能性があるが、断定できなかった。所見：ST82～84はSD38・16の区画に伴う建物跡とみられる。

### ③. 土坑

#### SK200 (第51図 PL9) I18

位置：②区南部区画に位置する。重複：柱穴跡SK236に切られる。構造：平面形は1辺約1.3mの不整形方位を呈し、断面形はU字状を呈し、検出面から底面までの深さは約50cmを測る。長軸方位はN1°Wである。埋土：埋土中に炭化物の薄層があり、その上下はブロック土を含む埋め土である。炭層は埋土中のもので、直接伴うものではないと判断した。出土遺物：なし。所見：ST80～84内に位置するが、これらの建物跡内部施設とは断定できなかった。

#### SK188 (第51図) I12

位置：②区南部区画に位置する。重複：柱穴跡SK190と重複するが、前後関係は把握できなかった。構造：西壁は検出作業で削平して残存せず、残存部は東西約1.0m以上、南北約0.8mの規模である。長軸方位はN87°Wで、平面形は長方形を呈する。検出面から底面までの深さは東側で11cmと浅い。埋土：灰黄褐色土上の単層で、埋め戻しとは断定できなかった。出土遺物：なし。所見：SD16南脇に位置し、類似したやや小型のSK205がSD38に並行して位置する。両者は②区南部の区画溝跡に沿って位置するように認められ、SD16の区画以後の所産と思われる。

#### SK205 (第51図) I13

位置：②区南部区画にある。重複：SK205→柱穴跡SK1386。SK205とSD39の関係は把握できなかった。構造：平面形は長軸約0.8m、短軸約0.6mの長方形で長軸方位はN1°Wである。断面形は長方形で検出面から底面までの深さ約24cmを測る。埋土：細かいローム粒を含む灰黄褐色土。出土遺物：なし。所見：規模は異なるが、同じ長方形の平面形の中型SK188がSD16脇に位置し、本址がSD16と接続するSD38脇に位置する。SD16の区画以後のものと思われる。

#### SK1308 (第51図) I18

位置：②区南部区画の東斜面直下にある。重複：SD38→SK1308。構造：平面形は長軸0.9m、短軸0.7mの楕円形で、断面形はU字状を呈する。埋土：本址の上部で長さ50cmほどの礫が検出されたが、斜面上方のSH01から転落したもので、本址には関連しないと思われる。出土遺物：内耳鍋2片129g(第61図14)があるが、斜面下部の周辺部でも内耳鍋は出土しており、本址に直接伴うものではない。所見：SD38を切り、中世以後の所産としかわからない。

## 6. 経塚

SM01 (第54～57図 PL10・11)

C05

位置：②区北端から北西方向に延びる尾根先端に位置する。重複：なし。

調査状況：経塚の存在は地元でも知られていなかったが、確認調査時に②区北西部の尾根先端付近で河川礫の散布が認められ、周辺を清掃したところ河川礫を盛り上げた塚状遺構が発見された。翌年の面的調査で1字1石経石が採取され、礫石経塚と認定した。検出状態では、経塚は直径4mほどの円形範囲に河川礫が散布する僅かに盛りあがった塚と認められ、その所々に角礫が垣間見えた。石碑等のみみつっていない。この経塚に関連すると思われる河川礫は北側斜面にも散布し、その一部と思われる礫は確認調査10トレンチ下方の北側平坦地盛土下層から検出された。このテラス状平坦地は、経塚の造成以後につくられたもので、近代以後の所産と捉えられた。面的調査は清掃後に空中写真撮影と空中写真測量を行って現況の記録を作成し、続いて経塚中央を通る断面観察用ベルトを十字に設定して掘り下げた。その過程で発見された経石は位置を記録し、それ以外の河川礫についてもすべて洗浄して文字の有無を調べた。その後は十字のベルト断面図を作成してベルトを除去し、経塚を囲む角礫と溝跡を精査・記録し、さらに角礫を撤去した状況の記録を作成した。最後に底面にトレンチを入れて下部施設の有無を確認した。

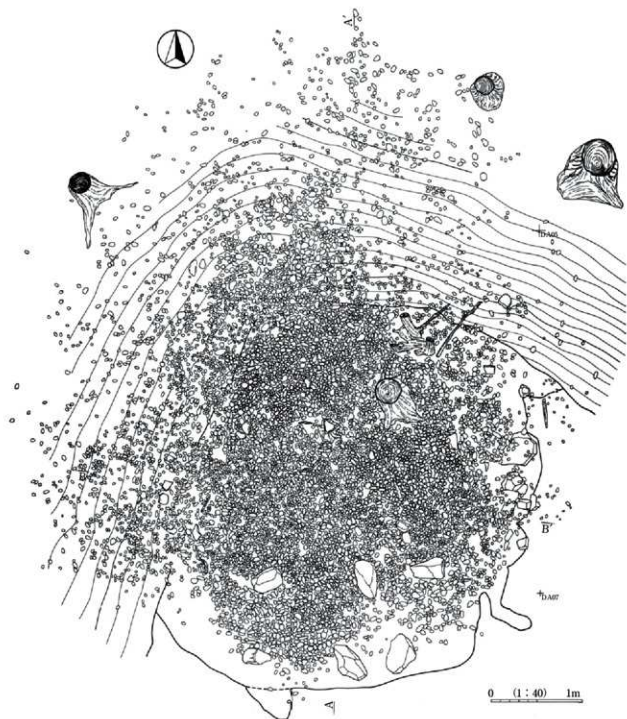
構造：経塚の平面形は溝跡や角礫の配置状況から方形と捉えられる。ただし、斜面下方の北・西辺は周囲を区画する溝跡や角礫が検出されず規模の詳細は不明である。溝区画内の平坦部は東西約2.4m、南北約3.2mを測る。主軸方位は溝跡からN4°E方向である。経塚の高さは南側検出面から遺存状態が良好な最高所で約30cmを測る。周囲を区画する溝跡は尾根続きの南・東側のみ認められ、幅約90cm、深さは10cmほどで断面形は立ち上がりが緩やかなU字状を呈する。溝の区画内側や溝内で人頭大の角礫を検出したが、本来は溝の内側に並べてあったとみられる。また、西側斜面には礫が僅かに残存し、西辺にも本来礫が存在した可能性があるが、北辺についてはまったく山礫が出土しておらず、礫の区画が存在したか、本来から存在しなかったかは明らかにできなかった。

以上から、本遺跡の経塚は尾根上を平坦に削って、尾根続きの東と南側を浅い溝で方形に区切り、内側に1辺30～50cmの角礫をならべて箱状の区画をつくって、その中に経石を含む河川礫を積み上げたと捉えられる。

埋土：経塚内は河川礫のみが積み上げられて土が混じらず、経塚表面は落葉を除去した程度で礫が露呈して表面に土を盛った形跡は確認できなかった。この表面には不整形な木根の窪みがあったが、他に杭や柱状標識等を建てた痕跡も検出されなかった。経石は経塚全体に散って出土し、出土標高もさまざまであった。また、経石は文字のない礫と同じ石を用い、別に採取して書いた経石を混ぜた可能性も低いと思われる。経石は文字のない河川礫と共に、書きながら積み上げたと思定される。なお、経塚に用いられた河川礫は丘陵上では採取できず、遺跡から西約750m離れた千曲川等で採取したものを持ち込んだと思われる。

出土遺物：経石（第69～99図）、石錘（第66図9）、内耳鍋（61図29）が出土した。内耳鍋は経塚北東部の上部から小破片が集中的に出土したが、接合せず完形にはならなかった。表層からの破片出土なので経塚に直接伴うとは断言できないが、居住遺構から離れた場所で、しかも土を盛らない構造の経塚上部で内耳鍋が出土したことは偶然の混入とも言い難い。石錘は経塚を造成するために運び込まれた河川礫に混じったものだろう。

経石は握り拳大より小さな河川礫に経文1字ずつ書いたもので、精査時に確認できたものもあるが、大部分は水洗して識別できたものである。経塚からは河川礫総数68,357個一重量約3,522.7kg出土している



第54図 経塚SM01平面

が、墨痕が確認できたのは753個—重量49.4kgにすぎない。経石の文字が剥落・磨滅で判読できないものが多いことから、調査以前に文字が消滅し、墨痕が薄く調査時に見逃したもの、あるいは経塚から斜面下方に転落し、北側斜面のテラス状平坦地造成土中に埋まったものも多いと思われる。しかし、文字の確認できなかった礫が67,604個（重量3473.3kg）あるのは注意される。経石に書かれた経典は突き止められなかったが、これまでの経塚調査で想定されている法華経（妙法蓮華経）とすると、一品～二十八品まで字数7万弱、文字種千八百数十字で、開・結合めて約83,000弱といわれる（註1）。この数は転落や盛土中に消えた経石を考えると、本遺跡の経塚を構成する礫総数に近いと思われる。しかし、一方で文字が確認

できなかった礫数の多さは、磨滅や見逃すには多すぎるように感じられ、法華経の一部のみを書いたか、あるいは経文数の少ない別經典を書いたのだろうか(註2)。また、本遺跡に近い山ノ内町の千手寺経塚(註1)のように火葬骨や、中央に「尊」と書かれた大き目の経石はない(註3)。

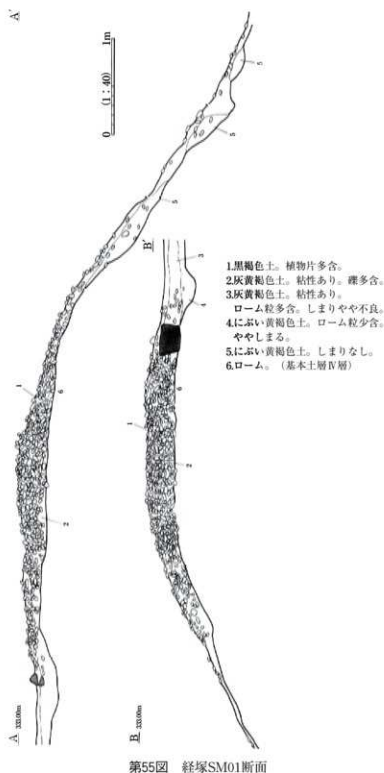
所見：経塚の時期は、断定できないものの、出土内耳鍋の時期とすると月岡遺跡の中世屋敷跡が営まれていた時期に重なる。しかし、月岡遺跡自体は近世にも耕地として利用され、近くには近世の墓も存在することから中世に限定するのは今少し慎重な検討が必要と思われる。

註1 千葉県かのへ経塚は明和二年(1765)に造られた一字一石経塚で、法華経とその開・結を含むすべての経石が確認された。その数は72000個とされる。(寺尾英智1991「付編 かのへ塚の性格」『千葉県香取郡大栄町かのへ塚・寺ノ上遺跡』(財)香取郡市文化財センター)

註2 隣接した山ノ内町の千手寺経塚(山ノ内町夜間瀬横倉千手寺経塚緊急発掘調査団1975「千手寺経塚」『高井』第三十一号 高井地方史研究会)では文字の書かれた石と、書かれない石が異なり、採取地点が異なる可能性が指摘されている。また、飯山市神明町第4号墳経塚では法華経の二十八品と開経と結経の名題を刻した銅板が出土し、「開経」は初品の徳行品のみ刻しているという(壇原長樹1986「古墳に築造された経塚二例」『高井』第七十四号 高井地方史研究会)。ここでは他に紙片が出土しているため、

銅板の刻書のみを例えに用いられないが、經典の一部のみを書く方法があったのだろうか。

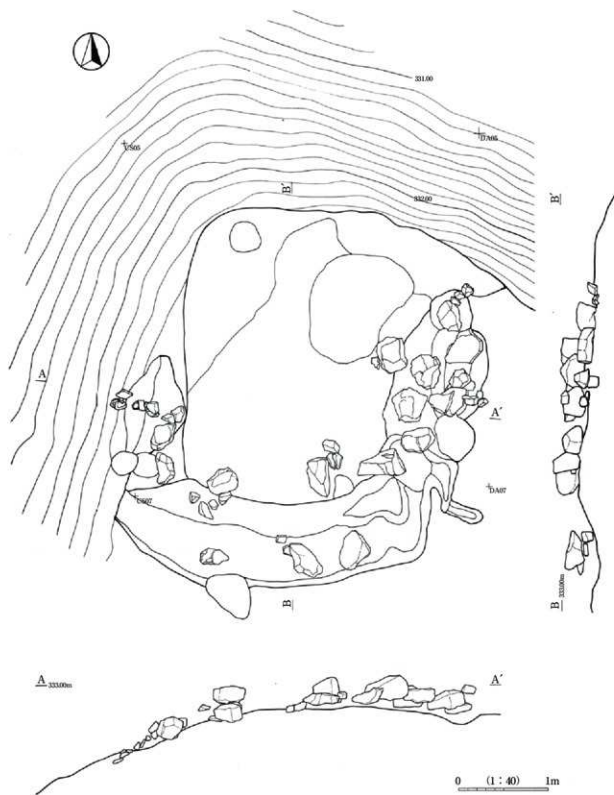
註3 山ノ内町夜間瀬横倉千手寺経塚緊急発掘調査団1975「千手寺経塚」『高井』第三十一号 高井地方史研究会



第55図 経塚SM01断面



第56図 経塚SM01経石出土状況



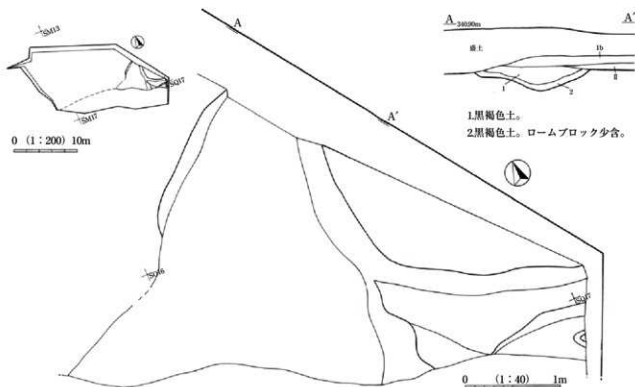
第57図 経塚SM01下部

## 第2節 中世以前の遺構と包含層

中世以前の遺構は、丘陵南西縁にあたる④区で不整形な自然の浸食地形とも思われる溝状遺構SD17が1条のみある。他に①区谷地形内のⅢ層から弥生後期初頭の土器が多く採取された。

SD17 (第59図) S19

位置：④区東端を南北に横断する。重複：なし。構造：Ⅳ層ローム層の上面で黒褐色土層の帯状落ち込みと認められ、南端は丘陵南面の急斜面で途切れる。傾斜上部で幅約1.2m、下方側で幅約3.0mと広がり、調査区内での確認長は約3.0mである。断面形は壁が緩やかなU字状で、底面は凹凸があり、傾斜下方の丘陵縁へむかって低くなる。東脇に直交方向の小規模な階段状の落ち込みが検出されたが、段丘縁の小規模な亀裂痕とみられる。埋土：基本土層Ⅲ層を基調とする。出土遺物：古墳時代の埴1点(第61図65)や弥生土器片少量がある。所見：出土遺物があるものの、雨水等が流れた浸食地形の疑いがある。



第58図 ④区SD17

中世以前の遺物包含層 (第57・58図 PL12) I19・20・24・25、N04・05

位置：①区中央南よりある小規模な谷地形内に堆積したⅢ層から、縄文時代から古代までの土器、石器が出土した。出土土器は弥生後期の土器が中心となる。

土層：古代以前の土器は②・④区でも出土したが、Ⅲ層の遺存状態が不良で土器出土も少ない。一方、①区谷地形内にはⅢ層が厚く遺存して多くの土器片が包含されていたため、このみで包含層の調査を実施した。①区谷地形内のⅢ層は色調やスコリア等の含まれ方からⅢa～Ⅲeまでの5層に分けられ、最も黒色の強いⅢb層に弥生土器が多く包含されている。Ⅲa・b層でも少量ながら古代・古墳時代の土器が含まれ



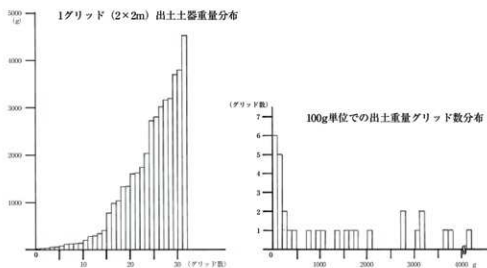
ており、弥生時代のみの土器包含層とは捉えられない。

**調査経過：**確認調査時に、Ⅲ層に古代以前の土器が包含されていると捉えられ、面的調査ではⅢ層が厚く残っている①区の谷地形内Ⅲ層を対象に包含層調査を実施することにした。中世遺構調査終了後に、谷地形内を南北方向に横断する3トレンチと傾斜方向の4トレンチの脇の50cmほど壁を設定し、その壁内の出土土器のみ土層別に位置を記録したが、他は2×2m四方の小グリッド毎に一括で取り上げた。整理作業ではグリッド別に出土重量を計測して出土土器の重量分布図を作成した。

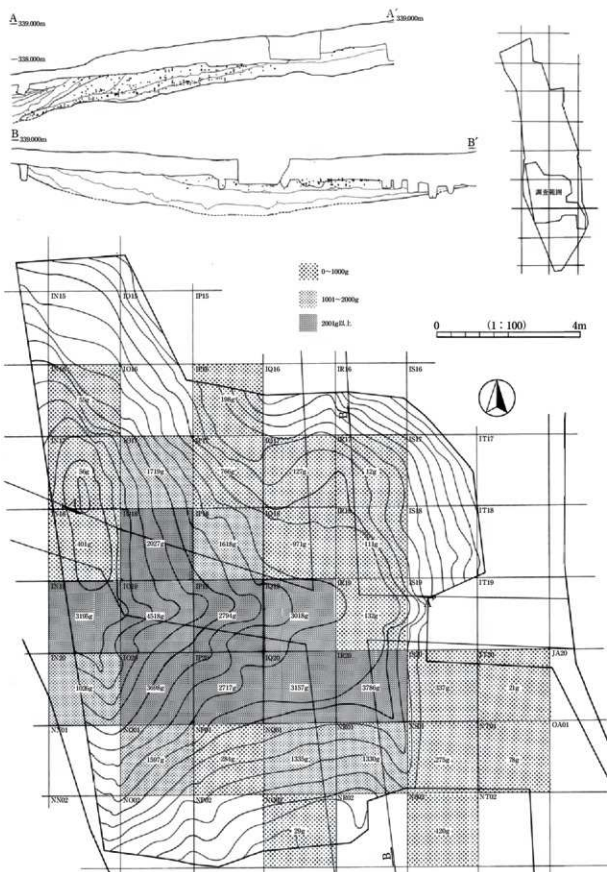
**構造：**小グリッド別土器出土重量を比較すると、出土土器重量500g以下が多いながら、特定重量に集中するグループは認められず、4,500gまでほぼ連続している(第59図)。また、重量分布を平面で比較すると、谷地形中央の低い場所での出土量が多く、谷地形縁や谷地形上方での出土が少ない(第60図)。これは包含層の厚さと、低い場所に土器片が集まりやすいなど、地形傾斜との関係に起因すると考えられる。また、土器集中が点的に偏する分布が認められないことは、土器廃棄に関わる活動の直接的な場所ではないとみられよう。さらに、整理で土器接合を試みたが、完形になるものはほとんどなかったことも直接的な廃棄場所と考えにくい傍証に挙げ得る。

**出土遺物：**Ⅲ層からは古代から縄文までの土器・石器が出土しているが、もっとも多いのが弥生土器で重量40,529gある。図示したのは出土土器の一部で、縄文土器(第65図224~229)、古代では須恵器坏(第62図63)、古墳時代では須恵器甕(第62図64)、土師器高杯(第62図66)、土師器壺(第62図67)、土師器甕(第62図68~70)、がある。弥生土器は壺(第63図94・97~120・121~124、第64図125~127・129~131・133~140・142~144・146・147)、甕(第64図149~164、166・168・169・171~178・179、第65図180~182・184~197)、高杯・鉢(第65図198~205・207~219)、ミニチュア土器(第65図223)を図示した。いずれも破片で全体形が窺えるものは155など僅かである。縄文~弥生時代と思われる石器・石製品には研磨痕のある石(第65図12~15)、石錘(第65図10・11)、凹石(第65図17)、石鏃(第66図13)、使用痕のある剥片(第66図12)を図示した。

**所見：**①区谷地形内のみで遺物採集を行ったが、古墳時代土師器や弥生土器は②・④区でも出土しており、月岡遺跡の丘陵の側面斜面に中世以前の土器が散布しているとみられる。調査した①区では出土土器のまとまりが人為的な遺構とは評価できないが、丘陵上に当該期の遺跡が存在する可能性があると思われる。



第59図 グリッド別弥生土器出土重量分布グラフ



第5表 掘立柱建物跡一覧表

①区の新立柱建物跡

番号	国	地区・ 区画	中地区	棟方向	梁行			桁行			柱配置	柱径 (cm)	底面標高 337.0+am	備考
					間数	長(m)	柱間(m)	間数	長(m)	柱間(m)				
ST01	18	①北部	104	N85°W	2	5.2	2.2-2.0	1以上	3.8以上	2.6-3.0	側柱	20~40	2.0-2.5	
ST02	18	①北部	104	N84°W	2	4.4	2.1-2.3	2以上	5.5以上	2.6-2.9	側柱	20~80	2.0-2.4	
ST03	18	①北部	104-09	N7°W	2	5.2	2.4-2.8	3以上	8.3以上	2.5~2.9	側柱	20~30	2.0-2.6	
ST04	19	①中央	I4-15-19-20	N88°W	2	4	2.0-0.4	4	9.1	1.7-2.9	側柱	30前後	0.7-1.4	
ST05	19	①中央	I4-15-19-20	N87°W	2	4.2	2.0-2.2	4	8.7	1.8~2.4	側柱	20~30	1.0-1.6	
ST06	19	①中央	I4-15-19-20	N84°E	2?	4.4	(2.2前後)	5	9.9	1.6-2.3	側柱	40前後	1.0-1.5	
ST07	20	①中央	I4-15-19-20	N89°W	2?	4.5	(2.2~2.3)	4	9.6	2.1~3.2	側柱	30~40	0.8-1.4	
ST08	20	①中央	I4-15-19-20	N87°W	2	4.2	1.8-2.4	4	9.3	2.1~2.5	側柱	20~30	0.5-1.5	
ST09	20	①中央	I4-15-19-20	N86°W	2	4.8	2.1-2.7	4	10.3	2.3-3.2	側柱	40~80	0.3-1.5	
ST10	20	①中央	I4-15-19-20	N87°W	2	4.5	2.2-2.3	3以上	8.0以上	2.5-2.8	側柱	30前後	0.8-1.5	
ST11	21	①中央	I4-15-19-20	N86°E	2?	3.8	(1.9前後)	4	9.2	2.0~2.7	側柱	30~40	0.7-1.4	
ST12	21	①中央	I4-15-19-20	N86°E	2?	4.7	(2.3前後?)	4	9	1.8-2.6	側柱	30~50	0.6-1.5	
ST13	21	①中央	I4-15-19-20	N85°W	2	4.7	2.2-2.5	4	9	2.0-2.7	側柱	30前後	0.1-1.0	
ST14	21	①中央	I4-15-19-20	N86°W	2	4.4	2.1-2.3	4	9	1.9-2.8	側柱	30前後	0.8-1.4	
ST15	22	①中央	I15-20	N3°W	2	5	2.3-2.7	5?	11.4	2.1-2.3?	側柱	20~30	1.2-1.8	
ST16	22	①中央	I15-20	N3°W	2	5.1	2.3-2.7	5?	11.3	1.8-3.1	側柱	20~30	0.6-1.7	
ST17	22	①中央	I15-20	N5°W	2	4.9	2.2-2.7	5?	11.3	1.7-2.7	側柱	20~30	0.8-1.8	
ST18	22	①中央	I15-20	N2°W	2	4.9	2.2-2.7	4	10.8	2.1-3.0	側柱	30~40	0.6-1.6	
ST19	22	①中央	I15-20	N1°W	2	5	2.5-2.5	4	11	2.2-3.2	側柱	20~40	0.8-1.4	
ST20	23	①中央	I15-20	N5°W	2	5.0	2.1-2.9	4	9.8	1.7-2.8	側柱	20~30	0.8-1.5	
ST21	23	①中央	I15-20	N7°W	2	4.6	2.2-2.4	4	9.8	2.2-2.8	側柱	30前後	0.8-1.5	
ST22	23	①中央	I15-20	N4°W	2	4.8	2.4-2.4	4	9	1.9-2.6	側柱	30前後	1.1-1.5	
ST23	24	①中央	I4-15-19-20	N3°W	2	4.6	2.2-2.4	4	9	1.9-3.2	側柱	20前後	0.5-1.8	
ST24	24	①中央	I4-15-19-20	N3°W	2	4.4	2.1-2.3	4	9.1	1.9-2.6	側柱	20前後	1.1-1.5	
ST25	24	①中央	I4-15-19-20	N3°W	2	4.6	2.4-2.2	4	9.5	2.0-3.0	側柱	20~30	0.8-1.5	
ST26	25	①中央	I15-19-20-25	N3°W	2	4.8	2.1-2.7	4	11.2	2.6-3.1	側柱	30~40	0.5-1.3	
ST27	25	①中央	I15-19-20-25	N2°W	2	4.2	2.1-2.1	5	11	1.8-3.0	側柱	30前後	0.5-1.4	
ST28	26	①中央	I15-20-25	N1°W	2?	4.8以上	不明	4	9.6	2.1-2.7	側柱	20~30	1.0-1.4	
ST29	26	①中央	I15-20-25	N3°W	2	4.8	2.2-2.5	4	9.3	1.9-2.5	側柱	20~30	0.8-1.5	
ST30	26	①中央	I15-20-25	N1°W	2	4.9	2.4-2.5	4	10.6	2.4~2.9	側柱	30前後	0.9-1.3	
ST31	27	①中央	I15-20	N5°W	2	4.3	2.0-2.3	4(5)	9.3(11.3)	1.9-3.2	側柱	30~40	0.9-1.4	
ST32	27	①中央	I15-20	N1°W	2	5	2.2-2.8	4	10.2	2.1-2.8	側柱	20~30	0.8-1.5	
ST33	27	①中央	I15-20	N10°W	2	4.8	2.3-2.5	5	11.2	1.9-3.0	側柱	20~40	0.8-1.5	
ST34	27	①中央	I15-20	N13°W	2?	4.9	2.4前後	4(5)	9.8(10.4)	1.8~(2.0)	側柱	20~40	0.7-1.2	
ST35	28	①中央	I20-25	N5°E	1	2	2	2	4.4	1.9-2.5	側柱	30前後	1.0-1.4	
ST36	28	①中央	I20-25	N1°E	1	2.3	2.3	2	4.5	2.0-2.5	側柱	20~30	1.0-1.4	
ST37	28	①中央	I20-25	N1°W	1	2.4	2.4	2	4	1.9-2.1	側柱	20~30	0.8-1.5	
ST38	28	①中央	I20-25	N1°W	1	2	2	2	4.4	1.9-2.5	側柱	20~40	1.0-1.2	
ST39	28	①中央	I20-25	N0°W	1	2.2	2.2	2	4.2	1.9-2.3	側柱	20~30	1.1-1.3	
ST40	28	①中央	I20-25	N4°W	1	2	2	2	3.9	1.7-2.2	側柱	20前後	1.1-1.4	
ST41	29	①中央	I4-15-19-20	N5°W	2	3.9	1.9-2.0	4(5)	7.5(9.8)	1.5-2.3	側柱	30前後	0.2-1.3	
ST42	29	①中央	I4-19	N0°W	1	2.1	2.1	2	3.6	1.8前後	側柱	20前後	0.7-1.2	
ST43	29	①中央	I19	N12°W	1	2.2	2.2	2	3.5	1.6-1.9	側柱	20前後	0.8-1.2	
ST44	40	①南部	I24-25, N04-05	N1°W	2	5.2	(2.6前後)	4	9.7	2.2-2.6	側柱	40前後	0.5-1.7	
ST45	40	①南部	I24-25, N04-05	N1°W	2	4.9	2.2-2.7	4	9.1	2.2-2.4	側柱	30前後	0.4-1.2	
ST46	40	①南部	I24-25, N04-05	N2°W	2	4.4	2.0-2.4	4	9	1.7-2.7	側柱	30前後	0.8-1.2	
ST47	40	①南部	I24-25, N04-05	N2°W	2	4.6	2.0-2.6	4	8.9	1.9-2.5	側柱	20~30	0.4-1.5	
ST48	40	①南部	N04-05	N2°W	2	4.2	(2.1前後)	4	7.1	1.7-2.1	側柱	20前後	0.4-1.2	
ST49	41	①南部	N04-05	N8°W	2	4.8	2.4-2.4	4	8.8	1.7~2.2	側柱	10~50	0.7-1.3	
ST50	41	①南部	I25, N05-10	N4°W	2	4.9~5.2	2.2-2.7	5?	10.6	1.8-2.4	側柱	30前後	0.6-1.6	
ST51	41	①南部	I25, N05-10	N2°W	2	4	1.9-2.1	4	7.9-8.2	1.4-2.7	側柱	30~40	0.8-1.2	
ST52	41	①南部	I25, N05-10	N2°W	2	4.2	2.1-2.1	4	9.2	2.1-2.7	側柱	20~30	0.8-1.4	
ST53	41	①南部	I25, N05, 001	N2°W	2	5	2.0-3.0	4	7.3	1.5-3.0	側柱	20~30	0.8-1.8	
ST54	41	①南部	I25, N05, 001	N1°W	2	5	2.2-2.8	3(4)	8.1(9.8)	2.5-3.0	側柱	30~40	0.6-1.6	
ST55	43	①南部	N05-10	N4°E	2	5.1	2.3-2.8	3以上	7.0以上	1.8-2.9	側柱	20~40	0.9-1.7	

## 第3章 遺構

番号	地区・区画	中地区	棟方向	梁行			桁行			柱配置	柱穴径 (cm)	底面標高 337.0+αm	備考
				間数	長(m)	柱間(m)	間数	長(m)	柱間(m)				
ST56	①南部	S05-10	N4'E	2	4.2	1.8-2.4	3以上	6.3以上	1.7-2.7	側柱	30-40	1.2-1.5	
ST57	①南部	S05-10	N3'E	2	3.9	1.7-2.2	3以上	6.6以上	1.7-2.9	側柱	30前後	1.1-1.8	
ST58	①北部	N04-05-09-10	N89'E	2	5.4	2.5-2.9	2以上	5.1以上	2.5-2.6	側柱	30前後	0.8-1.2	
ST59	①南部	N04-05-09-10	N86'E	2	5.4	2.6-2.8	2以上	4.6以上	2.1-2.5	側柱	30前後	0.8-1.2	
ST60	①南部	N09-10	N87'E	2	4.5	2.2-2.3	2以上	5.8以上	2.3-3.5	側柱	20-40	0.8-1.8	
ST61	①南部	N09-10	N86'W	2	4	2.0-2.0	2以上	5.7以上	2.5-3.2	側柱	20-40	0.8-1.7	
ST62	①北部	N09-10	N84'E	2	5.2	2.2-3.1	2以上	4.5以上	2.0-2.5	側柱	30前後	1.0-1.5	
ST63	①南部	N04-09	N86'E	2	4.2	2.1-2.1	2以上	3.2以上	1.5前後	側柱	20-40	0.9-1.1	
ST64	①北部	N04-09	N89'E	2	4.6	2.3-2.3	2以上	3.2以上	1.6	側柱	20-30	0.9-1.4	
ST65	①南部	N04-09	N90'E	2	5	2.3-2.7	2以上	3.5以上	1.7	側柱	20-30	0.9-1.5	

②KST-Ⅰ

番号	地区・区画	中地区	棟方向	梁行			桁行			柱配置	柱穴径 (cm)	底面標高 332.0+αm	備考
				間数	長(m)	柱間(m)	間数	長(m)	柱間(m)				
ST66	②北部	I02-07-08	N29'W	2	4	1.9-2.1	4	8.4	1.9-2.6	(側)	30-50	1.0-1.6	
ST67	②北部	I02-07-08	N30'W	2	3.9(4.9)	1.7(2.7)-2.2	4	7.7	1.6-2.2	(側)	30-50	0.9-1.4	
ST68	②北部	I02-07	N30'W	2?	4.7	(2.3前後)	3	7.2	2.1-2.3	側柱	30-60	0.8-1.4	
ST69	②北部	I02-07	N32'W	2?	4.8?	(2.4前後)	3	7.7?	2.3-2.7	側柱	40前後	0.9-1.4	
ST70	②北部	I02-07	N23'W	1以上	2.4以上	2.4	3	7.2	2.2-2.8	側柱	20-40	1.5-1.6	
ST71	②北部	D21-22, I01-02	N30'W	2	4.9	2.4-2.5	3	6.3	1.9-2.3	側柱	20-50	0.8-1.7	
ST72	②北部	D21-22, I01-02	N31'W	2	4.8	2.0-2.8	3	6.2	1.9-2.3	側柱	40-60	0.9-1.4	
ST73	②北部	D21-22, I01-02	N25'W	1以上	3.0以上	3	3	6.6	1.6-3.4	側柱	20-40	1.1-1.6	
ST74	②北部	D21-22, I01-02	N25'W	1以上	(4.9?)	1.8(2.2)	3	6.3	1.9-2.4	(側)	40前後	0.8-1.3	
ST75	②北部	D21-22, I01-02	N35'W	2	4.6	2.1-2.5	3	5.6(5.8)	1.6-2.0	側柱	20-40	0.8-1.2	
ST76	②北部	D21-22, I01-02	N28'W	2	5.1	2.3-2.8	4	7.7	1.7-2.3	側柱	20-40	1.2-1.6	
ST77	②北部	C22, I02	N8'W	2?	5.4?	(1.5?)	4?	7.6?	1.8前後	(側)	20-40	1.2-1.7	規模詳細不明
ST78	②北部	C22, I02	N5'W	2?	2.6以上	2.6	2以上	2.7以上	2.7?	(側)	20-40	1.2-1.8	規模詳細不明
ST79	②南部	I07-08-12-13	N14'W	2?	3.8	(1.9前後)	3	7.5	2.1-3.0	側柱	40前後	1.0-1.5	
ST80	②南部	I12-13-17-18	N3'W	2	5.1	2.3-2.8	2以上	5.5以上	2.3-3.0	側柱	20前後	1.0-1.8	
ST81	②南部	I12-13-17-18	N0'W	2	4.8	2.3-2.5	2以上	6.3以上	3.1-3.2	側柱	20-30	1.2-1.6	
ST82	②南部	I12-13-17-18	N5'W	2	4.6	2.2-2.4	4?	9.8?	2.2-2.7	側柱	20-40	1.1-1.5	桁行規模不明
ST83	②南部	I12-13-17-18	N6'W	2	4.4	1.9-2.4	3(4?)	7.4(10.7?)	1.9-(3.7)	側柱	40-50	0.9-1.6	桁行規模不明
ST84	②南部	I12-13-17-18	N7'W	1以上	2.2以上	2.2	3?	7.7?	2.1-(3.9)	側柱	20-30	1.1-1.6	桁・梁規模不明

第6表 土坑一覽表

SK番号	地区区画	中地区	分類	平面形	長軸(m)	短軸(m)	長軸方位	断面形	深さ(cm)	壁	底面	備考
448	①中央	I15	大型Ⅰ類	長方形	2.2	1.6	N60'E	長方形	22	垂直	平坦	SD2と関連するか。
979	①南部	I24-25	大型Ⅰ類	長方形	2.3	2	N88'W	長方形	18	垂直	平坦	掘出土。区画境施設か。
1218	①南部	S29-10	大型Ⅰ類	不整形長方形	2.9以上	2.5	N88'W	長方形	56	垂直	平坦	
1268	①南部	I25	大型Ⅰ類	方形	2.3	2.1	N6'E	長方形	34	垂直	平坦	掘出土。I29造り替え区画境施設か。
1269	①南部	I25	大型Ⅰ類	方形	2.1	2	N2'W	長方形	57	垂直	平坦	SKI268造り替え区画境施設か。
1272	①南部	N04+05	大型Ⅰ類	方形	2	2	N25'E	長方形	12	垂直	平坦	
1306	①南部	I25	大型Ⅰ類	方形	1.8	1.7	N6'E	進合形	36	垂直	平坦	SKI268造り替え区画境施設か。
303	①北部	I04	大型Ⅱ類	長方形	1.8	1.1	N83'W	進合形	70	垂直	平坦	ST02内施設か。
304	①北部	I04-09	大型Ⅱ類	長楕円形	2.7	1.9(1.5)	N10'W	進合形	38	垂直	平坦	ST03内施設か。
315	①北部	I04	大型Ⅱ類	長方形	2.8(2.1)	1.8(1.1)	N83'W	進合形	60	垂直?	平坦	ST01内施設か。
343	①北部	I10-15	大型Ⅱ類	長方形	2.6	1.8	N77'E	長方形	42	垂直	平坦	三隅に掘。区画境施設か。
344	①北部	I09	大型Ⅱ類	長方形?	0.8m以上	1.4	N2'W	U字状	42	垂直	平坦	建物跡内施設か。
878	①南部	N09-10	大型Ⅱ類	不整形長方形?	2.0m以上	2	N79'W	進合形	70	垂直	平坦	SN05関連施設か。
910	①南部	N04+05	大型Ⅱ類	長方形?	2	1.3	N89'W	進合形	30	斜め	平坦	
983	①南部	I24	大型Ⅱ類	長方形	1.8	1.3	N7'W	進合形	30	斜め	平坦	掘土中掘出土。建物跡内施設か。
1083	①中央	I20	大型Ⅱ類	長方形	2.3	1.5	N2'W	長方形	52	1412垂直	平坦・軟弱	建物跡内施設か。
1152	①南部	N09-10	大型Ⅱ類	不整形長方形	2.0m以上	2.1	N79'W	長方形	73	垂直	平坦・軟弱	SN05関連施設か。
1300	①中央	I20	大型Ⅱ類	長方形	2.5m前後	1.2	N9'W	長方形	40	垂直	平坦・軟弱	建物跡内施設か。
1217-1219	①南部	N09-10	大型Ⅱ類	長方形	3.4m	1.1	N2'E	長方形	38~42	垂直	平坦・軟弱	中央SKI1218に切られる。
301	①北部	I10	中型Ⅰ類	円形	1	0.9	—	長方形	22	垂直	平坦・軟弱	中央で掘出土。
558	①中央	I15	中型Ⅰ類	不整形長方形	1.0m以上	0.9	N80'E	長方形	20	垂直	平坦・軟弱	掘土中に炭化物含む。
684	①中央	I20	中型Ⅰ類	楕円形	1.2	0.9	—	長方形	14	垂直	平坦・軟弱	掘土中に炭化物含む。

## 第2節 中世以前の遺構と包含層

SK番号	地区	区分	分類	平面形	長軸(m)	短軸(m)	長軸方位	断面形	深さ(cm)	壁	底面	備考
873	①中央	E20	中型Ⅰ類	不整形円形	1.2	1	—	逆台形	12	斜め	平坦・軟弱	
992	③中央	E15	中型Ⅰ類	長方形	1.4	1.1	N88°W	逆台形	10	斜め	平坦・軟弱	
1073	③中央	E15	中型Ⅰ類	不整形円形	1	0.9	N2°E	逆台形	12	斜め	平坦・軟弱	
1098	③中央	E19	中型Ⅰ類	不整形円形	1.6	1.4	—	逆台形	100	斜め	丸底	
1103	①南部	N04・05	中型Ⅰ類	方形	1.1	1.1	N5°E	長方形	10	垂直	平坦・軟弱	
1210	①南部	N05	中型Ⅰ類	不整形円形	1.2	1.2	N8°W	長方形	24	垂直	平坦	
1213	①南部	N05	中型Ⅰ類	不整形円形	1.3	1.3	N5°W	長方形	20	垂直	平坦	
1254	①南部	E24	中型Ⅰ類	不整形円形	1.5	1.0以上	N2°W	長方形	14	垂直	凹凸あり	
1275	①南部	N10	中型Ⅰ類	不整形長方形	1.5	1.2	N85°E	長方形	38	垂直	平坦	
1290	①南部	N10	中型Ⅰ類	方形?	1	0.5以上	N2°E?	長方形	31	垂直	平坦	
1345	③中央	E20	中型Ⅰ類	不整形円形	1.2	1.2	N20°W	逆台形	52	垂直	平坦	SK1300底面検出。
1375	①南部	N10	中型Ⅰ類	方形?	1.2	1.0以上	N12°W	長方形	22	垂直	平坦	
1486	③中央	E25	中型Ⅰ類	不整形円形	1.6	1.4	N52°W	長方形	10	垂直	平坦	
435	③中央	E15	中型Ⅱ類	隅丸長方形	1.2	0.9	N87°E	長方形	14	垂直	平坦	
906	①南部	N09	中型Ⅱ類	長?方形	1.4	0.7以上	N18°W	長方形	66	垂直	平坦	
953	①南部	N10	中型Ⅱ類	長方形	1.2	0.9	N6°W	長方形	26	垂直	平坦	
1253	①南部	E24	中型Ⅱ類	不整形長方形	1	0.6	N2°W	U字状	16	垂直	平坦	
1473	③中央	E19	中型Ⅱ類	不整形長方形	1.2	0.9	N8°W	逆台形	36	斜め	凹凸あり	埋土中露出土。
447	③中央	E15	中型Ⅱ類	長方形	1.4	0.8	N2°W	U字状	12	垂直	平坦	
681	③中央	E20	中型Ⅱ類	楕円形	1	0.5	N3°W	逆台形	26	垂直	平坦	ST27内施設か。
760	③中央	E20	中型Ⅱ類	楕円形	1.5	0.7	N12°E	U字状	30	垂直	丸底	ST18・19・27内施設か。
1172	③中央	E19	中型Ⅱ類	楕円形	1.4	0.8	—	逆台形	70	斜め	平坦	柱穴跡の疑いあり。
1487	③中央	E15	中型Ⅱ類	長方形	1.4強	0.8	N7°E	長方形	34	斜め	平坦	建物跡内施設か。
257	①南部	N10	小型	方形	0.7	0.6	N17°W	U字状	36	斜め	丸底	柱穴跡の疑いあり。
425	③中央	E20	小型	円形	0.8	0.7	—	U字状	16	斜め	丸底	炭化物含む。
466	③中央	E20	小型	円形	0.5	0.5	—	U字状	14	斜め	平坦	焼土粒少含む。
467	③中央	E20	小型	円形	0.7	0.7	—	逆台形	18	斜め	平坦	焼土粒含む。
472	③中央	E20	小型	円形	0.5	0.5	—	U字状	16	斜め	丸底	焼土含む。
534	③中央	E20	小型	円形	0.8	0.6	—	U字状	16	斜め	丸底	焼土含む。
571	③中央	E20	小型	円形	0.6	0.6	—	U字状	22	斜め	丸底	
642	③中央	E20	小型	円形	0.7	0.7	—	U字状	14	斜め	平坦	
643	③中央	E20	小型	不整形円形	0.6	0.5	—	逆台形	12	斜め	平坦	
692	③中央	E25	小型	円形	0.4	0.4	—	長方形	12	垂直	平坦	柱穴跡の疑いあり。
700	③中央	E25	小型	楕円形	0.5	0.4	—	長方形	6	斜め	平坦	浅い。
769	③中央	E25	小型	不整形円形	0.6	0.5	—	U字状	14	斜め	丸底	柱穴跡の疑いあり。
783	③中央	E15	小型	楕円形	0.8	0.6	N9°W	方形?	14	斜め	丸底	銅線出土。
1008	③中央	E25	小型	楕円形	0.9	0.8	—	U字状	16	斜め	丸底	中世か不明。
1013	③中央	E20	小型	楕円形	0.7	0.6	N30°E	逆台形	14	斜め	平坦	焼土含む。
1074	③中央	E20	小型	不整形円形	0.7	0.6	—	U字状	32	斜め	丸底	
302	①北部	E10	他	不整形円形	1.4以上	1.6	—	逆台形	42	斜め	凹凸あり	SD02投食部か。
341	①北部	E09	他	円形	0.6	0.6	—	長方形	42	垂直	平坦	近景。
338	①北部	E10	他	円形	0.6	0.6	—	長方形	24	垂直	平坦	近景。
513	③中央	E20	他	楕円形	0.7	0.5	—	逆台形	14	斜め	平坦	近景。
982	①南部	E24	他	円形	0.8	0.7	—	逆台形	20	斜め	平坦	近景。
1145	②北部	E08	大型Ⅰ類	不整形円形	2.5	2.1	N8°W	逆台形	80	斜め	平坦	堺型に石組。区画境施設か。
167	②北部	E08	大型Ⅰ類	不整形円形	1.7	1.7	—	逆台形	39	斜め	平坦	堺型に石組。区画境施設か。
48	②北部	D22	大型Ⅱ類	長方形	2.5	1.2	N35°W	逆台形	36	斜め	平坦	
39	②北部	D22	中型Ⅰ類	台形	1	0.8	N31°W	逆台形	18	斜め	平坦	
96	②北部	D22	中型Ⅰ類	方形	1.2	0.9	N30°W	逆台形	30	斜め	平坦北側傾斜	
120	②北部	E07	中型Ⅰ類	円形	1	1	—	逆台形	22	斜め	丸底	
200	②北部	E18	中型Ⅰ類	不整形円形	1.3	1.3	N1°W	U字状	50	斜め	丸底	埋土中炭化物。
1142	②北部	D22	中型Ⅰ類	方形	1.3	1.3	N18°W	逆台形	24	斜め	平坦	
188	②南部	E12	中型Ⅱ類	長方形?	1.0以上	0.8	N87°W	長方形	11	垂直	平坦	
103	②北部	E01	小型	円形	0.7	0.7	—	U字状	16	斜め	平坦	埋土中炭化物。
145	②北部	E07	小型	方形	0.8	0.7	N16°W	逆台形	28	斜め	平坦	
205	②南部	E13	小型	長方形	0.8	0.6	N1°W	長方形	24	垂直	平坦	
1308	②南部	E18	小型	楕円形	0.9	0.7	—	U字状	28	斜め	丸底	木根痕の疑いあり。

## 第4章 遺物

月岡遺跡では旧石器から近世に至るまでの遺物が採取されたが、弥生時代後期初頭と中世が多い。発掘地点が丘陵先端付近であることから中世以前の遺物は調査地上方の丘陵上から流れてきた可能性があり、丘陵上には弥生時代や旧石器時代の遺跡が存在する可能性が示唆される。

### 第1節 焼物 (第61～65図 第7表)

#### 1. 中近世の焼物 (第61・62図1～62)

中世の焼物は総数182点出土し、すべて破片である。在地産土器類のカワラケ・内耳鍋、国産陶器の古瀬戸天目茶碗、珠洲壺・甕・すり鉢、輸入陶磁器の青磁碗・青花皿・天目茶碗などがあり、年代的には13～16世紀前半までがある。近世陶磁器は中世遺構に混入して出土したものも含めて、伊万里と唐津の碗・皿、すり鉢など14点と僅かで、ほとんどは18世紀以後である。ここでは中近世の焼物をまとめて報告する。

##### (1) 在地産土器

在地産の土器にはカワラケと内耳鍋がある。カワラケは総数25点採取され、酸化炎焼成で明褐色を呈する。手づくねカワラケは31の1点のみあり、他はロクロ調整である。31は口縁部に煤が付着し、灯明皿に利用されている。13世紀と思われる。ロクロカワラケは口径から10・39の小、1・7の大、11の特大の3法量あり、形態差から複数時期のものがある。

内耳鍋は瓦質内耳鍋2点と酸化炎焼成内耳鍋115点出土したが、小破片ばかりで個体数は少ない。瓦質内耳鍋は21・45を図示した。色調は黒灰色で、胎土は酸化炎焼成内耳鍋より砂の含有が少ない。口縁部が長く外反する形は、酸化炎焼成の古い形態の内耳鍋と共通し、酸化炎焼成の内耳鍋出現直前のものと思われる。21は断面に耳接合痕があり、耳の接続方法は粘土紐を差込んで周囲を粘土で補強充填する。他の酸化炎焼成内耳鍋は細砂を多く含む胎土で、明褐色を呈する焼成である。2・40・60・61の口縁部がやや厚く長いものと、19・29・41・59・62などの薄手で、口縁部が短く、外反が弱い形態がある。

##### (2) 古瀬戸

SH01や①区SK340などから3点出土し、2点図示した。いずれも後期様式の日目茶碗で、24が後Ⅱ・Ⅲ期、4が後Ⅲ期と思われる。4トレンチから鈿皿と思われる破片が出土したが図示していない。(註1)

##### (3) 珠洲

珠洲は①区中世遺構や盛土層中から壺・甕・すり鉢など29点出土した。甕破片22点、壺と思われる破片3点、すり鉢破片4点で個体数は少ない。甕破片は①区SX01の北側やSH02周辺に複数片が集中して出土したが、それ以外は散在的である。26が珠洲Ⅲ期、9が珠洲Ⅳ期、30が珠洲Ⅳ・Ⅴ期の所産と思われる。30の甕は漆で補修されており、口縁直下に「二」と読める沈線が認められる。すり鉢は内面の鈿目の特長から珠洲Ⅲ・Ⅳ期とみられる。(註2)

## (4) 中国産陶磁器

青磁碗4点、青磁小鉢1点、青花皿1点、天目茶碗1点、白磁碗1点が出土した。青磁碗は32が龍泉窯系の画花文碗、43は玉縁口縁の碗、6は体部破片ながら玉縁口縁の碗体部破片と思われる。42は略完形の青磁碗で外面に細い蓮弁、内面に花卉を削り出す。また、内面には付着物がある。44は見込みに魚文を配した小鉢である。3は中国産天目茶碗、16が青花皿である。白磁碗片は小破片で図示していない。これらの陶磁器は13～16世紀前半までの年代幅があって1時期の量は僅かである。また、県内の13世紀の遺跡で一般的に出土する龍泉窯系蓮弁文青磁碗は出土していない。(註3)

## (5) 唐津

唐津は碗3点、皿2点、すり鉢1点が出土した。碗は何れも水箆されたきめ細かい胎土である。皿は13のみ図示したが、赤茶褐色の胎土で口唇部に鉄錆釉が施される。すり鉢は図示していないが、無釉で内面に細い鉛目を密に入れた体部破片で肥前Ⅲ期と思われるものがある。(註4)

## (6) 伊万里

8点出土した。何れも小片で図示したのは20の肥前Ⅳ期と思われる碗、23の小碗か仏飯と思われる破片のみである。他には青磁釉の破片、上絵付破片、陶胎の染付碗、小片で識別不能な皿と思われる破片がある。時期的には18世紀頃のものと思われる。1層やSX05、SH01から出土し、SX05出土品は小片で混入の疑いがある。(註4)

## 2. 古墳～古代の土器 (第62図63～70)

古墳～古代の土器は①区Ⅲ層、あるいは④区から出土した。小片で弥生土器との識別が不十分だが、出土量は僅かである。古墳中期の土器は66の脚屈折高坏の柱状高台、古墳後期の土器は64の壺があり、65の須臾器は当該期の所産と思われる。67は古墳後期の直口壺口縁破片と思われるが、摩滅して仔細不明である。他に刷毛調整の甕と思われる破片があるが、古墳時代とも断定しきれず図示していない。古代では63の須臾器高台坏の底部破片が1点ある。外底回転系切りで高台端部の内側が接地する。

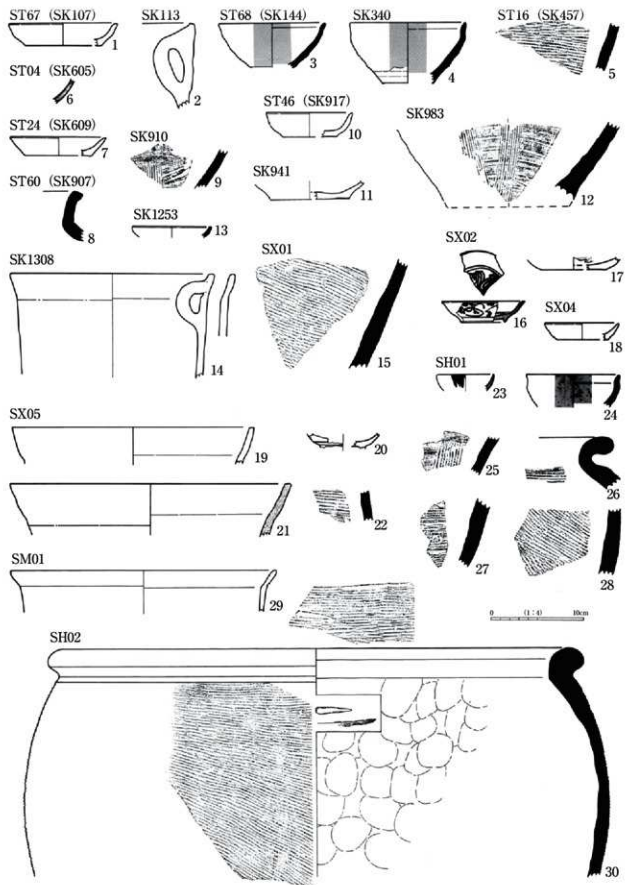
## 3. 弥生土器 (第63～65図71～223)

今回の調査で採取された弥生土器は総量49,230gあり、包含層出土品が40,529gで約82%にあたる。出土土器は破片ばかりで全体形が窺えるものはほとんどない。その中心は弥生時代後期初頭のもので、他に弥生中期後半の粟林式と思われる壺頸部破片が僅かに出土している。胎土は明褐色～明灰褐色を呈し、1mm以下の長石・石英・雲母・風化酸化鉄粒などの細かい粒子を含むのは共通する。焼成は全般的に良好で、2次焼成を受けたと思われる破片もある。以下、器種別に説明を加える。

## (1) 壺 (第63・64図71～147)

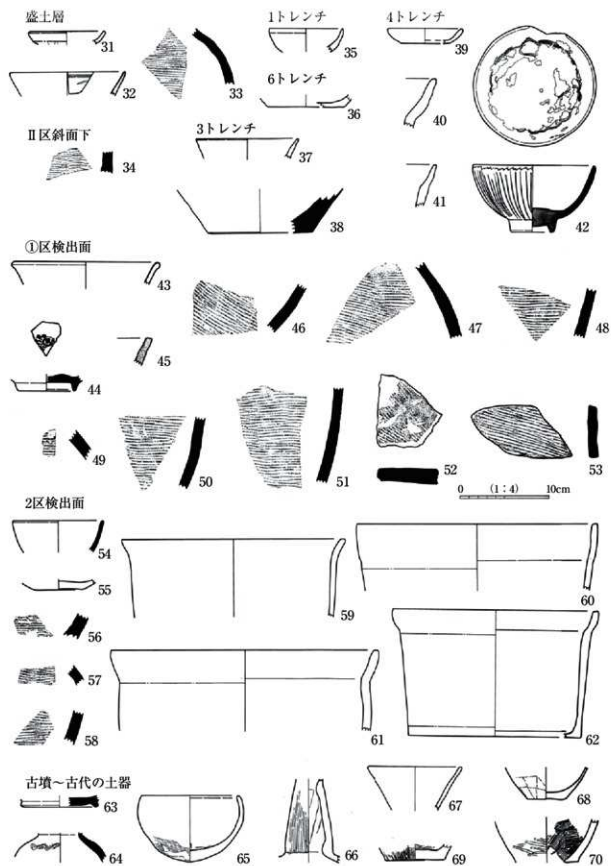
全体形を窺えるものはなく、小破片ばかりである。部位別に特徴を記す。

口縁部では、端部が屈曲する71～87・89・92・94、内湾ぎみに立ち上がり端部が上方に尖る88・90・91・93、その中間の95・96がある。端部が屈曲する形態にはさらに71の肥厚するもの、72の折れるもの、78の内湾するものがある。71は北陸の影響によるか。口縁部の調製は紐輪積み後に刷毛調整で器面を整え、外面と口縁部内面をヘラミガキするものと、ないものがある。ヘラミガキは頸部外面を縦方向、口縁内面は横方向もしくは連続した弧状に施され、赤彩スリップ技法に伴うミガキ以外にも、赤彩を伴わない



第61図 中近世の焼物 1





第62図 中近世の焼物 2・古墳～古代の土器

ミガキもある。ただ、赤彩する場合は基本的にミガキを伴い、98は頸部横線文が赤彩のミガキで一部消えている。文様は頸部に沈線・櫛描文を施し、胴部や口縁部内面を赤彩するものが多い。口縁部が磨滅して仔細不明なものが多いが、赤彩は内外面、内面のみ、内面から口縁部外面上部まで施すものがある。また、71・72のように口縁部外面上部に金属器か非常に薄く削ったヘラ先などの工具で、格子状沈線を施すものがある。沈線は左下がり→右下がり沈線の順とみえ、71の肥厚口縁の形態や72～74のように口縁部が折れる形態に、格子状の沈線と内面から口縁外面上部に赤彩を施すものが僅かに認められる。口縁部を屈曲させた形状に関連して口縁部文様帯が施されたと思われる。口縁が外反して端部が尖るものは内外面か、内面赤彩するものがある。

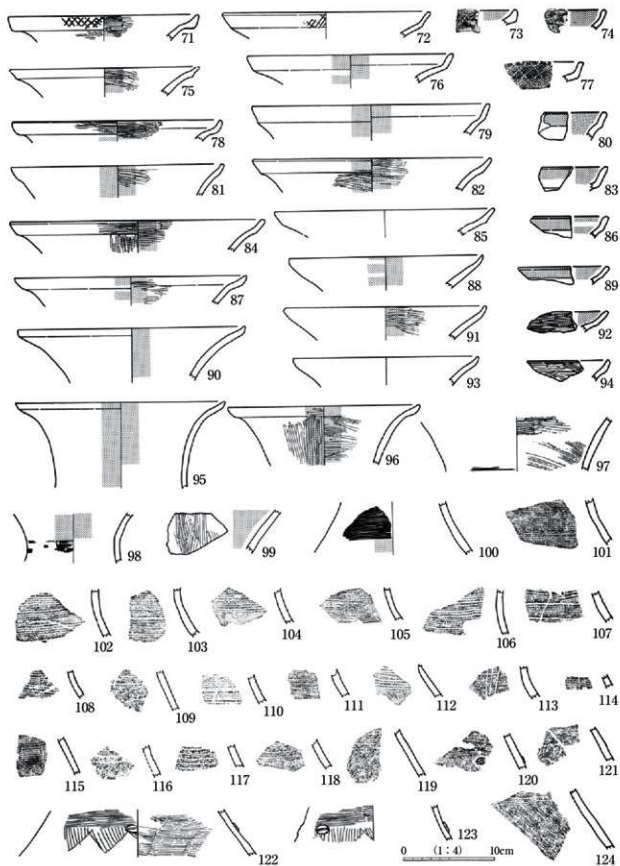
頸部は櫛描直線文を数段施し、その下端に鋸歯文や貼り付けボタン文を付加し、その下が赤彩されるものがある。頸部の文様は櫛描直線文のみで赤彩されるものとなないもの、直線文とボタン文のもの（赤彩なし?）、直線文と鋸歯状沈線文とボタン文で赤彩されるものとなないものがある。赤彩は鋸歯文やボタン文を除いて施され、直線文→鋸歯文→ボタン文→赤彩の順と思われる。赤彩を除けば、基本的に上から下へ施文される。頸部の櫛描直線文は5～10本単位の櫛歯状工具を用い、右周りに上から下へ2～3段施すものが多いが、116の棒状工具の沈線、117～119のような沈線と烈点状短線を交互に配するもの、115のように直線文と簾状文を施す例がある。また、直線文を縦に区切るT字文には113のヘラ状工具の沈線2～3条加えるものと、櫛描文を用いる2者がある。櫛描直線文下端に鋸歯状沈線が加えられるが、鋸歯状の沈線は三角形の輪郭を描いて内部を縦、斜めの沈線で充填する。大きめに描くものが多いが、136は小さな鋸歯文である。内部を充填する斜めの沈線は多くが左上から右下に下がるか、不規則な縦方向があるが、ごく稀に132・136のような右上→左下方向のものがある。沈線の幅は1mm以下と細く、口縁部外面とこの鋸歯文のみ非常に鋭利な工具が用いられている。123は直線文の次に鋸歯文を右から左へ描き、さらに貼り付けボタン文を施す。このボタン文は、鋸歯文施文後に直径1～1.5cmほどの粘土円盤を貼り付けたもので、装飾のない120・125や、表面に一文字の沈線を施す138・123・126・137、複数の刺突を加える131がある。なお、128は簾状文・ボタン文の下部に波状文が僅かに認められ、140は赤彩されながらも波状文が施される。胴部は磨滅した破片が多いが、赤彩が認められないものもあり、赤彩は普遍的ではない。100・141・139・140は赤彩される。

## (2) 甕 (第64・65図148～197)

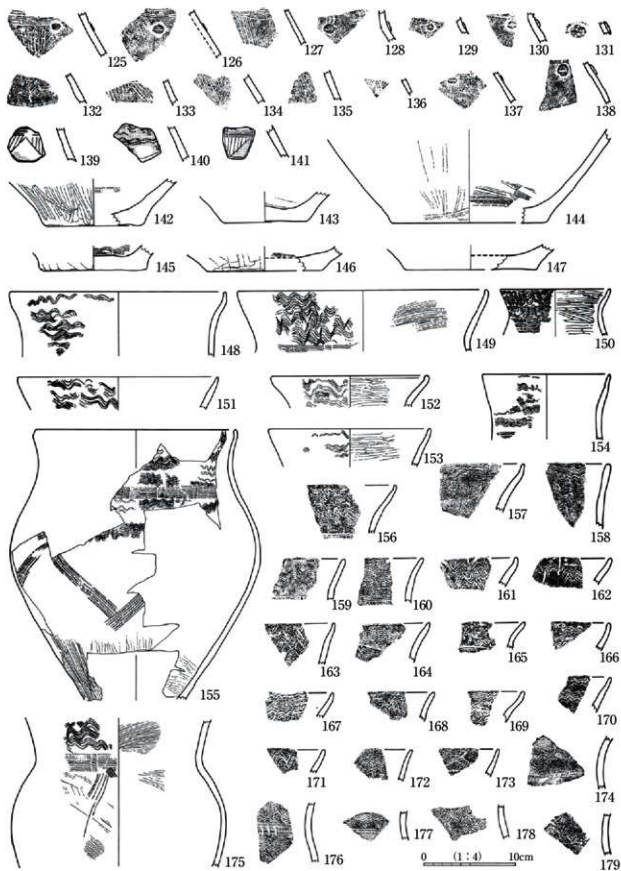
破片のみで全体形を窺えるものは155のみである。胴部中位の上部に最大径をもち、頸部は弱く屈曲して緩やかに外反ぎみの長い口縁に続く。底部は平底だが、僅かに196・197の台付甕破片がある。口縁部は内湾ぎみの形が多く、直線のあるいは外反するものもある。内湾する形状には155の端部を短く屈曲ぎみに内湾させるもの、149・150・157・163のように端部を軽く摘むように内湾させるものがある。これらの内湾する口縁形態は弥生中期後半の栗林式甕の受口口縁の退化ともみられるが、同様に捉えられるかは不明である。栗林式土器の甕では受口口縁の口縁外面にのみ施文されるので、後期の甕口縁が伸張して外面施文を基本とすることもその関連だろうか。

甕の底部破片では径4～8cmまでであるが、4cm前後と6cm前後に集中するように見受けられる。成形は紐輪積で、器面を刷毛調整して内面と体部外面下半を縦ヘラミガキする。磨滅した破片が多く、十分な観察ができていないが、胴部内面のヘラミガキが口縁まで達しないものもある。また、器壁が薄いものが多いながら、千野氏(註5)が指摘するような削り技法の存在は判然としなかった。189のように外底部に木葉痕を残すものがある。

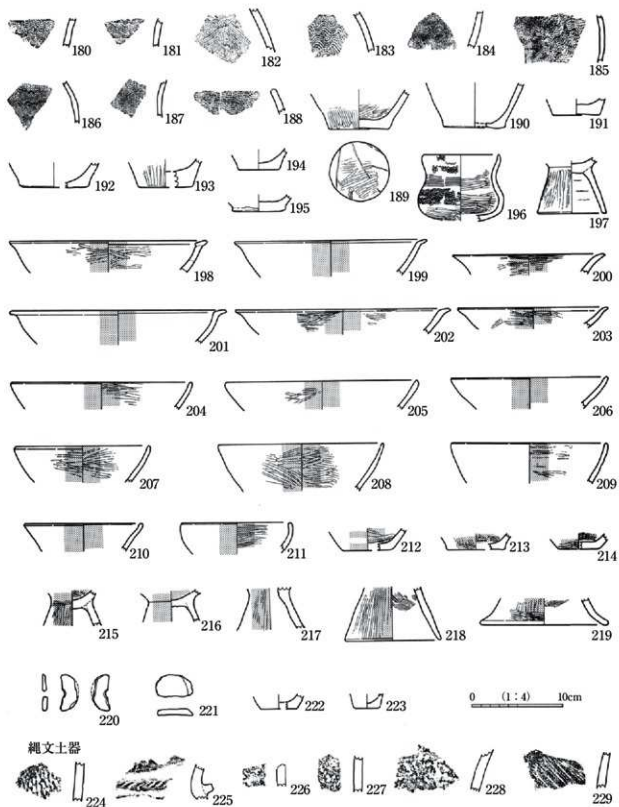
文様は頸部に簾状文、口縁部外面や体部上部に櫛描波状文、体部下部に羽状文を施す。北信地域では栗



第63回 弥生土器 1



第64図 弥生土器 2



第65図 弥生土器 3・縄文土器

林式・吉田式で中部高地型櫛描文ばかりでなく、全周する畿内型櫛描文が存在することはすでに指摘され(註6)しており、吉田式の成立に際して畿内型櫛描文の関わりに注目する意見もある(註5)。今回の調査で得られた資料では櫛描文の観察や比率は十分行えなかった。甕の櫛描文は5～7本前後を1単位とする櫛歯状工具(註7)で、簾状文は向かって右から左方向に施文され、口縁部では上から下へ施文される。

(3) 高坏・鉢 (第65図198～219)

規模や全容がわかる資料はない。また、体部や口縁部の破片は鉢・高坏の識別が容易ではないため一括して扱う。また、口縁破片で甕との識別に迷うものもあったが、外へ折れるように屈曲するものや、内湾する小径の赤彩された器体は高坏・坏と捉えた。200は口縁の外反が短く不明瞭なことから甕の疑いがある。高坏は長脚のみあり、短脚と断定できる資料は認められなかった。

成形は紐輪積みで基本形をつくり、刷毛調整で整えてスリップ技法で赤彩している。高坏は坏部に円筒形の脚を接続し、坏内底部を粘土で充填する。脚内面は刷毛調整し、端部を横ナデする。鉢には外面まで赤彩されたものがある。沈線や縄文の装飾はなく、内外面赤彩のみがあるが、遺存状態不良で部分的にしか残存していないものも多い。

(4) 土製品 (第65図220～223)

土器以外に弥生時代と思われる紡錘車、土製円盤、ミニチュア土器が出土した。いずれもⅢ層からの出土である。220は半分の遺存だが、土器片周囲を研磨し中央が穿孔される紡錘車と思われる。221は円形に周囲を打ち欠いた土器片で半分が欠損する土製円盤である。222・223はミニチュア土器の底部である。

## 4. 縄文土器 (第65図224～229)

縄文土器片が数片採取されたが、小片ばかりで詳細は不明である。224は横方向3段の半円形の魚鱗状の施文が認められる。後期初頭の三十稲葉式と思われる。225は径の狭い円筒形の器形で、隆帯を貼り付け端部に斜めの沈線を施す。小片で仔細不明ながら、頸の径がやや大きい弥生中期後半の粟林式土器の可能性もある。226～228は粗い縄文が施文されるが、詳細は不明である。229は細い縄文を施す。

註1 藤沢良祐 1991「瀬戸古窯址群Ⅲ—古瀬戸後期様式の編年—」〔瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要X〕瀬戸市歴史民俗資料館を参照した。

註2 吉岡広博1994「中世須恵器の研究」吉川弘文館を参照した。

註3 上田秀夫1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」〔貿易陶磁研究 No.2〕貿易陶磁研究会、小野正敏1982「15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」〔貿易陶磁研究 No.2〕貿易陶磁研究会を参照した。

註4 盛 峰雄2000「陶器の編年1.碗・皿」〔九州陶磁の編年〕九州近世陶磁学会、野上建紀2000「磁器の編年1.碗・小杯・皿・打皿・紅猪口」〔九州陶磁の編年〕九州近世陶磁学会を参照した。

註5 千野 浩2001「第4章 2 出土土器の様相」〔長野吉田高校グランド遺跡Ⅱ〕長野市教育委員会

註6 青木一男2000「第3章 第1節 甕の文様構成及び施文手法」〔松原遺跡 弥生総論3 弥生中期・土器本文〕長野県埋蔵文化財センター

註7 徳永哲秀2000「第2章 赤彩と文様の時代性」〔松原遺跡 弥生・総論7 弥生時代・考察 検索〕長野県埋蔵文化財センター







国番号	発掘種・器種	出土遺構・地点	法量cm (1件・高さ・ 縦径)内は測定	遺存状態	胎土	成形/施釉等	備考
60	181号土器	F19 Ⅱ中層	—	破1.65以下	immm下層台	内・ヨコギ(内側) 外・横溝造文・横文	胎土灰質
60	182号土器	F19 Ⅱ上層	—	破1.8	immm下層台	内・横溝造文・横文	胎土灰質
60	183号土器	N505	—	破1.65以下	immm下層台	内・ヨコギ(内側) 外・横溝造文	胎土灰質
60	184号土器	F19 Ⅱ上層	—	破1.8	immm下層台	内・ヨコギ(内側) 外・横溝造文	胎土灰質
60	185号土器	N13 Ⅱ中層	—	破1.8	immm下層台	内・横溝造文・横文	胎土灰質
60	186号土器	N19 Ⅱ中層	—	破1.8	immm下層台	内・横溝造文・横文	胎土灰質
60	187号土器	N18 Ⅱ上層	—	破1.8	immm下層台	内・横溝造文・横文	胎土灰質
60	188号土器	N19 Ⅱ中層	—	破1.8	immm下層台	内・横溝造文・横文	胎土灰質
60	189号土器	N19 Ⅱ中層	—	破1.8	immm下層台	内・横溝造文・横文	胎土灰質
60	190号土器	N19 Ⅱ中層	—	破1.8	immm下層台	内・横溝造文・横文	胎土灰質
60	191号土器	N19 Ⅱ中層	—	破1.8	immm下層台	内・横溝造文・横文	胎土灰質
60	192号土器	N19 Ⅱ中層	—	破1.8	immm下層台	内・横溝造文・横文	胎土灰質
60	193号土器	N19 Ⅱ中層	—	破1.8	immm下層台	内・横溝造文・横文	胎土灰質
60	194号土器	N19 Ⅱ中層	—	破1.8	immm下層台	内・横溝造文・横文	胎土灰質
60	195号土器	N19 Ⅱ中層	—	破1.8	immm下層台	内・横溝造文・横文	胎土灰質
60	196号土器	N19 Ⅱ中層	—	破1.8	immm下層台	内・横溝造文・横文	胎土灰質
60	197号土器	N19 Ⅱ中層	—	破1.8	immm下層台	内・横溝造文・横文	胎土灰質
60	198号土器	N19 Ⅱ中層	—	破1.8	immm下層台	内・横溝造文・横文	胎土灰質
60	199号土器	N19 Ⅱ中層	—	破1.8	immm下層台	内・横溝造文・横文	胎土灰質
60	200号土器	N19 Ⅱ中層	—	破1.8	immm下層台	内・横溝造文・横文	胎土灰質
60	201号土器	N19 Ⅱ中層	—	破1.8	immm下層台	内・横溝造文・横文	胎土灰質
60	202号土器	N19 Ⅱ中層	—	破1.8	immm下層台	内・横溝造文・横文	胎土灰質
60	203号土器	N19 Ⅱ中層	—	破1.8	immm下層台	内・横溝造文・横文	胎土灰質
60	204号土器	N19 Ⅱ中層	—	破1.8	immm下層台	内・横溝造文・横文	胎土灰質
60	205号土器	N19 Ⅱ中層	—	破1.8	immm下層台	内・横溝造文・横文	胎土灰質
60	206号土器	N19 Ⅱ中層	—	破1.8	immm下層台	内・横溝造文・横文	胎土灰質
60	207号土器	N19 Ⅱ中層	—	破1.8	immm下層台	内・横溝造文・横文	胎土灰質
60	208号土器	N19 Ⅱ中層	—	破1.8	immm下層台	内・横溝造文・横文	胎土灰質
60	209号土器	N19 Ⅱ中層	—	破1.8	immm下層台	内・横溝造文・横文	胎土灰質
60	210号土器	N19 Ⅱ中層	—	破1.8	immm下層台	内・横溝造文・横文	胎土灰質
60	211号土器	N19 Ⅱ中層	—	破1.8	immm下層台	内・横溝造文・横文	胎土灰質
60	212号土器	N19 Ⅱ中層	—	破1.8	immm下層台	内・横溝造文・横文	胎土灰質
60	213号土器	N19 Ⅱ中層	—	破1.8	immm下層台	内・横溝造文・横文	胎土灰質
60	214号土器	N19 Ⅱ中層	—	破1.8	immm下層台	内・横溝造文・横文	胎土灰質
60	215号土器	N19 Ⅱ中層	—	破1.8	immm下層台	内・横溝造文・横文	胎土灰質
60	216号土器	N19 Ⅱ中層	—	破1.8	immm下層台	内・横溝造文・横文	胎土灰質
60	217号土器	N19 Ⅱ中層	—	破1.8	immm下層台	内・横溝造文・横文	胎土灰質
60	218号土器	N19 Ⅱ中層	—	破1.8	immm下層台	内・横溝造文・横文	胎土灰質
60	219号土器	N19 Ⅱ中層	—	破1.8	immm下層台	内・横溝造文・横文	胎土灰質
60	220号土器	N19 Ⅱ中層	—	破1.8	immm下層台	内・横溝造文・横文	胎土灰質
60	221号土器	N19 Ⅱ中層	—	破1.8	immm下層台	内・横溝造文・横文	胎土灰質
60	222号土器	N19 Ⅱ中層	—	破1.8	immm下層台	内・横溝造文・横文	胎土灰質
60	223号土器	N19 Ⅱ中層	—	破1.8	immm下層台	内・横溝造文・横文	胎土灰質
60	224号土器	N19 Ⅱ中層	—	破1.8	immm下層台	内・横溝造文・横文	胎土灰質
60	225号土器	N19 Ⅱ中層	—	破1.8	immm下層台	内・横溝造文・横文	胎土灰質
60	226号土器	N19 Ⅱ中層	—	破1.8	immm下層台	内・横溝造文・横文	胎土灰質
60	227号土器	N19 Ⅱ中層	—	破1.8	immm下層台	内・横溝造文・横文	胎土灰質
60	228号土器	N19 Ⅱ中層	—	破1.8	immm下層台	内・横溝造文・横文	胎土灰質
60	229号土器	N19 Ⅱ中層	—	破1.8	immm下層台	内・横溝造文・横文	胎土灰質

## 第2節 石器・石製品 (第66・67国 第8表)

中世の石製品には砥石、石鉢、くぼみ石等があり、石臼は出土していない。弥生・縄文・旧石器の石器・石製品は出土点数が少なく、中世盛土層・遺構埋土や、Ⅱ・Ⅲ層中から単体で出土し、良好な出土状態を示すものがない。自然礫を利用した石製品などは時期を特定できないため、まとめて記述する。

## 1. 中世の石製品

## (1) 砥石 (第66国1～6)

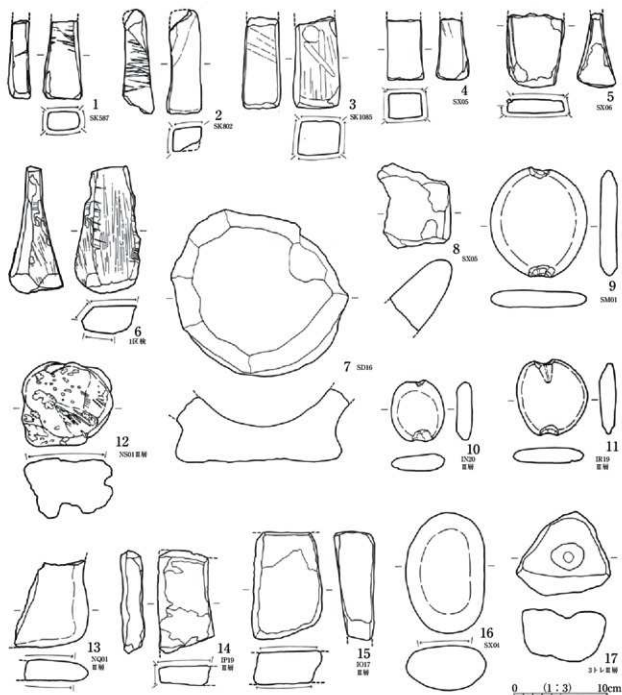
総数6点採取された。石材はすべて凝灰岩で、断面長方形の仕上砥とみられる。表面には細い線状痕が観察されるが、1・2・6は短辺方向に伸びる深く鋭い線状痕と、長辺方向もしくは斜めの細かい線状痕が認められる。前者は砥石先端にも認められ、6では短辺方向の線状痕が長辺方向の研磨痕に消されている。短辺方向の深い線状痕は砥石成形のための加工痕と思われ、類似方向に並列しながらも若干ずれがあり、鋸ではなく、たがねのような工具と思われる。5は側面に深い溝状の切りこみが認められる。砥石の研磨面がねじれ、磨り減って薄いものが多い。これらは広刃の研磨に用いられたと思われるが、3のみは幅3～5mmの浅い溝状の磨り減り痕が認められ、狭幅の工具類を研磨した可能性がある。

## (2) 石鉢 (第66国7・8)

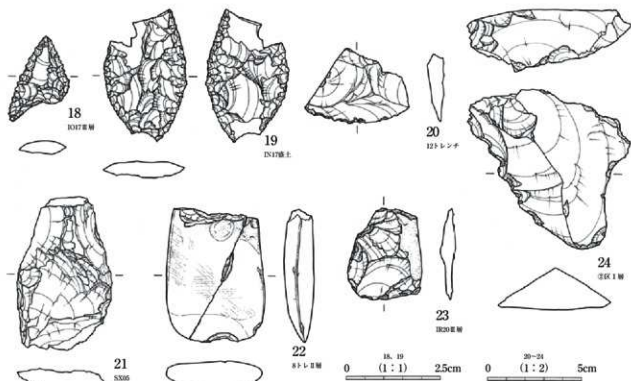
石鉢は2点出土したが、いずれも破片で全体形は不明である。7は底部破片で高台状に作り出す。8は口縁部の破片で、断面は体部から直線的で端部を丸く収める。いずれも安山岩を用いて、外面に成形のノミ敲打痕を残すが、内面は使用で磨滅して平滑となっている。

## 2. 中世以前の石製品・石器

石器と認定したものはすべて図示し、剥片のみは一部掲載した。出土量は僅かで特定の場所に集中することなく、遺跡全体に散って出土している。



第66図 石製品



第67図 石器

## (1) 凹石 (第66図17)

安山岩垂円礫の広面上下に浅い円形の窪みがある石製品が1点出土した。窪み径は2.5cmと小さく平面形も不整形で、凹石の可能性のある遺物として掲載する。Ⅲ層出土で時期は中世以前としかわからない。

## (2) 石鎌 (第66図9～11)

弥生土器包含層から2点、経塚から1点の9～11の合計3点出土した。経塚出土の9は経塚の河川礫に混在して出土し、紛れて運び込まれた可能性がある。9が安山岩、10が砂岩?の扁平な河川礫両端を打ち欠いている。11のみは軟質の安山岩河川礫を用いて若干溝状に削り込み造作が認められる。

## (3) 磨石・研磨痕のある礫 (第66図12～16)

研磨痕が認められる円・角礫は5点図示した。このうち、16のみが中世SX04出土で、他は弥生包含層出土である。16は安山岩の河川礫で、広面1面が平滑になっており、磨石の可能性がある。14・15は砂岩の角礫に研磨痕が認められる。砥石かもしれない。15は軟質の砂岩で表面の剥落が著しく、14はかなり硬質の砂岩だが、表面が傷んで研磨痕が部分的にしか遺存しない。13は安山岩円礫の表面に研磨されたと思われる痕跡がわずかに認められる。12は多角形の軽石で1面のみやや平滑で細く鋭い線状痕が認められる。研磨に用いられていると思われるが、研磨された器物は不明である。

## (4) 尖頭器 (第67図19)

中世盛土層中から19の黒曜石製尖頭器が1点のみ出土した。調査地内のローム層の大部分は信濃町ローム層で、それ以後のロームは谷地形内の狭い範囲しか残存しない。おそらく、周囲にあったものが雨水で流入したか、中世の土の運搬で混入したと思われる。周囲に当該期の遺跡が存在する可能性を示唆する。

## (5) 石畿 (第67図18)

①区のⅢ層から18の1点のみ採取された。チャート製凹基畿である。

## (6) 磨製石斧 (第67図22)

④区8トレンチのⅡ層下部から22の1点のみ出土した。蛇紋岩製の磨製石斧で、楕円形の横断面で側面は平坦に調整していない。

## (7) 打製石斧 (第67図21)

中世のSX05から21の頁岩製の1点のみ出土した。埋め戻し土に混入していた可能性がある。

## (8) 使用痕のある剥片・剥片類 (第67図20・23・24)

僅かながら黒曜石やホルンフェルス、珪質頁岩の剥片類や剥片類を利用した石器が採取されている。量も少なく、小破片が多いため一部のみを図示した。20は断面長三角の刃部1個縁に細かい剥離痕が認められる。23は両端から打撃が加えられた剥離痕が認められるが、右側縁は自然面を残す。24は左側縁に細かい剥離痕が認められるが、1層出土なので耕作による2次的な所産の可能性が高い。

第8表 石製品・石器観察表

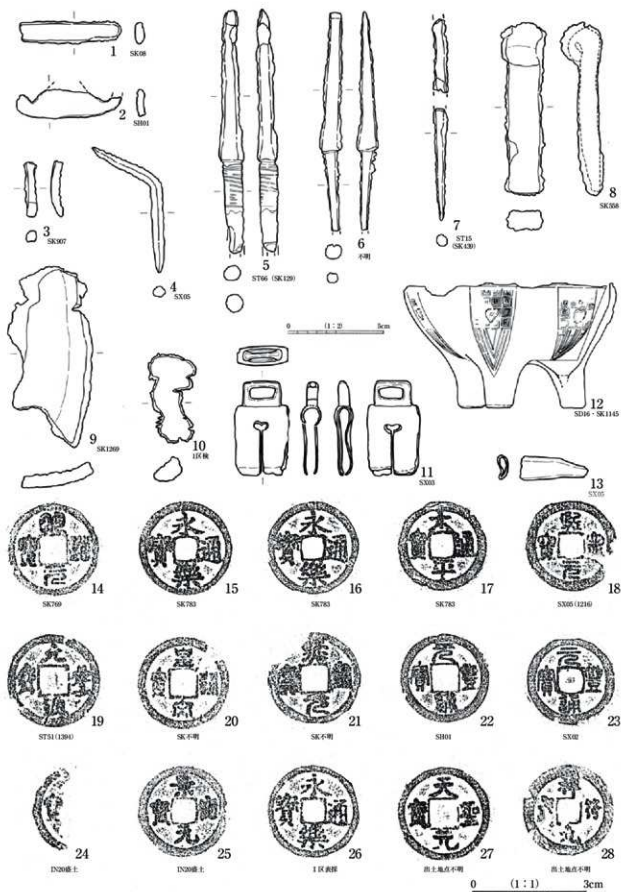
図番	部 種	遺物名	法量 (cm) 内は残存長	遺存状態	石種 (重量g)	形状の特徴	備 考
66	打製石	SK06	長4.5幅1.1厚0.9	破欠	燧石 (46.1)	長方形板、4面研削	中世
66	打製石	SK07	長4.5幅1.2厚0.9	破欠	燧石 (56.0)	長方形板、4面研削 側面直交方向の縦溝痕	中世
66	打製石	SK08	長2.4幅1.2厚0.9	破欠	燧石 (143.7)	長方形板、両面(長軸方向)の縦溝痕	中世
66	打製石	SK09	長4.9幅1.0厚0.6	破欠	燧石 (54.3)	長方形板、4面研削	中世
66	打製石	SK10	長4.5幅1.1厚0.1	破欠	燧石 (84.3)	長方形板、4面研削	中世
66	打製石	SK11	長3.5幅1.7厚0.1	破欠	燧石 (130.7)	長方形板、4面研削 直前長軸方向、側面直交方向縦溝痕	中世
66	打製石	SK12	長3.1幅0.9厚0.6	破欠	燧石 (94.3)	台形の板、両面研削	中世
66	打製石	SK13	長3.9幅0.9厚0.6	破欠	燧石 (22.6)	長方形板、4面研削	中世
66	打製石	SK14	長3.0幅1.2厚0.1	破欠	燧石 (152.1)	河川沖積礫打ち石	新石器
66	打製石	SK15	長3.0幅1.2厚0.1	破欠	燧石 (56.4)	河川沖積礫打ち石 一端磨り	古代以前
66	打製石	SK16	長3.0幅1.2厚0.1	破欠	燧石 (42.5)	河川沖積礫打ち石	古代以前
66	打製石	SK17	長3.0幅1.2厚0.1	破欠	燧石 (91.7)	礫石上に研削痕あり	古代以前
66	打製石	SK18	長3.0幅1.2厚0.1	破欠	燧石 (92.6)	両側の面に縦溝で平削となる	古代以前
66	打製石	SK19	長3.0幅1.2厚0.1	破欠	燧石 (100.2)	方形の面に縦溝研削あり	古代以前
66	打製石	SK20	長3.0幅1.2厚0.1	破欠	燧石 (187.3)	両側の面に縦溝研削あり	古代以前
66	打製石	SK21	長3.0幅1.2厚0.1	破欠	燧石 (208.6)	河川沖積に研削痕あり	中世以前
66	打製石	SK22	長3.0幅1.2厚0.1	破欠	燧石 (92.4)	礫片の上に深く研みあり	古代以前
66	打製石	SK23	長3.0幅1.2厚0.1	破欠	燧石 (10.2)	両面に縦溝(縦溝あり)	縄文
66	打製石	SK24	長3.0幅1.2厚0.1	破欠	燧石 (33.9)	両面に縦溝あり	旧石器
67	打製石	SK25	長4.5幅1.2厚0.9	ほぼ完好	ホルンフェルス (16.9)	片側面に微細な剥離痕	縄文以前
67	打製石	SK26	長4.5幅1.2厚0.9	基部一部欠損	燧石 (57.3)	下端は尖鋭	縄文
67	打製石	SK27	長4.5幅1.2厚0.9	基部一部欠損	燧石 (95.4)	両側面に 側面は高取せず、断面は片削型	縄文
67	打製石	SK28	長4.5幅1.2厚0.9	ほぼ完好	チャート (18.2)	両側に 両側面に剥離痕	縄文
67	打製石	SK29	長4.5幅1.2厚0.9	ほぼ完好	珪質頁岩 (21.0)	片側から微細な剥離痕 長軸に微細な縦溝 長軸の尖鋭なものの少	縄文以前

## 第3節 金属製品 (第68図 第9表)

金属製品の出土量は少ないが、鉄鍔、刀装具の出土は武装した居住者の存在、香炉は仏事に関わる活動があったことを示唆すると思われる。

## 1. 鉄製品 (第68図1～10)

鉄製品は全部で12点出土し、小片2点を除く10点を図示した。1は板状の形態から刀子柄部破片と思われる。2は先端部分を欠損するが、形状から火打ち金の破片と思われる。3・4は釘と思われるが、4は両端が尖っており、頭部を欠損した釘と考えたが、他の器種かもしれない。5～7は鉄鍔で、5・6は所謂整棍式鉄鍔である。5は基部に畿を固定したと思われる巻糸の線状痕が残る。線状痕は幅1mm前後で、上端で平行に数度巻いて左回りに幅2.1cmほど斜めに巻いている。7は2片に割れており、細く長い形状から畿の茎の一部と推定した。8が用途不明の板状鉄製品で下端はクサビ状で上端は丸く曲げている。



第68圖 金属製品

9・10は鋳物とみられる亀裂の入った板状鉄製品で、9は湾曲する形状から鍋底と思われる。他に鉄滓が僅かに出土している。

## 2. 銅製品 (第68図11~13)

銅製品は刀装具と香炉、キセルが各1点ずつある。11は①区SX03から出土した刀装具の足金具である。鞘を挟む部分と紐を掛ける部分を別につくり接合している。12は香炉で、確認調査1トレンチのSK1154とSD16重複部付近から出土した。出土標高と平面位置からはSD16より出土した可能性が高いが、断定できない。口径11.2cm、高さ6.6cmで、半球状の胴部に3脚がつく。口唇部は欠損し、僅かに受口状の造作が認められることから、蓋があったと思われる。表面の剥落や錆のために文様は不明瞭だが、胴部の脚部分と中間の合計6ヶ所に二等辺三角形の区画を配し、その三角形の区画内上部に右回り雷文を4×4個、中央下よりにハート状の浮文を配置し、下半には重三角形の4~5本の隆線を重ねる。なお、1ヶ所の脚は小穴があって脚内に銅がはみ出している。補修か、鋳造時の失敗だろうか。産地は国内産か中国産かは明らかにできなかった。13はキセルの吸い口でSX05から出土した。SX05は近世の陶磁器も僅かながら混じり込んでおり、これらの陶磁器同様に見逃した上層遺構からの混入と思われる。

## 3. 銭貨 (第68図14~28)

合計17点出土したが、2点は遺存状態が不良の細片で図示し得なかった。ここでは15点図示した。銭種は「水楽通寶」3点、「太平通寶」1点、「熙寧元寶」3点、「元豊通寶」3点、「祥符通寶」1点、「天聖元寶」1点、「皇宋通寶」1点、「景(祐)元寶」1点である。

第9表 金属製品観察表

図番別	部種	遺物名	法量cm	内は残存長	遺存状態	材質	観察の特徵	備考
68-11	刀装具	SK08	長13.5幅2.2厚0.5	刃部欠損	欠	銅	細い吸口の鉄製品	中国
68-12	刀装具	SK01	長5.5幅1.3厚0.4	柄部欠損	欠	銅	細い吸口の鉄製品	中国・高麗
68-13	刀装具	SK07	長19.5幅2.5厚0.5	刃部欠損	欠	銅	尖鋭はばき 細面加工	中国
68-14	香炉	SK05	径12.5高さ9.0	欠損	欠	銅	口唇部欠損 両脚部を 斬断方形、直径6.5cm	中国
68-15	銅線	SX05-SK120	長12.7幅1.2厚1.2	欠損	欠	銅	断面方形で尖鋭し状 面欠する未加工品	中国
68-16	銅線	不明	長11.4幅1.2厚1.1	断面欠損	欠	銅	断面方形で尖鋭	中国
68-17	銅線	SK1154-SK430	長10.8幅1.2厚0.4	一部に折れ	欠	銅	断面方形の両端 尖鋭尖鋭	中国
68-18	銅線	SK58	径4.5幅0.9厚1.1	欠損	欠	銅	厚さ約1mmの片状鉄片を巻いている	中国
68-19	銅線	SK1209	長13.5幅4.5厚0.7	両端欠損	欠	銅	片状鉄片を巻いて	中国
68-20	銅線	114区東前面	長13.5幅4.5厚0.7	両端欠損	欠	銅	細い吸口の鉄製品	中国
68-21	刀装具	SK05	長13.5幅2.2厚1.1	欠損	欠	銅	断面方形で尖鋭	中国
68-22	刀装具	SX05-SK1145?	長11.2幅1.5厚0.5	1端欠損	欠	銅	断面方形で尖鋭	中国
68-23	刀装具	SK05	長13.5幅2.2厚1.1	両端欠損	欠	銅	断面方形で尖鋭	中国
68-24	銅線	SK4 銅(SX05 SK1157?)	直径2.4	114区存在	銅	皇宋通寶(篆書)	中国	
68-25	銅線	SK709	直径2.4	114区存在	銅	熙寧元寶(篆書)	中国	
68-26	銅線	SK781	直径2.4	114区存在	銅	天聖元寶	中国	
68-27	銅線	SK783	直径2.4	114区存在	銅	太平通寶	中国	
68-28	銅線	SK05-SK1210	直径2.4	114区存在	銅	熙寧元寶(篆書)	中国	
68-29	銅線	SK1154-SK1360	直径2.4	114区存在	銅	元豊通寶(篆書)	中国	
68-30	銅線	SK4 銅(SX05 SK1157?)	直径2.4	114区存在	銅	皇宋通寶(篆書)	中国	
68-31	銅線	SK4 銅(SX05 SK1157?)	直径2.5	114区存在	銅	熙寧元寶(篆書)	同上	
68-32	銅線	SK01	直径2.4	114区存在	銅	元豊通寶(篆書)	中国	
68-33	銅線	SK02	直径2.4	114区存在	銅	元豊通寶(篆書)	中国	
68-34	銅線	SK03	直径2.4	114区存在	銅	元豊通寶(篆書)	中国	
68-35	銅線	SK20 磁土	径約1.5	114区存在	銅	不明	中国	
68-36	銅線	SK20 磁土	直径2.4	114区存在	銅	不明	中国	
68-37	銅線	114区 磁土	直径2.4	114区存在	銅	不明	中国	
68-38	銅線	不明	直径2.4	114区存在	銅	不明	中国	
68-39	銅線	不明	直径2.4	114区存在	銅	不明	中国	

## 第4節 経石 (第69-99図)

経塚から出土した経石は全部で753点あり、すべて図示した。墨書が確認できた礫のサイズは大きめの69で長さ6cm・幅7cm・厚さ5cm、小さい85で長さ3cm、幅2cm強、厚さ1cm強までであるが、基本的に河川礫を用いている。礫1つに1文字ずつ確認され、文字は崩さず比較的端正に書くものが多い。文字を書く位置は、縦長の楕円形礫は長軸を上下として書くものが多いが、礫の状面に書くものがあり面の広狭のこだわりはないようだ。

文字は墨痕が磨滅し、酸化鉄で汚れたりして断片的な遺存が多く、文字種が識別できたものは少ない。そのなかで、448・552・573は比較的墨痕が明瞭に遺存しながらも、文字種がわからなかったものである。ただし、552は「慶」、573は「龍」の一部の遺存か、異体字かもしれない。また、291は文字形が比較的近い「来」「恭」と推測したが、断定できない。それ以外は誤字、あるいは形だけの模倣とみられるものではなく、基本的に文字を正確に理解している人間の手によると思われる。文字の筆跡は「不」でも、細い筆跡の37、太い筆跡の39、その中間の35の例があり、3人以上の人間が係っていると推測される。また、「所」には324と319-323・325の二種の文字が用いられており、書き手が複数いたことを示す(註1)。

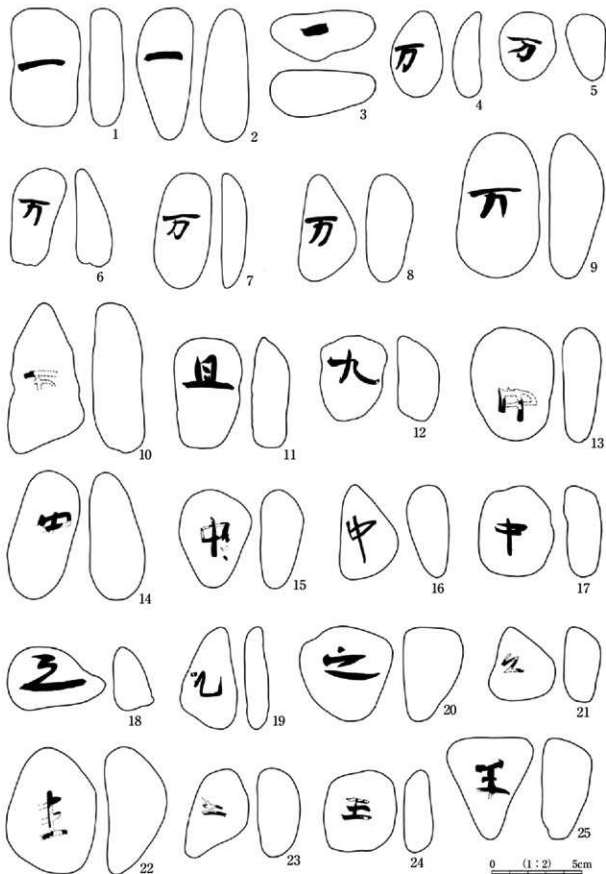
書かれた經典は特定できていないが、これまでに想定されている例が多い法華経とすると比較的鮮明に残る443の「鐘(鎖)」から、無量義経第一品か妙法蓮華経第二十五品が含まれる可能性がある。一方、法華経にない「元」「亘」「既」「恵」「痕」とみえる文字があるが、何れも墨痕が判然とせず偏の磨滅や傍の見誤りの可能性もあって断定できない。261は「宅」とみだが、法華経にない「屯」の可能性もある。80-84は「元」とみだが、81以外は部分的な遺存で断定できず、81も「阮」「阮」の一部か、「无」「天」「天」「夫」の可能性が残る。491は「恵」と思われるが、断片的な遺存で文字自体を「恵」と断定するには躊躇される。117の「既」、365の「痕」は、それぞれ「既」・「痕」の可能性もある。これまでに経石に法華経を書きながら、法華経以外の文字が含まれている例が指摘されているが(註2)、本遺跡では文字種が断定しきれず、同様の事例にあたるか、法華経以外の經典を書いているかはわからなかった。經典の特定は文字の確認ができなかった礫の存在の解釈や、経塚造営の作法の問題に関わると思われるが、今回の調査では明かにできなかった。なお、造営年代や造作契機、造立者を示す文字は確認できていない。また、大正大蔵経のデータベースで法華経に含まれない「元」「痕」「既」「恵」、出現頻度の少ない「鐘(鎖)」「龍」などの文字で經典を検索した結果、律部の「根本説一切有部毘奈耶」と出た(註3)。

掲載図は比較的判読できた文字のなかで、偏数の少ないものから、多い順へ掲載し、後半には磨滅や剥落で判読できなかった文字を並べている。ただし、判読できた文字でも形が似た文字は「月」「有」「所」などのように近くに掲載した。これは偏や傍が磨滅しているか、判断できないものが多いことによる。また、図の黒く塗りつぶした部分は比較的明瞭に見える墨痕、線のみは墨痕が薄い範囲が捉えられるもの、破線は推定を表す。

註1 千手寺経塚では4名の書き手が推測されている。山ノ内町夜間瀬横倉千手寺経塚緊急発掘調査団1975「千手寺経塚」[高井] 第三十一号 高井地方史研究会

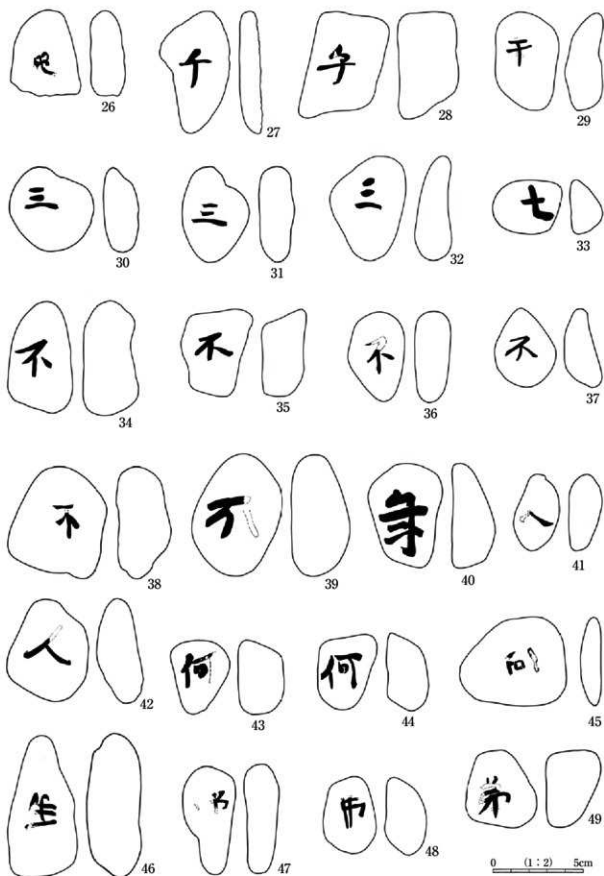
註2 寺尾英智1991「付編 かのへ塚の性格」『千葉県香取郡大栄町かのへ塚・寺ノ上遺跡』(財)香取郡文化財センター

註3 文字の検索にあたり法華経は東洋哲学研究所1977「法華経一字索引」、大蔵経テキストデータベース研究会(東京大学大学院人文社会科学部 次世代人文開発センター) 2009.10(利用) <http://21dtk.l.u-tokyo.ac.jp>、東京大学史料編纂所「大日本古記録 くずし字データベース <http://www.bl.u-tokyo.ac.jp/publication/kokiroku-ij.html>」を参照した。

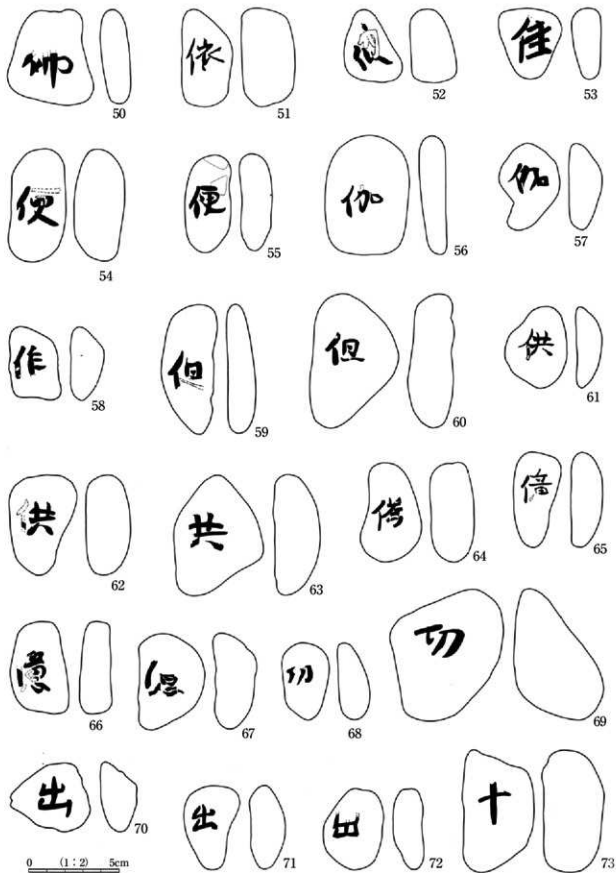


第69図 経石1

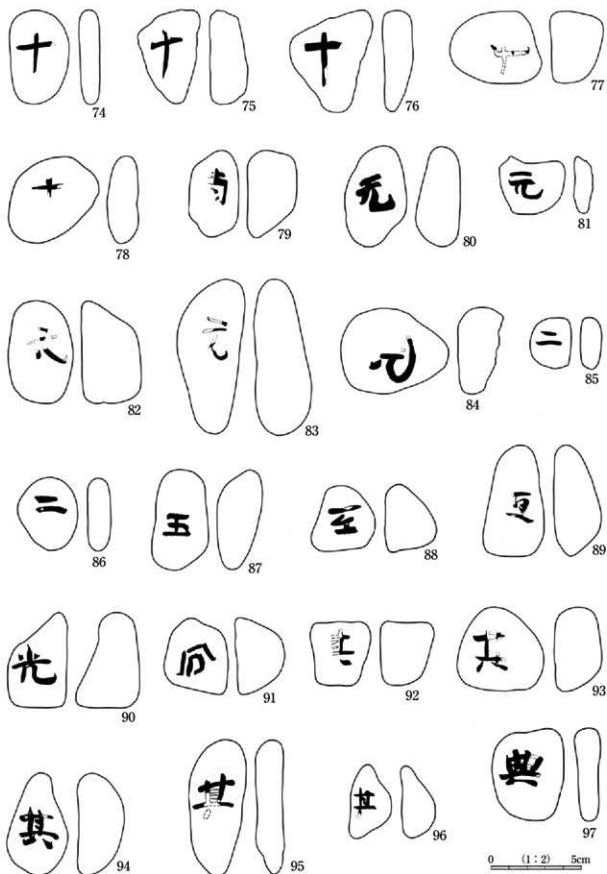




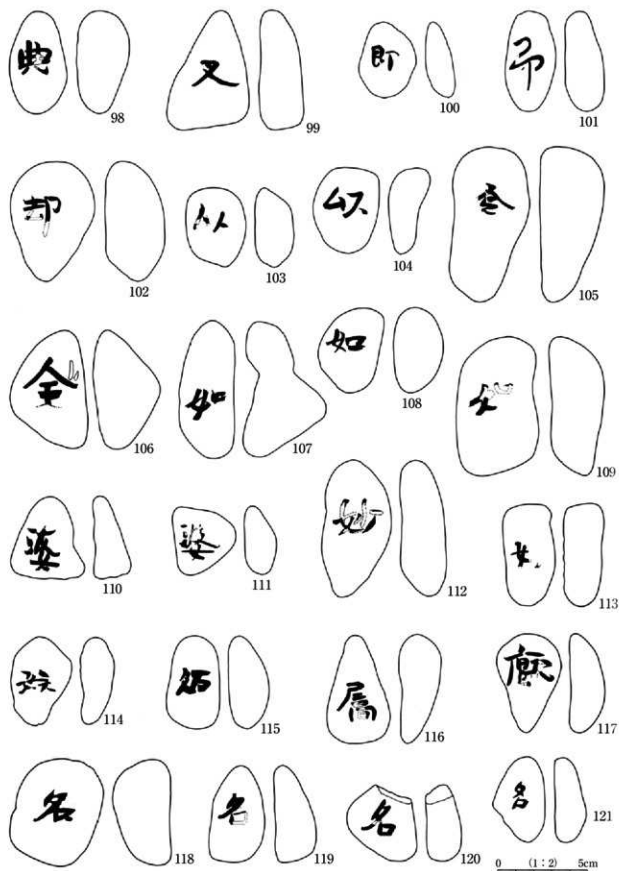
第70圖 經石2



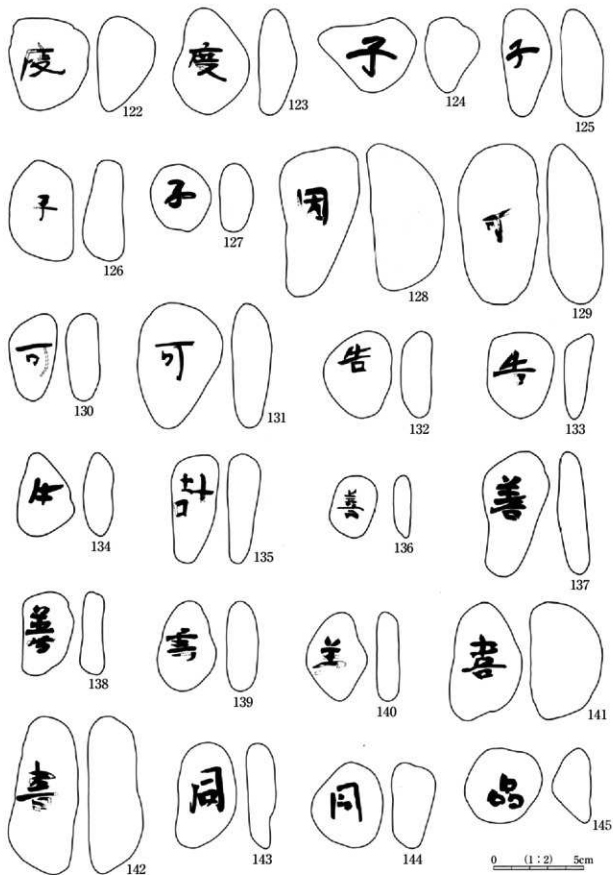
第71図 経石 3



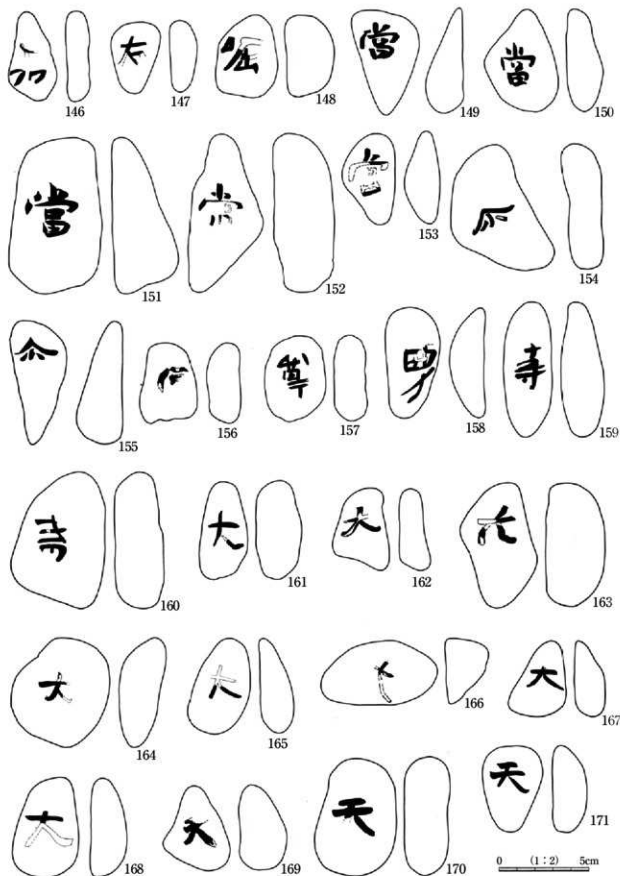
第72圖 經石4



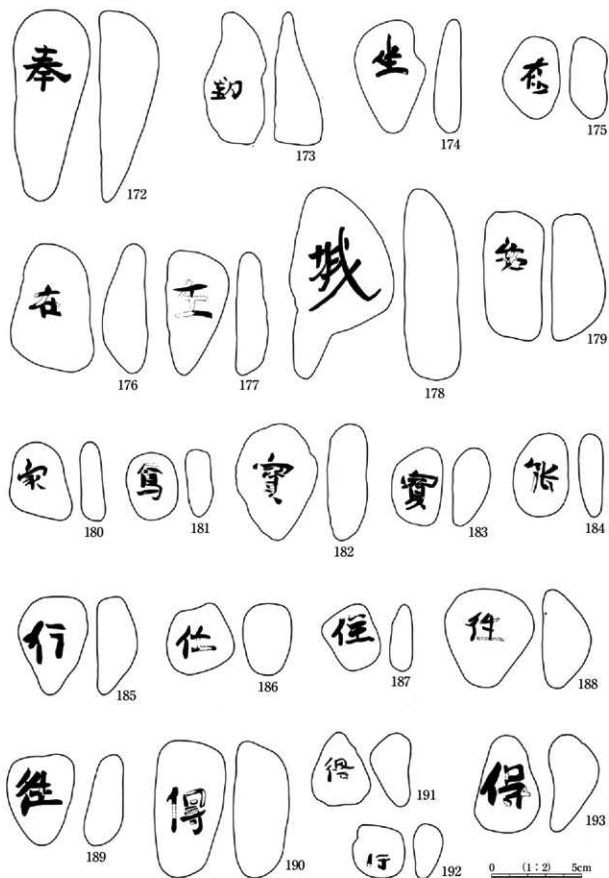
第73図 経石 5



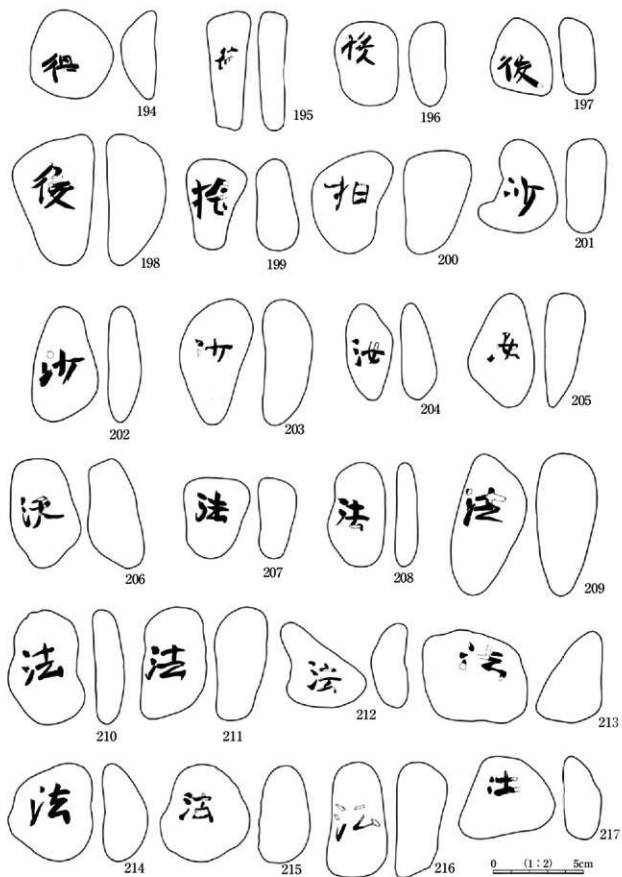
第74圖 經石6



第75図 経石7



第76圖 經石 8

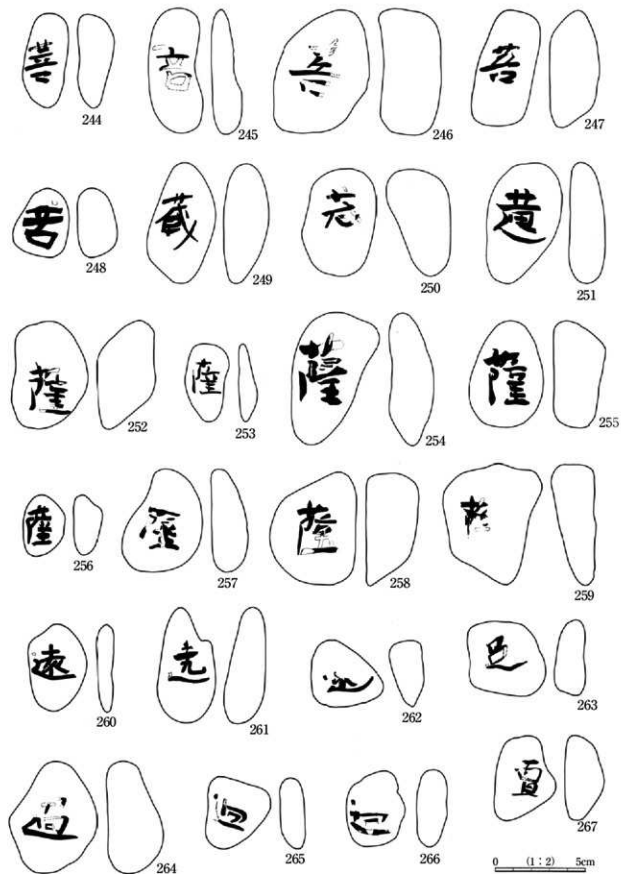


第77図 絰石 9

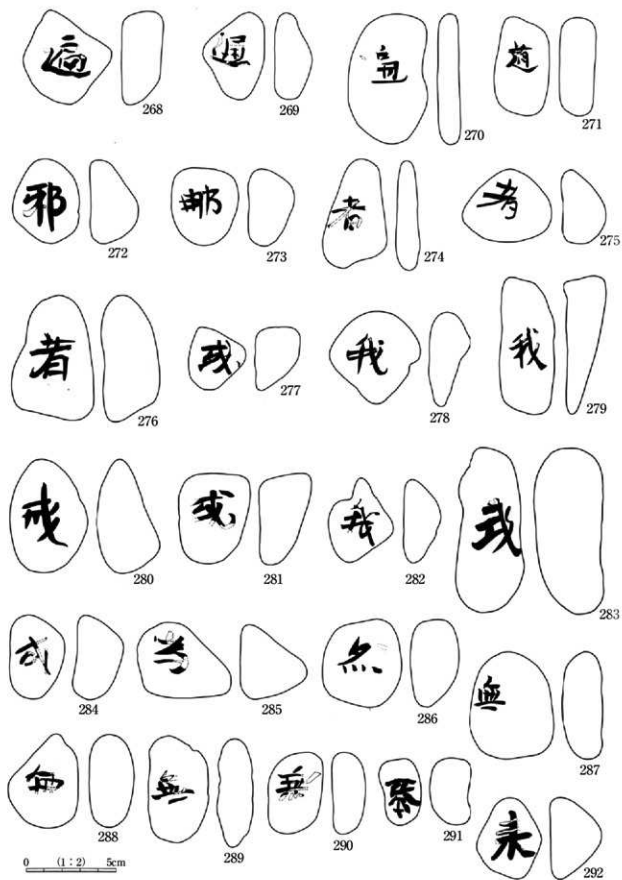




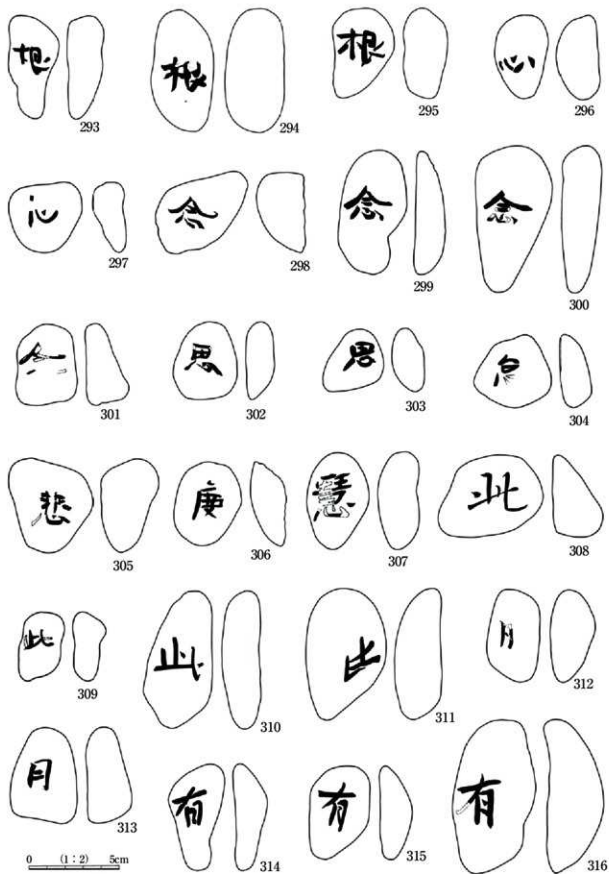
第78圖 經石10



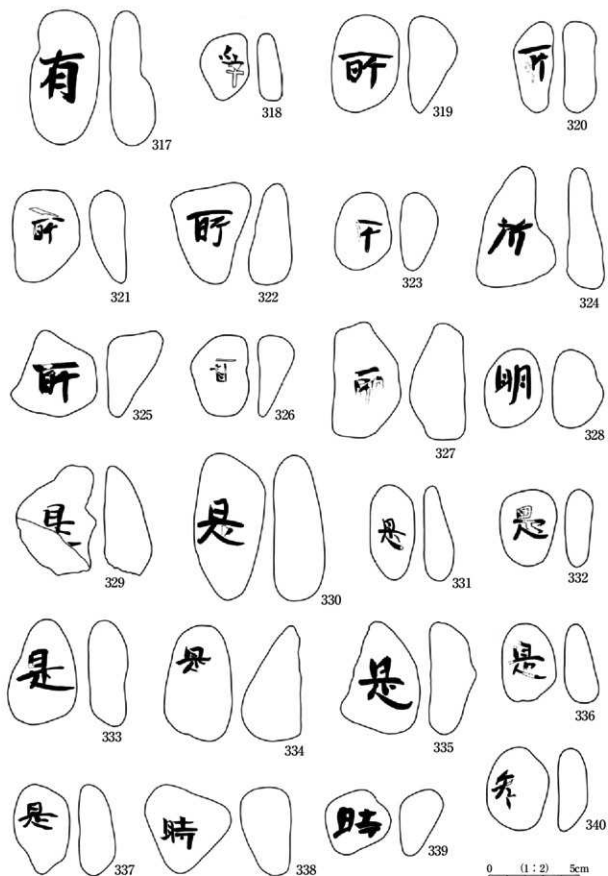
第79図 経石11



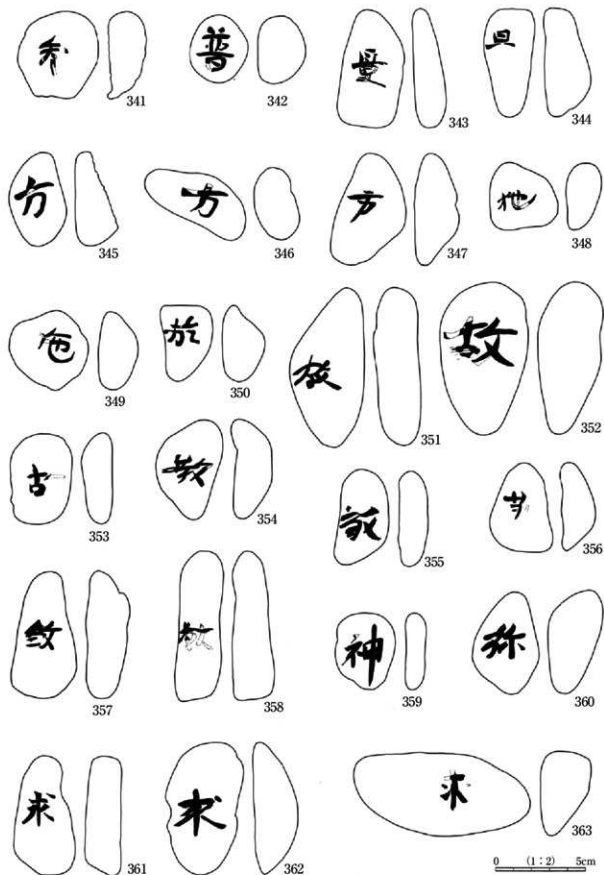
第80圖 經石12



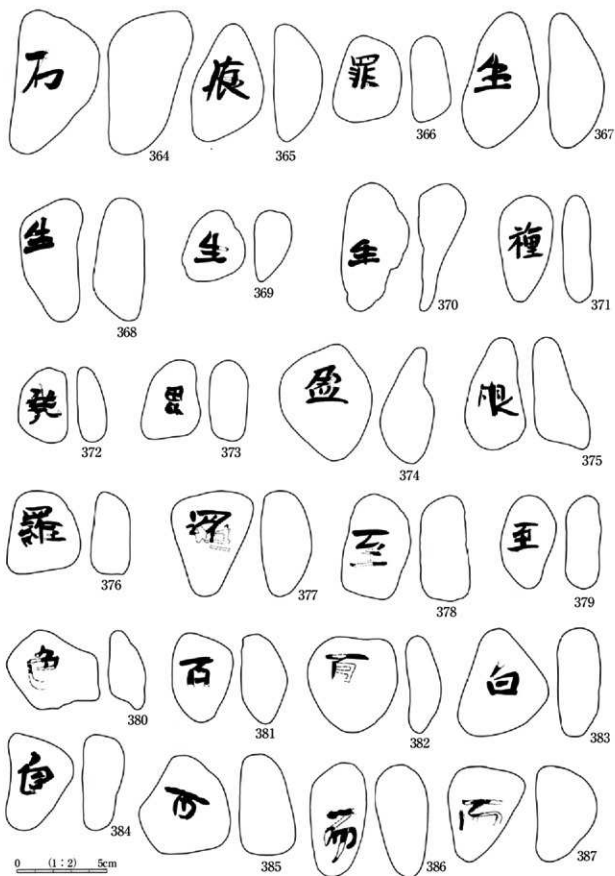
第81図 経石13



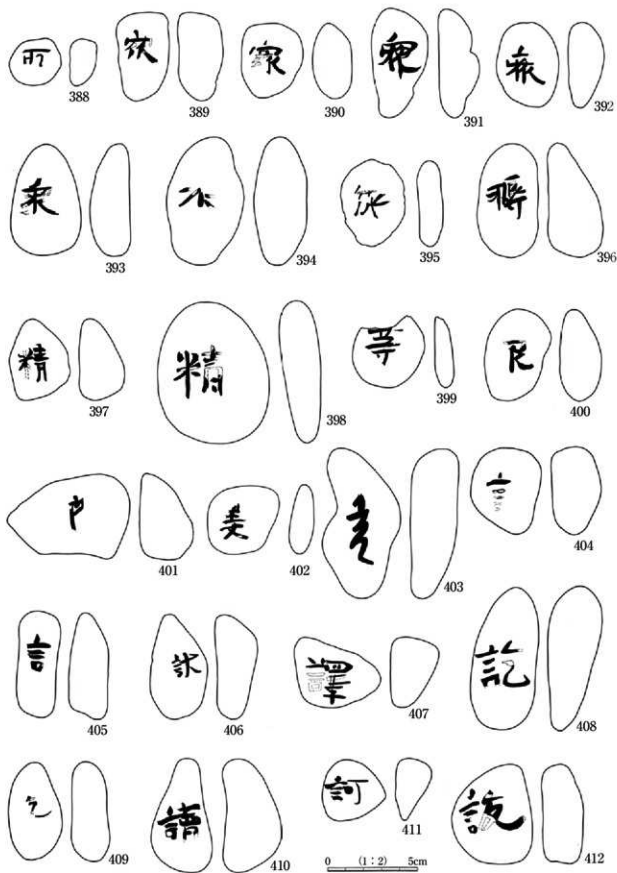
第82圖 經石14



第83図 絳石15

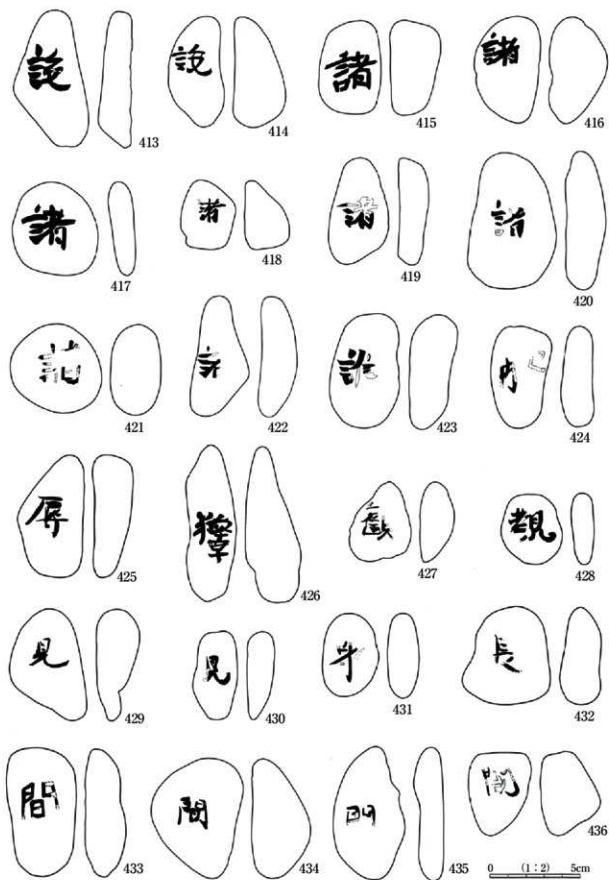


第84圖 經石16

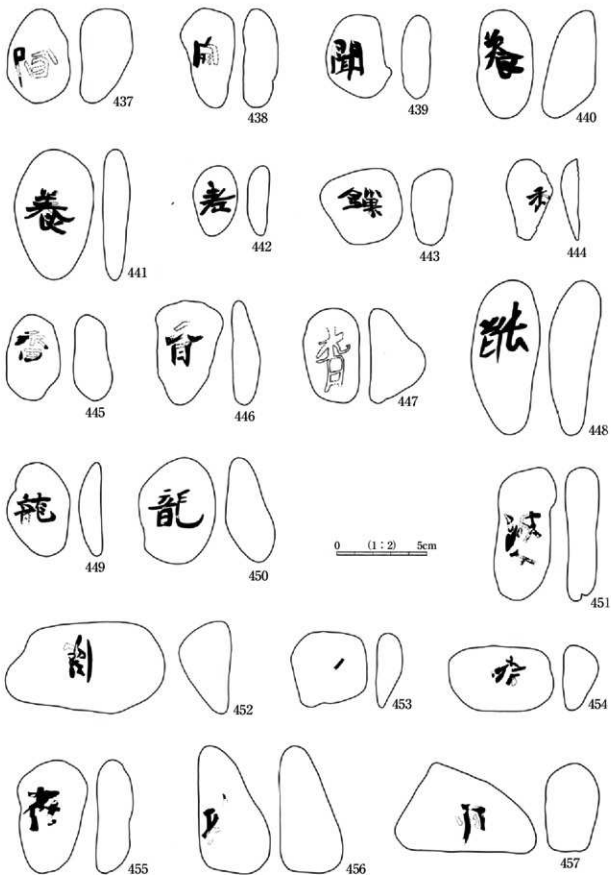


第85図 經石17

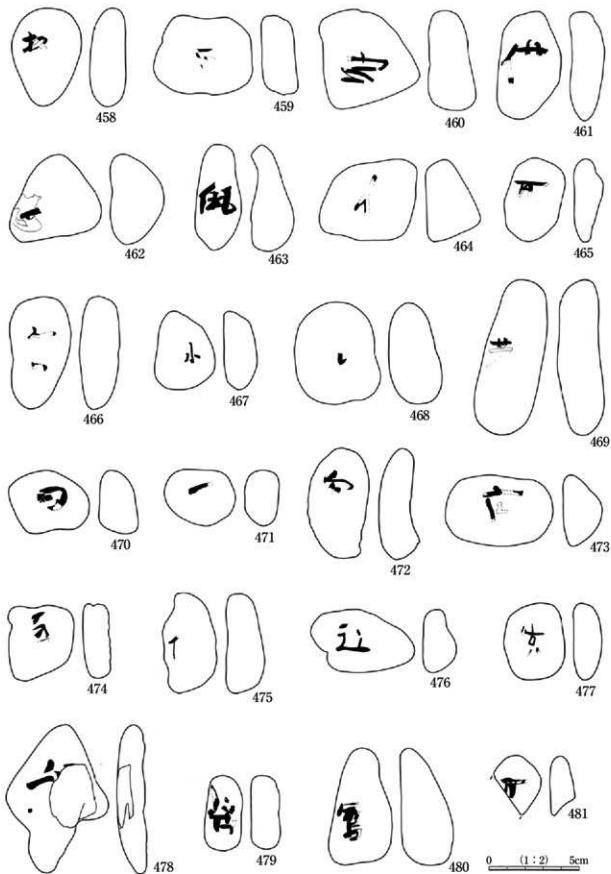




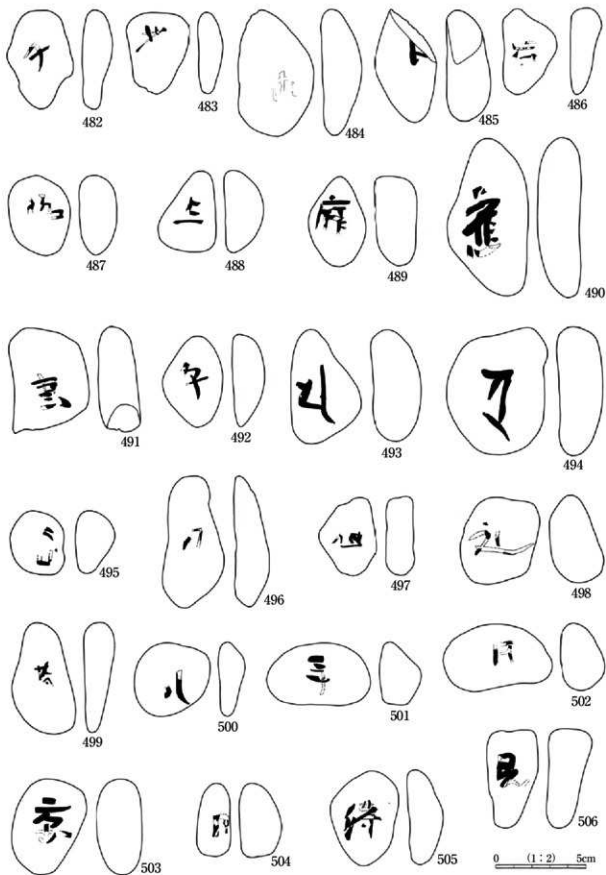
第86圖 經石18



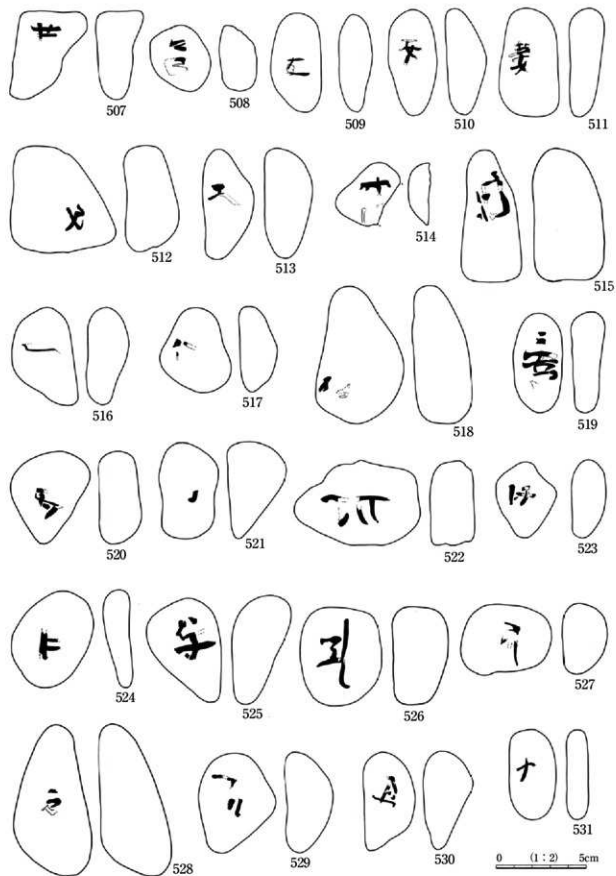
第87図 経石19



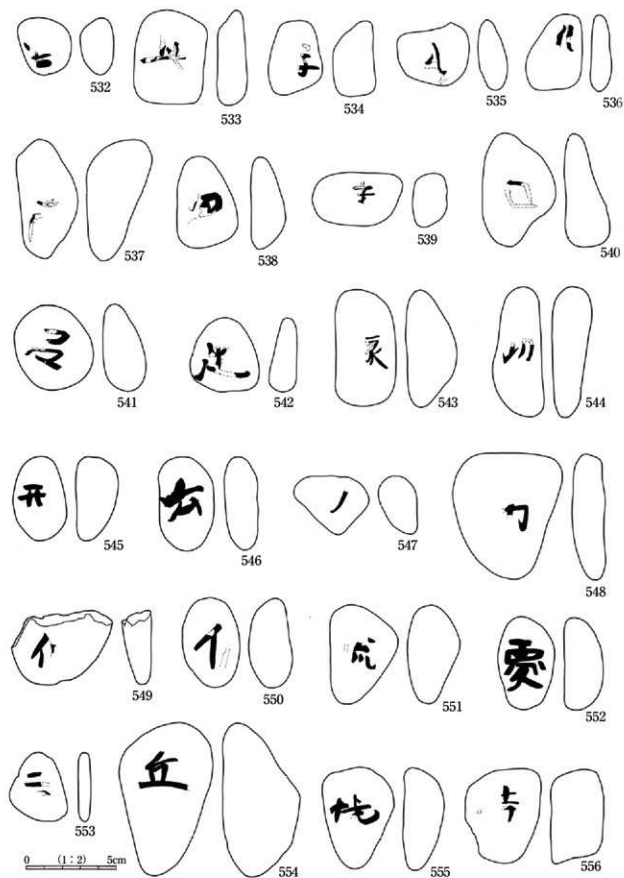
第88図 経石20



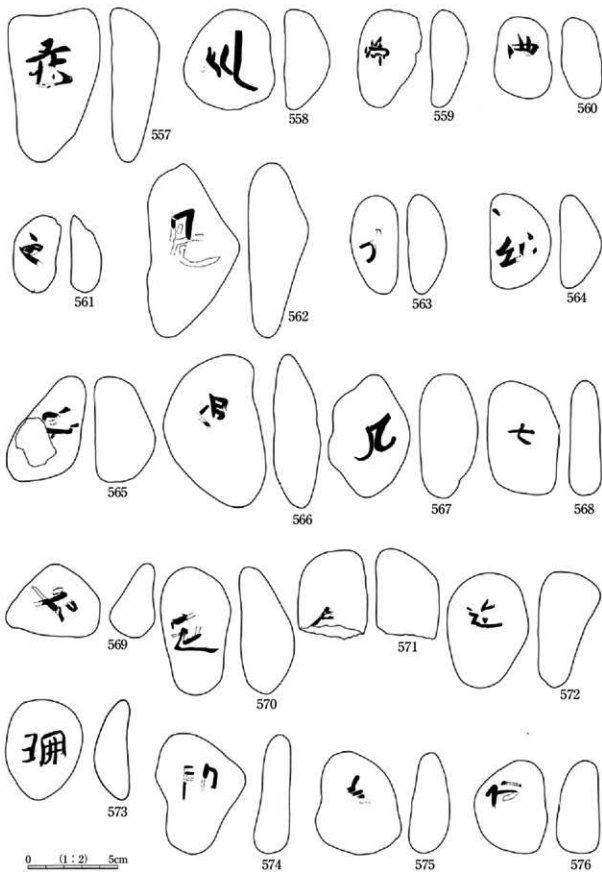
第89図 経石21



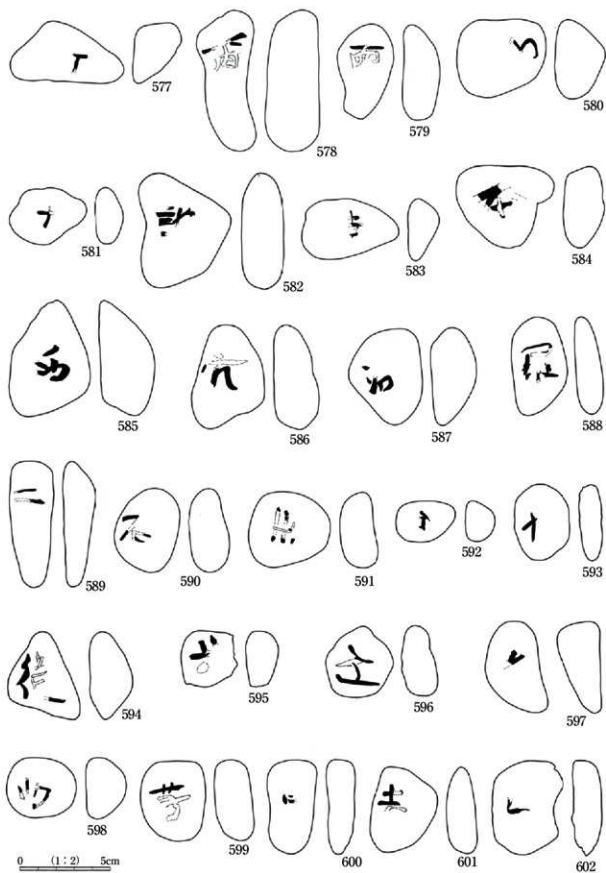
第90圖 經石22



第91圖 經石23

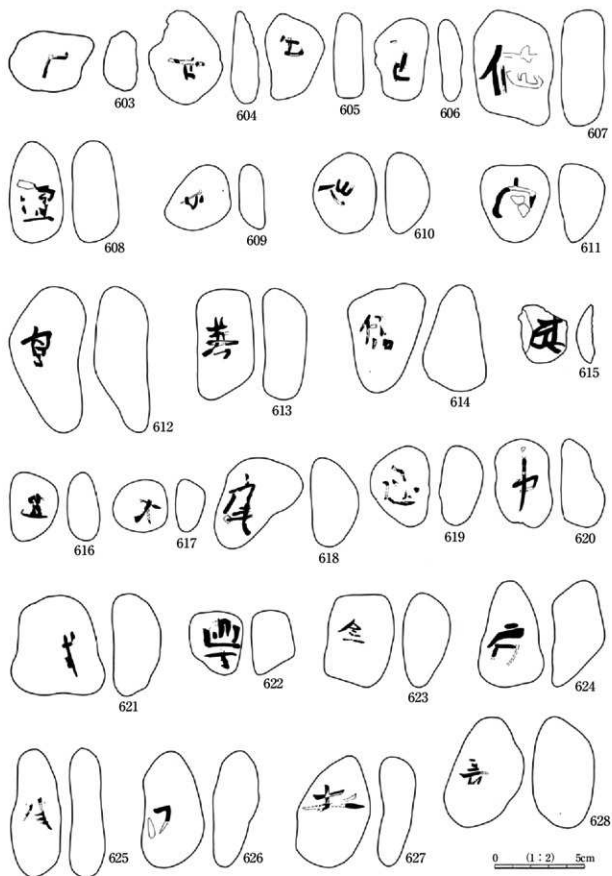


第92図 経石24

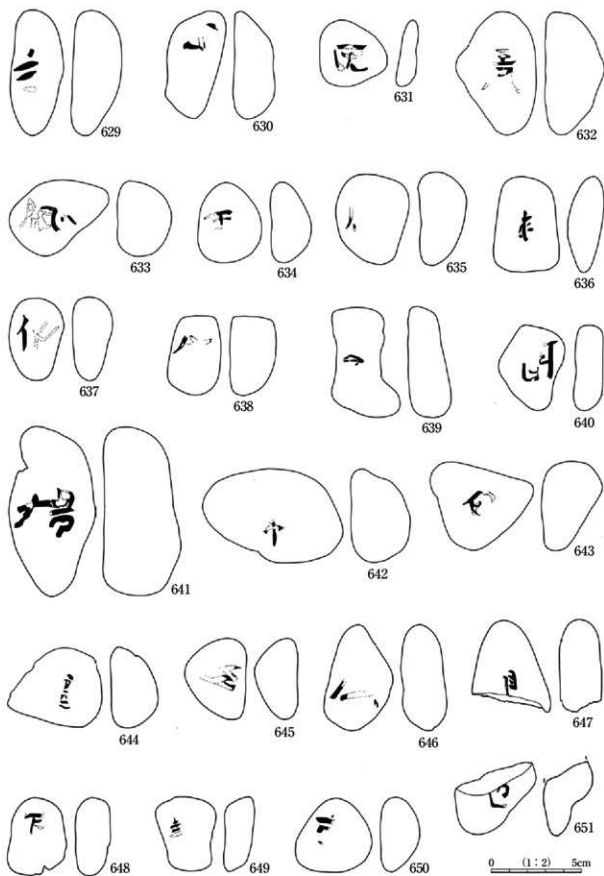


第93図 経石25

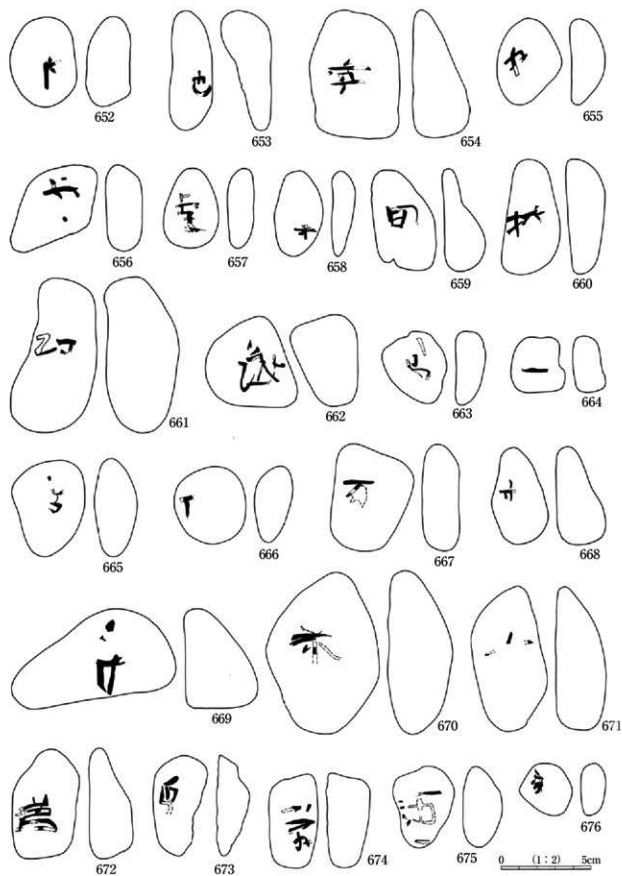




第94圖 經石26



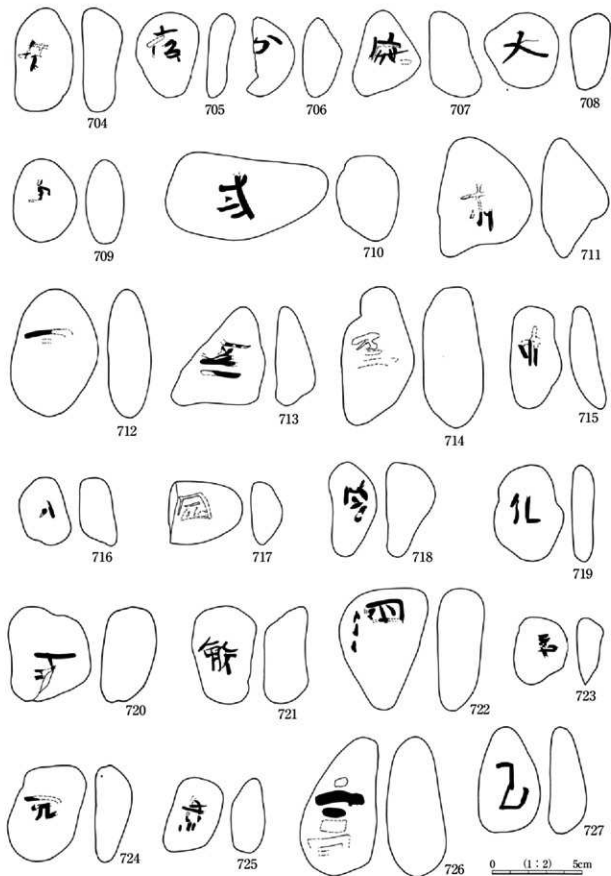
第95図 経石27



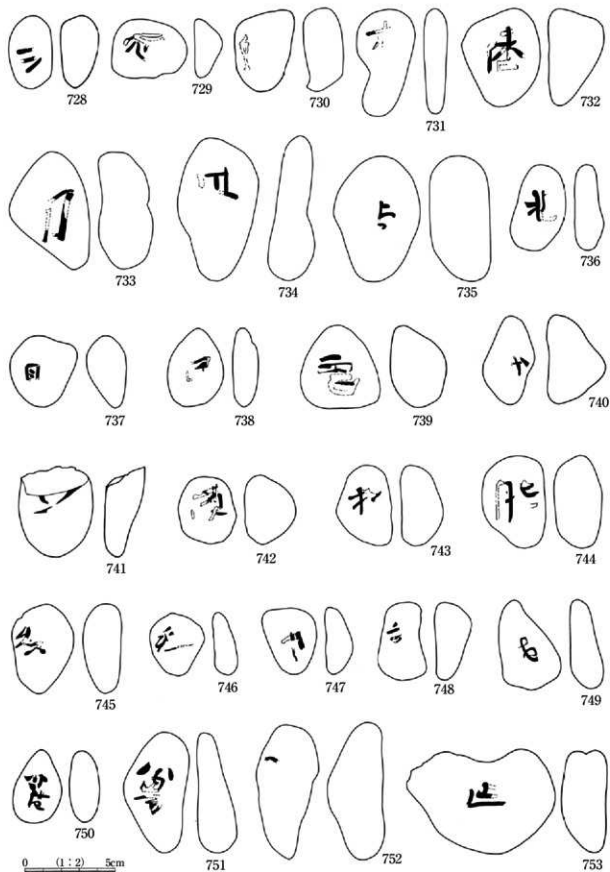
第96図 経石28



第97図 経石29



第98圖 經石30



第99図 経石31

第10表 経石一覧表

国	番号	文字	重量	備	考
69	1	一	74.9	墨部解明で、周囲に散滅や他墨部がみえず、「一」とみえた。	
69	2	二	84.9	解明で周囲に散滅や他墨部が認められず「二」と判断した。	
69	3	一ノ	75.8	石部が散滅するが、比較的解明。縦線と中央に横線がみえ残る。	
69	4	一ノ	27.6	墨部やや薄い。文字全体は遺存し、判読できる。	
69	5	一ノ	36.4	文字解明に遺存する。	
69	6	一ノ	40.2	墨部やや薄い。比較的解明。文字全体遺存。	
69	7	一ノ	36.6	解明に文字全体が遺存する。	
69	8	一ノ	69.1	比較的解明に文字全体が遺存する。	
69	9	一ノ	155.4	下部散滅するが、上部大部分は遺存する。上の横線の上に横線なく「方」と判読した。	
69	10	一ノ	119.7	墨部厚く僅かに遺存。横かな横線と「ノ」状の縦線がみえ、「方」の可能性あり。	
69	11	一ノ	64	解明に文字全体が遺存する。太い筆使いで書かれる。	
69	12	一ノ	49.2	部分的に墨部薄い。文字全体は遺存し、文字判読可。	
69	13	一ノ	89.8	上ノ、右散滅。墨部も薄い。左に短い縦線、中央に長い縦線と横線の「日」とみえ「中」とした。	
69	14	一ノ	160.8	上部散滅で不明瞭。遺存部「中」とみえるが中央線が上ノに接す。「日」「墨」の下部散滅の疑いがある。	
69	15	一ノ	49.2	比較的解明。文字右側に点状の墨部があるが、文字の一部は誤写か不明。	
69	16	一ノ	47.6	墨部やや薄い。文字の判読はできる。	
69	17	一ノ	56.3	墨部解明に遺存する。	
69	18	一ノ	45.5	墨部厚く、輪郭線味ながら文字全体が遺存する。	
69	19	一ノ	27.5	破滅で書かれる。文字全体が遺存するが、右下地の「之」と書き方が異なり、断定に躊躇される。	
69	20	一ノ	106.2	比較的解明。部分的に散滅するが、文字全体は遺存する。	
69	21	一ノ	36.8	中央のみ部分的に遺存。「乙」状の縦から「之」としたが、周囲に点状の墨部もある。「日」の可能性もある。	
69	22	一ノ	147.3	墨部薄い。三本の横線と中央の縦線がみえ、左上散滅し、「生」の可能性もある。	
69	23	一ノ	52.3	上ノ、右は散滅。三本の縦線が遺存し、横かに縦線がみえ、「日」の可能性もある。	
69	24	一ノ(下)	46.5	上部散滅し、上部の点の有無は不明。「日」の可能性あり。	
69	25	一ノ	73.6	上部散滅するが、下部は明瞭。墨部の下に点状は存在する。「日」に疑いがないとみられる。	
69	26	一ノ	58.1	墨部薄い。文字中央の残線。上ノか「一ノ」に「一ノ」に似てみえる。	
69	27	一ノ	35.7	墨部は若干薄い。文字全体は遺存し、判読できる。	
69	28	一ノ(中・下)	113.6	解明に文字全体が遺存。上は「一」に似て「丁」にみえる。「年」の横し字で92と同字か。	
69	29	一ノ	52.3	墨部で形厚く判読困難。横線二本と中央縦線の上部が疑い、右下に横かに斜線がみえ「未」と判断した。	
69	30	一ノ	32	比較的解明。横線二本のみみえる。	
69	31	一ノ	42.8	比較的解明。横線二本のみみえる。	
69	32	一ノ	57.2	比較的解明。横線二本のみみえる。	
69	33	一ノ	27.4	石トや散滅するが、縦線が右に屈曲して「七」とみえた。「十」の可能性残る。	
69	34	一ノ	99.6	墨部やや薄い。文字全体遺存し、判読できる。	
69	35	一ノ	56.2	下部散滅に散滅するが、文字全体は解明に遺存する。	
69	36	一ノ	41.6	上部散滅するが、下部は明瞭。上に縦線が薄くみえ、「木」とした。	
69	37	一ノ	31.1	上部散滅するが、比較的明瞭にみえる。	
69	38	一ノ	106.3	粗い石面で墨部歪み切れるが、比較的解明にみえる。	
69	39	一ノ	140.7	左側明瞭ながら、右側横、太い筆使いで横線と斜線、下に縦線がみえ、「不」とした。	
69	40	一ノ	66.2	太い筆使いで墨部解明ながら、文字解不明。「年」に類似する。	
69	41	一ノ	27.6	横線と解明で、左側に下がる斜線がみえようとして「人」としたが、「一」の可能性あり。	
69	42	一ノ	74.8	上部散滅するが、下部は明瞭。墨部の下に点状は存在する。「日」に疑いがないとみられる。	
69	43	一ノ	44.5	石部横、左ノに中央縦線と「日」がみえ、「上」と判断した。	
69	44	一ノ	43.9	四角のある種い面に書かれるが、文字全体は明瞭に遺存する。	
69	45	一ノ	46.7	全体に散滅し、墨部断片的に遺存。平行する縦線と、その間に「日」がみえる。	
69	46	一ノ	122.9	三本の横線と中央縦線、左上に横かな縦線があり、「年」と判断した。横線と下として「年」にもみえる。	
69	47	一ノ	44.4	大半散滅し、右下地の墨部遺存。遺存部は「日」状の一部分のみ。「日」と判断した。	
69	48	一ノ	38.2	上ノに横線と、右に点状の墨部がみえ、「年」の字の残りと判読した。	
69	49	一ノ	70.7	墨部厚く不明瞭だが、右に「日」状の線がみえ、左にも横かに縦線があるため「日」と判断した。	
69	50	一ノ	54.7	上部散滅して文字消えるが、左下に「一」に、右に縦線二本と両側に縦線がみえ「日」と判断した。	
69	51	一ノ	73	比較的解明。横しで書かれる。	
69	52	一ノ	45	中央散滅し、遺存部は「日」にみえるが、散滅した上に縦線がみえ、上部が散滅した「日」と判断した。	
69	53	一ノ	26.2	墨部薄い。大半で「一」に、石ト下ノ「丁」がみえようとする。	
69	54	一ノ	96.4	墨部厚く、文字の輪郭線不明瞭だが、上ノに右は「日」とみえた。	
69	55	一ノ	26.8	解明。左上と上部に短い墨部がある可能性があるが、筆が切れた痕跡か。	
69	56	一ノ	69.8	部分的に散滅するが、比較的解明に文字遺存する。	
69	57	一ノ	34.5	左上端が散滅するが、墨部は明瞭に遺存。	
69	58	一ノ	31.6	下ノ「日」は墨部遺存するが、残存部は解明に文字遺存。	
69	59	一ノ	42.7	墨部薄い。左ノに、右に「日」とみえ「日」と判断した。	
69	60	一ノ	111.4	墨部やや薄い。文字全体遺存する。	
69	61	一ノ	25.7	解明に文字全体が遺存し、判読できる。	
69	62	一ノ	71.6	左散滅。右はやや墨部薄いながら「日」と認め、左に横かな墨部あるようになり「日」と判断した。	
69	63	一ノ	99.5	墨部解明に残るが、左上散滅。散滅していない左上に縦線と横線の「日」とみえ「上」と判読しなかった。	
69	64	一ノ	68.6	やや不明瞭だが、文字全体遺存する。	
69	65	一ノ	40.5	石ト散滅し、横しに「日」。右に「日」と「日」は判読でき、遺存部から「日」と判断した。	
69	66	一ノ	41.1	中央から左下部散滅するが、文字の大部分は解明に遺存する。	
69	67	一ノ	54.5	上部散滅。左に縦線、右に「日」と「心」がみえ、「日」と推定した。	
69	68	一ノ(下)	27.7	墨部解明ながら、上部散滅。「日」の可能性あり。	
69	69	一ノ	231	一部散滅するが、右「七」に「石」にみえる。	
69	70	一ノ	40.7	墨部薄い。文字全体が遺存する。	
69	71	一ノ	35.1	墨部やや薄い。文字全体が遺存する。	
69	72	一ノ	32	上部マフ。下部は解明で「日」が一つ重なり、中央に縦線がみえ「日」とした。	
69	73	一ノ	132.1	左上散滅するが、他は解明に文字が遺存する。	
69	74	一ノ	33.3	比較的解明。	
69	75	一ノ	42.1	全体的に遺存し、周囲に散滅も認められず「十」とした。	
69	76	一ノ	46.1	中央縦線が薄くに散滅するが、文字全体は遺存して周囲に散滅なく「十」と判読した。	
69	77	一ノ	87.2	墨部薄い。縦線と横線はみえる。「十」と判読した。縦線が、断定できず。	
69	78	一ノ	52.4	下ノ右側散滅するが、「十」にみえる。	
69	79	一ノ	54.4	左上半分文字消滅するが、右は解明に残る。遺存部から「日」とみえた。	
69	80	一ノ	66.1	比較的解明。「日」としたが「心」にみえる。刻字の旁か。	
69	81	一ノ	15.3	墨部不明瞭。右の縦線と横線。左に縦し「一」の横線。下に「日」とみえ、上は散滅した「日」か。	
69	82	一ノ	99.2	墨部厚く、不明瞭。平行一本線と「心」はみえて「元」と判断した。縦線が「心」か。断定できない。	
69	83	一ノ	123.9	不明。中央散滅するが、横かに上縦線二本と下の横しのみみえる。「元」と断定はできない。	
69	84	一ノ	88.3	上部散滅するが、「日」は解明にみえる。	
69	85	一ノ	12.2	平行二本線は解明で、下に薄く石トから下ノ斜線がみえるが、断定できず。	
69	86	一ノ	70	右側散滅に散滅するが、比較的解明に遺存する。「日」と判断した。	
69	87	一ノ(下)	57.4	横線と解明で、右に横しに「心」にみえる。「心」は「心」にみえる。「心」の可能性残る。	
69	88	一ノ	51.4	墨部石で不明瞭。二本横線と斜線がみえ、中央に垂下線があるため「日」と判断した。	

第4章 遺物

国	番号	文字	系統	備 考
72	89	射	47.4	左側減し、右に「日」とみえる。左系統に「日」はなく、「射」など偏が増減した可能性ある。
72	90	水	47.4	比較的鮮明に墨線が遺存する。
72	91	分	49.8	墨線は薄いが全体が遺存し、「分」とみえたが「尔」の可能性もある。
72	92	其	56.5	左側減し、右側の不明瞭に遺存する。断片的な右横線と上の横線、下の点から「其」とした。
72	93	其	75.2	中央増減し、上下端部の墨線が遺存する。残存部から「其」と推測される。
72	94	其	57.8	上部減るが、下部は鮮明に墨線が遺存し、文字の判読可能。
72	95	其	56.2	断片的な右横線と不明瞭に遺存し、文字全体は推定できる。
72	96	其	119	上部は鮮明に遺存するが、下部の点が増減。
72	97	典	41.7	右上一部増減するが、他は比較的鮮明に遺存する。
72	98	典	62.5	文字の中央から右下一部増減。遺存部は墨線鮮明で文字の判読可能。
72	99	文	83.8	所々墨線がマツボクするが、比較的鮮明に文字が遺存する。
72	100	印	23	比較的鮮明。一辺増減した「印」とみえるが、上に横線なく「印」と推測した。
72	101	印	47.2	墨線薄い文字全体は遺存し、「印」とみえるが、偏ち分の位置がわかる。「印」の可能性はある。
72	102	印	127.4	左・下部増減し、墨線薄い。右は「日」、右の上は「上」とみえたことから「印」と推測した。
72	103	以	42.2	断片的な遺存で、「以」あるいは右を土として「之」にも見える。
72	104	以	45	横線、左「ム」右「ス」状の線のみ。「以」とみえた。
72	105	尙	172.9	墨線鮮明で左側増減。文字中央は右の深みで切れる。上「へ」下「日」。中間に交差線・縦線あり。「尙」か。
72	106	全	92.4	下部増減した上部は別は遺存。右に薄い線がみえみえるが、墨線が不明。
72	107	如	108.4	墨線やや薄い。左「矢」右「日」のみみえる。
72	108	如	65.7	墨線やや薄い。文字全体遺存。
72	109	如	134.1	墨線断片的な不明瞭。右は「左」、右は増減するが「日」、上部の墨線が偏かに認められる。
72	110	如	40.2	比較的鮮明に文字全体が遺存する。
72	111	如	27.5	左上増減するが、下「女」左「上」「日」とみえ、右に「女」字偏かに認められる。
72	112	如	91.9	墨線よく不明瞭だが、全に「女」、右に「日」とみえる。
72	113	如	56.9	右は文字減るが、左の「女」は鮮明で、右下部に縦線が「如」とみえた。
72	114	如	36.3	文字は鮮明だが、右側の西で墨線が切れ切る。左の偏は「女」、右の深み線が「如」と推測した。
72	115	如	43	左側減るが、他は鮮明。右は「右」、左は増減するが「女」とみえる。
72	116	如	49.6	墨線やや不明瞭だが、上に「日」、下に短い横線がみえ、さらに「日」が横で「如」と推測した。
72	117	如	44.6	墨線鮮明で左側増減。文字中央は右の深みで切れる。偏は「日」で「如」とみえるが、法系統にはなく仔細不明。
72	118	如	132.2	比較的鮮明。文字全体遺存。
72	119	如	42.3	右上部増減するが、他は比較的鮮明に遺存する。
72	120	如	40.4	所々増減するが、文字全体は比較的鮮明に遺存する。
72	121	如	28.8	墨線鮮明。上には「女」、下は「日」とみえたが、下は「右」にもみえる。偏定できず。
72	122	如	93.2	上部増減し、残存部も墨線薄い。左下に「日」右下に「女」とみえ「如」とした。
72	123	如	53.5	墨線薄いところもあるが、文字全体は鮮明に遺存する。下はとみえて「如」ではないとした。「尙」の可能性はある。
72	124	子	67.3	墨線よく鮮明で、文字全体は鮮明に遺存する。下はとみえて「子」である。
72	125	子	48.6	やや横化流行するが、比較的鮮明に文字遺存。
72	126	子	58.2	左側増減するが、上「フ」下に「日」と横線が遺存する。
72	127	子	30.5	墨線鮮明。「各」の可能性もあり。
72	128	子	179.7	右上部増減。遺存部から「日」とみえたが、下部が増減して「日」の可能性もある。
72	129	子	32.4	断片的な右横線のみ。残存部から「日」と推測した。
72	130	子	99.2	下文字減る。上の横線と左の「日」は明瞭に残る。
72	131	子	99.2	鮮明。文字全体遺存。偏定できる。
72	132	子	40	断片的な右で墨線薄い。文字全体は遺存する。
72	133	子	36.9	左側は増減するが、文字鮮明で遺存部から「日」と推測した。
72	134	子	30.6	下部増減するが、上部比較的良好に遺存。残存部から「尙」と推定した。「年」の可能性はある。
72	135	子	43.5	下部増減するが、左に「上」、下に「日」。その深み線が横線の「子」とみえる。
72	136	子	17.2	やや不明瞭だが、文字全体は遺存し、墨線薄い箇所がある。
72	137	子	50.1	若干不明瞭だが、文字全体は遺存して判読できる。
72	138	子	28.6	やや不明瞭だが、文字全体は遺存し、判読できる。
72	139	子	39	下部増減するが、上「子」で中段に右に点がある。「尙」とみたと推定できる。
72	140	子	30.1	下部増減し、上は墨線薄い。「子」とみえ「尙」と推測した。
72	141	子	132.1	比較的鮮明に残る。判読できる。
72	142	子	134.5	墨線不明で下部は増減。上に「尙」、中段に短い横線。下に「日」がみえ「尙」と推測した。
72	143	子	43.6	下部増減し増減するが、文字の大部分は鮮明に遺存する。
72	144	子	53.8	墨線薄い。文字全体は遺存する。
72	145	子	44.8	鮮明に遺存。やや左へ筆使いで書かれる。
72	146	子	22.3	中央増減し、上部に横線。右下に「日」とみえる。遺存部から「品」としたが「尙」の可能性もあり。
72	147	子	71.9	下部増減するが、上に「子」その右に「日」とみえる。「尙」と推測した。「尙」の可能性あり。
72	148	尙	69.7	右側減し、遺存部も偏頗しく不明瞭。右は「日」、右の赤は「日」にもみえる。
72	149	尙	43.4	墨線やや薄い。文字全体は遺存する。
72	150	尙	211.4	墨線やや薄い。文字全体は遺存する。
72	151	尙	49	やや不明瞭だが、文字全体は遺存する。
72	152	尙	147.3	上部と中央に一部墨線遺存。下は3つの付く「一」で下に横線がみえ、「尙」と推測した。
72	153	尙	102.2	文字の中央減る。偏は鮮明。下に「守」上を「日」とみえたが「尙」と推測した。
72	154	尙	106.2	左と右下部偏かに増減。他は墨線比較的鮮明。
72	155	尙	52.8	比較的鮮明に遺存する。
72	156	尙	34.2	上・左側は鮮明に遺存して「尙」と推測したが、断片的な遺存で文字偏。天地詳細不明。
72	157	尙	42.4	やや不明瞭だが、文字全体は遺存する。
72	158	尙	46.2	墨線よく鮮明だが、全に「日」状の線と下に「子」とみえ「尙」とした。
72	159	尙	49.2	左上部減るが、他は鮮明。下に「守」上を「日」とみえたが、上部横線が多いともみえ「尙」の可能性もある。
72	160	尙	162.4	やや不明瞭。右上部増減するが、下「子」下「子」とみえる。「尙」との偏定は不安が残る。
72	161	尙	50.9	比較的鮮明だが、右下部は横化流行的で不明瞭。
72	162	尙	26.8	横線右側増減するが、他は比較的鮮明。
72	163	尙	132.4	墨線よく左中心に増減。偏かに横線「一」状線がみえ「尙」と推測した。
72	164	尙	48.2	上部減るが下部は増減。中央は不明瞭で「人」と推定した。
72	165	尙	37.4	やや不明瞭。中央増減するが全体は判読できる。
72	166	尙	64.3	文字上へを中心に遺存。中央に交差する本線がみえるが、右下へ戻る線は増減して不明瞭。「尙」と推測した。
72	167	尙	20	墨線薄い。文字全体は遺存する。
72	168	尙	28.3	墨線よく、左下部減るが、文字全体は判読できる。
72	169	尙	47.3	右上部増減するが、比較的鮮明で「尙」か「天」とみえる。
72	170	天	104.9	右上部増減するが、他は鮮明に遺存。
72	171	天	39	鮮明に文字全体が遺存する。
72	172	天	152.8	文字は若干輪郭が不明瞭だが、比較的良好に遺存し、判読できる。
72	173	天	63.3	左上増減し、墨線やや薄い。左下に「上」状線、右に「力」とみえ「天」と推測したが判定できず。
72	174	天	36.4	やや不明瞭だが、文字全体は遺存する。
72	175	天	47.7	中央文字増し、右側減。左下に「上」下部減る。中央縦線偏にのみみえ「尙」とした。下部横線は右側偏か。
72	176	天	110	墨線よく、輪郭も鮮明。文字全体は遺存し、判読できる。
72	177	天	48.3	やや不明瞭で左上増減。異く斜線があるようにみえて「天」としたが、「日」「王」の可能性あり。



国	番号	文字	転写	備考
76	178	文	214.3	解明に形が残る。左「上」、右は「儀」で「儀」のみが「成」内の下は平行線にもみえる。
76	179	安	119.1	中央横線、横断片の女ながら「女」とみえ、「安」と判定した。
76	180	安	27.4	黒地の右で形残や不明だが判定できる。
76	181	高	29.4	上部やや形残するが、全体は残存する。継ぎで書かれる。
76	182	高	76.9	左下形残するが、上とは形残良好に遺存し、判定できる。
76	183	高	35.5	一部でメタ音が、文字全体は遺存する。「へ」下の旁が特性とせず、「高」の可能性あり。
76	184	高	29.2	右「上」下横線、右は「高」のみで「高」と判定した。右は「高」の字がみられない。
76	185	行	54.1	太い筆使いで、文字解明。「行」の上部が重なりながら「行」にみえる。
76	186	行	57.5	比較的解明ながら、中央部の小横線、左「イ」で、右は上下下本横線のみ。「行」と判断した。
76	187	住	18.7	形残解明で判定できる。左横は「イ」とはみえず「住」と判断した。
76	188	住	83.1	形残解明が、左に「イ」、右に横線と本横線、その上に別部線がみえ、「住」と判断した。
76	189	住	53.1	文字中央部が形残断片だが、字全体は遺存する。
76	190	得	135.7	全体の形不明。黄いながら「得」「石」「住」「下」「下」はみえ、「得」と判断した。
76	191	得	31.9	形残は解明ながら、右面の四角で筆が切れる。右下横線、遺存部から「得」と判断した。
76	192	得? (得時後?)	18.6	形残右下のみ遺存。「得」とみえ、「得」と判断したが、「得」「時」の可能性あり。
76	193	得	60	右下形残するが、文字全体はみえる。左「イ」の上横線は重なり「得」にみえる。
76	194	得	53	形残やや薄く、右下横線と判読しにくい。左に「イ」、右「下」「下」状の線はみえる。
76	195	得	41.2	左の「下」は解明で、右は横線、上に横線と別部線が残存し、「得」と判定した。
76	196	得	48.9	左下形残し不明。左は「イ」、右は「得」の上で「得」したが、右は「安」ともみえる。
76	197	得	43.2	上端文字部高まるが、下は解明に遺存し、遺存部から「得」とみえた。
76	198	得	128	右下形残するが、左「イ」右下に横線と「文」とみえ、「得」と判断した。
76	199	得	49.3	左は解明に「イ」がみえ、右は横線が形残するが「へ」下は「日」とみえ、「得」と判断した。
76	200	得	119.4	形残解明が、左「イ」はみえ、右は形残解明が「上」「目」下に横線がみえる。
76	201	得	63	全体的に形残解明が、右は「得」とみえる。左横線と右「下」の可能性あり。「得」と判断した。
76	202	得	54.8	文字は解明に重なりながら、左に点状の形がみえる。筆先が尖ったか。
76	203	得	91.7	左下形残するが、文字の上「イ」は遺存し、判読できる。
76	204	成	33.4	部分的に形残するが比較的解明に遺存する。
76	205	成	55.5	左は形残するが、横に形残のみ。右は「女」とみえ、「成」と判断した。
76	206	成	89.1	形残よく不明だが、左は「上」状、右は「女」の「女」とみえるが、法書らしく「成」の可能性あり。
76	207	成	44.5	形残やや不明だが、文字全体は遺存する。
76	208	成	133.2	右下形残解明が、左「上」「上」「上」はみえ、「成」と判断した。
76	209	成	119.2	左上と右端は形残するが、左に「上」右に「上」とみえる。
76	210	成	59.1	黒地の右で形残や不明だが、左に「上」右に「上」とみえる。
76	211	成	102.2	形残やや薄いが、左に「上」、右に「上」とみえる。
76	212	成	43.5	形残は解明だが、形残は断片の女ながら。左は「下」で右は断片の女ながら「成」と判断した。
76	213	成	126.1	形残よく不明だが、左「上」「上」はみえ、右は横線がみえ「成」と判断した。
76	214	成	75.1	右上やや形残解明が、文字全体は遺存する。
76	215	成	125.2	右表面の四角書きで文字が切れるが、形残は解明で判読できる。
76	216	成	80.9	上部メタ音、下横に「上」、右に「上」状の形残みえて「成」と判定した。
76	217	成	62.4	下部形残、左に「上」右に「上」とみえ、「成」と判断した。
76	218	成? (得時?)	25.4	上部横線のみが、左に「上」右に「上」の下部とみえ、「成」と判断した。「得」の可能性もある。
76	219	成	53.9	解明に文字全体は遺存する。
76	220	成	31.4	形残解明が、文字全体は遺存する。
76	221	争	81.6	左横線し、遺存部から「争」とみえたが、「争」の可能性あり。
76	222	争	25.1	右上に消した横線、右上に3本前後の横線と1本の縦線がみえ、「争」と判断した。
76	223	争	81.5	形残よく不明だが、左「上」右に横線と本横線のみ。「争」と判断した。
76	224	争	106.1	やや形残解明が、上「争」右「争」はみえるが、右は「争」とみえ、「争」と判断した。
76	225	成	72.7	形残解明に重なりながら、文字全体は判読できる。
76	226	成	62.8	上部の形残、下方に「上」、右に「上」状の線とみえ、その間に上部の線がみえ、「成」と判断した。
76	227	成	76.4	形残断片の「上」と横線のみみえるが、中間は形残不明。中間は「火・火」とみえ「成」と判断した。
76	228	成	96.6	部分的に形残解明とみえるが、文字全体は遺存し、判読できる。
76	229	成	96.5	上「右」と左横線、左に点と「上」その右側に「上」状の線のみみえる。「成」か。
76	230	成	39.3	黒地の右で形残解明が、左に「上」右に「上」とみえ、「成」と判断した。
76	231	成	49	線の輪郭不明だが、字全体残る。
76	232	若	30.3	太い筆で書かれ、形残解明に遺存する。
76	233	若	33.5	形残やや薄いが、細い線が書かれた文字全体が遺存する。
76	234	若? 美?	26.7	右横線し、全体的に不明。上に「上」、下に横線横線のみ「若」としたが、右下に線が横びて「美」の可能性あり。
76	235	若	55.1	左「下」部横線、上に「上」下に横線横線と、右に短い横線がみえ「若」と判断した。
76	236	若	90.1	左下横線やや不明だが、比較的解明に文字全体は遺存する。
76	237	若 (得?)	48.1	不明に上「上」と下横線横線のみ「若」とした。右下横線と縦線の交差部が右に寄って「得」にもみえる「若」か。
76	238	若	83.3	左下を中に形残、上「上」、下3本横線と横かに別部線がみえる。「若」と判定した。
76	239	若	56.6	形残解明が文字全体は遺存。上に「上」、下に「上」「上」と読める。
76	240	若	31.7	比較的解明に文字全体は遺存する。
76	241	若	50.2	形残やや薄いが、文字全体は遺存。判読できる。
76	242	若	75.5	右横線が「上」の形残解明が、文字全体は解明に遺存する。
76	243	若	72.2	太い筆使いで文字解明に遺存する。
76	244	若	34.4	やや不明だが、文字全体は遺存する。
76	245	若	40.3	形残よく、文字中央横線、上は「上」で、下に横線とあるとみえ「若」としたが、上は「上」の「若」の可能性あり。
76	246	若	153.7	上「右」部横線、上に「上」状の線と横線、下に「上」とみえ、「若」と判断した。
76	247	若	96.8	やや形残解明が、文字全体は遺存する。
76	248	若? 若?	28.8	上部横線し、形残解明が「上」「上」とみえ、「若」と判定した。「若」ともみえる。
76	249	成	74.7	比較的解明だが、中央やや黒く塗む。上は「上」下「上」状の線のみみえる。
76	250	成	103.4	下部横線し、遺存部も形残解明。上に「上」下に「上」と断片の形がみえ、「成」と判断したが、判定できず。
76	251	成	66.4	比較的解明だが、中央は横線横線付着でやや不明。太い筆使いで文字全体は遺存する。
76	252	成	102.9	形残断片、全体的に不明。上が「上」下左「上」下右「上」とみえ、「成」と読めた。
76	253	成	19.4	上「上」部横線し、形残解明。横「争」状で書かれる。
76	254	成	11.7	やや不明で所々形残するが、太い筆使いで大きく書く。上に「上」下「上」右に「上」とみえ「成」と判断した。
76	255	成	87	形残やや薄いが、文字全体は遺存し、判読できる。
76	256	成	15.2	解明だが、上「左」部やや形残、右「上」「上」は明瞭で左「上」はやや不明。上に「上」が付く可能性あり。
76	257	成	64.5	中央から左下横線横線、上「上」で左下横線、右「上」とみえ、「成」と判断した。
76	258	成	125.3	やや不明解明が、判読可能。上に「上」左に「上」とみえ、右に「上」が形残する。
76	259	成	31.9	右の形の消し、左「上」右「上」はみえ、右は「上」右に「上」とみえ「成」と判断した。
76	260	成	17.7	形残やや薄いが、文字全体は遺存し、判読できる。
76	261	成	53.8	上と右が形残、下は「上」で上横は「上」中間が不明で、下は「上」状のみみえる。「成」とみえた。
76	262	成	28.9	形残よく、上部横線、下の短い横線は「上」の一部、下に横線とあるとみえ「成」と判断した。
76	263	成	45.7	文字中央横線、上「上」下横線は解明。中間に「上」横線のみみえる。「成」と判断した。
76	264	成	114.1	「上」の下部横線し、形残解明。上は「上」下「上」とみえ、「成」と判定した。
76	265	成	28.2	形残よく、断片の形が「上」「上」と「上」の交わり、下に横線は「上」と判断した。
76	266	成	42.7	形残上部横線、下端に短い横線、その上に「上」がみえ「成」と判断した。

国	番号	文字	系属	備考
79	267	度	38.4	左側減し、右端は不明。右下に横・斜線と「コ」状線。下に「目」、最下段に「レ」の横線があり「道」と推測した。
80	268	度	65.1	やや不明だが、左側減減するが、「レ」の一部と「目」はみえる。「道」と推測した。
80	269	度	36.1	断面削片的な造りで、下の「目」の横線と上に「垂」と「コ」状線があり、「道」とみだが、「道」の可能性あり。
80	270	度	47.6	左側減減するが、右は下に点と「目」下に「垂」とみえ「道」と推測した。
80	271	道	56.9	断面の遺存状態は良好だが、中央は線が混み押しにくい。上は「レ」で下が「目」状とみて「道」と推測した。
80	272	度	51.7	全体に断面遺存、左下減減するが左「身」右「多」とみえ「度」とした。
80	273	名	55.9	断面削片に、下に「度」
80	274	名	35.1	断面削片が、上に「度」下に「目」が「度」の線のみ「度」と推測した。
80	275	名	56.4	右下不明ながら、判読できる。
80	276	名	117.7	比較的解明、太い筆使いで書かれる。
80	277	成? (成?)	32.4	断面削片で、「成」とみたいが、左下の線が横して「目」にもみえ、「成」の可能性も残る。
80	278	成	46.7	非常に解明、比較的細い筆使いで書かれる。
80	279	成	61.4	右下やや減減するが、文字の大部分は遺存し、判読できる。
80	280	成	99.8	太い筆使いで書かれ、文字解明に遺存する。
80	281	成? 成?	73	離れ付着部の断面削片。「成」は明瞭だが、左下が「成」としてが、横線と「目」が見え「成」か。
80	282	成?	33	上部断面削片、左下端マツマツ。右を上として90°反転すると「成」にみえなが、左は「手」状にみえて「成」とした。
80	283	式?	190.2	左上側減減するが、大部分は断面削片に残り、「式」の左下は「エ」とみて「式」と推測した。
80	284	成?	51.2	全体に断面遺存するが、左下は「目」右は「支」にみえ、「成」と推測した。
80	285	成?	44.8	比較的解明だが、右側減減する。
80	286	成?	85.4	果地の右で断面もよく不明。右側減減するが、左の「夕」と下の判点のみ、「成」と推測した。
80	287	成	88.7	比較的解明で文字全体遺存する。
80	288	成	63.1	下・右側減、上に「レ」と縦線数本、中央に横線のみ、「成」と推測した。
80	289	成	50.2	右上側減、横線と縦線数本の横線、下に短い横線のみ、「成」と推測した。
80	290	成?	92.8	下・右側減減するが、「レ」で下の下に縦線数本みえ、「成」と推測した。
80	291	成? 成?	25.8	文字全体は不明ながら、所々断面削片「成」とみえ「成」の可能性残る。
80	292	成? 成?	52.6	上部ややマツマツするが、比較的解明、下に3本横線があり、「成」か「成」と思われる。
81	293	成	40.8	左は側減し断面削片が「木」とみえ、右は下側減減するが「長」とみえる。
81	294	成	120.9	右上側かに側減減するが、断面削片、左「木」右「長」とみえる。
81	295	成	57.3	断面削片が、左に「木」、右に「長」とみえる。
81	296	心	43.1	「心」は明瞭だが、上部減減。「心」とみえる。「心」の可能性あり。
81	297	心?	35.5	上部減減して「心」は遺存する。右上端まで空気が少ないが「心」の可能性残る。
81	298	心?	60.9	比較的解明に文字遺存する。
81	299	念	58.1	解明に文字全体遺存、中央の太使いで書かれる。
81	300	念	85.5	下部の断面削片が、上部は断面遺存し「念」とみえる。
81	301	念	43.3	果地の右で断面も断片的。残存部からは「念」の可能性あり。
81	302	思	38.2	比較的解明で文字遺存する。
81	303	思	25.7	比較的解明に遺存する。
81	304	思?	34.1	左上上部遺存し、周囲が側減減する。上に「目」「目」、左下に点のみ見える。遺存部分から「思」と推測した。
81	305	思	50.2	解明に遺存するが、右表面の凹みで断面逆切れる。文字は遺存する。
81	306	思?	37.1	断面削片が、左に「レ」と右に縦線数本、「思」とみえ、「思」と推測した。下部側減。
81	307	思?	56.8	左下側減し、断面も薄く上に「レ」一つ、中段に「コ」状線、下段は「心」とみえ「思」とした。
81	308	思	85.5	比較的解明に遺存する。やや減減し書きで書かれる。
81	309	思?	72.7	右・一部と左側減減。「思」が横に並び、左端に横線が横して「思」とみだが、中央は「人」、左端線は「目」の一部か。
81	310	思?	85.4	右側減減するが、左は比較的解明、細い筆使いで書かれる。
81	311	思? (成?)	111.8	断面やや明瞭。縦が横直して「目」にもみえるが、「思」が斜めに重なる「思」と推測した。
81	312	月?	50.9	離れかな遺存で、「月」はみえるが、横の一部の可能性あり。
81	313	月? (同?)	56.5	右下側減減して「月」とみえ、中央から下端は不明で「同」の可能性も残る。
81	314	有	32.8	断面削片が比較的解明に遺存する。
81	315	有	42	果地の右で断面やや薄い。文字全体遺存。
81	316	有	126.2	比較的解明に断面遺存する。
81	317	有	84.4	太い筆使いで書かれ、解明に文字遺存する。
81	318	有?	19.3	果地の右で下側減、上は「レ」と思われ、遺存部は「有」とみだが、断定できない。
81	319	所	68	解明に断面遺存し、判読できる。中央の筆使いで書かれる。
81	320	所	32.2	左下側減減するが、上に横線、右に「目」とみえ「所」と推測した。
81	321	所	50.8	部分的に側減減するが、比較的断面明瞭。
81	322	所	66.6	断面削片が、文字全体は遺存する。
81	323	所	37.8	右側減、「下」にみえるが、右に縦線が薄くみえると思われ「所」と推測した。
81	324	所	57.9	比較的解明だが、横と書体が異なる。
81	325	所	58	横直に側減減するが、文字全体は解明に遺存する。
81	326	所?	35.5	断面削片的な造り。細い筆使いで左に「目」、上に薄く横線のみ「所」とした。右は側減。
81	327	所?	82.8	断面やや下側減減、やや不明だが上に横線、左は「目」の上部遺存と思われ「所」と推定した。
81	328	所	52.9	解明に遺存。左は縦線3本の横線に点とみえるが、上点は「目」の横線とみえた。
81	329	所	60.5	断面やや右下側減減。残存部の上に「目」下に横線数本みえ、「所」と推測した。
81	330	所	125.7	断面削片、右下側減減。下に「目」とみえ、下に横線と「人」状の線のみ、「所」と推測した。
81	331	所	61.1	断面削片「わ」に「有」
81	332	所	29.9	果地の右で断面も薄い。下部は比較的解明で下部に薄く「目」とみえて「所」と推測した。
81	333	所	66.2	断面やや薄く下側減減するが、横は傾きに遺存し、判読できる。
81	334	所	106	右下側減減するが、左とは解明に断面遺存し、「所」とみえた。
81	335	所	60.5	右面の凹みで断面不明だが、文字全体は遺存して判読できる。
81	336	所	33.3	断面やや不明ながら、下に「目」下に「人」状の線のみ、「所」とした。
81	337	所	42.8	果地の右が、比較的解明は残り、文字全体の判読はできる。
81	338	時?	81	右上側減減するが、文字全体は遺存する。
81	339	時?	37	断面やや薄い太い筆で右に「身」、左に薄い女から「目」とみえ「時」と推測した。
81	340	時?	34.8	右上のみ解明しては側減、「時」か「時」の可能性あり。
81	341	時?	58.1	右・下側減減するが、左下に「身」下に「目」の一部はみえ、「時」と推測した。
81	342	時?	39.5	全体に断面遺存するが、下に「目」下に「目」とみえて「時」と推測した。
81	343	時?	61.1	下部減減するが、大部分は遺存して判読できる。
81	344	時・足?	55.8	上に「目」と横線のみ、下側減減する。「足」とみだが、文字が左に寄って「足」かもしれぬ。
81	345	方	43.8	断面やや薄い。文字全体遺存する。
81	346	方?	53	若干断面削片のところもあるが、概して比較的解明に遺存する。
81	347	方?	64.6	断面解明で文字全体が遺存する。
81	348	方?	38.1	比較的解明、一回減減する。
81	349	方?	46.8	左側減し、右に「レ」と「他」とみえ、「方」と推測した。
81	350	方?	31	断面削片が、左に「方」、右に「レ」下に「レ」とみえる。
81	351	方?	118.8	やや不明で中央傾か側減減。右「手」、左下傾かに「目」、右「支」とみて「方」と推測した。
81	352	方?	196.6	太い筆使いの文字だが、断面やや不明。左は「高」、右「支」とみだが、左下の「目」が小さく「改」の可能性あり。
81	353	改?	35.5	左・右」は解明で、右は側減減するが傾きに断面のみ「改」と推測した。
81	354	改?	51.1	断面削片が、文字全体は遺存する。
81	355	改?	35.1	断面削片が、左に「レ」、右の線と右に「支」とみえ「改」と推測した。

国	番号	文字	系属	備	考
83	356 歌		35.8	部分の濁音、右側の大半は音減し、左に「 <b>○</b> 」と「 <b>ウ</b> 」がみえて「 <b>後</b> 」と判断した。	
83	357 歌		73.4	異音がたが、異音が「 <b>良</b> 」か、左は「 <b>イ</b> 」か「 <b>我</b> 」、右は「 <b>ウ</b> 」の「 <b>後</b> 」とみえたが、断定できない。	
83	358 歌		62.7	異音強く、下は音減。偏と字が並び、左が「 <b>イ</b> 」で「 <b>ウ</b> 」で「 <b>ウ</b> 」か「 <b>ウ</b> 」に「 <b>後</b> 」とみえる。	
83	359 節		25	やや音減して異音消えるが、文字全体は比較的解明に遺存する。	
83	360 節		77.7	異音比較的解明に残る。	
83	361 歌		69.5	やや音減いが、比較的解明に遺存する。中央の筆使いで「家」に書かれる。	
83	362 歌		88.3	両側にある面がほとんど不明だが、文字全体は「 <b>良</b> 」か「 <b>良</b> 」とみえる。	
83	363 歌		172.2	左上音減、右下の音はほぼ音減か、右に「 <b>イ</b> 」音がみえる。右を横長にしていることから上下は400回転して置かれた。	
84	364 石		190.2	黒地の右で異音弱くやや不鮮明。右上音減するが「 <b>右</b> 」と認めると「 <b>右</b> 」の可能性が残る。	
84	365 石(組・組)		82.1	不鮮明。左上「 <b>イ</b> 」「 <b>ウ</b> 」、右下に「 <b>良</b> 」みえる。上の横線から「 <b>良</b> 」「 <b>良</b> 」としたが、北縁にはない。	
84	366 節		55.1	異音強いが、文字全体が遺存し、判読できる。	
84	367 石		116.1	比較的解明。文字全体遺存。	
84	368 石		86	比較的解明に遺存する。	
84	369 石		35.6	右側異音やや音減するが、比較的解明に遺存する。	
84	370 石		61.2	黒色の石だが、異音解明で文字全体遺存する。	
84	371 横		41.7	異音やや強いが文字全体が遺存する。	
84	372 歌		25.5	左右両側音減するが、上に「 <b>四</b> 」、下に「 <b>開</b> 」状の線のみ見え、「 <b>後</b> 」と判断した。	
84	373 長		48.3	右下音減するが、上に「 <b>開</b> 」、左下は「 <b>七</b> 」とみえ「 <b>後</b> 」と判断した。	
84	374 石		101.7	中央やや音減するが、比較的解明に遺存する。	
84	375 長		63	解明。偏が左上音減するが、左は「 <b>日</b> 」とみえる。	
84	376 長		61	比較的解明に遺存する。左下音減。	
84	377 節		88.3	下部音減するが、上部音弱はと文字が遺存し、遺存部から「 <b>開</b> 」とした。	
84	378 石		43	「 <b>全</b> 」体に音減し、不鮮明だが、断片的に文字全体はみえる。	
84	379 石		45.8	偏に音減するが、全体は比較的解明に遺存する。	
84	380 石		48.2	下部音減するが、「 <b>ウ</b> 」「 <b>ウ</b> 」、下に「 <b>日</b> 」の音がみえる。「 <b>色</b> 」と判断した。	
84	381 石		54.5	全体的に不鮮明で下部音減し、異音偏が上平のみみえる。	
84	382 石		68.9	上部は比較的解明だが、下部音減する。遺存部は「 <b>日</b> 」とみえるが、下に傾くようにもみえる。	
84	383 石/百		101.9	薄い異音ながら、「 <b>日</b> 」と上部から見る斜線はみえる。斜線の上は音減し仔細不明。	
84	384 石/百		61.2	異音強く、下・右側音減。遺存部から「 <b>日</b> 」とみえたが、「 <b>イ</b> 」と石の旁の片が重なる箇所が。	
84	385 石/百		108.3	異音比較的解明だが、横線がやや湾曲した痕跡。中央に伏線があり、「 <b>開</b> 」か「 <b>開</b> 」とみえた。	
84	386 石/百		83.3	異音やや音減するが、文字全体は「 <b>良</b> 」か「 <b>良</b> 」とみえる。	
84	387 石/百		84.5	「 <b>日</b> 」は確認できるが、異音不鮮明で文字詳細不明。「 <b>開</b> 」か。	
85	388 石(下?)		14.7	全体的に酸化状がひどく不鮮明。上の横線は明瞭だが、下部は不鮮明。「 <b>開</b> 」の可能性あり。	
85	389 歌		54	異音強く、上部音減。下に斜線3本前後、上に横長の「 <b>コ</b> 」状の線のみ見える。「 <b>開</b> 」と判断した。	
85	390 歌(家?)		36.3	左下音減。上に「 <b>開</b> 」「 <b>ト</b> 」下に横線と「 <b>く</b> 」状の線はみえる。「 <b>家</b> 」としたが、「 <b>家</b> 」の可能性あり。	
85	391 歌		45.4	やや音減いが、比較的解明に遺存する。	
85	392 歌		45.4	右上音減し、異音消えるが他は解明に遺存する。	
85	393 歌		67.8	異音やや不鮮明。中央に「 <b>家</b> 」状とみえるが、上部に薄く別線が数本見え、「 <b>後</b> 」と判断した。	
85	394 歌?		111	上部音減し、酸化状が著した下部のみ解明に残る。文字は音減的から判断した。	
85	395 歌?		31.4	右の両端で異音不明瞭。上部音減し、下は横線と「 <b>く</b> 」状の線とみえ、「 <b>家</b> 」とした断定できず。	
85	396 節		87.7	異音解明に遺存。右は「 <b>日</b> 」、左は「 <b>良</b> 」と見られると「 <b>良</b> 」と見られる。「 <b>良</b> 」と見られる。	
85	397 石		42.4	右は「 <b>日</b> 」と「 <b>良</b> 」、右は「 <b>日</b> 」と「 <b>良</b> 」とみえる。右は「 <b>日</b> 」と「 <b>良</b> 」とみえる。	
85	398 節		145.3	中央音減。異音強いが、左「 <b>家</b> 」、右下部片に「 <b>日</b> 」、右「 <b>上</b> 」「 <b>上</b> 」とみえる。「 <b>開</b> 」とみえた。	
85	399 節		22	横上端大濁するが、比較的異音解明。上「 <b>○</b> 」「 <b>ウ</b> 」とみえ、「 <b>後</b> 」と判断した。	
85	400 長		50.2	異音強いが、右中央に「 <b>良</b> 」と書かれる。位置から他に文字はないと思われる。	
85	401 長(下?)		125.8	異音強いが、右は「 <b>良</b> 」とみえ、右は音減し不明。「 <b>良</b> 」か「 <b>開</b> 」と思われる。	
85	402 長		78.1	偏は横線が若干音減。上部は横線3本と中央音減。右下に「 <b>良</b> 」か「 <b>良</b> 」とみえ、「 <b>家</b> 」と判断した。	
85	403 長		109.6	異音比較的解明だが、右は「 <b>日</b> 」と「 <b>良</b> 」とみえる。右中央に「 <b>良</b> 」とみえる。偏にみえる。	
85	404 石/下?		72.4	異音強く不鮮明。上に「 <b>○</b> 」下に横線が数本見え、「 <b>日</b> 」とみえたが、「 <b>日</b> 」の可能性もある。	
85	405 石		50.2	異音やや強いが、狭い右面に「 <b>日</b> 」とみえ、位置からも他に文字はないとみられる。	
85	406 石		55.8	全体的に異音強い。偏は「 <b>日</b> 」。旁は「 <b>日</b> 」状にみえ、「 <b>武</b> 」と判断した。	
85	407 石?		55.9	左は音減し、右は「 <b>家</b> 」とみえる。右上に点があり、「 <b>日</b> 」と判断して「 <b>日</b> 」と判断した。	
85	408 石?		103.3	異音やや不鮮明だが、右に「 <b>日</b> 」「 <b>上</b> 」下に「 <b>日</b> 」とみえる。「 <b>日</b> 」と判断した。	
85	409 石/下?		50.4	偏に書かれた「 <b>日</b> 」で、右は音減するが、位置的に偏がついて「 <b>日</b> 」の可能性もある。	
85	410 節?		83.7	右下音減し、やや不鮮明。左は「 <b>日</b> 」。右は断片的ながら「 <b>良</b> 」とみて「 <b>開</b> 」と判断した。	
85	411 石		25.8	異音解明で文字全体遺存する。異音は細い筆使いで書かれる。	
85	412 石?		79.7	異音強く不鮮明。左「 <b>日</b> 」、右は「 <b>良</b> 」状にみえたが、「 <b>日</b> 」と判断したが、仔細不明。	
85	413 石?		70	文字は解明に遺存。ただし、右の旁の文字が不明で、「 <b>日</b> 」と判断した可能性がある。	
85	414 石?		65.2	やや音減いが、左「 <b>日</b> 」で右「 <b>○</b> 」「 <b>ウ</b> 」とみえる。	
85	415 石?		72.2	異音比較的解明で判読できる。	
85	416 節		84.4	比較的解明に遺存する。文字全体が残り、判読可能。中央の筆使いで書かれる。	
85	417 節		50.2	酸化状の付着でややくすむが、比較的解明に遺存。太い筆使いで書かれる。	
85	418 石/下?		35.6	「 <b>日</b> 」は明瞭で方偏に横線状の線がある。「 <b>開</b> 」としたが、横線は偏の厚さで適切れた「 <b>書</b> 」の可能性もある。	
85	419 石		41.2	上部酸化状がひどく、右上音減。異音弱く判読しにくい。左は「 <b>日</b> 」。右は「 <b>良</b> 」とみえる。	
85	420 石?		112.7	やや不鮮明だが、右上音減。右は「 <b>日</b> 」と「 <b>良</b> 」とみえる。右は「 <b>日</b> 」と「 <b>良</b> 」とみえる。「 <b>日</b> 」と判断した。	
85	421 石?		99.2	異音弱く断片的に異音遺存。左は「 <b>日</b> 」とみえ、右は断片的ながら「 <b>良</b> 」とみえ、「 <b>開</b> 」と判断した。	
85	422 石?		50	左一帯のみ異音遺存。下に横線1本と、右に斜線と横線が偏かみ見え、左は「 <b>日</b> 」、右は「 <b>良</b> 」の石痕とみえた。	
85	423 石?		95.4	右下音減し、やや不鮮明。左「 <b>日</b> 」、右「 <b>○</b> 」「 <b>ウ</b> 」とみえ、「 <b>後</b> 」と判断した。	
85	424 節?		45.4	下・右側音減。右下に「 <b>開</b> 」とみえ、「 <b>日</b> 」とみえる。	
85	425 石?		70.3	解明に遺存するが、文字の位置から他に偏はほとんどみられない。	
85	426 石?		82	比較的解明に遺存する。両端の偏で判読しにくいと字が部分的にある。	
85	427 横		31.3	上部と右下音減。偏は細い筆使いの異音残る。右は「 <b>日</b> 」とみて「 <b>開</b> 」と判断した。	
85	428 横		21.9	やや不鮮明で左下音減いが、文字全体は判読できる。	
85	429 石		84	異音比較的解明で文字全体が遺存する。	
85	430 石		25.4	左下音減するが、比較的解明に文字遺存。	
85	431 石(家?)		33	異音不鮮明で上部音減。右「 <b>日</b> 」状。下「 <b>日</b> 」状の偏かみ見え。「 <b>日</b> 」か「 <b>日</b> 」とした。右下は十中全金の染みか。	
85	432 石		77.8	文字中央のみ音減し、右上音減。偏は横線が数本付く痕跡。下に「 <b>日</b> 」状の線のみ見え「 <b>良</b> 」と判断した。	
85	433 石		91.4	右下音減するが、左と中央下の「 <b>日</b> 」は比較的解明に遺存。	
85	434 石		125.4	やや不鮮明だが、文字全体は遺存し、中央下の「 <b>日</b> 」も明瞭に判読できる。	
85	435 石/下?		58	下部音減するが、上に「 <b>日</b> 」つみえて「 <b>開</b> 」の一部と思われるが、旁は不明。	
85	436 石/下?		63.6	異音弱く不鮮明。偏が「 <b>日</b> 」「 <b>開</b> 」とみえ、中央下に不鮮明ながら偏・横線があり、「 <b>開</b> 」か「 <b>開</b> 」と思われる。	
85	437 石/下?		67.7	異音比較的解明に遺存。中央下に「 <b>日</b> 」か「 <b>日</b> 」とみえるが、中央下に「 <b>日</b> 」と右側に横線が偏かみ見え、「 <b>日</b> 」か「 <b>開</b> 」か。	
85	438 石/下?		28.6	左下音減。上に横線が伏線かみ見え、右側音減。左縁線は初期線かみ見え、「 <b>開</b> 」か「 <b>開</b> 」、あるいは「 <b>開</b> 」か。	
85	439 石		31	左一帯一部音減するが、他は解明に遺存。	
85	440 石		74.6	異音やや強いが、文字全体は遺存し判読できる。	
85	441 石		65.7	右上やや音減するが、全体は遺存。中央の筆使いで書かれる。	
85	442 石?		15.7	右上音減するが、偏は解明に遺存。偏中央より下部の偏は初期線あり。右は不明。	
85	443 石		54.4	比較的解明だが、左「 <b>日</b> 」とみえ、右の旁は「 <b>日</b> 」とみえる。	
85	444 石		11.3	上部解明だが、下部は音減する。横線片ながら文字部は全体が遺存する。	

第4章 遺物

国	番号	文字	系属	備考
87	445	香?	42.5	中央一石の墨痕留まるが、上は「香」下は「日」とみえるが、「香」と推測した。
87	446	香? (香?)	33.6	上部横線、下部のみ遺存。上は「日」上は横線、斜線読み込み。「香」か「香」と思われる。
87	447	香?	69.1	墨痕不鮮明で、細い遺墨線から「香」にみえるが、墨痕不鮮明である。
87	448	香?	104.5	墨痕鮮明ながら文字不明。左は「日」にもみえるが不明で、右は「日」にもみえる。「日」か。
87	449	香?	26.5	左下擦滅するが、左下は「立」。右は横線を併う「し」とみえる。「日」と推測した。
87	450	香?	64.8	全体に墨痕薄く文字の全体は確認できる。
87	451	香?	66.5	全体に墨痕薄く、左下は横線。「左」か「日」か。「上」か「下」か。下部は横線が「日」か「日」と推測した。
87	452	不明	180.9	墨痕鮮明で文字種・上下不明。上半に「日」と推測され、下半は横線が「日」か「日」と推測した。二本線の間に点状墨跡があるが仔細不明。
87	453	不明	36.1	横かに線状墨痕のみ残る。大部分文字消滅。
87	454	不明	58.4	酸化質に覆われるながら墨色の不鮮明な線状墨痕があるが、形状は不明瞭で墨痕とも断定できず。
87	455	不明	53	黒い線はみえるが、線が不明瞭で十中全風の遺存の疑いもある。
87	456	不明	166.5	左下に墨痕鮮明ながら文字は文字消滅して判別できず。
87	457	不明	87.5	墨痕鮮明で文字種・上下不明。上半に「日」と推測され、下半は横線が「日」か「日」と推測した。二本線の間に点状墨跡があるが仔細不明。
88	458	不明	59.6	墨痕右下は消滅。左は「日」にもみえるが字は不明。
88	459	不明	63.3	墨痕大部分消滅し、線が断片的にしに残らない。
88	460	不明	104.9	墨痕断片的な遺存で文字不明。横は「へ」とみえるが、左を上にして「日」とみえる。
88	461	不明	50.8	墨痕明瞭だが、中央から右は消滅して文字不明。左は「日」。上は「日」状で「日」か「日」か。
88	462	不明	88.1	厚黒い線が横かにみえるが、十中全風の汚れの可能性もあり。墨痕不明。
88	463	不明	49.9	厚いので、墨痕不明。文字種不明。
88	464	不明	99.5	墨痕全体の濃い。左横は「日」だが、字は不明ながら右端に線がみえる。
88	465	不明	30.4	墨痕右上のみ明瞭で、他は消滅して文字不明。上に横線あり。左下は「日」か「日」か「日」か?。
88	466	不明	66.6	墨痕消滅して断片的な遺存。上は「日」とみえる。
88	467	不明	38.1	墨地の石で墨痕不鮮明。「日」か「日」か。
88	468	不明	108.9	大部分消滅し、横は「し」状に線のみ残る。文字種不明。
88	469	不明	103	右上部のみ墨痕が残る。上は「日」か「日」状で「日」か「日」か。
88	470	不明	45.6	左側横線。右は「日」状とみえる。「日」か「日」の可能性あり。
88	471	不明	34.2	「日」は明瞭だが、右側横線。「日」か。
88	472	不明	48.5	下部擦滅するが、上部は「日」が明瞭に認められる。
88	473	不明	73.3	墨痕横かに残存。文字種、上下不明。
88	474	不明	30	墨痕断片的な遺存で文字種・上下不明。下は「日」か「日」か「日」か。
88	475	不明	60	断片的な墨痕は認められるが、大部分消滅。左は「日」か。
88	476	不明	47.7	右面凸出で墨痕不鮮明。「日」と思われるが字は不明。
88	477	不明	34	断片的な遺存ながら、「日」か「日」とみえるが、周囲の墨痕は消滅して不明。
88	478	不明	64.4	右上のみ墨痕明瞭だが、下方は消滅。右側石面消滅して文字種不明。横は「日」か。
88	479	不明	23	中央墨痕鮮明だが、周囲消滅。文字種や上下不明。
88	480	不明	69.2	石質文字種不明。上は「日」とみえるが「日」か「日」か「日」か?。
88	481	不明	11.4	墨痕比較的多明瞭ながら種下部欠損して文字種不明。
89	482	不明	40.5	墨痕中央明瞭ながら周囲消滅。遺存部は「日」状の線と下に横か交差線のみみえる。「日」か。
89	483	不明	22.8	大部分消滅。残存部は「日」状の線と斜線のみみえる。下は擦滅して不明。
89	484	不明	79	やや凹味を帯びた薄い線状の痕跡のみみえるが、墨痕と断定できない。
89	485	不明	63.6	墨痕断片的ながら種欠損して文字種のみ残存。「日」と推測される。
89	486	不明	32.7	墨痕は横線に「日」状の線が横かに認められるが、上下は文字種不明。
89	487	不明	40.9	中央下部の墨痕消滅し、左上に「日」状、右上「日」状、右下「日」状の線が横かに残存。「日」の一部か。
89	488	不明	40.8	墨痕断片的に遺存。3本横線と横か交差線があり、「日」状。「日」か。上下部で「日」とみられる。
89	489	不明	40.7	墨痕比較的多明瞭だが、右表面の凸出で若干途切れて文字種不明。「日」は確認できる。
89	490	不明	69.5	右側横線。墨痕の線が横かに「日」状とみえるが、周囲に墨痕は横かとみられる。文字不明。
89	491	不明	84.5	厚い墨痕の線が横かに認められる。中段に「日」状。最下段に凸出のみ。「日」か「日」か。墨痕は横線にない。
89	492	不明	34	左下横線。「日」は「日」状の線が横かに認められるが、上下は文字種不明。
89	493	不明	115.4	左下横線。「日」状が左右に並び、左側横線中に点のみみえる。「日」か。
89	494	不明	30.4	下部墨痕薄く、文字種、上下不明。上は「日」状は横線と下に斜線が横かにみえる。
89	495	不明	140.7	右端部のみ断片的に墨痕遺存。「香」か「日」か。
89	496	不明	29.5	墨痕断片的な遺存で、文字種・上下不明。斜線と「日」状の線が横かに残る。
89	497	不明	70.4	左・右上部消滅して文字種不明。「日」とみえるが「日」か「日」か「日」か?の可能性もある。
89	498	不明	79	墨痕よく不鮮明だが、下に断片的ながら「日」状とみえる。字は不明。
89	499	不明	43.7	中央上部のみ遺存し、周囲消滅。文字不明だが、上は「日」状に「日」か「日」か「日」か?。
89	500	不明	28.8	上・右側横線、縦一本線のみみえる。
89	501	不明	64.8	墨痕薄いが、平行横線が見え、横かに線が残るが、文字上下は90°回転する可能性あり。
89	502	不明	74.1	上部墨痕消滅。縦線数本のみ。中段に「日」状の線のみみえる。「日」か。
89	503	不明	74.6	全体に墨痕薄く、左下横線。文字種不明だが「日」にもみえる。
89	504	不明	22.7	不規則な右に横か帯の墨痕があるが、十中全風の可能性もある。墨痕と断定できず。
89	505	不明	43.7	断片的な遺存で文字不明。左「日」状で右の字は上下に分かれる。「日」か。
89	506	不明	46.1	下部横線。上は「日」状とみえて「日」か。右上の角が一筆でかきぬかれたで周囲の上下とした。
89	507	不明	46.4	下部上下擦滅し、上は「日」か「日」状で「日」か「日」か。
89	508	不明	37	厚い石で墨痕不鮮明。左・下横線のみ。文字種不明。
89	509	不明	43.6	横かに線が横かにみえるが、「日」か「日」か「日」か?。「日」か「日」か?の可能性あり。
89	510	不明	44.9	墨痕部分のみながら「日」か「日」か。上に横線と3本前後の縦線があるようにみえる。「日」か。
89	511	不明	52.7	墨痕左下のみ遺存し、右とは消滅。「日」か?
89	512	不明	127.7	右下に「日」状の墨痕があるが、周囲は消滅。墨地の石で墨痕不明。
89	513	不明	16.1	横かに墨痕遺存。文字種、上下不明。
89	514	不明	16.4	大半墨痕消滅し、右下横線のみ。上は「日」か。字は不明で不明。文字種、上下不明。
89	515	不明	127.5	左に横線のみ。右に「日」状の線のみみえるが、内側は墨地のようにになって横不明。「日」にもみえる。
89	516	不明	53.1	墨痕よく、横線の残片を横かに認められるが、文字種、上下不明。
89	517	不明	44.2	横かに右端に点状の墨痕遺存する。文字種・上下不明。
89	518	不明	149.8	右下に墨痕横かにあるが文字種不明。その右にも横かに薄い線状の痕跡が認められる。
89	519	不明	39.8	上下横線消滅。縦線数本のみ。中段に「日」状の線のみみえる。「日」か。
89	520	不明	68.5	右側のみ墨痕のみ。上は「日」か「日」か「日」か?。「日」か「日」か?の可能性あり。
89	521	不明	71.5	「日」状の線が横かにみえるが、上部には十中全風の遺存があり墨痕不明。
89	522	不明	119.3	墨痕よく文字種、上下不明。縦に長い横線と3本前後の縦線があるようにみえる。「日」か。
89	523	不明	33.6	墨痕断片的に残存。文字種不明。左に90°回転して「日」か「日」か?の可能性あり。
89	524	不明	46.5	墨痕断片的な遺存で文字種、上下不明。残存部は「日」か「日」か「日」か?。
89	525	不明	83.2	墨痕よく、文字種不明。上は「日」か「日」の断片。下は「日」か「日」か?の可能性あり。
89	526	不明	47.6	右側のみ墨痕のみ。上は「日」か「日」か「日」か?。「日」か「日」か?の可能性あり。
89	527	不明	67.8	墨痕大部分消滅して文字種、上下不明。右を上にして「日」か「日」か?の可能性あり。
89	528	不明	157.9	大部分墨痕消滅し、中央部のみ横かに「日」か「日」状の線のみみえる。下にも墨痕横かか。
89	529	不明	73.3	断片的に横・縦線の墨痕認められるが、文字種、上下不明。
89	530	不明	48.8	墨地の石で墨痕不鮮明。断片的に墨痕残し、線が認められるが、文字種、上下不明。
89	531	不明	25.6	大部分消滅して横かに墨痕のみ残る。「日」か「日」か?。
89	532	不明	25.4	墨痕断片的な遺存で文字種・上下不明。縦に長い横線と3本前後の縦線があるようにみえる。「日」か。
89	533	不明	59	墨痕があるが、全体的に消滅し、文字不明。「日」の一部にもみえる。



第4章 遺物

国	番号	文字	取組	備	考
94	624	(不明)	46.6	里地の石で墨痕も文字も不鮮。上に二本線、下に「口」状のみ見える。	
94	625	(不明)	46.6	墨痕のみ遺存。長い縦線と短横線二本がある。左はほとんど下段の横線が折れて消え、消え切った「口」か。	
94	626	(不明)	76.5	里地の石で墨痕も不鮮。フ、横線とみえる。左に横線が折れて消え、文字が左向きなので右に文字読か。	
94	627	(不明)	58.7	墨痕断片的な遺存で下部横線、上は「上」とみえる。縦線が横かに認められる。「書」か。	
94	628	(不明)	111.1	墨痕が、短い水平横線二本下に「口」状のみ見え、「口」と思われる。字が左上に寄るので劣は横線か。	
95	629	(不明)	68.3	短水平横線二本のみ「言」と思われる。墨痕はほとんど下段の横線が折れて消え、消え切った「口」か。	
95	630	(不明)	61.4	里地の石で墨痕も不鮮。横線とみえる。横線とみえる。消え切った横線が折れて消え、消え切った「口」か。	
95	631	(不明)	19.6	里地の石で墨痕も不鮮。文字、大抵不明。「口」か。「口」状のみ見える。「書」か。	
95	632	(不明)	106.5	墨痕断片的な遺存、上・下・左横線、上に水平横線二本と短横線、下に「口」状に折れた横線があり、「口」か。	
95	633	(不明)	74.8	石「乙」状。左は付着物跡が白くみえる。「口」にも似るが、横線が折れて消え、消え切った「口」か。	
95	634	(不明)	46.3	墨痕断片的な遺存で文字不鮮。水平横線と二本と横線のみ見え、「上」か。「言」の可能性あり。	
95	635	(不明)	68.3	左に横線が折れて消え、「言」の横線と思われるが、劣は横線ではない。	
95	636	(不明)	58.3	四角形跡。中央に横線と文字する縦線跡のみ見える。「書」か。	
95	637	(不明)	41	墨痕断片的。左に「上」。右に横線と短横線二本「作」か。上は折れた横線が折れて消え、消え切った「口」か。	
95	638	(不明)	47.8	墨痕断片的。右に「上」。右の上端にもみえるが断定できない。	
95	639	(不明)	74.2	白地の石中央に二本の横線のみ墨痕残る。文字不鮮。上下不明。	
95	640	(不明)	35.8	方上、右下部横線。墨痕断片的な遺存。両側に縦線と短横線二本のみ見える。「口」か。「口」か。	
95	641	(不明)	237	左下部横線。墨痕断片的。太い線で左に「上」。右上に「口」下に「口」か。「口」か。「口」とみえるが文字不明。	
95	642	(不明)	178.9	墨痕断片的な遺存「口」にみえるが、「下」か。縦線は消え、消え切った「口」か。	
95	643	(不明)	106	墨痕断片的な遺存で下部横線、横線は明瞭だが、筆の入りから「上」ではない。「口」の一部にもみえる。	
95	644	(不明)	62.8	文字中央部のみが帯状に遺存し、周囲は消滅。文字不鮮。上下不明。	
95	645	(不明)	39.5	墨痕断片的な遺存。墨痕は消滅しないが、文字不明。下部横線は消え、「口」か。	
95	646	(不明)	63.6	上・右横線。墨痕断片的。左に縦線と横線、右下にみえるが、直は横線が折れて消え、消え切った「口」か。	
95	647	(不明)	55.5	四角形跡。横線とみえる。右に「上」か。「上」か。「上」か。「上」か。「上」か。「上」か。「上」か。「上」か。	
95	648	(不明)	49	墨痕断片的。上は横線と短横線二本、下部横線のみ見える。「口」か。「口」か。「口」か。「口」か。	
95	649	(不明)	33.7	墨痕断片的。右・下横線。上に短横線と下に水平横線二本跡のみ見える。「言」とみられるが、右の劣は不明。	
95	650	(不明)	46.7	左端に明瞭に墨痕残るが、右の大部分は墨痕消滅。文字不鮮。	
95	651	(不明)	39.7	7角形文字跡。文字も読めない。墨痕や劣は「口」の一部にもみえる。	
95	652	(不明)	64.5	墨痕断片的。上部横線と下部横線のみ見える。方上とみえるが「口」にみえる。	
95	653	(不明)	47.6	石地の石で墨痕も不鮮。右に「上」か。「上」か。「上」か。「上」か。「上」か。「上」か。「上」か。「上」か。	
95	654	(不明)	135.1	墨痕断片的な遺存で文字不鮮。横線とみえるが、横線と横線が折れて消え、消え切った「口」か。	
95	655	(不明)	38.5	墨痕断片的な遺存。右に横線と短横線二本、下部横線のみ見える。「口」か。「口」か。「口」か。「口」か。	
95	656	(不明)	67.9	中央・下部横線。残存も墨痕断片的。文字不明。横かに横線と短横線二本のみ見える。「口」にみえる。	
95	657	(不明)	28.5	方・下部が横線。右に墨痕断片的な遺存。文字、上下不明だが、「口」か。「口」か。「口」か。「口」か。	
95	658	(不明)	20.3	上部横線と、下部に「木」にみえる墨痕断片的な遺存。大抵不明で下部の可能性あり。	
95	659	(不明)	49.3	上部横線と下部横線のみ見える。下部横線は消滅し、「口」か。「口」か。「口」か。「口」か。	
95	660	(不明)	29	短横線と上段の石が横線。上は墨痕断片的。右に「上」か。「上」か。「上」か。「上」か。「上」か。「上」か。	
95	661	(不明)	211.3	中央部のみ明瞭。上下横線。右に「口」状に横線あり。左は横線が折れて消え、消え切った「口」か。	
95	662	(不明)	105.5	墨痕断片的な遺存。左は少し折れた横線、右に短横線と短横線のみ見える。文字や上下不明。	
95	663	(不明)	24.3	上下横線と中央が遺存。横線と横線のみ見えるが、上部の横線は横かに横線と断定できず。	
95	664	(不明)	29.5	中央部のみ横線とみえる。「口」か。	
95	665	(不明)	62.4	中央の一角部のみ横線とみえる。横線と「口」状。上を繋ぐ横線は横かに横線が折れて消え、消え切った「口」か。	
95	666	(不明)	45.2	左端に横・短横線のみ。右横線「上」にみえるが文字不明。	
95	667	(不明)	86.7	右下部横線。横線は明瞭だが、その下は横線が折れて消え、消え切った「口」か。	
95	668	(不明)	59.9	方上に「口」のみ見え、他は横線。「口」か。「口」か。「口」か。「口」か。	
95	669	(不明)	213.4	墨痕断片的な遺存。上下不明。中央に短「口」字状の横線のみ見える。右を下とするか。	
95	670	(不明)	209.9	縦線が、中央に横線とみえる。下に「口」状に横線のみ見える。文字は上に横線と短横線二本のみ見える。「書」か。	
95	671	(不明)	96.2	中央に横線と、それに直交する縦線のみ見える。「口」か。「口」か。「口」か。「口」か。「口」か。「口」か。	
95	672	(不明)	76.1	上「上」か。中段「口」か。下「へ」状の横線のみ見える。「書」か。	
95	673	(不明)	27.4	横線跡に墨痕断片的な遺存。下部横線、左上に「口」のみ見える。「書」か。	
95	674	(不明)	48.1	墨痕断片的な遺存。上に横線、中段に短「口」状。横線と短横線二本のみ見える。「口」か。「口」か。「口」か。「口」か。	
95	675	(不明)	35.8	里地の石で墨痕も不鮮。左「上」か。横線の端部か。上に横線、下に横線と「口」状のみ見える。文字不明。	
95	676	(不明)	19.8	方上部の墨痕のみ遺存。右横線。下に横線。その下に「口」か。「口」か。「口」か。「口」か。	
95	677	(不明)	29	横線と中央から垂下する短い縦線は横かにみえるが、下部は横線。下部の尖から「口」か。「口」か。「口」か。「口」か。	
95	678	(不明)	17	里地の石で墨痕断片的な遺存。左は「上」か。「上」か。「上」か。「上」か。「上」か。「上」か。「上」か。「上」か。	
95	679	(不明)	22.3	上に横線と短横線跡が横かにみえる。下部は横線。縦線跡中に「口」か。「口」か。「口」か。「口」か。	
95	680	(不明)	80	横線跡が付着するなかに薄く墨痕らしい跡のみ見えるが、断定できず。	
95	681	(不明)	83.9	墨痕断片的。左に「上」か。「上」か。「上」か。「上」か。「上」か。「上」か。「上」か。「上」か。	
95	682	(不明)	34.8	里地の石で墨痕も不鮮。横線と短横線二本のみ見える。「口」か。「口」か。「口」か。「口」か。	
95	683	(不明)	26.5	墨痕断片的な遺存。中央に「上」状のみ見えるが、周囲は横線が不明で墨痕と断定できない。	
95	684	(不明)	28.7	石面にわずかに短「口」本の墨痕が認められるが、他は横線と短横線二本のみ見える。上下不明。	
95	685	(不明)	24.1	中央に墨痕らしき短い横線があるが、横線が不明で墨痕と断定できない。文字、上下不明。	
95	686	(不明)	24.9	横線跡で文字の一部のみ遺存。文字不鮮。上下不明。	
95	687	(不明)	83.9	横線跡で文字の一部のみ遺存。左は「上」か。「上」か。「上」か。「上」か。「上」か。「上」か。「上」か。「上」か。	
95	688	(不明)	21.4	墨痕断片的な遺存。横線と短横線二本のみ見える。「口」か。「口」か。「口」か。「口」か。	
95	689	(不明)	26.5	墨痕断片的な遺存。左は「上」か。「上」か。「上」か。「上」か。「上」か。「上」か。「上」か。「上」か。	
95	690	(不明)	73.1	左上のみ横かに墨痕断片的。「口」の左端とみられる。他は横線。	
95	691	(不明)	28.7	下部横線。上に横線、下に横線と二本のみ見える。右の石の上端に墨痕の跡のみ見えるが文字不明。	
95	692	(不明)	112.3	墨痕は上部に横線。それに直交する縦線跡が横かに認められる「口」と読める。下部横線。	
95	693	(不明)	27.6	下部に横線と短横線二本のみ見える。「口」か。「口」か。「口」か。「口」か。「口」か。「口」か。「口」か。「口」か。	
95	694	(不明)	86.4	横線と上部にわずかに墨痕断片的な遺存。短横線とみえる。「口」か。「口」か。「口」か。「口」か。	
95	695	(不明)	83.4	上・左横線。中央部に横線二本と横線のみ見え、最下段の横線は「上」とみえる。文字不明。	
95	696	(不明)	35.8	墨痕の跡と思われる白い横線。横線が横かにみえるが、横線が折れて消え、消え切った「口」か。「口」か。「口」か。「口」か。	
95	697	(不明)	144.5	凹面に滑らかな表面に太く滑らかな線。横線と短横線二本のみ見えるが、横線が折れて消え、消え切った「口」か。「口」か。「口」か。「口」か。	
95	698	(不明)	61.4	短い横線断片的のみ見える。横線と短横線二本のみ見える。「口」か。「口」か。「口」か。「口」か。	
95	699	(不明)	46.3	滑らかな表面に滑らかな線。横線と短横線二本のみ見える。「口」か。「口」か。「口」か。「口」か。	
95	700	(不明)	37.2	凹面のあるやがねの横線のみ見えるが、十中全無の付着の可能性もあって墨痕と断定できず。	
95	701	(不明)	72.6	左側横線。右に横線と短横線二本のみ見えるが、下部は横線跡で墨痕と断定できず。中央は「口」にもみえる。	
95	702	(不明)	69	右・下は横線。方上も墨痕が滑く文字不明だが、「上」状にみえる。	
95	703	(不明)	68.9	下部横線跡だが、「口」とみえる。劣の有無は不明。	
95	704	(不明)	53.2	非常に滑らかな表面に。右に横線二本と横線のみ見えるが文字不明。	
95	705	(不明)	28.8	里地の石で墨痕も不鮮。横線と短横線二本のみ見える。「口」か。「口」か。「口」か。「口」か。	
95	706	(不明)	25	墨痕断片的だが、横線跡で文字も読めない。横線は横かに横線と断定できない。	
95	707	(不明)	54.2	墨痕断片的な遺存だが、「口」にみえる。横線と短横線二本とみえるが文字不明。下部横線。	
95	708	(不明)	43.2	墨痕断片的だが、短い横線で文字も読めない。横線は横かに横線と断定できない。「口」か。	
95	709	(不明)	45.4	中央のみ遺存し、周囲は横線。「口」か。「口」か。「口」か。「口」か。「口」か。「口」か。「口」か。「口」か。	
95	710	(不明)	176.3	右下部に横線のみ見える。横線と短横線二本のみ見える。「口」か。「口」か。「口」か。「口」か。	
95	711	(不明)	104.1	四角形跡。上部のみ横線とみえる。「口」か。「口」か。「口」か。「口」か。「口」か。「口」か。「口」か。「口」か。	
95	712	(不明)	107	右と下横線。左上に横かに墨痕あり。横線は明瞭だが、右は「へ」状にみえる。その下に横線があるが、存続不明。	

国	番号	文字	取巻	備	考
98	713	(不明)	98.4	中央に4本前後の筋線がみえるが両面割減して文字不明。	
98	714	(不明)	126.3	形痕僅く、左部筋線、横方向に数本横線重なるが、文字不明。下には強い形痕ながら横線2本入る可能性がある。	
98	715	(不明)	36.6	形痕薄いが、縦線が3本とそれに薄い横線の形痕みえる。右と上は割減。「面」か。	
98	716	(不明)	25.1	右に縦線と点の形痕がみえるが、他は割減して不明。上下不明。	
98	717	(不明)	35.6	形痕全体的に薄く残存するのみ。偏は「口」か「門」で、「間」ともみえる。左側横欠損で文字の連続不明。	
98	718	(不明)	38.5	やや大きい筋線で点状の弱い筋が複数残存するが、下は割減。文字不明。	
98	719	(不明)	39.3	形痕は右に「イ」右に「リ」状に重なるが文字不明。右には割減する。	
98	720	(不明)	92.5	斜めに縦線1本と断片的縦線あり。右の鬼契で文字途切れる。下の横線は右から書かれる。	
98	721	(不明)	64.8	形痕薄くやや不明。左上「フ」左下「日」か「月」、右は縦線と上部横線二本ほどみえる。	
98	722	(不明)	117.6	下平割減。方に何点状に形痕あり、上は「=」状ともみえる。「面」か。	
98	723	(不明)	20.8	断片的な形痕の遺存で文字不明。上に二本縦線があり、下に「ロ」状の筋がみえる。	
98	724	(不明)	54.9	形痕薄く上平割減。中央付近に縦線と「九」状の筋がみえる。「空」にもみえるが、文字不明。	
98	725	(不明)	39.6	形痕僅く、断片的な遺存。上に縦線1本、下に断片的に縦線4本前後みえる。左右縦割減か。	
98	726	(不明)	124.3	形痕薄いが、大「等」跡で縦線4本みえる。上割減。「日」か。	
98	727	(不明)	55.5	黒地の右に形痕薄く文字不明。「己」「乙」とみえるが、上は「フ」で途切れ下とは連続しない。「色」にもみえる。	
99	728	(不明)	28.4	形痕薄いが、二本の横線が認められる。「三」「十」「上」「下」か。	
99	729	(不明)	26	形痕薄いが、中央左に「凡」か「心」方角ともみられる筋がある。周囲は線不明瞭で仔細不明。	
99	730	(不明)	45.7	左下に僅かに形痕の可能性ある程度の筋線があるが、輪郭曖昧で形痕不明。	
99	731	(不明)	32	形痕は大部分割減し、左側に縦線と斜線の筋線が残る。「有」か。	
99	732	(不明)	78.6	左上と右平割減。中央のみ形痕遺存。左は縦線か「イ」、右は「未」下は「二」「日」「口」の一部ともみえる。	
99	733	(不明)	97.8	左割減し、形痕薄いが右に「月」とみえる。「刀」「力」「功」あるいは「月」の内部割減したものか。	
99	734	(不明)	95.5	下部割減し、上部に僅かに薄く形痕遺存。「面」にみえるが右割減して不明。「案」「面」か。	
99	735	(不明)	157.5	中央部の一部のみ形痕遺存。周囲形痕消滅。上「下」下「フ」状にみえるが、上下不明。	
99	736	(不明)	28.5	黒地中で形痕不明瞭。右割減するが、左は「イ」か「日」とみえ、右に縦線が僅かに残る。右は「し」で「家」か。	
99	737	(不明)	39.2	形痕は左に「日」とみえ、下へ右は割減する。「日」の右縦線はほぼ途切れる可能性がある。	
99	738	(不明)	27.3	形痕は中央上部のみ薄く遺存。「口」「口」横とみえ、中に僅かに別線と縦線がみえる。文字、上下不明。	
99	739	(不明)	77.2	形痕が、太筆で中央に横線2本、右下に縦線が重なる「日」「口」「日」とみえる。輪郭曖昧で仔細不明。	
99	740	(不明)	40.3	右後面に断片的に形痕残る。上、左は割減。「十」と斜線がみえ、「本」の下部ともみえる。	
99	741	(不明)	56.1	横欠損で文字も途切れるが、形痕は比較的明瞭。「フ」状にみえるが左は「フ」の断片か。	
99	742	(不明)	46.9	形痕僅く、断片的な遺存だが、右に縦線、中央に「口」、下に「人」で右にわずかに縦線状の形痕みえる。	
99	743	(不明)	87	左「十」は形痕だが、右は割減して余の筋線が僅かにみえる。文字不明。	
99	744	(不明)	59.4	左上と左下割減し、残存する形痕も薄いが、左は「月」、右は「し」とみえ、「色」の可能性あり。	
99	745	(不明)	39.5	左上に断片的に形痕残るが右は割減して文字不明。左は「糸」右は「久」にもみえる。	
99	746	(不明)	19.2	黒地右に形痕断片的で、文字不明。右割減し、方に何点状の筋。下に弱い点状の形痕がある。「面」か。	
99	747	(不明)	22.1	中央に縦・横方向の薄黒い筋はみえるが、断片的で形痕が、土中変色の筋が頻りに割減する。	
99	748	(不明)	39.5	左上の形痕断片的な遺存し、右は割減。左は「口」の一部のみ。右の筋は不明。	
99	749	(不明)	26.1	形痕薄く上・左割減。縦に長い筋線、交差する横線数本みえるが、上下下に「口」が重なるようにみえる。	
99	750	(不明)	29.1	形痕明瞭な上は「少」下「丁」、内部に「マ」とみえるが、右は割減して文字不明。	
99	751	(不明)	59.3	中央へ右・下割減。上に3点。下に「口」状線、下段に横線2本・点・縦線がみえる。「尊」か。	
99	752	(不明)	91	左上に僅かな横線の形痕が遺存。右、下の大部分は割減し形痕残る。	
99	753	(不明)	138	斜割減。中央に1枚横線と別線が薄く残る。1枚横線は「し」か「口」の一部か。上下割で「色」にもみえる。	

# 第5章 まとめ

## 第1節 中世の遺構

これまで個別平坦地の遺構の様相を記述したが、最後に平坦地ごとの遺構の関係や変遷について整理し、それらを踏まえて遺跡の歴史的な位置について検討したい。

### 1. 各平坦地の中世遺構の変遷

#### (1) 12トレンチの平坦地

この平坦地は①区東側上段の小規模な平坦地で、ごく一部のみの調査ながら掘立柱建物跡が存在する可能性が捉えられた。建物跡の詳細は把握できなかったが、少なくとも中世には居住地として利用していることが窺えた。

#### (2) ①・③区平坦地の変遷

①・③区平坦地は造成時期を明らかにしえなかったが、遺構は不明ながら13世紀頃の陶磁器が出土しているため②区平坦地より古い可能性がある。検出遺構の全体図は第100図のとおりで、主な遺構の重複関係は第101図ようになる。なお、この図で建て替えの関係を捉えた建物跡を□で括った。

#### ①. 北部区画の遺構変遷

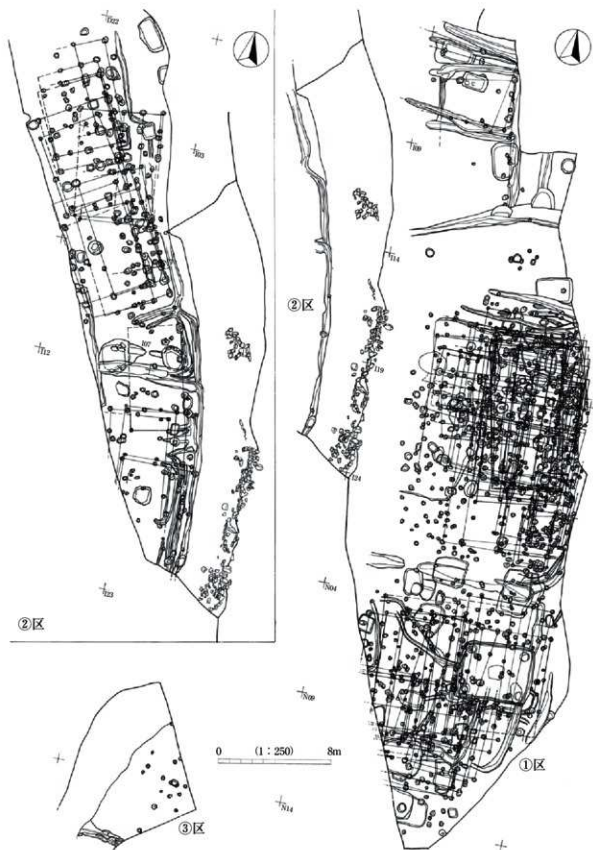
北部区画は中央区画北辺SD26以北の範囲で、SD09以南は近世以後に削られ、残った北部のSX01内でST01～03を認定した。いずれも削平地SX01内にあって、雨水浸入防止用溝跡SD04～08を伴うもので、北部区画自体を囲む溝跡はなかったと思われる。調査区東壁にかかったSX01埋土の土層観察からSX01は、最北端にあるSD03個から埋め戻されており、SD03=ST01が最終的な建物跡と捉えた。さらにSD05→07→06の重複関係から、ST03→ST02→ST01へ変遷したと推測した。

この変遷のなかで、ST03→ST02の間に棟方向を南北棟から東西棟へ90°回転したと捉えられる。同様に建物跡の付属施設とした長方形土坑の長軸方位も90°回転し、棟方向の変移は雨水浸入防止用溝跡の変遷からもみてとれる。ここでは遺構配置から南北棟ST03を①グループ、東西棟ST01・02を②グループと捉え、①→②へ変遷したと捉えた。後述するように南北棟から東西棟へ変化した変遷は①・③区平坦地の中央・南部区画でも捉えられる。また、建物跡1棟前後に伴う雨水浸入防止用溝跡で囲むあり方は、①区南部区画や②区平坦地と共通する様相である。ただし、この北部区画は遺構密集度が低く、利用期間が短い可能性がある。

#### ②. 中央区画の遺構変遷

中央区画は北辺をSD26～32・55、東辺をSD56、南辺をSD14・15・57に取り巻かれ、区画内部の個別建物跡や削平地に雨水浸入防止用溝跡は伴わない。さらに、遺構重複が著しいため、北部区画のような建物跡と他遺構の組み合わせは把握できなかった。しかし、区画西側に位置する削平地SX03・04との前後関係や棟方向を南北と東西にとる違いなどから、建物跡は配置の異なる3つのグループに分けて捉えられる。それは以下の通りである。





第100図 ①～③区中世遺構全体図

- ①グループ：SX03・04と併存もしくはそれ以前と思われる南北棟建物跡ST20～22、31～34。  
 ②グループ：SX03・04を切る南北棟建物跡ST15～19・23～27・41。  
 ③グループ：SX03・04を切る東西棟建物跡ST04～14。

①グループは区画東側に位置し、西側にある削平地SX03・04と併存して中央区画を東西に二分する配置関係にあったか、それ以前の建物跡群と捉えられる。削平地SX03・04は、伴う建物跡が把握できず、その性格は明らかにしえなかったが、規模から東側①グループ建物跡に付属する施設と思われる。この①グループ建物跡では、ST20とST21が②グループST24と25にそれぞれ切れられ、ST31と20が③グループST14と07にそれぞれ切られる関係から、中央区画で古い建物跡群と捉えられる。①グループ内の前後関係ではST20→22、ST32→20、ST32→31、ST33・34→31、ST34→32で、建て替えの建物跡と捉えたST20～22、31・32、33・34がそれぞれ近接時期とすれば、①グループ（ST33・34）→（32→31）→（21・20→22）→②グループ（ST23～25）の関係となる。

②グループはSX03・04を切る南北棟建物跡で、SX03・04が埋められて中央区画がひとつの空間にまとめられたなかに配置されたと捉えられる。南北棟ST15～19・ST23～27は、③グループ東西棟ST05・07に切れられ、①グループのST20・21が、ST24・25に切られる重複状況から、①グループより新しく、③グループより古いと捉えられる。しかし、②グループ内ではST17→16→15、ST18→19、ST27→18、ST37→30、ST37→26しか重複がなく、ST15～17、ST18・19→26・27、ST23～25の建て替えの建物群相互の関係は不明である。また、ST18・19、23、27はSX03・04の半分程に重なって位置し、ST15～17・ST24～26はSX03・04内東側に一部柱穴跡がかかって重複する。ST27→18の位置関係から、②グループ内ではSX03・04の東・南側に重複するもののほうが古く、西か北へ順次建て替えられた可能性がある。

③グループの東西棟ST04～14では、ST11・13、12、14、13、06が①グループST21、22、31、33、34をそれぞれ切り、ST06、05、14、05が②グループST15、16、25、27を切る。つまり、①・②グループの南北棟建物跡を切り、ST04～14を切る南北棟建物跡がないことから、中央区画の最終的な建物跡群と捉えられる。この棟方向の変化は①区北部区画と対応する。③グループ内の東西棟建物跡間ではST06→05→04、ST07→10、ST07→04、ST12→11、ST11→09、ST14→13、ST14→08で、相対的に南から北へ順次建て替えられた可能性が推測される。

上記以外のST35～40、28～30、42・43は、SX03・04との重複がなく時間的な位置づけが難しい。

ST35～40は小型建物跡で、(母屋となる)2×4・5間の建物跡と併存した付属屋と考えられる。ST35～40と位置が重ならず併存しうる建物跡は、③グループST04～12と②グループST15～19・23～25・27・41があり、①グループST20がST37～40、ST22・31～34がST39・40と併存が可能である。この母屋と思われる規模の建物跡との重複関係では、ST37→13、ST37→26、ST37→30と捉えられた。ST37が②グループST26に切られるならば、後出する③グループST04～14とST35～40の併存は可能性が低く、②グループST26より後出するST18・19との併存も可能性は低い。また、①グループのST31～34は、ST35～40の古い建物跡ST38と位置が重なって併存しえず、ST35～40が連続した建て替えならば、部分的にも位置が重なるST20～22との併存の可能性も低いと思われる。このことからST35～40は、②グループのST15～17・23～25・27・(41)と併存する可能性が高いと思われる。

ST28～30だが、上記よりST37が②グループに含まれる可能性があり、そのST37をST30が切ると捉えた関係から上限は②グループと思われ、③グループST04～14とは位置が重なって併存しえないことから②グループの可能性もある。このことはST28～30の西桁行や南梁行が、同じ②グループST26・27の東桁行や南梁行と類似位置にあることから、近い時期の建て替えと推測されることから考えられる。ST42・43は重複関係が把握できず全く位置づけが不明である。また、ST41はSX03・04を切るが、場所が西

へ寄りすぎ、東側に空間が空いてしまうことになるため認定に不安がある。

以上をまとめると、中央区画は上記から①→②→③グループと変遷している。建物跡の密度が高く、周囲を溝跡で区画している特徴から、①グループの建物建築時から区画が設定されていた可能性がある。さらに、建物跡がほぼ類似規模なので、継続的に類似性格の居住者の屋敷として維持されたとみられる。なお、方位に建物跡の棟方向を合わせ、南北棟→東西棟方向へと変遷する点は北部や南部区画と共通する。

### ③、南部区画の遺構変遷

南部区画北辺は中央区画南辺SD14・15を境とするが、南西部にSD01があるのみで、南部区画自体を囲む溝跡は捉えられなかった。雨水浸入防止用溝跡を伴う建物跡が建て替えられている点も、区画溝跡がなかった可能性を示唆する。この南部区画では雨水浸入防止用溝跡との位置関係や、建物跡の棟方向、遺構種類と重複関係から以下の4グループに分けて捉えられる。これらの各グループは共通した遺構配置となることから、近接時期に造り替えられたと思われる。

- ①グループ：SX05、大型土坑SK1218・878・982・1152（・979・1268・1269・1306）。
- ②グループ：雨水浸入防止用溝跡SD10～13・23の区画から外れて位置する南北棟ST55～57。
- ③グループ：雨水浸入防止用溝跡SD10～13・23に伴う南北棟ST44～54。
- ④グループ：東西棟ST58～65。

①グループは堅穴建物跡SX05とその西側に並ぶ大型・中型土坑からなる。SX05は③グループST47・49・52に切られる。西側大型土坑SK1218は③グループST45・47、②グループST55～57、④グループST58・59・64に切れ、SK1217・1219は③グループST46、④グループST63・64に切られる。また、SK983・878・1152、大型土坑SK1272も配置や類似形態から同グループの可能性が高い。これらの重複関係から、①グループの遺構群は南部区画で最も古いと思われる。ところで、このSK983・878・1152・1218、1272の並びの北端SK983から、東へ直交方向に大型土坑SK979・1268・1269・1306が線状に並ぶ。これらの大型土坑群がSX05をL字状に取り囲むようにみえるが、北側に並ぶSK979・1268・1269・1306は石組を伴っていた可能性があり、類似した構造の大型土坑が区画境界線に位置する傾向から、これらの土坑が中央区画境の施設であった可能性もある。そのため①グループに含められるとは断定できない。

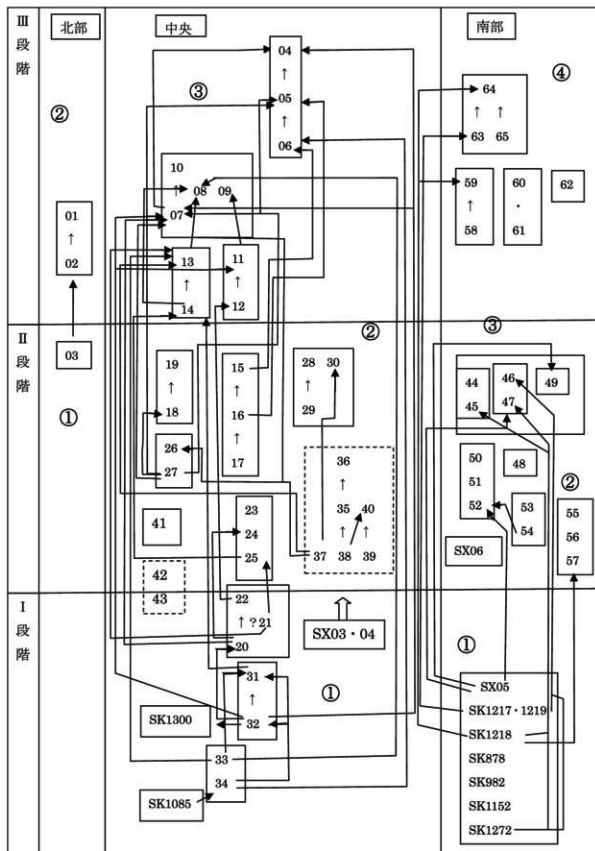
②グループはST55～57の3棟のみである。SX05との関係は把握できなかったが、同じ①グループSK1218を切ることで、後出するとみられる。南北棟なので③グループに近いが、雨水浸入防止用溝跡SD10～13の範囲から外れて位置し、③グループとは異なる時期の建物跡と考えられる。他に重複関係がないため③グループとの前後関係は不明である。

③グループは雨水浸入防止用溝跡を伴う建物跡で、建物跡と溝跡の関係はSD10にST53・54、SD11にST50・51・52、SD12・13にST44～47・49、SD23にST48が伴うと捉えた。このSD10～13・23は平行して位置し、南端の屈曲場所が一致することから、連続した造り替えか、同じ区画方法によって並存したと思われる。

④グループは北部・中央区画にも認められた東西棟建物跡で、各区画の東西棟建物跡はほぼ近接した時期に存在したと想定される。

南部区画では建物跡間や建物跡に伴う溝跡の重複が僅かしかなく、②～④グループの前後関係は直接把握できなかった。しかし、北部・中央区画では東西棟建物跡が南北棟建物跡より新しい様相から類推して、④グループは南部区画の最終段階に位置づき、南北棟の②・③グループはそれ以前と考えられる。

上記から、南部区画では①SX05と大型土坑SK1217～1219・878・982・1152・1272（・979・1268・1269・1306）のグループ→②ST55～57のグループか、③SD10～13・23を伴うST44～54のグループ→④東



第101図 ①・③区平坦地の主な遺構変遷

西棟建物跡ST58～65のグループへの4段階の変遷が捉えられる。この変遷では堅穴建物跡と中心とする①グループと、掘立柱建物跡を中心とする②～④グループ間では大きく利用状況が変化している。また、③グループの雨水浸入防止用溝跡を伴う南北棟建物跡は、①区北部区画や②区平坦地でも認められ、同じ背景の元に出現したと思われる。

### (3) ②区平坦地の変遷

②区平坦地は南北二つの区画が捉えられたが、当初は区画が存在しなかった可能性がある。従って、南北二つの区画にわけて記述することが適当ではないところもあるが、ここでは段階が不確実なものもあるため、分布上で南・北部区画にわけて遺構を記述し、月岡遺跡全体の遺構変遷のなかで②区平坦地の変遷をまとめる。なお、②区平坦地で出土した陶磁器は15世紀後半以後のものしかないため、この平坦地の利用は①・③区平坦地よりも遅れる可能性がある。②区の検出遺構は第100図のようになり、その主な遺構の変遷は第102図の通りとなる。

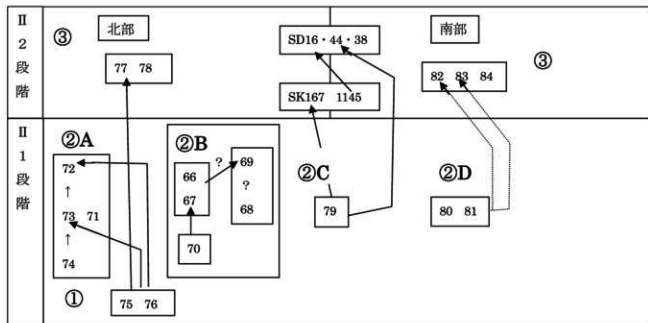
#### ①. 北部区画の遺構変遷

北部区画で検出された掘立柱建物跡は大きく3つのグループに分けられる。まず、遺構方位からN30°W前後と、N8°W方向の二種の棟方位のグループが捉えられ、前者はさらに北側にあるST71～74と南側にあるST66～70、その中間にあるST75・76に分けられる。北側のST71～74と南側のST66～70は重複せずに並列する位置関係から併存可能と捉えられ、それぞれ②A、②Bグループとした。一方、②A・Bグループの中間で重なる位置にあって併存しえないST75・76は別に①グループと捉えられる。最後に、N8°W方向のST77・78も他グループの建物跡と重複する場所において併存しえないので③グループとした。各グループはそれぞれ棟方向を同じくして柱穴跡が近接することから、近接時期に建て替えられたと想定する。建物跡間の重複関係は②Aグループ内ではST74→(73→)72で、②Bグループ内ではST70→66・67、ST66→SD48 (ST69に伴う?)である。グループ間の重複では①グループST75→③グループST77、①グループST76→②AグループST72(・73)である。これらの建物跡グループ間の重複関係を整理すると①→②A、①→③グループと捉えられる。②Aと②Bは重ならないので併存したとすると、①→②A・Bか③となる。後述するように、北部区画の②A・Bグループ同様に②区南部区画ではST79と80・81が並列し、SD16区画以後はST82～84が建て替えられる場所が変わったと捉えられた。それと対応させると、②A・BのST71～74とST66～70の並列から、③ST77・78へ変化した可能性が推測され、①→②A・B→③の変遷と推測する。

#### ②. 南部区画の遺構変遷

南部区画の建物跡は直接重複するものが僅かだが、建物跡に伴うと捉えた溝跡の位置関係から近接時期に建てられたと思われる建物跡グループを認定した。建物跡に伴う雨水浸入防止用溝跡SD39～41(北部区画に含めたSD44～46と組み合う)に伴うのがST79、SD33～37に伴うのがST80・81、区画溝跡SD16・38に伴うのがST82～84で、合計3グループに分けられる。このなかで、ST79とST80・81は、それぞれ伴う溝跡SD39～41南端とSD33～37北端との位置が一致するので、併存していた可能性がある。建物跡が並列するようすは北部区画②A・Bグループが捉えられており、これと対応する可能性があることから、ST79を②C、ST80・81を②Dグループとする。また、区画溝跡に伴うST82～84を③グループとする。南部区画では北部区画①グループに対応する建物跡が捉えられなかった。

南部区画の建物跡に伴う溝跡や土坑との重複関係では、②CグループST79→SK167 (SD16脇にある区



第102図 ②区平坦地の主な遺構変遷模式図

画境に設置された石組土坑の可能性あり)、ST79→区画溝跡SD44である。グループ間の重複は②Dグループに伴うSD33・34・40→③グループST82、②Dグループに伴うSD35→③グループST83、②Cグループに伴うSD45→③グループに伴うSD38と捉えられた。これらの重複関係から、雨水浸入防止用溝跡SD39～41とSD33～37が並列していた後に、SD16・38の区画溝跡が出現したと捉えられ、②C・D→③グループの変遷と捉えられる。なお、SK188・205は区画溝跡SD16と38脇に位置して長軸方位も同じなので、③グループの建物跡と併存した可能性がある。

## 2. 月岡遺跡全体の中世遺構変遷

### (1) 平坦地毎の変遷

上記までに各平坦地の区画毎の遺構変遷を整理した。それぞれ遺構の変遷内容が異なるため、並列して比較することは難しいが、遺跡全体の変遷を推測してみたい。

①・③区平坦地：この平坦地内では中央区画のみが周囲を溝跡で囲む特殊な区画と捉えられた。その境界は若干変動があったようで、SK1268・1269・1306・979が中央区画南辺脇に位置する施設の可能性から、当初はSD14・15よりも南側に中央区画南辺が位置していたと考えられる。しかし、溝跡で囲まれた区画内に建物跡が収まることから中央区画自体の規模の大きな変化はなく、この区画内での建物跡の重複が著しいことから中央区画が長期に維持されたと捉えられる。一方、南部区画では竪穴建物跡を中心とする特殊な利用空間から掘立柱建物跡が構築される場所へ変化したことが捉えられた。また、北部区画は建物跡の数が少ないことから区画の利用は中央・南部区画より遅れ、また存続期間が短いとみられる。

このように各区画の変遷のようすが違い、調査でも同時期と対比しうる確実な根拠は得られていないが、下記のような類似した様相から近接時期と推測されるところがいくつかある。

- ・中央区画は当初から類似規模で設定された可能性から、南部区画も同時に近接時期に存在したと考えられ、各区画の古い遺構グループ中央区画の①と南部区画の①グループが対応する可能性がある。
- ・各区画では南北棟建物跡→東西棟建物跡への変化が共通して認められ、東西棟建物跡が出現する北部区画②グループ、中央区画③グループ、南部区画④グループが対応する可能性がある。

- ・雨水浸入防止用溝跡を付設した南北棟建物跡が建て替えられる様相は、区画の利用状況が同じと考えられ、北部区画①グループと南部区画②・③グループが対応する可能性がある。
  - ・南部区画③グループの建物跡に伴うSD11は中央区画南辺の溝跡SD14に接続しており、SD14の区画存在時にSD11を伴う南部区画③グループが対応する可能性がある。
  - ・北部区画では中央区画北辺SD26脇に石組を伴ったとみられる大型土坑SK343があるが、中央区画南辺周辺にも同様の遺構とも考えられるSK979・1268・1269・1306がある。これらの大型土坑はいずれも区画溝跡SD26、SD14・15に切れ、近接した時期の遺構と考えられる。上記の南部区画SD11がSD14と接続することから、大型土坑が構築されたのは南部区画③グループを含む時期以前で、北部区画も同時に利用されていたことが推測される。
- これらの状況から、各区画の変遷は下のよう整理できると考えた。

- I 段階 中央区画では①グループの建物跡と削平地SX03・04が併存し、南部区画では①グループの堅穴建物跡を中心とする段階で、異なる利用状況の中央・南部区画が並列していた段階。
- II 段階 中央区画に加えて、雨水浸入防止用溝跡を伴う南北棟建物跡が北部区画、南部区画にも認められる段階。中央区画②グループと南部区画の②・③グループ、北部区画の①グループが対応し、この段階で区画境周辺に大型土坑を配して3つの並列的な区画に変化したと思われる。やがて中央区画は北辺をSD26、南辺をSD14・15で区画し直している。
- III 段階 東西方向に棟方向を変化させた段階。北部区画②グループ、中央区画③グループ、南部区画④グループが対応すると思われる。

以上から、I 段階では建物跡1棟とSX03・04からなる中央区画と、堅穴建物跡を伴う特殊な南部区画が並列していたが、II 段階で類似規模の独立柱建物跡を繰り返し建て替える3つの居住区画になり、その延長のIII 段階で南北棟から東西棟へ変化したと推測される。①・③区平坦地では中央区画が当初より中核的存在としてあったが、居住者の増加と共に、均一な居住空間に変化したと捉えられる。

②区平坦地：先述したとおりに②区では当初から区画が存在したわけではなく、北部区画周辺に①グループの建物跡が出現した後、長さ10m前後の雨水浸入防止用溝跡を伴う②A～Dグループの4棟前後の建物跡が並列するように変化し、最後にSD16と44・38によって南北二つの区画に分割され、それぞれ③グループの建物跡が建てられたと推測した。ただし、この変遷は後述するように大きくは①・③区平坦地のII 段階に対比しうる様相なので、同じ段階名で呼称しておく。

- II-1 段階 雨水浸入防止用溝跡を伴う建物跡1棟前後が並列して建て替えられた段階。北部区画②、南部②グループが該当し、北部区画のみ1棟を建て替えた①グループが認められた。
- II-2 段階 SD16と44・38によって②区平坦地内が二つの区画に分割された段階。北部区画③グループ、南部区画③グループにあたる。ここでも区画溝脇に大型土坑SK167・1145を配置した段階とSD16で二分された段階が推測される。

北部区画ではII-2 段階以後の建物跡はST77・78しか捉えられず、また、北部区画で建物跡が2棟並列する以前にST75・76の1棟のみが建て替えられた変則的な変遷がある。

## (2) 月岡遺跡全体の変遷

上記に平坦地ごとの変遷をみたが、最後に平坦地間の変遷の対比を試みる。

平坦地間で同時期と捉えられる材料は、区画溝跡と区画溝跡の脇に位置する石組を伴う大型土坑である。同じような区画施設が異なる平坦地に構築されたことは、同じ区画配置計画によって近接時期に造られたことを示唆する。この区画施設は、①・③区平坦地ではII 段階、②区平坦地ではII-2 段階にあ

る。

それ以外の段階は平坦地間で様相が異なり、対比には問題が残された。①・③区平坦地のⅡ段階では、区画溝跡SD14と雨水浸入防止用溝跡SD11が接続していた可能性から、区画が設定されたと同時に、雨水浸入防止用溝跡を伴う南北棟建物跡が分布する。ところが、②区平坦地では区画出現以前に雨水浸入防止用溝跡を伴う建物跡が並列するⅡ-1段階がある。つまり、①・③区平坦地では3つの区画成立と、各区画に建物跡が建てられることが同時と思われるが、②区平坦地では集住と区画の成立に時間差があったと考えられる。したがって、②区平坦地のⅡ-1段階は①・③区平坦地のⅡ段階ではなく、Ⅰ段階に対比しうる可能性もある。直接対比する材料はないが、ここでは雨水浸入防止用溝跡を伴う建物跡群は共通した背景の元に生じたと考えて②区平坦地の建物跡群をⅡ段階に含めた。また、①・③区平坦地では南北棟から東西棟へ変化するⅢ段階が認められるが、②区平坦地では同様の変遷は認められず、②区平坦地のⅢ段階の様相は不明である。

このように各平坦地間の対比は一部しかできず、各平坦地相互に前後の段階が重なりあうこともあると思われる。しかし、概略の変遷として①・③区平坦地の中央区画と特殊な目的で利用された南部区画が並列する様相から、Ⅱ段階の遺跡全体の居住地利用へ、そのなかで②区平坦地では建物跡が並列する段階から区画に編成されていく流れがあった。また、区画施設として大型土坑を伴う段階と、比較的幅広い溝跡で区画される段階があったと思われる。そして、①・③区平坦地のみⅢ段階に南北棟から東西棟へ変化する。①区北部区画の東西棟建物跡が僅かしかなく、中央区画や南部区画ほどの建て替えは認められないことから、北部区画は中央・南部区画より早めに廃絶し、東西棟建物跡が認められず区画以後の建物跡数も少ない②区平坦地も①・③区より早めに廃絶した可能性もある。なお、各平坦地の区画毎の遺構グループの対応関係の予測を以下の表に示す。

第11表 各平坦地の変遷の対比 (○は各区画の遺構グループ)

段階	変遷の特徴	①・③区平坦地			②区平坦地	
		北部	中央	南部	北部	南部
I	①・③区中央・南部区画の限定した利用。		①	①		
Ⅱ 1	雨水浸入防止用溝跡を伴う建物跡が広域に建てられ、区画が生まれる。②区平坦地では区画出現以前に建物跡が並列する段階がある。また、区画施設は大型土坑の設置から溝跡の区画へ変化する。	①	↓ ②	②・③	①・②A・B②C・D	
Ⅱ 2					③	③
Ⅲ	南北棟～東西棟への変化。	②	③	④	?	?

変遷の年代：出土遺物が少ないため年代比定は困難だが、僅かな出土陶磁器を手掛かりに各段階の年代を推定してみたい。最も古い①区南部区画SX05から瓦質内耳鍋が出土したが、瓦質内耳鍋の年代は確定しきれておらず、断定はできないが、15世紀前半～中頃と思われる。②区ではこの瓦質内耳鍋は出土していないが、酸化炎焼成内耳鍋が出土しているため、15世紀後半には利用されはじめたと思われる。そして、②区SX02では青花皿が出土した。SX02はSD16との前後関係が把握できなかったが、位置的に重なるSD16との同時存在は考えにくく、SD16の区画位置とずれることからするとⅡ-1段階の遺構と思われる。この段階が16世紀前半までを含む可能性が想定できる。これ以後は出土遺物がなく不明である。僅かな唐津皿をあげれば、17世紀初頭まで存続した可能性もないわけでもないが、当該期に多い石臼、あるいは16世紀後半まで含む場合に時期差を示すさまざまな形態の内耳鍋や16世紀後半の焼物がない点では江戸時代までの長期の存続は考えにくい。



非常に僅かな出土遺物を手掛かりとした推測であるが、上記の通りとすると、Ⅰ段階は15世紀前半～中ごろ、Ⅱ-Ⅰ段階が15世紀中ごろ～16世紀前半、Ⅱ-2・Ⅲ段階がそれ以後となる。

### (3) 月岡遺跡の歴史的背景

月岡遺跡では13・14世紀の遺構が不明ながら、Ⅰ段階15世紀前半～中頃から居住遺構が認められ、Ⅱ段階に集住が著しく進み、やがて一定の屋敷区画に編成される過程が捉えられた。この変遷から、集住が優先で、屋敷地所有は次点の要件だったとも考えられ、当初から集住が計画されていない事情があったかもしれない。いずれにしろ、屋敷地区画が集合する景観が16世紀には現れていたと思われる。

本遺跡の中心的な存続時期と推測される15世紀中頃～16世紀に相当する周辺の類似遺跡として飯綱町表町遺跡(註1)、長野市北之脇遺跡(註2)などが挙げられる。城郭遺跡との関連が推測される遺跡もあって同列に扱えないところもあるが、いずれも一定範囲に屋敷地が集合する形態である。屋敷地の集合の仕方は、城下町の短冊型地割ではなく、一定面積をもつ(方形?)屋敷地が縦く集合すると認められる。表町遺跡では農耕具が出土し、農業に関わる居住者像が考えられるが、建物跡の分布からは狭い畑地はともかく、耕地と屋敷が散在する風景にはみえない。また、立地自体が水田耕作地からは離れているとみられ、本遺跡の立地条件と似ている。月岡遺跡は以上のような共通点からも、農業生産に関わる個別居住者の屋敷が散在する遺跡ではなく、耕作地とやや離れて集住化に向かった社会的動向を反映した遺跡の一つとみられよう。そして、出土金属製品に刀装具と鉄鎌などの武器、銅製香炉が含まれる点からは、少なくとも武装し、仏教に関わる人間が住んでいた居住者像が描けるだろう。

周辺の歴史的環境として信濃の15世紀は守護内、守護と国人層、あるいは土豪・国人間の戦闘が激化していく時代と知られる。本遺跡でも鉄鎌や刀装具といった武器出土は、居住者が武装していたことを窺わせ、不安定な社会背景のなかでの生命・財産の維持に関わって集住化した可能性が考えられる。集住した場所が月岡の地であることは、月岡に伝承を残す岩井氏や称念寺との関係は考えてみる必要があろう。遺跡の変遷から集住が本格化するのⅡ段階だが、Ⅰ段階ですでに居住が認められ、その年代は15世紀前半～中頃と推測した。一方、遺構は把握できなかったが、さらに古い時期の珠洲甕やすり鉢、青磁鉢などが出土しており、13・14世紀に遡る居住遺構が周辺に存在した可能性が示唆される。

第2章に記したように、岩井氏は高梨氏配下の武士として戦国時代から名がみえるので、年代的に古く存在したと思われる称念寺が関係した可能性は高いかもしれない。しかし、湯本軍一氏は中野市域の真宗寺院の成立時期の寺伝は、いずれも高梨氏支配時代に重なり、惣村が未発達な当地域では高梨氏の庇護がないと真宗寺院が成立しにくい可能性を指摘している(註3)。このことから、岩井氏の関わりも否定できない。また、称念寺は伝承で天文年間(1572～1582)に飯山へ転出したとされ、岩井氏は武田氏の侵攻で上杉氏を頼って高梨氏ともども越後へ転出している。一方、現岩井集落は月岡から移転したという伝承もあり、伝承通りならば村落は継続していたことになる。遺跡の存続時期からも、16世紀中ごろですべて途絶えたとは言いつれず、寺院・武士を中核として集住しながらも、やがて独立して歩む村落の姿も想像できる。

ところで、長野市北部の居館跡を検討した浅野井氏(註4)は真宗系寺院が武士居館同様の形態をとる可能性を指摘している。本遺跡が称念寺と関わりがあるとすれば、北信地域での真宗寺院と集落の関係を示す事例となるが、調査では寺本体も岩井氏の居館も確認できておらず、上記のこともあくまでも推測の域を出ない。詳細は今後の検討にゆだねたい。

註1 長野県埋蔵文化財センター2009「西四ツ屋遺跡 表町遺跡」

註2 長野県埋蔵文化財センター1999「小流遺跡・北之脇遺跡・前山田遺跡」

- 註3 湯本軍一1981「第三編 第四章 第二節 宗教と領土」『中野市誌 歴史編(前編)』中野市誌編さん委員会。中野市内の中世真宗寺院の年代は寺伝等によれば、笠原本誓寺(1457以前)、命徳寺(正長年間(1428)、天正年間(1573~93)復興一寺伝)、尊福寺(文明年間(1469~87)一寺伝)、正源寺(大永年間(1521~27)再建一寺伝)とされる。称念寺については触れられていないが、湯本軍一氏は高梨氏支配時代に真宗系寺院が多く出現している点に注目し、惣村が未発達ななかでは直接農民の門戸化が難しく、領主に依存する形で成立した可能性を指摘している。
- 註4 浅野井 担1976「長野吉田地区の居館跡(続)」『千曲』第9号 東信史学会

## 第2節 経塚について

今回の調査で、地元で伝承もなかった経塚が新たに発見された。最後に経塚の所見を整理し、若干の検討と課題をまとめてみたい。

今回発見された経塚は②区平坦地北西部に張り出した沖積地を臨む尾根上に立地し、平坦地に続く南側が正面と思われる。経塚は北部区画の掘立柱建物跡群から約30m離れて位置し、周辺に中世遺構はない。また、調査前には南東10mのところ紀年銘は読めなかったが、近世石塔墓1基が存在した。経塚は溝区画内に角礫を並べ、そのなかに経石を含む河川礫を積み上げた構造で、発見時に河川礫が露呈して盛土された形跡は確認できなかった。経塚内では骨等は出土せず、埋葬施設ではないと考えられる。

経塚の築造年代は表層出土の内耳鍋片から中世とも考えられるが、破片なので確実に伴うと断定できない。また、近世墓が近接することから近世とも考えられるが、経塚は尾根先端側へむけて築造されたようにみえ近世墓を意識した位置関係とは言い切れないし、経塚が先行して墓が後に造られた可能性もある。本遺跡の経塚の構造は溝区画や石柵を伴う特徴があり、松原典明氏の分類に照らせばⅡC、E類に該当し、これらは中世墳墓に近い古形態(註1)と捉えられる。以上からは、本遺跡の経塚はその造営が増加する16世紀前後(註2)か、あるいは墓と近接した近世のいずれかの時期と思われる。

ところで、月岡遺跡も含む高社山山麓には一字一石経塚がいくつか分布する。高社山南東山麓では発掘された山ノ内町千手寺経塚(註3)、東山麓に猫間経塚、西麓の柳沢に八幡塚経塚(註4)がある。他に山麓の尾根上に塚も数多く分布する。これらの一字一石経塚は分布上、高社山と関連するようにみえるが、構造や形態が異なって同列に比較しえない。たとえば、千手寺経塚は周辺に数基経塚が存在した可能性があり、発掘された経塚では火葬骨が出土した。報告者は問題提起と断りながら、中世後期の修験道に関連した人物の埋葬施設と想定している。本遺跡の経塚は千手寺経塚に近い形態だが、墓ではなく同じ目的で造られたとはいえない。また、猫間経塚は周辺の開発がはじまる近世初期と推測されている(註3)。一方、柳沢の八幡塚経塚は、元文元年(1776)滝沢家が願主となって平徳無事を願って、伊勢生まれの六十六部(諸国行脚の僧)の僧「安心」により写経された主旨が石碑に記される。壇原長則氏は造立年前後に千曲川水害が多発したことが背景にあると指摘している(註4)。このように経塚といってもさまざまである。

経塚は平安末期の末法思想下に造られはじめたが、中世では積善業・功德業や供養目的で、経供養の1形態として残り、16世紀には廻国型によって奉納を重視するものに変化し、さらに近世は現世利益を目的とした埋納も増えるとされる(註1)。同じ礫石経塚でも造立目的や年代は多様であり、全国の礫石経塚の寺院境内例(註5)をみても、特定宗派に限られるものではないようだ。月岡遺跡周辺の例でも関係した僧は八幡塚経塚では廻国型、千手寺経塚は修験道関係者が想定されている。しかし、こうした礫石経塚も願主の発心や法会など特殊な契機で造られた点は共通し、月岡遺跡の場合も葬送以外の何らかの特殊な契機が背景にあったと想像できる。

月岡遺跡の場合、築造目的を解く鍵は築造場所の意味と年代から、二通り考えられる。中世後半期ならば、中世遺構群と併存して、居住地との問題で造立された可能性がある。ただし、16世紀以後に経塚の造

営が増加したとの指摘を踏まえれば、経塚は中世遺構群の出現前後ではなく、むしろ居住遺構が減少する16世紀後半以後ではないかと思われるが、築造目的は全く不明である。近世ならば、1基のみ存在する墓と何らかの事情に関わる供養の可能性があると思われる。本遺跡の経塚は、構造からみると中世後半の可能性はあるが、根拠が弱く断定できない。本遺跡の経塚の背景を考えるに際しても、年代比定が大きな鍵となることは明らかであるが、今回の調査では年代を明らかにすることができなかった。今後、類例の増加をまって、年代比定と新たな検討が進むことを期待したい。

註1 松原典明1994『礫石経研究序説』『考古学論究』第3号 立正大学考古学会。

註2 三宅敏之氏(1984『経塚の分布』『新版仏教考古学講座 第6巻』雄山閣)によれば、経塚は14-15世紀に少ないながら、16世紀から増加するのは廻国型の廻国納経との関係と指摘されている。また、一字一石経の早い例として大分県上尾坂の八角石輪の暦応二年(1339)「浄土三部経一石一字」銘、永和二年(1376)岩手県和見経碑「五部大経一石一字」、礫石経では福島県中目経塚で「天文十三年(1544)」の願文が発見されていると紹介されている。

註3 山ノ内町夜間瀬横倉千手経塚緊急発掘調査団1975「千手経塚」『高井』第三十一号 高井地方史研究会

註4 壇原長岡1986「古墳に築造された経塚二例」『高井』第七十四号 高井地方史研究会

註5 1994『考古学論究』第3号 立正大学考古学会

### 第3節 弥生土器について

今回の調査ではⅢ層から弥生土器が比較的多く採集され、丘陵上方には当該期の遺構が存在する可能性が捉えられた。最後に、出土土器の様相について整理してみたい。

出土弥生土器を器種別にみると、壺は頸部に櫛描直線文と鋸歯文と一部赤彩が認められ、甕は口縁部が長く屈曲が弱い器形に櫛描波状文や簾状文、あるいは胴部下半に羽状櫛描文が施される。鉢・高坏は赤彩されるが、屈曲が弱く余り大きく外反しない特徴がある。これらの特徴から本遺跡の出土弥生土器は後期初頭の吉田式に比定しうるとみられる。中島庄一氏の中野市周辺の弥生土器編年検討(註1)を参照すれば、壺頸部の鋸歯文の出現が6段階以後で、口縁部外面まで波状文を施す甕の出現は7段階とされる。本遺跡出土土器の様相は7段階に該当し、後期初頭の後半とみられる。本遺跡ではバリエーションが少なく、時期幅が短い可能性もある。

ところで、今回出土した壺は口縁部が上に屈曲するように折れる形が多い点、注目される。この口縁形状は千野氏が指摘する栗林式土器の「受口型」からの発展か、あるいは地域的特性として北陸からの外来的影響が考えられよう。隣接した新潟県の後期初頭の土器様相が不明なので何とも言えないが、吉田高校グランド遺跡で東北地方の天王山式土器が吉田式土器に混在して出土していることから、外来的影響を考えたくなる。また、笹沢浩氏は後期の箱清水式土器分布圏内に飯山型という小地域型を設定したが、これも北陸との境界付近で生まれた地域性とみられなくはない。

註1 中島庄一1999「飯山・中野地方における弥生中期後半から後期の編年について」『長野県の弥生土器』長野県考古学会弥生部会編

## 第6章 結 語

調査の結果、13・14世紀の遺構は把握できなかったが、15世紀中頃から16世紀を中心とした集村景観の居住遺跡であることが確認できた。この集村化は室町時代における地縁的結束の強化が背景にあると思われるが、この集村の中核となる主体が何なのかは課題として残された。伝承にある称念寺や岩井氏が中核的な役割を果たした可能性は十分考えられ、一方で程度自立した村自体が主体となっていた可能性も考えられる。今回の発掘調査では称念寺も岩井氏の居館跡も直接確認できていないが、遺跡地に称念寺と岩井氏の伝承があることは示唆的ではないと思われる。

岩井氏、称念寺があったと言いつける年代は遺跡の存続時期に重なり、しかも居住遺構が捉えられた15世紀中ごろ頃は、真宗系寺院が中野市に増えてくる時期にもあたるとも考えられる。集住を進めた中核に称念寺、岩井氏の存在を想定する可能性を否定はできない。しかし、一方で遺跡の変遷のなかで、SX02の出土遺物の年代から、集住が進んだのは16世紀前半までを含み、屋敷地のような区画が遺跡全体に出現するのが遅れる可能性があることから、岩井氏、称念寺が転出する年代で遺跡が途絶していると思われる。さらに①区北部区画のように、遺構数の少なからず早めに放棄されたと推測される区画もあるので、月岡遺跡全体が一律同時期に放棄されたとは考えにくい。すると、月岡遺跡に住んだ人々は寺院や武士と完全に一体化した関係ではなく、緩やかな繋がり関係し、中核がなくなっても独立した存在で、「村」ではなかったかと思われる。その点では現岩井集落が月岡から移転したという伝承は興味深い。

今回の調査結果は、上記のような歴史的事象との関連を証明する材料が不足していることは否めないが、ここでは月岡遺跡が村であったと考えておきたい。月岡遺跡と同時期の屋敷地が集めた遺跡がいくつか知られるので、今後そうした類似遺跡と比較するなかで本遺跡の事例も検討されることを期待したい。

次に経塚であるが、今回の調査で調査事例の少ない一字一石経塚について新たな知見を加えることができた。年代は16世紀前後か近世と推測したものの結論がだせず、その年代的な位置づけは今後の課題として残された。造営目的も葬送以外としかわからず、なぜ、②区平坦地のはずれに造られたのかも不明である。全くの憶測だが、一字一石経塚自体の数が少ないことは、やはり特殊な契機に造られるもので、造られる場所もどこでも良かったわけではないと思われる。きちんとした施設を伴うことは後代に破壊されることなく永続的に残ることを願った記念碑的な意味合いもあり、そもそも石に経を書く行為からして永続的な呪術力を願ったものと思われる。経塚を築造する場所は目的の呪力が機能することが期待された場所でもあるが、一旦造ってしまえば聖なる場所として不可侵となることから、その場所は厳選されていたと思われる。そう考えると、②区平坦地の北西端に経塚が営まれたことは、その場所に関わる何か意味があったことは考えられよう。

弥生時代については、遺構が検出されなかったものの、比較的多くの土器が採取され、丘陵上方に居住遺跡が存在する可能性が想定できた。出土土器は後期初頭のいわゆる吉田式と認められ、周辺では当該期の遺跡が少ない上に、耕作地と想定される沖積地から離れて丘陵上に居住する特殊な立地にも思える。しかし、吉田式期の遺跡は丘陵上にあるものばかりでないで、こうした立地が普遍的とはいえず、社会背景というよりは千曲川の流路位置や洪水の影響などの当地域特有の事情によるかもしれない。

残された課題は多いが、今回の調査を通して月岡遺跡の一端を垣間見ることができたと思われる。特に室町～戦国時代にかけての遺構群は、現在の岩井地区のムラの歴史を考える上でも重要な資料と考える。また、それは北信地域、あるいは信濃の歴史を考える上でも貴重な資料になるとと思われる。今後、本報告がこうした歴史を紐解く時の資料として活用されることを切に願う。

左：調査地遠景  
(南西)より  
右：調査地遠景  
(西より)



調査地遠景  
(北より)



調査地全景  
(南より)





左：④区全景  
(東より)  
右：④区土層  
(南より)



左：12トレンチ  
全景(北より)  
右：12トレンチ  
土層(西より)



①・②区  
中世遺構全景



左：③区全景  
(北より)  
右：③区北壁土層  
(南より)

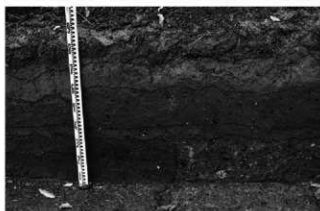
左：①区調査前  
風景（南より）  
右：②区調査前  
風景（南より）



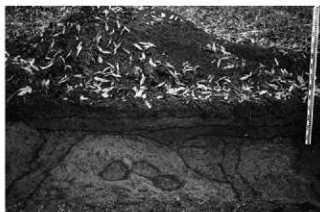
左：確認調査  
3トレンチ  
（南西より）  
右：3トレンチ  
土層  
（南東より）



左：3トレンチ  
土層（南より）  
右：同上  
（南より）



左：3トレンチ  
遺構検出状況  
（西より）  
右：4トレンチ  
土層  
（南西より）



左：4トレンチ  
青磁碗出土状況  
（北より）  
右：②区基本  
土層  
（東より）





①区全景  
(南より)



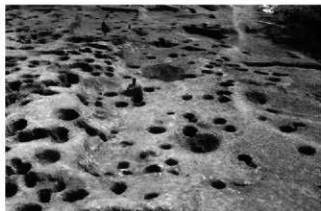
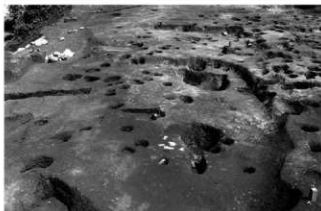
①区全景  
(北より)



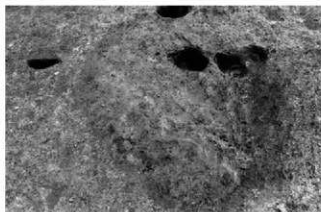
左：SX 01  
(北西より)  
右：同上  
(北より)



左：SX 03・04  
(南より)  
右：同上  
(北より)



左：SX 05新  
(西より)  
右：SX 05  
新炉跡  
(西より)



左：SX 05旧  
(西より)  
右：SX 05  
旧炉跡  
(西より)



左：SX 06  
(北より)  
右：SD 24・25  
(北より)





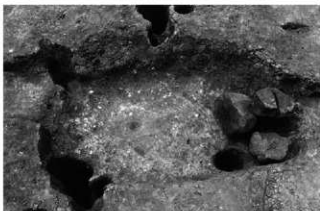
左：SK 301  
（北より）  
右：SK 303  
（北より）



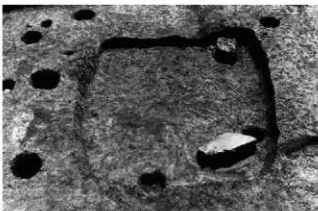
左：SK 303  
埋土中  
SF 10~12  
（西より）  
右：SK 304  
（北より）



左：SK 343  
（西より）  
右：SK 1152  
（東より）



左：SK 910  
（北より）  
右：SK 979  
（西より）



左：SK 983  
（北より）  
右：SK 1103  
（北より）



左: SK 878

(東より)

右: SK 1213

(南より)



左: SK 1217

(北より)

右: SK 1218

(東より)



左: SK 1253

(北より)

右: SK 1268

(西より)



左: SK 1275

(北より)

右: SK 1268、

1269、1306

(西より)



左: SK 1306

(西より)

右: SK 1085、

1300、1345

(北より)





左：①区中央区画  
東部  
中世遺構完掘状  
況（北より）  
右：同上  
（南より）



左：①区南部区画、  
中世遺構完掘状  
況（北東より）  
右：同上  
（南西より）



②区中世遺構全景  
（南より）



左：②区北部  
ST 66～78  
（北東より）  
右：②区南部  
SD 33～38、  
ST 80～84  
（南より）

左: SK 48

(北より)

右: SK 96

(北より)



左: SK 167

(南より)

右: SK 167

石組

(南より)



左: SK 200

(西より)

右: SK 1145

(西より)



左: SK 1145

土層

(西より)

右: SK 1145、

167、SD 16

(東より)



左: SK 1145、

SD 16

香炉出土状況

(北より)

右: 同接写

(北より)



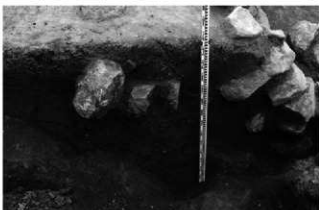
PL10 ①-②区斜面の石垣・集石遺構、経塚1



左：SH 01、02  
検出状況  
（北西より）  
右：SH 01  
検出状況  
（北より）



左：SH 01  
（南西より）  
右：SH 01  
（北西より）



左：SH 01土層  
（北より）  
右：SH 02  
（西より）



経塚 SM 01  
検出状況  
（南より）

左：経塚 SM 01  
検出状況  
(東より)



右：同上  
(西より)



左：経塚 SM 01  
土層  
(南より)



右：同上  
(東より)



左：経塚 SM 01  
土層接写  
(南より)



右：経石出土  
状況接写  
(南東より)



左：経塚 SM 01  
石組検出状況  
(南より)



右：同上  
(西より)



左：経塚 SM 01  
完掘状況  
(南より)



右：同上  
(東より)

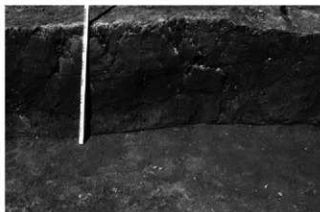




中世以前の土器包含層発掘  
(北より)



中世以前の土器包含層発掘  
(北西より)



左：土器包含層の  
土層（南より）  
右：同上 接写  
（南西より）



左：青磁碗  
右：珠洲壳

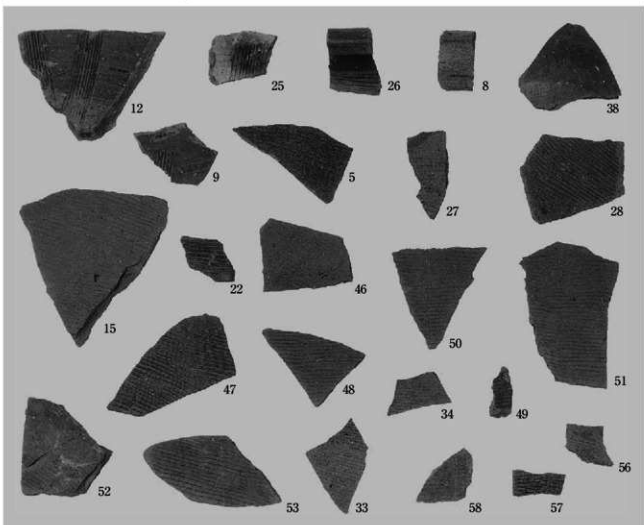


42

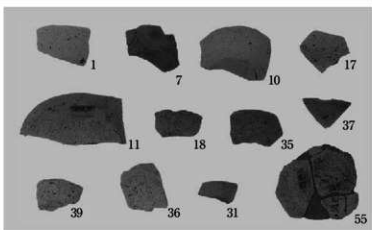
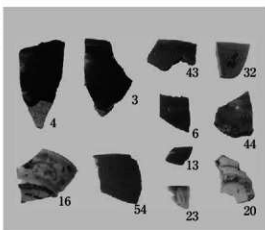


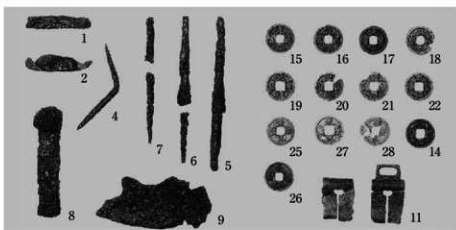
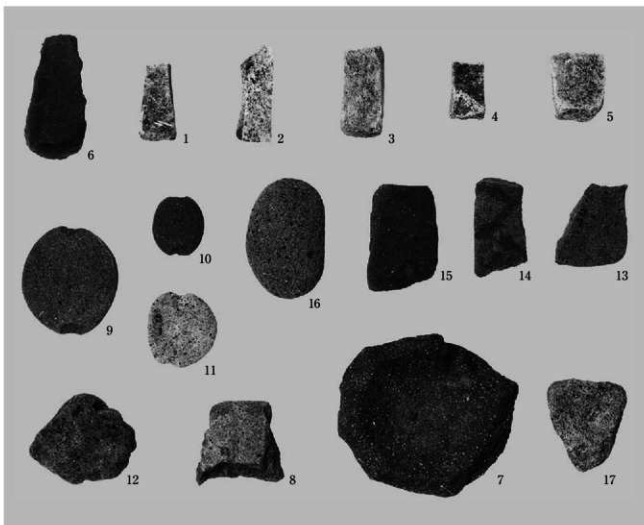
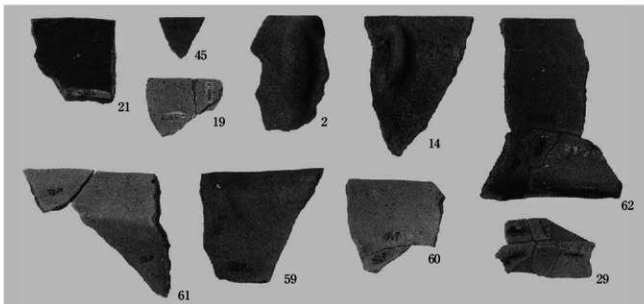
30

珠洲すり鉢・  
壳・壺

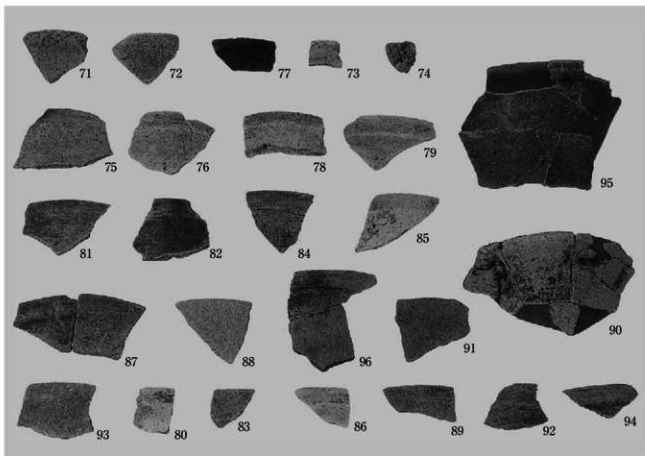


左：中国産陶磁器  
古瀬戸  
右：カワラケ

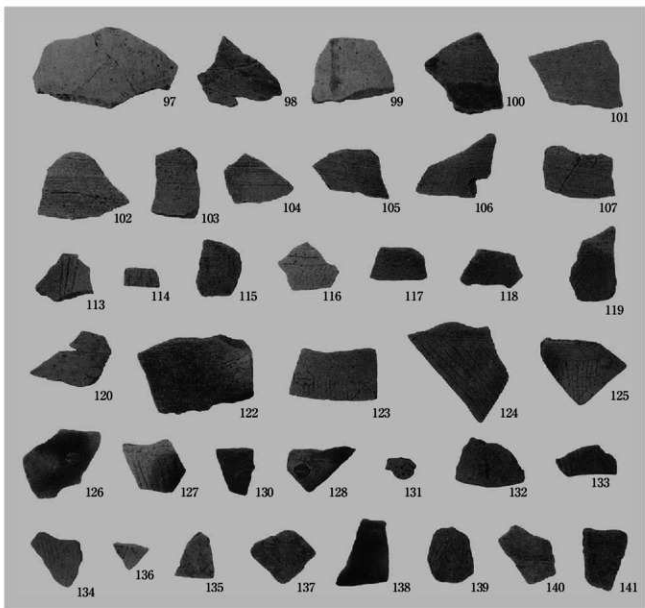




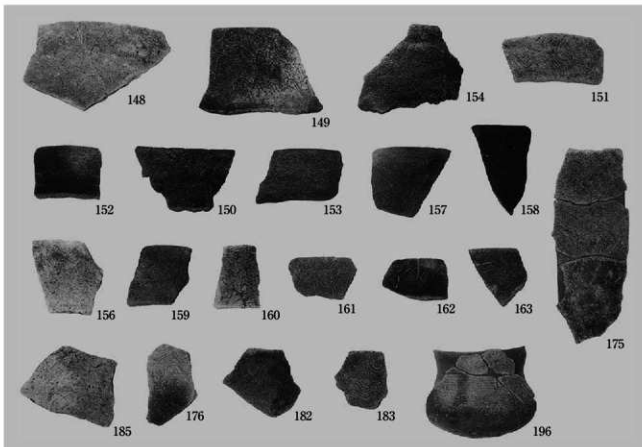
弥生土器壺



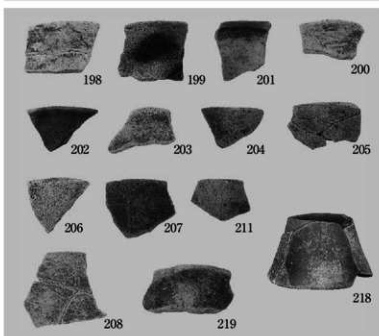
弥生土器壺



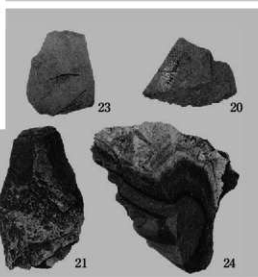
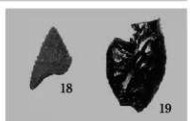
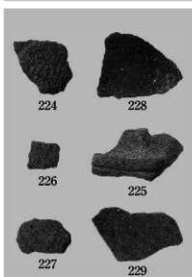
弥生土器甕

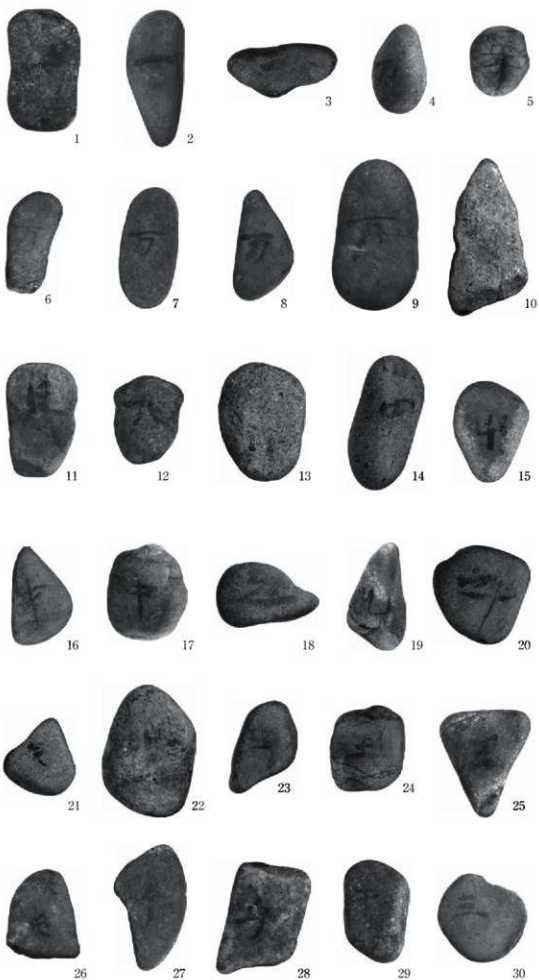


左：弥生土器高杯  
右：弥生土器甕



左：縄文土器  
中：石鏃・ポイント  
右：石斧・剝片類







31



32



33



34



35



36



37



38



39



40



41



42



43



44



45



46



47



48



49



50



51



52



53



54



55



56



57



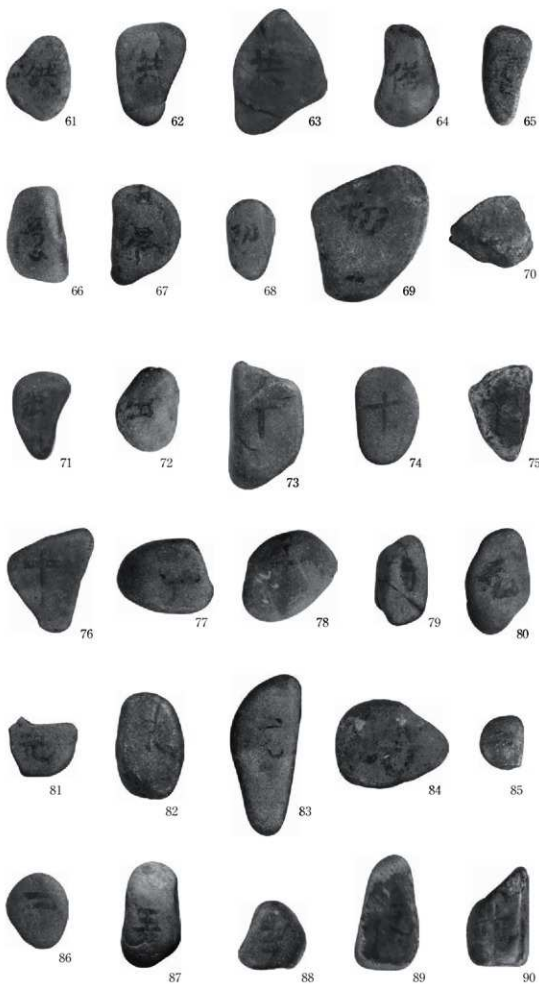
58

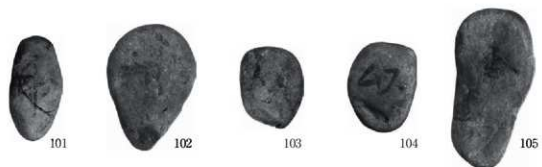


59

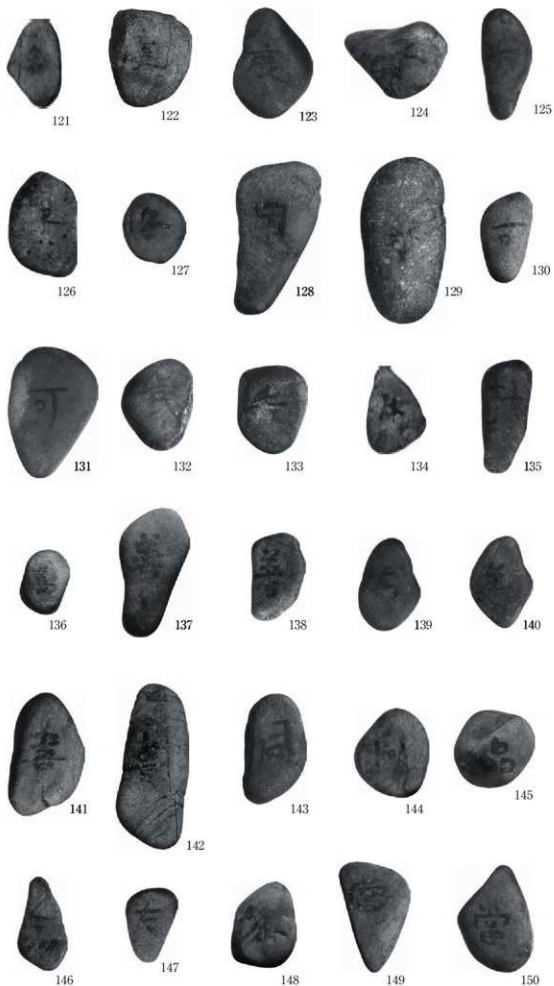


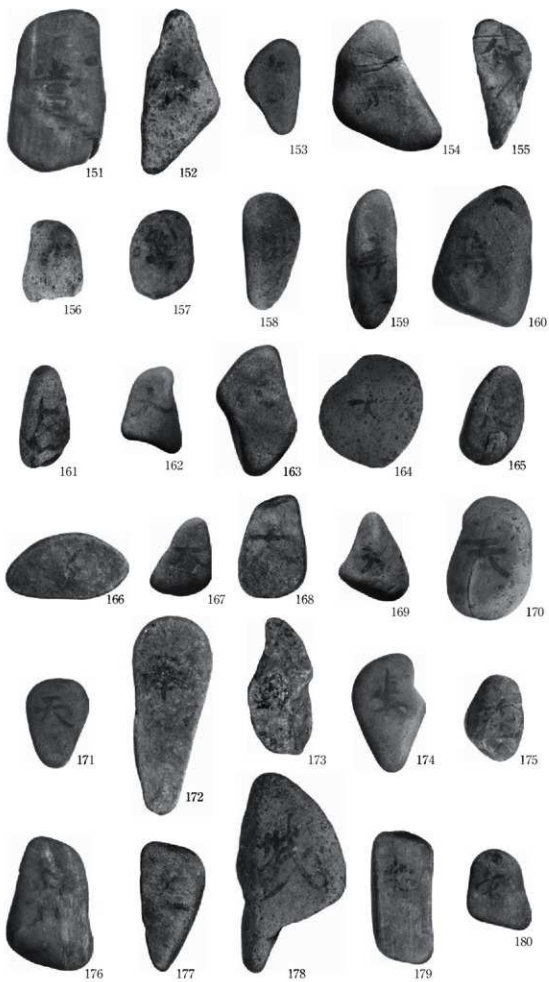
60

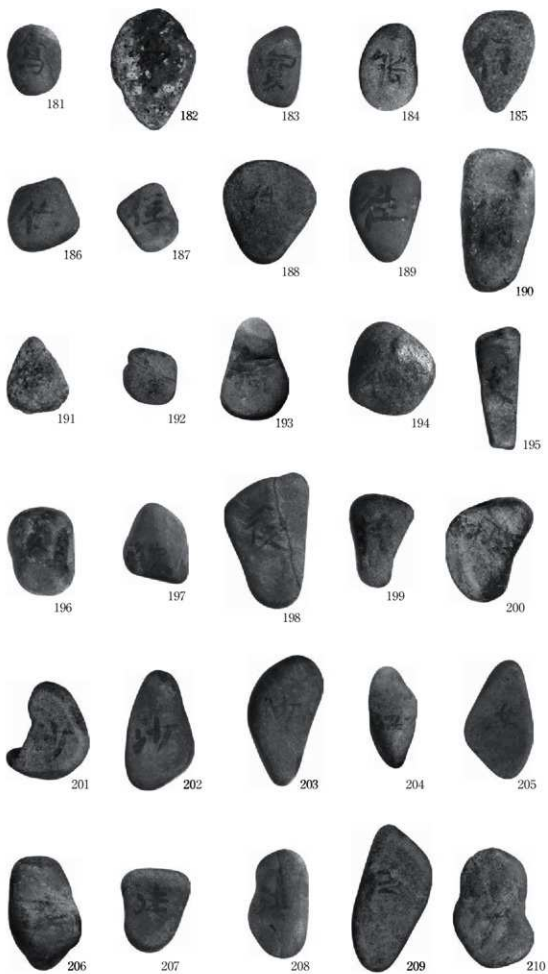




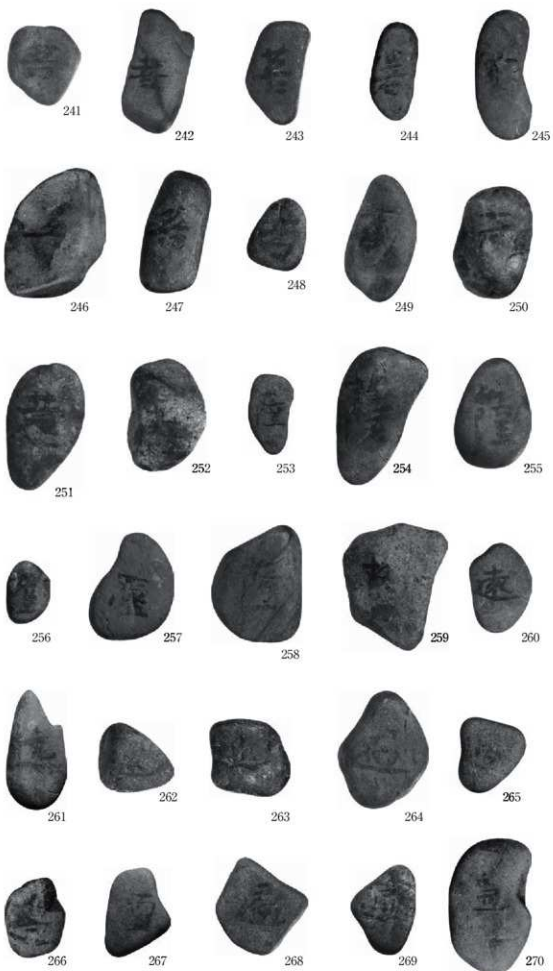


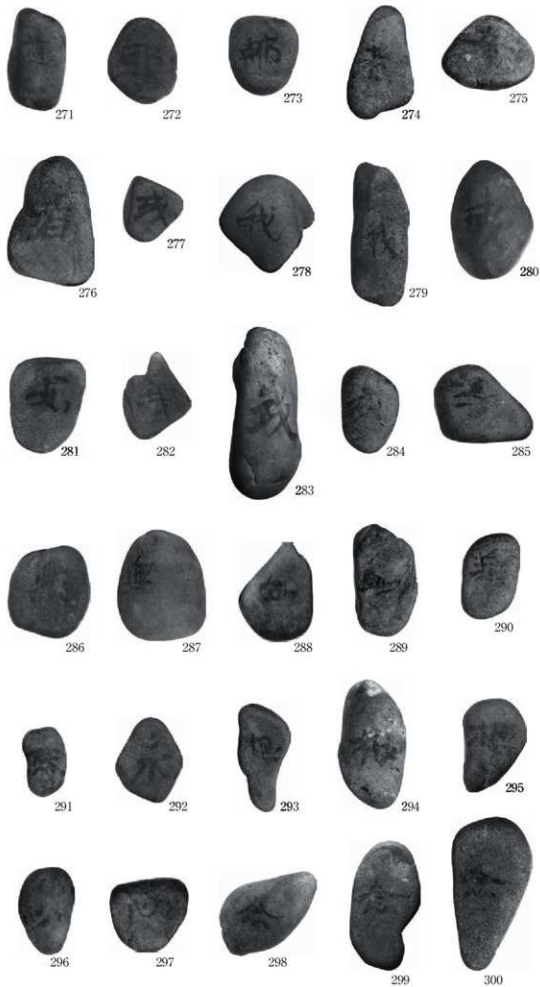














301



302



303



304



305



306



307



308



309



310



311



312



313



314



315



316



317



318



319



320



321



322



323



324



325



326



327



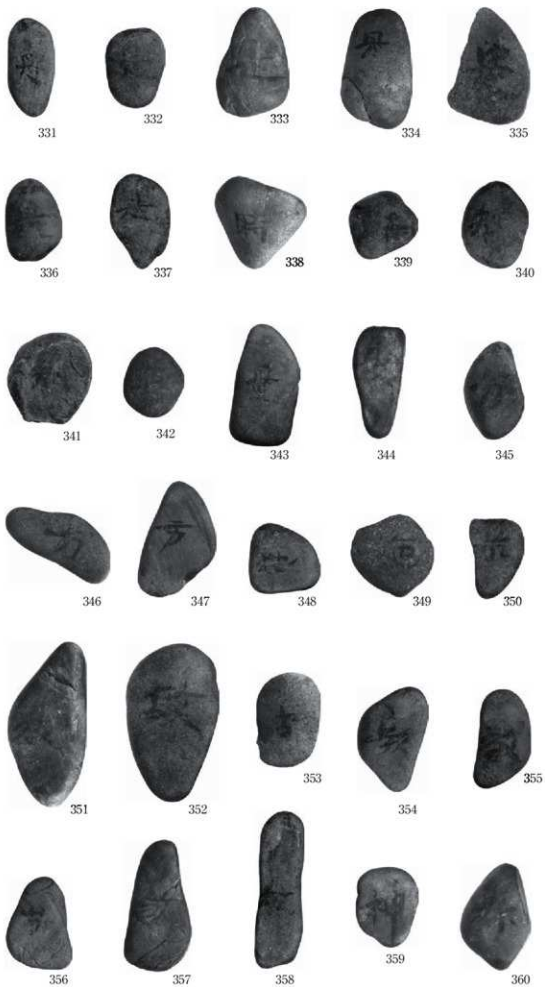
328



329



330









391



392



393



394



395



396



397



398



399



400



401



402



403



404



405



406



407



408



409



410



411



412



413



414



415



416



417



418



419



420



421



422



423



424



425



426



427



428



429



430



431



432



433



434



435



436



437



438



439



440



441



442



443



444



445



446



447



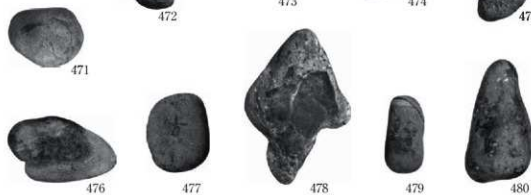
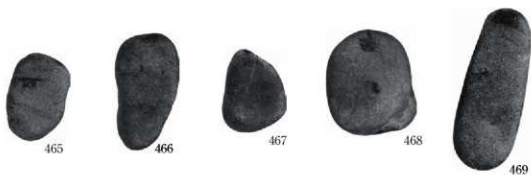
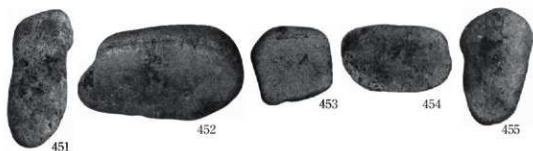
448

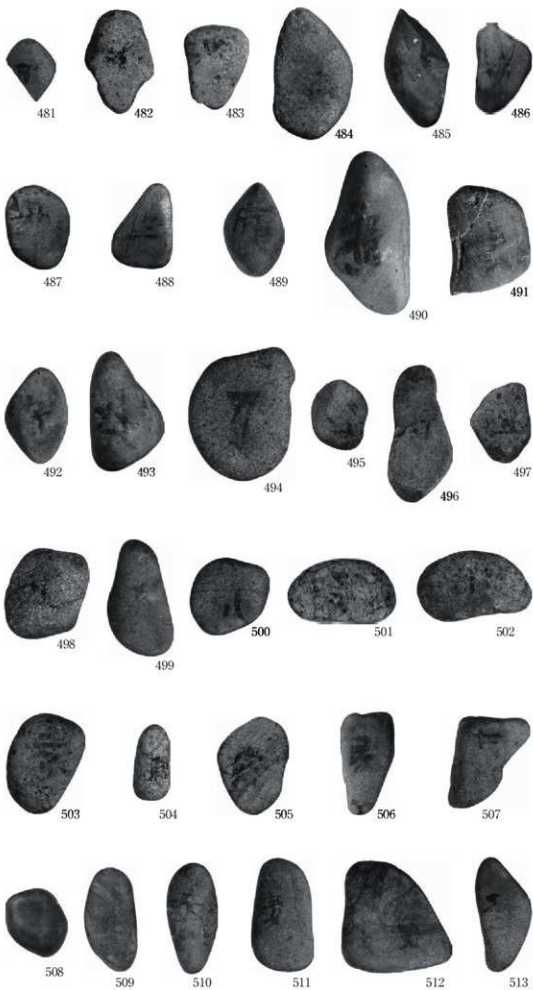


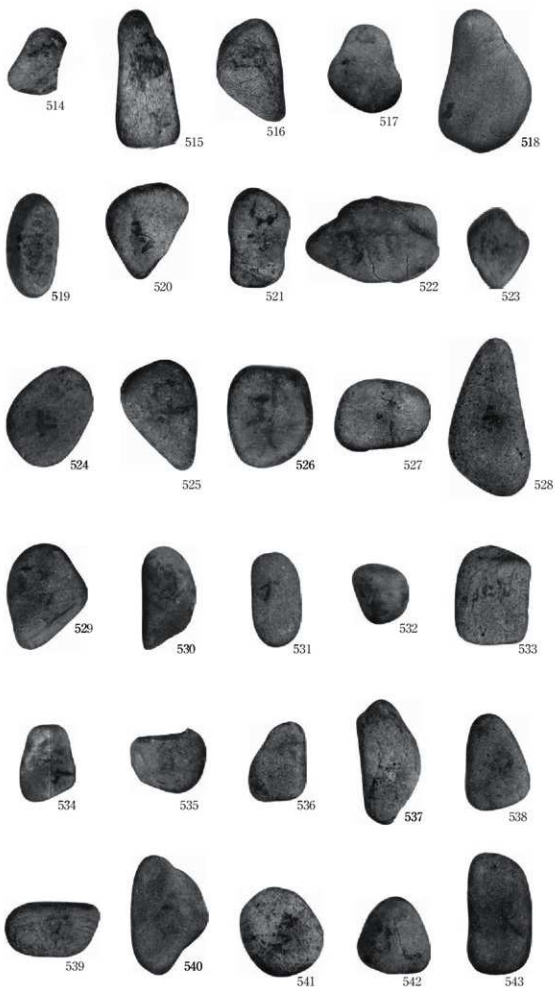
449



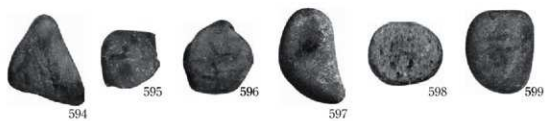
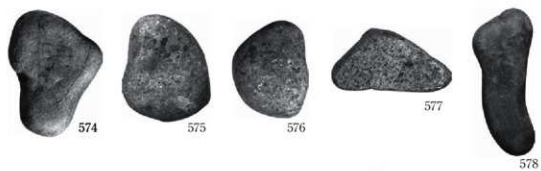
450



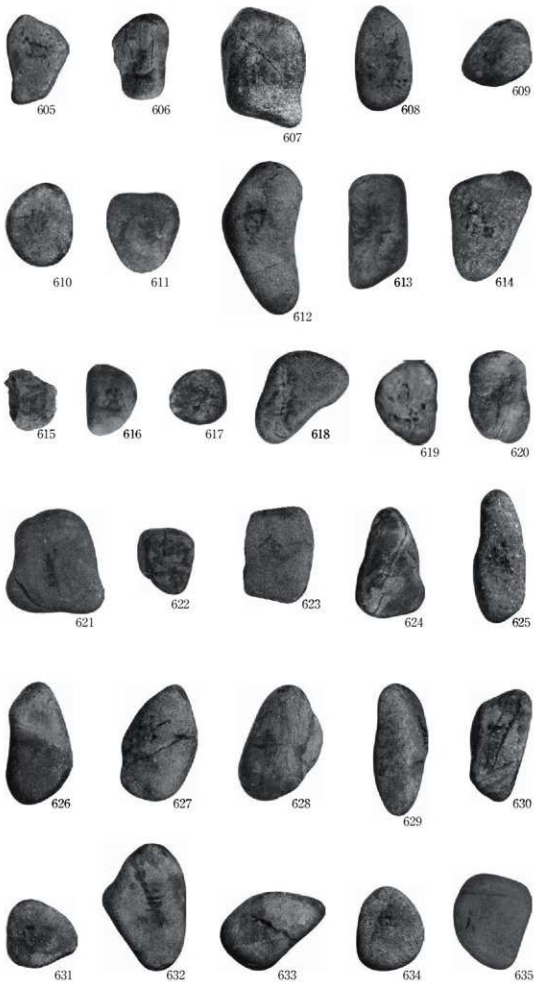


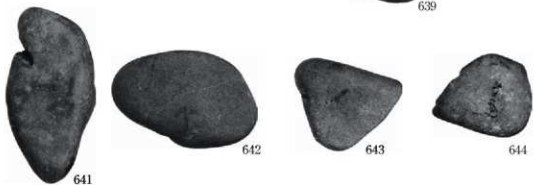
















695



696



697



698



699



700



701



702



703



704



705



706



707



708



709



710



711



712



713



714



715



716



717



718



719



720



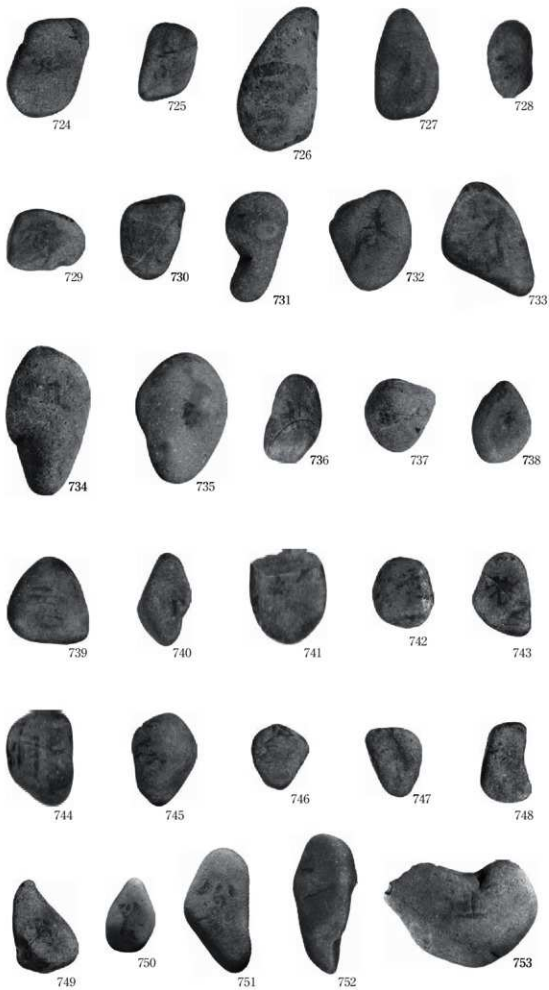
721



722



723



## 報告書抄録

ふりがな	ほくりくしんかんせんけんせつじぎょう まいぞうぶんかざい ほくつちょうさほうこくしょ 8
書名	北陸新幹線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書 8
副書名	月岡遺跡
巻次	中野市内その2
シリーズ名番号	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書95
編著者氏名	市川 隆之
編集発行機関	財団法人 長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター
所在地	〒388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田963-4 TEL:026-293-5926
発行年月日	2010(平成22年)3月24日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯		東経		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	世界測地系	世界測地系					
月岡遺跡	長野県 中野市 岩井	20211	189	36度 49分 50秒	138度 22分 18秒	2002年11月25日 ～12月6日 2003年5月15日 ～10月11日	9,800 ㎡	北陸新幹線建設に伴う事前調査		

立地	種別	主な時期	主な遺構	主な遺物	特記事項
沖積地を 望む丘陵 上に立地	包含層 集落遺跡	弥生時代  中世(一部近世の可能性があるものを含む)	削平地5ヶ所 掘立柱建物跡84棟 堅穴建物跡1軒 溝跡48条 土坑78基 焼土跡12か所 石垣・集石遺構2基	中世陶磁器、 銅製香炉 鉄鏃 銅銭 刀装具 石鉢 砥石	周辺での集落遺跡の存在を示唆する  階段状に連なる平坦地地形を数区画にわけた屋敷地が集集する室町時代を中心とする集村景観の遺跡
	経塚	中世～近世	経塚1基	経石	一字一石経塚
遺跡の場所は、かつて真宗の称念寺、在地武士の岩井氏居館跡、あるいは現岩井集落があったとの伝承がある。発掘調査の結果、階段状の地形を利用して屋敷地を集集させた集村形態の遺跡であることが明らかになった。調査地は丘陵の縁部にあたるため、遺跡の中心地の様相は不明だが、伝承との関係は注目される。					

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 95

北陸新幹線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書 8

—中野市内その2—

月岡遺跡

発行 平成22年（2010）年3月24日  
発行者 独立行政法人 鉄道建設・運輸施設整備支援機構  
鉄道建設本部 北陸新幹線建設局  
（財）長野県文化振興事業団  
長野県埋蔵文化財センター  
〒388-8007 長野市篠ノ井布施高田963-4  
Tel 026-293-5926 Fax 026-293-8157  
E-Mail info@nagnomaibun.or.jp  
印刷 三和印刷株式会社  
〒381-2226 長野市川中島町今井1822-1  
Tel 026-285-2300